大正十年三月一日發行

RECONSTRUCTION

改造

参月號

特別號

SSS FountPen

◆堅實と熱誠とはサンエスの營業的信條なり◆



現代の各方面に於ける代表的人士の手に執らるゝ

サンエス萬年筆

如何なる人のポケットにも
如何なる家の卓上にも

◆斯て生產するサンエスは當然天下を風靡す◆

東京馬喰町

細沼株式會社



改造 三月號目次



死線を越えて

廿九版賣切

賀川豐彦著

◇四六版ポイント組五百五拾頁◇

◇バイブル式裝幀天金函入美本◇

參拾版發賣

帝都の男女學生を通じて尤も廣く愛讀されつゝある本書は、愈々參拾版を重ねた。四ヶ月に滿たずしてかく多大の讀者を得たるは、全く、賀川氏の感激的生活が、總ての階級に共鳴されたからである。氏の博大の愛、熱烈の戀、敬虔なる人道的貢献、その崇高なる人格を知るものは誰として襟を正さぬものがあらう。誰として熱涙を以て感謝せぬものがあらう。

東京芝櫻田久保町 改造社 振替東京八四〇二

◇定價金參圓・送料拾八錢◇

嵐の前

◇再版即

◇四六版最上用紙天金函入美本◇

吉江孤雁氏評して曰く……故人の遺稿を校正してゐる間、ところ〳〵で、深く感じたことは、次のやうなことであつた。「人が四十の坂を越す頃から、當然踏まねばならない一つの運命がある。それは一生のうちに二度とない大きな危機である。その時我等の肉體にも精神にも、徐々たる然かも深甚な、犯すことのできない組織の變化が起る。我等の肉と心とは一度壊はされて更に新らしく築かれねばならぬ。」そのほかに或は「死」か「再生」かを説き、中年期の心理狀態の變化とに對する叡智の目醒めを説き、時には、冷たい夕の霧の中に浮ぶバザロフの墓をやがて大地の愛を、そして、はつきりとつかみ得た一層確かなる自己の理想の徐々に、極めて徐々に實現せられるかすかなる

◇東京芝區櫻田久保町

日賣切參版發行◇

中澤臨川著

◇定價金貳圓・送料金拾貳錢◇

悦びを說きつゝあることとであつた。

實際生命のクリシスに立つてゐたのであつた。故人自身も得意としてゐた、ニイチエの一面を描き出した「嵐の前」を讀みながら、私は涙ならではゐられなかつた。その純情は小兒の如くその熱誠—天才のみの持ち得る眞の熱誠—はニイチエその人の如くであつた故人の面影は、この一篇の中によく籠められてゐると思つた。

併し、この純誠と熱情とを永く生かし得なかつたことには、現在の人間社會に、何處かに缺陷があるのではなからうか。それは國木田獨歩の死に接した時にも感じたことであつたが、有ゆゝ人々が忙はしさを強いられてゐる。しかもその忙はしさはその人々が當然持つべき忙はしさでなく、强いられるものが多い。故人でも獨歩でも、その無理な忙はしさの中で、肉體を虐使した。時には肉體の桎梏から早く脫れ出でないと思ひでもするかのやうに、酷使してゐた。

再生は徐々に來る。獨自の世界が彼の前に開けかゝつて來た寂光の國が彼の所有するオリゾンの上に開けかゝつて來た。その光りが周圍を照らし初めた。けれど、その時彼の存在は最早地上にはゆるされなかつた。我々が後に殘つて、その死を思ふときに、一種の光りが、殘光が、我々の魂を照らすのをおぼえるのは、まさしく彼自身の生命の純なる姿の反映てある。

おそらく其一篇の遺稿を讀る、人々の心の上に、同じ寂しい光が影を投げること、思ふ。この光こそは、我々を導く命の松明てある。我々をより廣き自由の世界へ誘ふ道しるべてある。

改造社

◇振替東京八四〇二番◇

早稻田大學生募集

高等學院

第一部（文、理）

- 政治經濟學部
- 法學部
- 文學部
- 商學部
- 理工學部

第二部（文）

- 學部（政、法、文、商）
- 修學年限二年（新設）

第一學年

入學資格
一部　中學四年修了者及同等以上ノ者
二部　中學卒業者及同等以上ノ者

入學試驗
一部　四月一日ヨリ同月四日迄
二部　四月一日ヨリ同月五日迄

願書受付
一、二部　三月十五日ヨリ同月三十日迄

專門部

- 政治經濟科
- 法律科
- 商科

高等師範部

- 國語漢文科
- 英語科

第一學年

入學資格
中學卒業者及同等以上ノ者
政治經濟科及商科ハ四月六日ヨリ入學試驗ヲ行フ○法律科及高等師範部ハ四月中無試驗（但滿員ノ節ハ謝絶ス）

願書受附
受驗者ハ三月十五日ヨリ四月四日迄

○詳細は郵券三錢相添入學志望學科明記の上照會せらるべし、

國民性闡明の新歷史

天覽台覽

蘇峰 德富猪一郎新著

内容一斑 [illegible]

近世日本國民史 織田氏時代

完成全三册＝上製各册菊版クロース函入 定價金參圓五拾錢郵税各十八錢＝並製各册 定價金一圓六十錢郵税各金八錢

江湖に布く既に廿餘萬部歡迎の益々旺盛なるを感謝す

『近世日本國民史』は、日本の國民性を闡明する唯一の方法也。明治維新の大改革を成就し、萬國對峙の實力を發揮したる近世的國民性は、實に其の源頭を織田氏時代、豐臣氏時代に發したり。吾人現代に生活する者は、必ず此の源頭に溯つて、探究する所無かる可らず。

近世日本國民史 豐臣氏時代

定價＝上製各册菊版クロース函入 定價金三圓八十錢郵税各十八錢＝並製各册 定價金二圓郵税各金八錢

甲篇（秀吉生立より明智、柴田共他を退治し獨自に昇進し今正に徳川と折衝中迄を敍む）＝乙篇（秀吉徳川を羈致し島津を征服し耶蘇教を退治し聚樂行幸を仰ぎ正に得意の絶頂に筆を止む）

發行所 東京市京橋區日吉町 振替東京口座一三一〇〇 民友社



——（改造三月號）——

無限の壓迫、無限の搾取、無限の恥辱

日本の政治界に於ける第一の邪魔物と目された元老なる者が、自ら大躓づきに躓づいて而も猶ほ容易に其の餘力を失ひ盡しさうもない。多年新らしい光りを待ち憧がれてゐる國民は、もう此上の忍從に堪へきれなくなつてゐる。

長の陸軍、薩の海軍、その事實が千九百廿一年の今日、猶ほ明かに嚴存してゐる。否、それが大戰後に於ける世界的の反動に乘じて更に新發展の氣勢を示してゐる。軍備制限の論議の間に、軍備擴張の新競爭が行はれかけてゐる、日本軍閥は愈々得意の時代に逢着した積りで、好い氣になつて勝手な熱を吹いてゐる。悶々たる國民の潜熱が何處に其の發散の口を求めるかは、彼等の全く想ひ及ばざる所であるらしい。

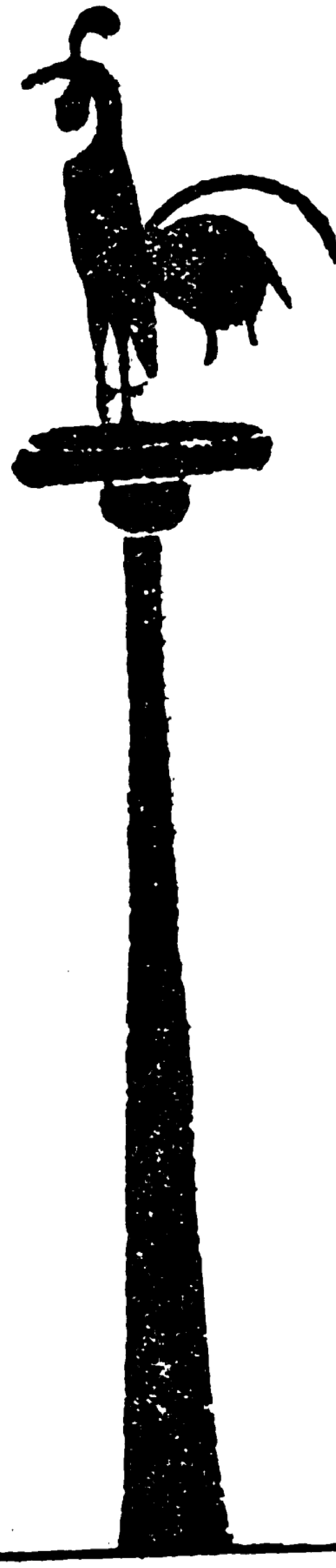
それに又議會があのザマだ。若し議會が幾分でも、國民の潜熱の發散口であり得るならば、猶ほそこに多少の希望がある。然るに今や議會は全く國民から愛憎を盡かされてゐる。普通選擧の運動を眞面目に相手する者がないのを見て、國民に政治的智識がないの、政治的興味がないのと考へる位が、今の政黨屋の識見の程度である。

然るに政府は其の議會と、其の軍閥と、其の元老との間に立つて、辛うじて數年若しくは數月の權力を持續する事にのみ腐心してゐる。そして夫等の國家機關の背後に在つて、少數の富豪資本家がハチ切れる樣に肥え太つてゐる。斯いふ狀態が一體いつ迄續き得ると思うてゐるのだらう。

國民は無限の壓迫と、無限の搾取と、無限の恥辱とに堪へ得る者ではない。忍耐にも限度がある。從順にも限度がある。或者は失望するであらう、或者は諦めるであらう。或者は自暴自棄に陷るであらう。或者は放縱墮落を極めるであらう。然し或者は假令ひ盲目的にも何等かの運動をやりださずには居られない。國民の意氣精神は決して未だ死んでは居ない。

此の危急な形勢を、十分に、明白に、適確に認めて居るのは誰だ。それが卽ち本統の識者である。

現下の渾沌狀態の諸原因



バートランド・ラッセル

人間社會の進行は、これを有史以來の時代を一貫して通觀すれば、なかば循環的であつて、なかば進歩的である。それは、譬へていはゞ、同じ一曲の樂譜の、繰返し〱演奏せられてゐるのが、一回は一回よりも、ます〱高らかに響き、且つます〱洗練せられたる諧調を呈する、といつたやうなものである。この一曲のうちには、緩調の節々もあれば、急調の節々もある。そこにはまた、烈しき響きを立てる最高頂の調べもあり、それから一時樂の音が途絶えて、やがてそれが再び始まるまでには、しばしの寂寞が續く。かうした最高頂の調べに擬ぞらへるべきものとして、我々は、

我々が今現に通り越しつゝあるところの、若しくは我々が今將さに通り越しかけてゐるところの時代を擧げることが出來る。若し我々が、この曲の唯一回限りの演奏のことだけを考へると、それはその儘消え去つて空に歸するものとも思へる。若しまた我々が、唯その演奏の循環のことだけを考へると、同じ曲を無際限に反復するといふ、この全過程が無意味なものと思へる。我々は唯その間に於ける進歩的な點を見詰めることに依つてのみ、——換言すれば、我々は唯、同じ一曲ながら、前の演奏の一循環と後のそれとの間に區別がある點を見詰めることに依つてのみ、——我々は時代から時代への進展の跡を認めることが出來るし、また、表面の上を吹き寄せては又吹き返へす旋風の底にも根强き前進の行はれてゐることを知ることが出來るのである。

エジプトやバビロニアの古代諸帝國はペルシア帝國に依つて掃蕩せられ、ペルシア帝國はまたマセドニア帝國に依つて、マセドニア帝國はローマ帝國に依つて、ローマ帝國はチユートン民族やアラビア民族に依つて、アラビア民族はチユートン民族に依つて掃蕩せられた。かういふ新陳代謝の行はれた度毎に、それまでに或る程度の高さに達したところで頽廢しかけてゐた舊るき文明が破壞せられ、そして或る新らしき文明がその廢墟の上に打建てられた。時としてはさうした新しき文明が打建てられたのは、過渡期の渾沌狀態が相當に永い間續いた後のことであつた。我々の現代文明は、だん〳〵頽廢を重ねて、今や將さに倒壞しかゝつて居るかのやうに見える。すべて斯ういふことの裡に、我々は歴史の循環運動を認める。それは、出生、成長、老衰、死、といふ順序で行はれる。かういふ循環運動は、山野の獸類の上に行はれる通りに、また諸帝國の上にも行はれ、各時代の文明の上にも行はれる。

しかしながら、これらの各時代の文明のどれをでも取つて來て、それをその前の時代の文明と比較するときは、我々はその間に或る確實なる進歩の跡を認めることが出來る。殊に次の二つの點に於て、それを認めることが出來る。す

はち、第一には、知識の增進といふ點に於てゞある。第二には、諸般の組織の規模の擴大――別けても諸國家の組織の規模の擴大――といふ點に於てである。これらの二つの點に於ける過去の進歩から判斷するときは、恐らく今直ぐにといふ譯には行かなくとも、將來必ず或る進歩が實現せられるであらう、といふ希望を我々が懷くのは、當然なことだと考へられるのである。

知識の增進といふことゝ、諸國家の擴大どいふことゝは、善果を齎らしたと共に、惡果をも齎らした。たとへば、科學は戰爭を一層破壞的にしたし、また諸大帝國は戰爭を一層廣く流布させた。しかしながら、科學も諸大帝國も、どちらも共に有害な働きをすることが出來るものではあるが、同時に、どちらも共に活力ある進歩のためにはなかるべからざる必須的條件を構成するものでもある。知識に關しては、斯ういふことは、判り切つてゐることと看做しても、多分差支はあるまい。が、諸國家の擴大といふことに關しては、かういふ現象が望ましいものだといふ意見は、世界に於ける現下の渾沌狀態並びにこの渾沌狀態を收拾するための唯一の可能な手段方法を考察することから生じるのである。戰爭を根本的に防止することが出來る唯一の手段は、諸國民間に於ける總ての爭論を法律で裁決するに足るほど有力なる世界國家、すなはち超國家を創設することである。そして世界國家といふものは、世界中の各部間の利害關係が相互的に非常に密接になつた結果として、どの部分に住む人々も、或る他の部分に於て起る事件に對して冷淡な傍觀的態度を取ることが出來なくなつた程の狀態が行はれた後でなければ、出現しさうな見込はないものである。ところが、かういふ狀態が今日到來して居るのである。一體、近年までは、極東はヨーロッパに對して何等の重要な關係を持つて居なかつた。コロンバスの時代まではアメリカは孤立してゐた。ピーター大帝の時までは、ロシアは西洋の列强とは餘まり交通をしてゐなかつた。世界大戰は、その破壞の跡の普遍的であつたことに依つて、人類の利害關係の聯帶性を證明し

た。この聯帶性は、工業主義及び各種の機械的發明から生じたものであるが、この工業主義及び各種の機械的發明といふものは、畢竟、科學の產物である。我々の時代を、既往のすべての時代とは異なつたものにするものは、結局、科學である。そして科學は、其進歩の過程に於てどういふ種類の有害な動きをしようとも、結局、人類を、過去の如何なる時代に於けるよりも、一層幸福なる狀態に導き入れることが出來るものである。

かういふ廣い根據の上から大觀すれば、現下の渾沌狀態も結局は滿足な解決に到達するであらう、と樂觀するのが當然であるらしく見える。だが、當分の內は、世界は不安の氣分に滿ちて居て、どうかすると近き將來に於て一層惡化しさうな模樣を見せて居る。若し我々が此の暗黑時代に於て賢明に行動しようと願ふならば、――若し我々が來るべき破壞を出來得るかぎり狹少の範圍に止まらしめ、そして新たなる建設を出來得るかぎり急速に且つ堅實に完成せしめる事業に參加しようと願ふならば、――そんならば、我々が現在に於て我々の勇氣を沮喪せしめるやうなすべての事柄や、近き將來を脅威して居るやうなすべての危險やを正面から凝視することが必要であり、從つて我々が、各種の黨派的標語に傾着することもなく、又は誤まれる希望から無雜作な解決を夢みて自ら慰めて居る人々の望みなどに氣を兼ねることもなく、大膽に時代の徵候を診斷することが必要である。そして又、我々の考慮の內に於て、現代に於て求め得られるかぎりの最も進歩したる科學と最も賢明なる理想とを應用することが必要である。別けても、我々が實現させようと望んで居る各種の目的を妨害するために陣立てせられたる、一見恰かも不可抗的なものであるかの樣に思はれる諸勢力の跳梁の影を見て、驚きの餘りに、勇氣を喪つたり力を落したりすることのないやうに、十分警戒して掛かることが、何よりも必要である。この目的のためには、――政治的諸勢力といふものは、輿論の後援に倚るのでなければ有力になり得るものでないといふこと、並びに、大體からいへば、惡事に對して輿論の後援が得られるのは、たゞ無學といふこ

との結果であるといふこと、——斯ういふことを銘記することが大切である。如何にも、我々の新運動を憎惡する反對の諸勢力が、あらゆる神秘じみたことや、あらゆる狂氣じみたことやを言ひ觸らして居る今日に於ては、眞理を一般民衆の間に行き渡らせたり、感情に依つてゞなく實證に依つて意見を立てる習慣を普及させたりすることは、甚だ困難である。だが、それが如何に困難であらうとも、世界の將來の希望は、全くかういふ事の上に繫がつてゐるのであつて、決してどんな政治上の能書的口上の上にも繫がつてゐるのではないのである。

理性と科學を尊重する氣分とが、世界の爲めに必要なること今日の如きは、過去に於てその類例のなかつたところである。と云ふのは、不合理的權威の上に根據をもつてゐたところの總ての教理や習慣やは、悉く崩壞してしまつたからである。樣々のタブー（或る特定の物を神聖なるものとして之れに接觸することを禁ずる野蠻人間の迷信）とか、樣々の宗教的信仰とか、樣々の社會上の習慣とか云つた樣なものは、未開諸種族間に於ける秩序——どういふ風の秩序かが彼等の間に存在するものとして——の根源であるのだが、幾多の時代を經て居る間に、懷疑派の理智がさうしたものゝ馬鹿げさ加減を示すやうになつて、始めてさうしたものが遂に其權威を失墜すると云ふ段取になるのである。斯う云ふとが、古代アゼンスに於て、其政治的及び文化的榮光の全盛時代に起つて、そして其結果として生じた渾沌狀態の裡にアゼンスは亡んだ。また同樣のことが、イタリーに於て、第十五世紀の末期に起つて、そしてそれからイタリーは、宗教熱に燃えてゐたスペイン人に隷屬したのであつた。更らにまた同樣のことが、現在文明世界の全部に起りつゝあるのである。卽ち、古き權威の支柱は戰爭の爲めに傷けられて、人々は最早單に彼等の祖先が大體それに服從し來つたと云ふ理由だけでは、彼等自らそれに服從することを肯じなくなつた。かう云ふ譯で、今日に於ては、如何なる人に向つても、其權利を主張することを斷念せしめようとするには、或る理由を示さなければならなくなつたのである。ところが

斯う云ふ目的の爲めに提示せられた理由は、何れも皆なまやかしもの式の理由ばかりであつて、唯さう云ふ理由に『如何にも尤も』と承服することが自分達の個人的利益の爲めになると考へる人達だけに尤もらしく響くに過ぎないのである。斯う云ふ根據から出た反抗狀態は、女性の間に於ては男性に對して存在して居るし、壓迫を受けて居る諸民族の間に於ては、壓迫を加へてゐる諸民族に對して存在してゐるし、そして殊に勞働者仲間に於ては資本家階級に對して存在してゐるのである。斯う云ふのは、過去の歷史が前後一貫して示して居る通りに、危險千萬な狀態であるには相違ないが、併し乍ら又た同時に希望に滿ちた狀態でもある。と云ふのは何う云ふ譯であるかと云へば、若し唯だ抑壓せられた側の反抗が、餘りに殘虐なる鬪爭なしに勝利を得さへしたならば、——そして彼等の此勝利の結果として、一の鞏固なる社會秩序が新に樹立せられさへすれば、——と云ふ假定の下に於て、それが希望に滿ちた狀態だ、と云ふのである。

今後の世界を形成しつゝある諸勢力、及び今後の世界の鬪爭を釀成しつゝある諸勢力は何であるか？　そして此等の各勢力の强さの對比は何う云ふ工合であるか？　又た其の鬪爭の前途の見込は何うであるか？　私は是等の諸問題を冷靜に、論戰家の態度を以てではなく、科學的研究者の態度を以て、冷靜に考究して見たいのである。

現今の世界には段々と增大しつゝある諸勢力と、段々衰頽しつゝある諸勢力とがある。衰頽しつゝある諸勢力の中にも、尙ほ其餘喘を有力に保有してゐるものもあるが、併し乍ら何と云つても、それらのもの〻全盛時代は已に過ぎ去つて、そして（若し文明の上に來るべき混亂が避け得られるものであるとすれば）それらのものは、日一日と終焉に近づくべく運命づけられて居る。又た段々增大しつゝある諸勢力の中に於ては、二つのものが特に他の何れよりも目立つてゐる。此二つのものは卽ち、工業主義及び國民主義である。此二つのもの〻背後に、政治的性質のものではないが、それにも拘らず總ての政治的事件を支配してゐる一つの勢力がある。それは科學である。

工業主義及び國民主義には、各々二つの形式があつて、其一つは既存の力の所有者の爲めにあるものであり、他の一つは自分達自身を解放しやうと焦つてゐる人々の爲めにあるものである。資本主義と共產主義とは、工業主義の二つの形式である。それから、帝國主義と、被抑壓諸民族のために自由を獲得しようとする運動とは、國民主義の二つの形式である、被抑壓民族の爲めの自由の獲得は、ウィルソン大統領が『民族自決主義』の名の下に一般に普及しようと努力したところの、そのものである。世界大戰に於ける戰捷國の政治家達は、此自決主義を唯だ、聯合側の敵國の爲めに抑壓せられてゐた諸民族の爲めにのみ適用しようと決心した。さうして聯合側諸國の抑壓の下に在る諸民族は國民的獨立の權利がないものと極めてかゝつた。ところが、勞農ロシアの政府は、それ故に、自決主義を其の敵國側に占領せられてゐた領土の上に適用しようとした。斯う云ふ所から、自決主義は事實上共產主義と提携する運びに立ち至つた。けれども、何と云つても、自決主義は共產主義とは全然違つた種類の思想及び感情に即してゐるのであるから、それがカール・マルクスの主義のやうな根本的に國際的性質を帶びて居る主義と提携するやうなことは、ほんの表面上だけのことに過ぎないので、それ以上に一歩をも出でたものではないのである。

かう云ふ譯で、現在の世界には、四つの大なる政治的勢力がある。それは工業主義に屬する二つの形式、即ち資本主義及び共產主義、並びに國民主義に屬する二つの形式、即ち帝國主義及び民族自決主義である。そして現下の世界に於ける渾沌狀態は、主として是等の四つの勢力の間に於ける大衝突と云つた形式で現はれて居るのである。即ち、資本主義と帝國主義とが一方の側に於て、そして共產主義と自決主義とが他の一方の側に於て、それ〴〵陣取つて居て。——

二

政治上及軍事上の軋轢の激しさから、世界も、交戰者達自身も、工業主義の二形式の間にも、それからまた國民主義

の二形式の間にも、如何に多くの共通分子が、存在してゐるものであるかと云ふことを忘れてしまつた。であるから、若し我々が現下の時局を解剖するに際して、旁徑に迷ひ込まないやうにしようと思へば、相角逐しつゝある諸勢力の間に存する斯うした親和的諸分子を理解することが必要である。

先づ第一に、我々は工業主義と云ふ言葉を何う解釋すべきかを明瞭にしなければならぬ。

工業主義とは、其本質上、多量の(註)固定資本を必要とする方法に依る生產樣式、卽ち、我々の必要なり欲求なりを直接に充足するところの商品を生產する爲めの機械を生產する爲めに多大の勞力の消耗を必然的に伴ふやうな種類の生產樣式を指して云ふのである。それは道具を用ひて生產すると云つた樣な原始的習慣の延長したものである。種子を蒔く前に土地を犂くことを最初に思ひついた人は、工業主義の方への第一步を踏み出した人である。卽ち、犂と云ふものは、夫れ自身では我々の必要なり欲求なりを何一つ充足する力を持つてゐないものであるが、併し乍ら、それは我々の飢を充す爲めに必要な勞働の分量を輕減する力を持つてゐるものである。工業主義と云ふものは、畢竟するに、かう云ふ風に道具を造る習慣の延長したものである。尤も道具は其儘道具に留つたものではなくて、段々發達して近代式機械になつたものであるが、近代式機械なるものはそれを生產する爲めにも使用する爲めにも、多數の勞働者の群の協同勞働を必要とするのである。此工業主義的生產方法の一實例として、試みに鐵道をとつて觀察して見よう。鐵道は其敷設の爲めに、非常に多大なる勞働量を必要とするものである。が併し、それが敷設されたからと云つて、直に其儘で我

(註)資本は貨幣ではなくて、生產機關である。貨幣は資本を買ふとが出來るのであつて、そして貨幣が投資の目的に用ひられてある場合には普通、資本を買ふために用ひられて居るのであるが、資本は貨幣から成り立つてゐるのではなくて、機械とか鐵道とか船舶とか云つたやうな種類のものから成り立つてゐるのである。

我の何んな慾望をも滿足させる力を持つてゐるものではない。我々はそれを食ふことも出來なければ、それを我々の身に着けることも出來ないし、又（眼前に迫る危險なしには）其上に眠ることも出來るものでない。要するに鐵道は、一片のパンを消費するやうに之れを消費しては、決して我々に利益があるものではない。我々は唯だそれを使用することが出來るのである。換言すれば、我々は幾片ものパンなり其他のあらゆる消耗品なりを、鐵道が無い場合に必要な勞力よりも遙に少ない勞力を以て調製する爲めの手段として、それを使用することが出來るのである。鐵道を敷設して居る間は、並びに鐵道が實際使用せらるゝに至る迄は、其敷設に從事する人々は、自分達自身の勞働によつて生命を維ぐことは出來ない。何故なら、彼等の勞働はどんな生活の必需品をも生産する爲めに用ひられては居ないからである。で、彼等が鐵道敷設に從事して居る間は、彼等は他の人々によつて生産せられたる生活必需品の剩餘の中から衣食を給與されなければならない。それ故に、工業的資本が增加する每に、一時的にはそれだけづつ慾望滿足の手段が減少する譯である。斯う云ふ筋道から、現在工業化されつゝある一社會は、將來に於ける慾望滿足のヨリ大なる增加の爲めに、現在の慾望滿足を常に犧牲にしつゝある譯である。

工業主義を有効に實行しようと云ふ社會に於ては、或る數個條の特質が必要であると云ふことは、自明の理である。即ち先づ第一に、そこには、協同の仕事に從事するための勞働者等の大なる組織を得ることが自由でなければならない。例へば、鐵道を敷設しようと云ふには、唯だ一人や唯だ一家族やでそれを遂り遂げることが出來ないと云つたやうなものである。第二に、そこでは、此全社會の勞働を管理指導することが出來る人達が、將來ヨリ大なる富を得ようといふ念慮から、現在の滿足を甘んじて犧牲にする用意をもつてゐなければならない。第三には、そこには相當に秩序立つた、そして相當に鞏固な政府があつて、斯う云ふ風に一時的に慾望滿足を犧牲にした人達が後日必ず其報償を得るも

のであることを、餘程の確實さをもつて保證するのでなければならない。さうでなければ、誰もが例の『飲めや食へや明日は我等は死ぬ身だから。』と云ふ享樂主義の格言を服膺するであらう。第四に、そこには、多數の熟練職工が居なければならない。と云ふのは、工業的生産の過程には、困難な部分が多いからである。最後に、そこには、各種の機械的發明を遂行したり利用したりする爲めに、科學的智識を具備した人々の集團が居らなければならない。此最後に擧げた條件は、就中最も根本的性質のものである。それが過去に於て缺けてゐたといふ事實が、やがて、工業主義が近世に於て發達したと云ふ事實の原因となつたのである。

一國が工業主義の初期に在る間は、其國の經濟組織の管理は寡頭的であつて、そして先進諸國から多額の借入をすることが出來る場合でゞもなければ、民衆の大多數は甚だ貧困な狀態に陷ると云ふことは、殆ど避け難いことであるらしい。先づ貧困の問題に觸れて一言しようならば、一國がまだ工業化しない間は、そこで行はるゝ生産方法は、甚だ有効であると云ふ譯にはゆかないし、そして大體の上から云へば、生存の爲めの必需品以外の剩餘をあまり多く生産することが出來ないのである。かう云ふ國が工業的發達の方へ轉換し掛けると、此の第一の影響として現はれることは、多數の勞働者等を直接に生産的なる仕事から奪つて、これを鐵道敷設とか機械製作とかの方へ振り向けたり、又は其製造品を他の諸國——そこでは機械の買入や、鐵軌のやうな製造品の製作やが行はれる他の諸國——へ輸出する仕事に振り向けたりすることである。其結果はかう云ふことになる。——先づ第一に、そこでは世間一般に分配せらるべき各種の消費品の量が減少する。そこには素々かう云ふ消費品が餘り豐富だと云ふ譯ではなかつた（此國の產業が從來はまだ工業化して居なかつたと云ふ事實に基づいて）のだから、其減少の結果は、普通の勞働者が赤貧洗ふが如き狀態に陷りがちだと云ふことになる。かう云ふ惡影響を避ける唯一の途は、極めて徐々に工業化するか、若くは經濟的に既に進んで

ゐる諸國から、多額の借入をするかにある。此最後に擧げた手段は、先進諸國との關係が友誼的である場合には、普通採用せらるゝ方法である。併し乍ら、今日の勞農ロシアに於て見るやうに、諸外國の敵對感情が激烈である爲めに、外債募集が不可能な場合に於ては、唯だ極度の貧困を我慢するか、若くは極めて徐々に工業化するかの、二つに一つの方法を擇ぶより外に途がないのである。

更らに、一國が工業的發達の初期に在る場合に於ては、産業の經濟的組織の管理が寡頭的であると云ふことは、なほ一層避け難いことである。すべての工業國中での最も古る顔であるイギリスに於ては、現今、勞働者側の産業自治權要求の有力なる運動がある。此運動は何處までも同情に値するものである。そしてこれは、イギリスの勞働組合員達の間に於て、最も大なる活氣と力とを持つてゐるところの社會主義の一形式である。ロシアに於ても、同様の産業自治權要求の運動が、一九一七年及び一九一八年に行はれてはゐたが、此運動は今日では全然官憲の爲めに抑壓せられて居る。そして官憲は諸工場に於ける一人專制を復舊し、並びに總ての産業を上から管理すると云ふ非民主的方法をも復舊して居るのである。是等の兩國に於けるかうした差異は、或る全然無用な意見の衝突を惹起した。即ち、ロシアの共産黨員達及び西洋諸國に於けるその贊成者達は、ロシア政府の此點に於ける經驗が、尠なくとも當分の間は、産業自治などと云つたことの實行の不可能であることを確證したものだと考へてゐる。之れに反して、サンディカリズムにヨリ多く似寄つた思想を懐いてゐる人達は、此點に關して過激派の實行して居ることを非難せざるを得ざる破目に陷つてゐる。私の意見は何うかと云へば、一體産業自治に關してイギリス系及びロシア系の社會主義の間に差異の生じて居るのは、畢竟是等の兩國に於ける産業發達の程度の差異から必然的に生じた結果なのだ、と私は考へてゐるし、そして又、若し人々が政戰上の叫び聲に根柢して物事を考へるやうな習慣がある爲めに、割り切つた事柄までが分らなくなつてしまふと云

ふやうなことがなかつたならば、此事實は誰の目にも明かに映じた筈だ、とも考へてゐる。勞働者の產業自治と云ふことは、ロシアのやうな發達の遲れた國に於ては明かに不可能なことであるが、併し乍ら、イギリスに於ては全然可能なことだと私には考へられる。何故さう云ふ譯になるかと云ふことを、私は次に、明瞭に解說して見ようと思ふ。

先づ第一に、前にも言つた通りに、未發達國の產業化と云ふことは、それが外債によつて遂行することが出來ない場合には、普通の勞働者を驅つて、彼が從前工業の未だ起らなかつた時代に苦しんだ以上に、尙ほ一層の悲境に陷れると云ふ結果を生ずるものである。であるから、若し普通の勞働者が斯る場合に產業管理權を持つてゐたとしたならば、彼はこんな悲境に陷ることを我慢しないであらうし、さうしてまた、彼がそれを我慢しさへすれば彼の子孫が其窮極の恩惠に浴するであらう、と說き聞かされようとも、彼はそれに耳を藉さないであらう。イギリスに於ける產業革命の初期に於ては、機械は僅かの勞力を以て同じ生產上の能率を擧げるから、從つて勞働者の失業の原因になるのだ、と云ふ理由で、勞働者の一揆が起つて諸工場の機械を破壞したものであつた。若しさう云ふ時代に於て勞働者等が、生產方法に關する管理權を持つてゐたものとしたら、產業革命は決して起ることが出來なかつたであらう。

併し乍ら幼稚な工業に於て勞働者の產業自治が不可能な譯は、貧困の一時的增進と云ふ單一の原因だけに基くものではない。それはまた斯う云ふ原因——そしてこれは一層大切な原因である——にも基くのである。即ち工業の幼稚時代に於ては、人々は多數の生產者の群の組織をなして相協同行動する習慣をまだ〱養つてゐないと云ふとが、それである。非工業的生產は、各個人で出來ることであるか、若しくは一家族又は小數の手工業者達の集團で出來る事かである。で、そこには、數百若くは數千の任意的結合を可能にするやうな習慣が成り立つてゐないのである。そればがりでなく、一遍新らしき種類の組織が、果して任意的に創設せられ得るものであるかと云ふとからしてが、既に疑問であ

る。新らしき種類の組織は、多數の人々をして、彼等が自ら選んだ目的の爲めにでなく、上の方から彼等に課した共同目的の爲めに、協同的に働かしめるやうに、强制力を用ひた場合に於て、始めて可能である。そして此等の人々が、斯う云ふ協同勞働の習慣を養ひ、且つその能率の勝れた事を體得した後に於てこそ、始めて彼等は外部から强制せらるゝことなしに、自ら進んでそれに從事するやうになるのである。此事は單に工業の場合に於てさうであるばかりでなく、政治の場合に於ても矢張りさうである。即ち、政治の場合に於ては、國王達が結合の鞏固なる國家を創建した場合に於てのみ、デモクラシーが其後に有効に働くものなのである。私は、合衆國の如きも此原則に對して例外を構成してゐるものだとは思はない。何故なら、此國の憲法を創設した先覺者達の政治的習慣は、第十七世紀に於て既に其の鄕國であつたイギリスで養成せられてゐたからである。そして私は又、國際的世界國家と云ふものも、一國若くは鞏固に結合せられたる數國の同盟の優越的支配によるのでなければ、到底確實なる効果を擧ぐることが出來るものでない、と信じてゐるのである。必要なる組織が既に出來上つて居て、そして、其組織を有効に運用する習慣が既に養成せられて居る場合に於て、始めて自治と云ふことが可能になり、そして自由が漸次に完成せらるゝことが出來るのである。工業に於ても恰度それと同じである。即ち工業の場合に於ても、其名が資本主義的と呼ばれて居ようが、共產主義的と呼ばれて居ようが、何れにしても、幼稚な工業は多少專制的に管理せらるゝより外仕方がないものであつて、そして專制者は、前者の場合であつては一の資本家であり、後者の場合にあつては一の國家官吏である。過激派の凡ての施設は、此意見の正しいことを證明する。そして私は、印度なり、支那なり、其他の未發達國なりに於ても、矢張り同樣の結果が生ずるであらうことを、毛頭疑はないのである。

斯う云ふ考察から、次の樣な斷案が生ずる。即ち、資本主義と共產主義との間に於ける實際上の差異は、兩側に於け

る政權運用者達が想像してゐる程、それ程大きなものではないのである。どちらの主義を採用したにしても、兎に角工業主義の初期に於ては或る種類の特徴が必ず現はれるであらうし、又どちらの主義を採用したにしても、其發達の程度の進むに從つて、或る他の種類の特徴が必ず現はれるであらう。過激派政府の下に於けるロシアの工業狀態は、我々をして百年前のイギリスの工業狀態を聯想せしめる。無暗に長い從業時間、過勞に對する過少の賃銀、同盟罷業の禁止、勞働者の工業管理者に對する絕對服從、——斯うしたものが、現今のロシアの工業と百年前のイギリスの工業とに共通して居る特徴でもあり、また共通して居ない譯には行かない特徴でもある。何故といつて、兩方とも、外國資本の扶けなしに工業を發達せしめようと云ふ企てであるのだから。

斯う云ふことの結果として、共産主義が目指してゐるところの總ての良き結果は、唯だ工業が非常に發達して、そして國民の習慣の中へ深く喰ひ入つて居る場合に於てのみ、完成せられることが出來るものなのである。イギリスなりアメリカなりに於ては、若し共産制度が永引いた戰爭とか、産業上の顚倒とかなしに實現せらるゝことが出來たとしたならば、其結果として各成年市民に僅か四五時間の勞働を課するだけで濟むと云ふことになつて、從つて全國民の物質的幸福が、非常に増進することになるであらう。そしてこれらの兩國の場合に於ては、共産制度が實現せられても、中央集權的官僚組織を採用する必要は起らないであらう。何故なら、勞働者達が、永い間の習慣に依つて、彼等が從事してゐる各工業の性質を理解するやうになつてゐるので、それを自治的に管理する能力を彼等自身に充分に具備してゐるのであるから。斯うした好況に徐々に到達することは、資本的組織を一刀兩斷的に撤廢することなしに、その實現を期し得られることであり、從つてまた、世界的階級戰爭の場合には必然的に生じなければならないやうな、工業主義や文明の全機構やに對する極めて重大なる危險なしに、その實現を期し得らるゝことでもある。併し乍ら、かうした好況は、

まだ殆んど手工業的狀態に在るやうな國に於ては、それが名義上如何に共産主義的であるにしろ、その實現を期することが出來ないものである。何故かと云へば、かう云ふ國に於ては、勞働の全收が生存の爲めに必要なるもの以上に幾らもある譯はなく、尙ほ其上に國民の大多數の間に、工業的生産過程の民主的管理の爲めに必要な程度の習慣なり、熟練なり、知識なりが、まだ充分に行き渡つてゐないからである。

若し以上の考察が正しいものとすれば、それからかういふ結論が生じて來る。――階級鬪爭を中心としての政治的爭論が如何程大切なものであるにしろ、それは、機械の發達だの、熟練だの、工業上の習慣だのと言つたものが尙ほそれ以上に一層に大切だ、といふ事實を打消すことが出來るものではない。一國內に行はれて居る分配制度の種類の如何を問はず、その國の現實の經濟生活の大體の輪廓を決定するものも、實にそれらのもの(機械の發達だの、熟練だの、工業上の習慣だのと言つたもの)であれば、更らにまた、或る二つの未發達國――その一つが共產主義國で、他の一つが資本主義國だといつた風の組み合はせになつて居る或る二つの未發達國――の場合に於て、樣々の點に就いて、双方のうちのどちらかゞ他の工業上の先進國に似通つてゐるといふよりは、寧ろ双方がお互同士相似通つて居る程度の方が遙に多いといつた樣な現象の發生を促すものもまた、矢張り同樣にそれらのものなのである。

三

工業主義に次いで、近代世界を形成しつゝある最も優勢な力は、國民主義である。工業主義と同じ樣に、國民主義もまた二つの形式を持つてゐる。其の一つは矢張り既存の力の所有者のために存してゐるものであつて、他の一つは自らを解放しようと焦つてゐるものゝために存してゐるものである。力の所有者のために存する國民主義は、帝國主義と呼ばれて居るものであつて、被抑壓諸民族のために存する國民主義は、民族自決主義と呼ばれて居るものである。工業主

義の場合に於けると同じく、國民主義の場合に於てもまた、この二つの形式の間で行はれて居る闘爭に參加して居る人達が考へてゐる以上に多くの共通點が、その二つの形式の基底に横はつてゐるのである。

我々は先づ、國民主義と云ふ言葉の意味を明らかにして掛からなければならぬ。

國民主義は、『群の本能』の展開したものであつて、それは要するに、各人が自分の屬してゐる民族を自分の群と看做す習慣を指していふものである。一民族を構成する諸要素の中で、確實で動きの無きものとして擧げられるものは唯一つであるが、それは、一民族とは地理的に區劃せられてゐる人々の一集團である、といふことである。何人も、一人で樣々の種類の集團——例へば人種とか、宗教團體とか、職業組合とか、藝術家の會とか、科學者の會とか、といつた樣な樣々の種類の集團——に對して服屬關係を感じることが出來るものである。で、若し人々が服屬關係を感じる集團が地理的の集團であるならば、それは民族と呼ばれるものであつて、そして此場合に於ける服屬關係から生ずる感情は、之を國民主義と呼ぶことが出來るのである。かう云ふ譯で、『民族』と『國民主義』とは相關聯して定義すべきものである。即ち、是等の二つのものは、双方とも、一種の地理的集團に向けられたる『群の本能』によつて構成せられて居るものである。この形式に於ける『群の本能』が、他の總ての形式に於けるそれに對して、際立つて優勝の地位を獲得する樣になつたといふ事實は、現代の世相の一つを構成するものである。過去の多くの時代に於ては、人々の群團は、同國人だと云ふ點で成立つたよりは、寧ろ同宗教者だと云ふ點で成立つたものであつた。マルクスは、世界の歴史を主として諸階級間の闘爭と見て、そして封建的貴族は資本階級に取つて代はられ、資本階級は勞働階級によつて取つて代はられるのだと説明したのであるが、このマルクスは、人間の『群の本能』が、その國籍に向けられるよりは、寧ろ共階級籍に向けらるゝであらうと豫言したのである。それ故に、マルクスの追隨者達は、勞働者間の愛國心の發現を見て、

いに驚き、そして資本階級の人々の表面的な愛國心に向つて皮肉な冷罵を放つて居る。『萬國の無產者等よ、協同せよ』といふのが、マルクス派が賃銀勞働者に向つて與へた勸奬であつて、それは賃銀勞働者の『群の本能』を、その國籍からその階級籍の方へ轉換させようと企てゝゐるものである。從來に於ては、此のマルクス派の勸奬は餘り大した効果を示したといふ譯に行かなかつたことは、今次の世界大戰に際して示された通りである。が、しかし、我々は、それが何時までも其通りで續くだらうとは、保證することが出來ないのである。

競爭心は人間性の本能的機構の一部であつて、そして文明の程度が進むに從つて、競爭に從事する集團が、たとへば家族から種族へ、種族から小民族へ、小民族から現代式大國民へ、といふ風に、段々と擴大する傾向がある。國民主義の神髄は、一民族と他民族との間に存する競爭感情である。此の競爭感情の結果として、同胞國民に對しては忠信とか友情とかいつた樣な情誼が生じて來るし、同時にそれに對抗して、競爭相手の民族に對しては憎惡とか反感とかいつた樣な敵愾心が湧き起るのである。國民主義の熱に浮かされてゐる人は、自分の國だけが世界に於て最も文明的な、そして最も人道的な國であつて、自國の敵は皆、想像し得られる限りの慘虐と卑劣とを敢行するものだ、といふ樣なことを信じる。自國が極めて文明的であり、人道的であるのに、敵國は如何にも卑劣であり慘虐であるから、自國は斯う云ふ敵國に向つては、どんな卑劣な、そしてどんな慘虐な仕打をしても、決して不正當だとはいへないのである。——といふのが國民主義の教義である。

斯ういふ教義が、其の本質上からいつて、虛僞に根ざして居るものであり、且つまた、反噬、慘虐、破壞に導くものであるといふことは、自明の理である。國民主義者の信條は、國々に依つてそれ〴〵異つてゐる。ドイツ國民は、彼等の文化が非常に優秀なものであるから、ヨーロッパ戰爭を賭しても、これを他の諸國に普及する價値のあるものだと

考へて居た。これに反してイギリス國民は、彼等自身の文化こそ他の總ての文化よりも貴重なものであるから、銃劍と皮笞とを以てゞも、これを四方に宣傳する價値のあるものだと考へてゐる。イギリス國民とドイツ國民とは、双方とも同じ國民主義の信者でありながら、かういふ風にお互同士の意見を異にしてゐたのである。各國民が自國民こそ最も優秀な國民だと考へて居るのは、全く自惚れ沙汰に過ぎないのだが、それが自惚れでなく、眞實その通りに優秀な國民が唯一つだけある、といふことは、疑ひもなき事實である。しからば、その國民はどの國民かといへば、それは無論、本文の各讀者が屬して居る國民（それが事實どの國民であらうとも一向差し構ひはない）である。この國民以外の他のすべての國民が國民主義の教義を採用して居ようなどとは、以ての外の了簡違ひである。他のすべての國民は、本文の各讀者が屬して居る國民の優越を承認すべきであつて、そしてその一切の要求に溫順なしく從ふべきである。ところが、心外千萬にも、他のすべての國民が、それ〳〵自國の優越を主張する態度は、恰かも正當な根據に立脚してゐるかのやうに、如何にも頑固執拗を極めて居て、そして我々自身のやうな眞實優秀なる國民と同じ様に、自信に充ちた口吻でそれを主張して居ようとは！——

帝國主義と被抑壓民族の自決主義との間の差異が些細なものに過ぎないといふことは、抑壓せられてゐた民族が解放せられた場合のことを考へると、極めて明瞭に判つて來るのである。我々はポーランド民族の場合を、その最近の、そしてその最も顯著な一例として擧げることが出來るのである。凡そ百五十年の間に亘つて、ロシア人は、ポーランド人を壓迫してゐた。そしてポーランド人は、自由の外は何物も望まないと公言してゐた。で、各國に於ける自由の味方を以て任じてゐた人達は、ポーランド人等に好意を寄せ、彼等を目して、彼等自身が受けつゝあつた様な暴虐を決して他國民に加へることが出來ないやうな任俠の國民だと稱してゐたのである。それにも拘らず、ポーランド人等は、その

國民的獨立を獲得したと同じ瞬間に、ロシア征伐の戰爭を開始し、それに依つて、彼等自身が曾てツアーの虐政の下に於て受けたと同樣の苦痛と凶暴とを、出來るだけ多數のロシア人の上に加へようと企くんだのであつた。彼等の此の行爲には、別に不思議な所も變つた所もあつた譯ではない。それは毒々しい國民主義の熱に浮かされた國の行爲としては極めて自然なものであつたのである。

國民主義の害惡を醸成したものは、單に人爲的に決めた國境とか、外交家の過失とかばかりではない。それはまた、單に或る諸國民が抑壓を加へる側にあつて、或る他の諸國民が抑壓を受ける側にある、といつた事實ばかりでもない。無論この事實は極めて重大なる惡事であるには相違ないが、併しながらそれは、諸國民の勢力の間に完全なる均衡を維持することが不可能なる世界に於て存してゐる國民主義的感情から生じた避くべからざる結果に外ならないのである。要するに、文明世界の人類の大多數が、彼等の唯一の社會的義務が自國に對してのみ存在してゐるものだと感じてゐる間は、そして彼等が自國の進歩のためになら、如何なる程度の損害を他國民に加へても、決して咎めのあるべきものでないといふ樣なことを考へてゐる間は、何の樣な外交上の施設を以てしても、また何の樣な政治上の改革を以てしても、到底住みよき世界を造ることは出來ないのである。

自決主義は、弱小なる諸民族が優强なる諸大國に對して奮鬪する際にそれに訴へるのを常とするものではあるが、併しそれは單獨のまゝでは、國民主義的性質のものではない。それは寧ろ、國際主義的立場から國民主義に對して挑戰して居る形のものである。眞底からの國民主義者は、唯自國のためにのみ自決主義を適用することを切望するものである。もつとも、國民主義者が如何に其を切望するからといつて、聯合諸國の必要上から、其を口に出さないで、表面上他の諸國民の要求に對して正義を重んずる態度を餘儀なく示す樣なことはあるが、併しそれは言ふまでもなく、唯表面

上だけの話である。國民的感情が今日の様に熱烈である間は、若し自決主義を優强諸國民の意志に及して實現し强行することが出來るものとすれば、さうすることが、國境を定めるための最上の方法であるといふことは、自明の理である。併しながら、國民的感情が現狀のまゝで續く間は、さういふことが實現されたり維持されたりしようなどといふことは、到底考へられないことである。すなはち、それが今日のまゝで續いて行けば、各國境に於ては敵味方の軍隊が相對峙して互に虎視眈々の形で居るであらうし、通商貿易は妨害を受けるであらうし、そしてそれが行はれる場合には、それが敵味方の間に於ける國民經濟的憎惡感情を挑發する樣に用ひられるであらう。かういふ狀態の下に於ては、ほんの僅かばかりの言ひがかりから、直ちに戰爭が勃發することであらうし、そして斯ういふ戰爭に於ける戰勝國は、自決主義を一擲して顧みないことになるであらう。

國民主義の害惡を防止することが出來るものは、何の主義とか、何の原則とかいつた樣なものでない。さうした主義なり原則なりは、其の名が何んなに美しく響くものであらうとも、此の目的のためには効果のないものである。尙ほまた、國民主義の害惡は、今日抑壓せられてゐる諸民族の肩を持つことに熱心になることに依つて防止し得られるものでもない。何故なら、もし彼等に對する我々の加擔が成功したならば、彼等は明日にも抑壓を加へるもの丶側に廻ることであらうから。で、國民主義の害惡を防止するための唯一の方法は、たゞ國民主義そのものを削減することであり、また、人々の精力と感情とを國民的競爭といふ空疎なる仕事から外の方へ轉換することである。私は尙ほ今後の論文に於て、かういふ事が果して成し遂げ得られものであるか？　若し成遂げ得られるものだとすれば、どういふ方法によつてゞあるか？　といふ問題に立ちかへるであらう。兎に角私は、かういふことが現今に於ては文明世界が着手しなければならない最も大切な仕事——それは、ヨリよき經濟制度を確立することよりも、もつと大切な仕事——だと確信してゐるの

である。

此の論文に於て私は、現代社會を形成しつゝある二つの主力であると私が信じてゐるところのものに就いて、考察を試みた。私は此の二つの主力の相互的關係に觸れないで、雙方を引離して別々に考察した。併し是等のもの丶相互的關係は甚だ大切なものであり、また甚だ興味の多いものである。工業主義は、國民主義の發達に對して色々と貢獻し來つたが、他方に於てはまた、それは歷史上に於て初めて全世界のための超國家的政府を設置することの可能性を示した。共產主義は自ら國際的であることを公言したと同時に、被抑壓諸民族の救濟者であることをも公言した。また、他方に於て資本主義は、勞働者を社會主義的思想から外の方へ轉換せしめるの一方法として、國民主義を庇護してゐる。勞働者の間に外國人を憎む風習を植ゑ付けることが出來て行く間は、勞働者の資本家を憎む感情が、それだけづつ緩和せられるであらう、といふのが、資本主義が國民主義を庇護するに至つた動機である。是等の總ての事柄は、現代の文明を破壞すべく脅威して居るところの軋轢衝突の性質を考察するに際して、大切なものばかりである。

斯ういつてゐるうちにも、過去から傳來したまゝの復古的諸勢力——それは段々腐朽に瀕しつゝあるとは言ひ條、今尙ほ相當に有力で居る諸勢力——がある。其等は何であるかと云へば、例へば、手工業及び自作小農業とか、宗教とか思想上の章典尊重的習慣といつた樣なものである。近代思想の先驅者達が、その仲間うちでの競爭反目の結果、各々其の力を弱めて行く間に、復古的諸勢力はそれだけづゝその强味を增すのであつて、そしてこれらの諸勢力が最後に於ける唯一の勝利者となりはしまいかと考へることとすら、さして無理な憶測とは言へないのである。併し總べてかういふ事柄の前途の見込如何といふことに關しては、私は後の論文に於てもつと精しく述べようと思うてゐる。

附記——本論文はミス、ブラックとの共同思索の結果に成つたものである。

相對論に於ける法則の絕對性

理學博士　石原　純

一

「私の說き示さうとする空間及び時間の觀念は實驗的な物理學的な基礎の上に生育したものである。そこにその確實さがあり、さうしてまた根底的な傾向を示してゐる。今後、空間夫れ自ら及び時間夫れ自らは全く陰影のなかに隱れ失はれて、獨りその兩者の或る結合のみが獨自性を保つと謂はねばなるまい。」

これは一九〇八年の九月に獨逸國ケルンに開かれた獨逸自然科學者及醫學者大會に於てミンコフスキーが「空間及び時間」といふ題目で講演せるときの最初の有名な言である。この時までは未だアインスタインの相對性原理は幾ばくも世に認められてはゐなかつた。多くの學者たちはそれを只奇を求むる說でもあるやうにして恐らくは顧みやうとしなかつたのである。地球運動の效果がマイケルソン及びモーレーの實驗に全くあらはれなかつたことは不思議には相違ないけれども、それはエーテルとか物體とかの性質を適宜に考へたなら說明の出來ないことではあるまいと人々は豫想してゐたのである。ローレンツが、エーテルに對して運動せる物體はその運動の方向に長さを短縮するものであるといふ假定を導いて之を說明したのは、卽ち常識的に最も近い方法で之に答へたものであると見做すことが出來る。まさかに空間や時間に對する觀念が、こんな物質的現象のために動搖させられやうとは思はなかつたであらう。物質やエネルギーやエーテルを思惟する以前に、既に抽象的に空間や時間の觀念がその全內容をもつて成立するもののやうに人々の思

想が傾いてゐたからである。併し單純な實在論に滿足し得なかつた批判哲學は、既に此の點に反省を有つて居るべき害であつた。物質の皆無な空間や、現象の何も存在しない時間が果して最初から觀念的に認め得られるものであらうかそれは決して然定せらるべき所以ではない。況して空間や時間が數量的な概念に渾成されるためにはどうしても物質的現象の觀察に待たなければならないのであつて、從つてそれらが物理的法則に依存すべきことは至當のことに外ならないのである。空間や時間の自然現象に對する關係は、容器とそのなかに盛られた水のやうな、お互に引き放して考へ得られるやうなものではない。併しながら斯樣な密接な關係をたとへ哲學的に承認してゐたにしても、マイケルソン及モーレーの實驗が、從來會得されてゐた空間時間の概念の變更を齎らすべきものであるかどうかを見究めることは容易のことではない。尚ほまたさう云ふ變更によりて實驗的事實を解釋することが出來たにしても、それに必然性を歸するまでには相當の論據を要することなのである。アインスタインの仕事が遽かに認められなかつたのも斯樣な事情があつたからである。夫れ故に前述のミンコフスキーの講演を人々は驚異の眼を見張りながら聽いてゐた。空間及び時間によりてつくられた四次元の世界のなかにすべての物理的法則が、不變な幾何學的形象として云ひあらはされるといふことはまことに驚くべきことに相違なかつたのである。それは彼の言のやうに實驗的の基礎をもつて主張せられてゐるには違ひないが、そればかりでなく更に普遍的な幾何學的關係によりて裝はれたことに於て、その換へ難い價値を獨り占め得たものと云はなければならない。私は此のミンコフスキーの與へた衣裝に飾られて、相對性原理が始めてその本來の美を輝かすことが出來たことを思はずにはゐられない。否、彼の導いた四次元の世界は單に此の原理を飾る形式的衣裝ではなかつた。そのなかに空間と時間との深く相關聯する哲學的意義を認めることの出來る點に於て、もつと本質的に相對性原理と結び付いてゐるものなのである。物理的法則の眞否の判斷が如何に深く數學の普遍性に待つ處があるべきものかを私は此の例に於て痛切に感ずるものである。

ミンコフスキーの講演のあつた同じ大會に於て、電子の質量が運動速度によりて如何に變るかといふ問題に對し、ブ

ウヘレルの實測の結果が發表された。それに依れば電子の形體を剛體的に不變なものと假定した理論に比べて、相對性原理の主張する如く運動によりて變形すると假定した理論の方が實測と一致することが示された。さうして之に對すミる議論がその席上に集つた人々のなかに云ひ交はされたなかに、即ちおほくのものに尙ほ躊躇の佛が殘されてゐた間にンコフスキーは敢然として次の言を述べてゐる。

「私は實驗の結果が剛體電子に對してでなく相對性理論に對して都合よく見えることに就て欣びを述べたいと思ふ。いつの日かさうなければならないだらうと云ふことは理論的な立場からは少しも疑ひのないことであり得た筈である。電磁現象の法則をあらはすマックスウエルの式が相對性原理と最も內面的な調和を有するなかに剛體電子は私には一の畸異者としか見えない。剛體電子の思想をもつてマックスウエル式のなかに入り込むのは、恰かも奏樂のまへに立つて綿の栓をもつて自分の耳を塞いでゐるやうなものである。剛體電子を信ずる人々の眞理とその暴力とを少くとも私は驚かずにはゐられない。その人たちは無理に當座の假說を擔ぎ上げて、最も廣濶な數學的な構圖をとび超えやうとしてゐる。さうしてその向うのどこかで偶然に實驗的な物理學的な礎石に出遇はうと望んでゐる。けれど剛體電子は決して作業假說（Arbeitshypothese）ではない。寧ろ作業妨碍者（Arbeitshindernis）である。」

彼が如何に確い自信をもつてゐたかを私たちは此等の言に見ることが出來る。さうしてその自信は至深至妙な數學的關係の木框のなかへ空間と時間とさうしてまた自然現象の法則とを嵌め込むことが出來るといふ處に確かりと根づいてゐる。私はもう一度此處で繰返して言うておきたい。私たちが自然現象を理解すると云ふことは斯うした普遍的な數學的關係の之に相當するものを探し索めることに外ならないのである。夫れ故に數學の普遍性は即ち私たちの自然科學的認識の普遍性の根據となり、さうして數學の玄妙な論理的關係は同時に自然現象のなかに具體的に再現せられることが出來るのである。

ミンコフスキーの四次元の世界が如何に至妙な空間と時間との關係を與へるかといふことは、只數學解析を審かに

する人々にのみその味得をゆるされる。私はこの紙面に於てそれを説くことの適切さを見いだし得ないことを遺憾に思ふ。併し私は此處では、人間の頭腦がさう云ふ機微を普遍的知識として、現在に於て所有し得べきことを廣く告げればそれでいゝのであると思つてゐる。

相對性原理の基礎を確立せしめた偉材ミンコフスキーは其のケルンに於ける講演を果して間もなく、未だその講演の草稿が載せらるべき雜誌にあらはれなかつた間に、既に早く盲腸炎を病んで逝いた。一九〇九年の一月であつた。私は相對論をこゝに紹介するに際して、彼の斯う云ふ不慮の死によりて天命を短く終へたことを惜まずにはゐられない。

二

相對論は必ずしも一の物理學的理論としてのみ終始すべきものではないと私は思ふ。其の本質的な關係は既に幾何學に於て具はつてゐるものである。そこでは種々の幾何學的形象の間に存在する關係は、之を解析的に云ひあらはすために便宜上取られた坐標の如何に拘らないといふ定理として示されてゐる。換言すれば私たちはどんな坐標を選ばうともその間に常に一定の函數的關係をもつてあらはされる幾何學的性質を具へた對象を思惟することが出來る。私たちはそれを共變的（covariant）な關係であると名けてゐる。此の場合に於て坐標の選び方は限りなく澤山にある。けれどもそれらの坐標は、その間に成立つ幾何學的關係を云ひあらはす上に於て總て同等の位置におかれて居り、また同等の權利を所有してゐる。その何れを選ばなければならないと云ふ差別は少しも存在してゐない。此の意味に於てそれらの坐標は全く相對的であり、さうしてその坐標の間に成立つ幾何學的關係のみが一の絶對者となつて私達に示されて來るのである。

此のことは幾何學の理論の發達と共に抽象的に私たちの思惟の世界のなかに闡明せられて行つた。此の理論の與ふる種々の幾何學的對象が實在の空間のなかに見いだされるかどうかは勿論顧慮する必要もなかつたし、また實際に不明でもあつた。然るに相對性原理は之等の全く抽象的な思惟の所産であつた幾何學の理論をそのまゝ物理學的對象に應用し

得るものであることを明らかにしたのである。何故なれば物理的法則に入る諸概念はすべてミンコフスキーの四次元世界に於ける幾何學的對象として云ひあらはし得べきことを此の原理が主張するからである。

相對性原理は萬有引力論をその同じ屋蓋の下に包容するに至つて著しく一般的に擴張された。物體がそのまはりに萬有引力を及ぼしてゐるために、四次元の物理學的世界は物質の分布に應じて種々の歪みを生ずるものとせられてゐる。それにも拘らず此の世界のなかに於て行はれる物理學的法則は一定の共變的關係としてどんな坐標を選んでもそれには關しない。法則は斯樣にして絶對のものでなければならないのである。之に反して此の四次元世界に於ける坐標は卽ち夫々の觀測者が準據すべき空間と時間とを與へるものであつて、それらは觀測者の物理的情況の異なるに從つて、相異してゆくものであるけれども、法則を云ひあらはす上に於て全く同等な資格を具へてゐるのである。空間と時間との完全な相對性の存立はここに基いてゐる。夫れ故に物理學に於ける相對論は、觀測者の完全な相對性を認めることによりて、法則の絶對性を確立し、從つて之を普遍的な永遠的なものとして徹底せしめてゐることを諒解しなければならない。

私は相對論に於ける對象の絶對性に關して特にここに注意をとどめておきたいと思ふ。或る對象に絶對性を歸結せしめやうとするために最も徹底せる道は斯くして相對論に求むべきことを私は感ずるからである。觀測者若くは批判者が相對的に同等でないとしたならば、その觀測若しくは批判の結果が何れの場合に絶對であるべきかを判斷することが出來ない。それらの異つた多くのもののなかで絶對の權威者があらはれるのを待つと假想するにしても、果して實在者の何れが之に相當すべきかを判斷し得るのは、その絶對者自からにのみゆるさるべきことであつて、他には任せることが出來ない筈である。換言すれば絶對者でない他のものは、その誤謬を免がれない判斷によりて、絶對者の判斷の絶對性をも疑ふにちがひない。卽ちすべての人に對する絶對は此の場合には單に想描的に存在する外、決して實在的には成立し得ないであらう。之に反して觀測若くは批判者の凡てが相對的に同等である場合に於ては、それらの觀測若くは批判の結果は相一致する。卽ち普遍的な從つて絶對的なものとしてそれを許容することが出來る。

私たちが實際に行ふ物理學的觀測はそのまゝで普遍的なものではない。觀測者が個性的に多少異つた感覺を有つてゐるからである。併しそのなかから普遍的要素を抽象してそれによりて認めらるゝものを私たちは物理學的對象と見做してゐる。卽ち個性的相異から起る觀測の誤差を取り除いたものを始めて物理學的の素材としての觀測と見なすのであつて、此の意味に於てその觀測は普遍的であり、從つて嚴格に相對論を應用し得るのである。實際に於ては之等の誤差を全く取り除くことができないので、夫故に完全なる普遍性は遙かに之にゆるされないけれども、併し少くとも理想の極致に於て之が可能を信じ、さうして現在の觀測が少くとも最後の理想的のものの或る漸近値を與へてゐることを肯定する處に、私たちの物理學の成立の論據が存在してゐるのである。

物理學の對象たる自然現象に比して、文化現象は極めて複雜なものを含むでゐる。併し此の現象に關する原理が立てられやうとする場合に當りては、やはり自然現象に於けると同樣の事情が存在することが悟られる。私は此に言及せんと欲して特に相對論に於ける對象の絕對性を上に述べたのであつた。文化現象に關する原理が若し或る場合に立てられやうとしたならば、その絕對性さうして普遍性を期待するがためには、玆處にも相對論が主張されなければなるまい。さうして文化現象に與かる個性のなかに少くとも其の理想的極致に於て普遍的なる性格を認める必要をもつやうになるであらう。之は同時に文化價値に對して最高極限の存在を認容するためにも必要なことなのであると私は考へる。

いろいろの社會事象が論議される場合に私はいつも此の相對論のことを思ひ合せてゐる。

三

相對性原理は最初等速運動の場合に立てられたのであつたが、アインスタインが萬有引力をその考察のなかに導びき入れて、すべての種類の運動にまで之を擴げたことは、まことに天籟の音でなければならなかつた。古來の力學は狹く限られた等速運動の世界にのみ成立つてゐた。そこでは速度の變化は絕對者としてあらはれて居た。さうして力の實在

といふ觀念がその上に作りあげられてゐた。速度の變化の絶對性がゆるされてゐる處には、此の變化が測られ得べき絶對の空間が與へられてゐなければならないのであつた。ニウトンは云ふ。

「絶對の空間は其の性質によりてさうして外界の諸物に關することなしに常に同一に且つ動くことなく止まつてゐる。」

彼は絶對空間に於ける運動が、單に相對的に考へられた運動から差別することの出來るのを示した。

「桶を長い糸でつるして、糸が強く捩られるまで之を廻し、桶に水を注ぎ入れて最初、手で抑へて止めておく。それから之に勢をつけて放すと、逆にくるくると廻つて糸の捩れが全くほどけてしまふまで廻り續ける。桶のなかの水面をみると、その動き出すときには水平であつたものが、だんだんと桶の運動が水に傳はるに從つて、水も廻り出し中央から端の方へ偏倚つて桶の縁で高くなり、從つて水面は凹んだ形になる。……水と桶との相對的運動はまだ水の廻り出さない最初に一番大きかつた筈であるけれど、そのときはまだ水は水平の儘で殘されてゐる。『實在』の運動が未だ始まらないからである。併しその後に水の相對運動は減つてくるに拘らず水は縁の方へ遠かつてゆく。それが水の絶對空間に於ける實在の運動を示すものに外ならない。」

此の實驗は少くとも廻轉運動に對して絶對空間の存在を示すものとせられた。ニウトン力學を承認する物理學は之に向つて故障を云ひ立てることは出來なかつたに相違ない。併し私たちの現時代がアインスタインを送り出すまへに、既に二三の明眼者が昔の力學に或る懷疑をもたずには居なかつたのである。私たちはそこに先づマツハの名を見いだす。

「一つの物體の運動は常に他の諸物體に對してのみ判斷することが出來るのである。けれど通常私達は相對的に靜止してゐる若くは其の位置を極遲くしか變じない澤山の他の物體をもつてゐるものであるから、特にどれに對してと云ふことを指摘せずに居る。從つて場合に依りて或は此の物體とか、或は彼の物體とかの存在を見遁して構はずにしまふ。併し此の事情のためにさう云ふ物體は皆同じことだと思ふのは間違つてゐる。」

彼に於ては運動は全く相對的にのみその意味をもつてゐる。

「ニウトンの廻轉せる水桶の實驗は、水の器壁に對する相對的廻轉が目に見える程の遠心力を起さないと云ふことと併しそれが地球やその外の天體に對して相對的廻轉をなすためにあらはれると云ふことを教へるに過ぎない。若し器壁をだんだんと厚くして質量を增させ、遂にその厚さを數哩にも亘るやうにしたならば、その實驗がどうなるであらうかを誰が豫言することが出來やう。……」

マッハの論鋒は鋭くニウトンに迫つて行つてゐる。彼が近く一九一六年の初に逝いたとき、アインスタンはその追悼の辭のなかに述べてゐる。

「マッハは古來の力學の弱點を明らかに知つてゐたので、此點に於て一般的相對論に甚だ接近してゐた。さうして此は今から殆ど半世紀以前のことであつたのである。若し彼の若い心が活動してゐた時代に光速度の不變の意義に關する疑問が既に物理學者を動かしてゐたとしたならば、彼がもうその時分に今日の相對論に到達してゐただらうといふことは必ずしも憶測には止まるまい。……ニウトンの水桶の實驗に對する考察は一般的の意味に於ける相對性（加速度の相對性）の必要が如何に切に彼の思想に横はつてゐたかを示すものである。……」

空間や時間や力といふ概念、それらは私達に最初から與へられたもののやうに思つてゐる。併しさう云ふものをその儘に呑み込んでゐたのでは、驚くべき內容をもつた新らしい物理學は生れ得なかつたのであらう。私達はそれらの概念がどうして形づくられてゆくべきかを飽くまでも分析して見なければならなかつた。さうして之等の基礎的概念が、やはり物理現象の法則を離れて、それの成立つまへに與へられてゐるものでは決してないことを悟り得たのである。自然法則が私達の理解に協ふやうに、即ち數學的論理の形式のなかにぴつたりと當て嵌まるやうに、私達はあらゆる物理學的概念をつくつてゆかなければならない。それが最も自然な途なのであると私は思ふ。ミンコフスキーは之は純正數學の異常なる勝利（Ein ausserordentlicher Triumph der reinen Mathematik）として云ひあらはした。私達の有す

る最も普遍的な、夫れ故に最も精確な知識として數學が認められるときに、自然が之と融合し得る所以の哲學的意義を私はここに見逃してはならないと思ふ。さうして私は此の意味を含めてミンコフスキーの言を味ひたい。

四

ニウトンの萬有引力の法則は物理學の諸法則のなかで最も精密なものの一つとして信ぜられてゐた。それは諸天體の運動に應用せられて能くその軌道を計算するに足りてゐた。日蝕とか月蝕とかいふ天體の力學的現象がいつ如何なる時日に如何に起るべきかを豫言することが出來るのは皆そのお蔭であると謂はなくてはならない。併しながらニウトンの法則が只觀測的事實から歸納せられた一の命題に過ぎないものであるならば、それはミンコフスキーの謂ふ處の、事實との偶然の適合に外ならないのである。自然の素朴的實在を假定する限に於ては、自然法則はそれだけの意味で充分であつたかも知れない。けれど現在の私たちは、自然法則の體系にもつとそれ以上の意味をもとめて、その認識論的の根據をつくらうとしてゐる。自然法則は夫故に至妙なる數學の柵圍のなかに嵌め込まれなければならなかつたのである。さうしてその論理形式の完美に於て始めて法則の必然性を仰視することが出來るのである。

先世紀の前半に於ける引力ポテンチアル論の發展に伴つてニウトンの法則は斯樣な數學の柵圍の方によほど引き寄せられたやうに見えたのであつた。併しそこには未だ解かれなければならない問題が殘つてゐた。それは引力が空間をどんな速さで傳はるかといふ問題である。

ニウトンの法則のなかには引力の傳達といふ思想がまるで入つてゐない。そこでは二つの物體の間の引力は最初から與へられたものであつて、その距離が變れば之と全く同時に引力の大さも變つてしまふのである。物體がたとへどんなに速く動いたとしても、引力の變化は常にその瞬時的現在の距離に應じて起るのである。併し斯樣な關係が認識論的に承認され得るかどうかに就て先づ疑が投げられた。空間的に相離れた場處へ物理的作用が直接に及ぼされ得るものであ

らうか。此問題の解決は萬有引力の場合でなしに、電氣力に對して先づ與へられるやうになつた。電氣力の法則も最初は實驗的にニウトンの引力法則と同樣の形で見出された。併しその種々の關係が磁氣力と相關聯して明かになつて行つた結果、遂に之等は有限な速度で空間を傳はるものであることが論斷せられ、さうして實驗的にそれが光速度に等しいことが確定せられるやうになつた。そこで萬有引力も亦恐らく空間を傳はるに有限な速度をもつてするであらうと云ふことは、普ねく豫想せられ、此の意味に於てニウトンの法則は變更せられなければならないのも當然の運命と見なされてゐたのである。只引力の傳達の速度は觀測的にその精確の値をもとめることが困難であつたために相對性原理の成立以前に於ては、その有限さを確實にすることが出來なかつた迄である。

諸天體の運動のうちでニウトンの法則で解釋の出來ないものも屢ゝあつたのである。そのうち最も著しいのは月の運動であるけれども、月は地球に近接してゐるために、その形體や潮汐の變化などの複雜な影響があらはれるためであらうと想像されてゐる。此の外には水星の運動であるが、これも黃道光を起す物質の存在を考慮したなら說明ができはしないかと云はれてゐた。勿論その差違は極僅かなのであつて、引力が距離の二乘に逆比例する代りに、200000016乘に逆比例すると假定すれば實際の運動に近くなるくらゐなのである。併し引力の法則にそんな變更を施して事實に適合させるといふのは、それこそ明るい數學の構圖をとび越えて、闇黑な領域に迷ひ出すものだと謂はなくてはならない。

相對性原理が最初等速運動に就て立てられたときに、すべての物質的運動並びに物理的作用の速度は光速度を超ゆることが出來ないと結論せられた。若し之を超ゆる作用があつたとしたならば因果律に矛盾するやうになる。從つて萬有引力も光速度より速く傳はることはできない。多分それと等しい速度で空間を傳播するであらうと豫想せられ、之を滿足すると共に、一方に於てその原理の要求する處に從ひ、ミンコフスキーの四次元世界に於て不變の形をとるやうにその法則が創り更へられなくてはならないやうに迫られた。處がアインスタインは之を試み企てるに當りて、彼が最初に相對性原理を稱へるときに主張した光速度不變の假定を捨てなければならなくなつた。どんな觀測者から見ても光の速

度は同一であると彼は言うた筈なのである。さうしてそれは彼にとりては演繹せられた結論ではなくて公理的な假定であつた筈なのである。それをいま捨ててしまつて、それでも相對性原理が成立つと云ふのは論理を誤つたものではあるまいかと云ふ激しい駁論が彼に向つて發せられた。電子論に於て多くの功績をもつてゐるアブラハムの如きは此の駁論を振りかざして相對論に背き當て彼自らが主張した剛體電子の故壘に歸つて絶對論を守らうとさへするに至つた。併しながらアインスタインの引力論が最後の勝利を獲得するやうに幸せられたのは果して何故であつたであらうか。必ずしも事實との偶然の逢合によりてではないと私は思ふ。美しく建設せられた數學の大厦のなかへ彼は引力論をぴつたりと引き入れた爲めである。リーマン幾何學、それが此の大厦の名まへであつた。斯くして出來あがつた一般的の相對性原理に於ては、ミンコフスキーの四次元世界はリーマン幾何學の成立する空間として取り扱はれるのである。そこには物質の存在によりて空間の歪があらはれて來る。歪のない場處ではいつも同一の速度で走る光は、空間の歪の影響によりてその速度を變へることは必ずしも考へ難いことではない。私たちは此の光速度の變化を萬有引力のはたらいてゐる爲めであると言ひ直してもいゝ。或はまた光は重さを有つてゐると、さう云つてもいゝのである。さうして之等の光速度の變化に拘らず、此の四次元の世界のなかで、萬有引力の法則はリーマン幾何學に於ける共變的關係として、どんな空間時間的坐標に對しても同樣に成立つのである。すべての觀測者に對して光速度の變らないといふことは捨てられたけれども、それはもつと一般的な形で、即ち法則の共變性（Covariancy）といふことで置き換へられて、一層廣濶な數學的基礎のうへに据ゑられた。私達はこの事實が相對性原理の自然法則としての必然性をどんなに高めてゐるかを深く悟らなければなるまい。私は斯樣な見方で、法則の必然性の意義を徹底せしめることによりて、自然の唯一性を理解し、之と數學の公理系統との關係を新らしく究めてゆきたいと思つてゐる。

五

物理的作用が空間を隔てて物體間にあらはれる場合に必ず有限な速度で傳はるといふ事實は、謂はゆる作用の遠隔性を否定するものである。すべての作用は近接的に相隣れる場處へのみ及ぶことが出來るとすることは今日殆ど疑を容れる餘地がない。最初この近接作用の思想が物理學に導き入れられたときには、之は空間に於て一種の媒質の存在を示すものであると解せられ、エーテルといふ假想的物質によりて眞空が塡充せられたのである。併し物質の存在しない空間は現象的にも空虛でなければならないと云ふやうな概念は、實在の空間に對して固執される必要はなくなつた。物質の周圍の空間はその力の場、従つてエネルギーの所在でなければならないと云ふことは漸く明らかになつたと共に、相對性原理は各の物質を離れて存在すべきエーテルを否定してしまつた。近接作用の傳播する場處は即ち私達の認識する物理的空間に外ならないのである。

此の物理學の理論の推移に對して、幾何學の理論の發展を比較することは極めて興味深いことである。その間に單なる類推ではなくて、物理學の法則が最後に四次元世界の幾何學の論理關係と融合すべきことを思ふときに、特に至大の意味を感ぜずにはゐられないのである。

古來のユークリッド幾何學は一の遠隔幾何學（Fern Geometrie）である。そこには幾何學的形象の對比がどんなに遠く離れてゐやうとも、空間を隔ててその儘ゆるされてゐる。之に反してリーマン等によりて基礎をおかれた微分幾何學は或る意味に於て近接幾何學（Nahe-Geometrie）である。そこでは極微な空間的形象を定むる要素が、只近接的に相隣つた場處毎に對比せられて然る後漸次遠方のものへ及ぼすことが出來る。丁度ユークリッド幾何學がだんだんに理論の發達に伴つて斯様な微分幾何學に移つて行つたのは、物理學に於て遠隔作用が廢れてすべての力が近接作用によりてその説明を見出して行くやうになつたのに對比される。それぱかりでなく相對性原理に於て光速度不變の假定から更にその變化する場合に擴げられて行つたのも、ミンコクスキーの四次元世界の性質が、遠隔幾何學から近接幾何學によりてあらはされるやうに推移したのに外ならないのである。

リーマンの幾何學は一の近接幾何學には相違ないけれども、そこには空間のなかの極微な距離は全く不變の大さを保つてゐる。夫れ故に此の距離の大さに關して遠隔的に對比することが出來る譯である。此の意味でそれはまだ純粹な近接幾何學とは云へない。近ごろワイルといふ人は幾何學を純粹に近接的なものに徹底せしめ、さうして之を空間的時間的の世界に應用することによりて相對性原理を擴張し、依りて萬有引力ばかりでなく電磁氣力をも幾何學的に解釋しやうと試みてゐる。萬有引力のある場處では世界空間は近接的に歪を受けるけれどもリーマンの與ふる如く極微な距離の大さは變らない。併しそこに電磁氣力があると後者が近接的に變つてゆく。彼は斯う云ふ見解のもとに現在物質の組成分として知られてゐる電子の秘奥を拓かうとしてゐる。

アインスタインの相對性原理に關しては尚ほ多少の論議のあるべきことは當然であるかも知れない。萬有引力を世界空間の歪によりて解するとしても、彼の主張する如く、逆に世界空間のあらゆる可能的な歪が萬有引力として物理的に解し得べきものであるかどうかに就ては、私は特に疑をもつてゐる。さうして此の疑問の解決は力の實在性といふことに重大な關係をもつてゐることをも想つて居る。併しながら物理的法則がミンコフスキーの世界のなかに於て、幾何學的な共變的關係として云ひあらはし得べきことを主張する限り、相對性原理は少くとも私には既にあらゆる疑問を超越したものとして肯定せられる。そこに法則の絶對性と普遍性とさうして必然性とが恐らくはその最も正當な理解を出し得ることを深く想ふからである。

（此の文を讀まれる人たちに對して私は昨年十二月の本誌上にある私の「時間及び空間の相對性」といふ一文を是非參考せられんことを願うておく。）

中産階級滅亡論

山川・均

一六　中産階級の質の變化——新中産階級の出現

或るマルクス批評家は、マルクスは唯だ一つの作用——從來の中産階級の資本家が、斷えず無産階級に陷落するといふ、唯だ一つの作用——しか認めなかつたかの如くに云ふ。そしてベルンシタインも其内の一人である。成るほどマルクスの書いたものゝ中には、一讀しただけでは、斯ような印象を與へる章句のあることは疑ひがない。また一般的傾向の概括的記述としては、之でよいのである。けれども其れは必ずしも、マルクスの記述した根本的の主要な傾向を全然打消さぬまでも、幾らか之に影響を與へる逆流のあることを否認することにはならぬ。マルクスの著述の中から、其前後の關係や、又は其章句がその場合に用ひられてゐる當面の目的などを精密に調べないで、唯だ一章句だけを引用するの危險は玆にある。又た他の問題に關聯して指摘したように、マルクス批評家が、有ゆる種類の矛盾をマルクスのうちに譯もなく發見する理由も玆にある。マルクスが其學說體系を系統的に說明する爲には、數卷の大冊を必要としたが、それで尙ほ彼れの事業は未完のまゝだつた。マルクスは有ゆる場合々々に、此箇所に論じた傾向や法則に影響を及ぼしたり、又は之を變更するような、一切の情況を一々反覆する譯には往かなかつた。そして之は自然、其著述の他の部分に收められた場合もある。彼は讀者が之を記憶して居つて、同一の問題に關聯した全ての章句を通讀するものと見做してゐた。又時としては、彼は故らに、絕對無條件的の形式で記述をしておいて、跡から之に制限を加えて往かうとした場合もあるし、又た或る場合には、自ら自身も信じて居らぬような推定を先づ掲げておく、跡からこの絕對無條件的の記述に變更を加へたり

又は此推定の不正確なことを指して、彼れ自身の學說を一層明白に且つ一層系統的に叙述するの手段としたのである。

そこで今問題となつてゐる事柄に就いて云へば、マルクスは資本主義の進歩の結果として、資本家階級から陥落した人々が全く殘らず無產階級になるといふ積りであつたことは疑ひがない。其中の或者は、ほんの一時にせよ、半資本家、無產者の地位に止どまつて、收入の一半は其財產から、一半は其勞働から得るといふ場合もあらう。更に其全財產を無くした者すらも、唯だ舊るい意味での無產者——財產は何もないが而かも近代的の意味での無產者、即ち生產機關を所有され勞働者と云ふ意味での無產者である人々と——あるに止まる者もあらう。彼等は最早や資本家ではなくなつても、尙ほ勞働者とはならぬ場合もあらう、勞働の代りに頓才で食ふ者もあらう。中には、又昔の同僚の居候になるものもあらう。吾々の見るところでは資本主義の進歩につれて、中產階級排除の作用の爲に其地位を失つた人人の間には、此最後に述べた階級の割合が、段々增加して居るのである。

そこで謂ゆる『新中產階級』といふ、修正派（レヴイジヨニスト）の叫びが揭げられた。そして收入に關する統計に、奇異なる特徵の現はれてゐるのも、之が爲めである。是等の統計を一見したところでは、賃銀以外の小所得を得て居る階級が、如何にも多いように見えるが、之はベルンシタインの主張するように、資本の聚積（コンセントレエシヨン）に伴ふ富の集中（センツラリゼエシヨン）の作用が存しない爲ではない。斯ような現象は先づ第一には、資本家の聚積に伴つて、賃銀奴隷制度が上の方に向つて生長してゐるといふ事實——賃銀奴隷制度が、其性質と報酬の上から見て、資本主義進化の初期には賃銀奴隷の領分に屬してゐなかつた新職業をまでも包容して、段々上の方に向つて生長してゐるといふ事實——によるものである。そして此階級は特に會社組織の發達によつて增加したのである。第二には、何等の財產も持つては居らぬが、事實上にせよ見て呉れだけにせよ、兎も角獨立の地位を保つて、少くとも形式だけは賃銀奴隷の範圍に這入つて來ぬ人々の階級が增加した結果である。

そこで此事實は、最近に於ける經濟上の發展は、中產階級の性質にどんな影響を與へたかと云ふ問題を引き起す。然しながら此問題の考究に移る前に、吾々は次の如き事實を指摘しておきたいと思ふ——事業集中（コンセントレエシヨン）の作用を非常に緩慢なものと見てゐる多くの議論や統計は、其實集中されて大きな事業に隷屬してゐる、多くの事業や事業家が、外觀と形式だけは獨立の存在を

保つて居るといふ事實に由來するものである。吾々はまた獨逸に於ける最も有爲な新進社會主義者の一人たるハインリヒ・クノウが、此事實を指摘する上に大なる貢獻をしたことをも、玆に附記しておきたいと思ふ。

一七　新中産階級は資本の集中を妨げぬ

そこで或人は斯う反問するかも知れぬ——君の記述した作用によつて、現在又は從來の中産階級の人々全てが、其財産から收入を得る小資本家の地位を維持し得ないと云ふことは、事實かも知れぬ。けれども其れにしても、尙ほ無産者（プローレタリアン）の地位になり切らぬ『新』中産階級が殘る譯である。この『新』中産階級は何等の財産をも持たず、若くは經濟的に重要なほどの財産を持つては居らぬが、それにしても無産階級とは別な一階級であるから、若し其數が可なり多いとすれば、看過することの出來ない一勢力である。然るに此階級の數の多いことは收入の統計によつて確かに推測することが出來る。賃銀勞働の結果と認められない收入は、**それが財産を所有する舊中産階級の收入でない**限りは、この『新』中産階級の收入でなければならぬ。そこで收入の統計は、少くとも僅かに一つの事を證明して居る。と云ふのは、この財産の無い『新』中産階級は、財産のある中産階級と相合して、今日のところ一個の大なる階級を成して居り、且つそれは徐々としか減少しないと云ふ事である。果して然らば、資本主義から社會主義への近づきつゝある變形といふ、吾々に興味ある問題に關係のある範圍に於ては、舊中産階級と新中産階級との間に、どんな相異があるのであらうか。して見ればベルンシタインが、社會主義の實現が若し中産階級の消滅に懸つて居るものならば、少くとも差當りは、社會主義は一寢入りしてゐてもよい筈だと云つたのが、詰りは正しいではないか？

此種の質問に對しては、吾々は斯く云ひたい——既に指摘した通り、マルクスの學說のうちには、決して、社會主義の實現する前に、全ての中産階級が消滅しなければならぬと云ふことを含んでは居らぬ。從つて新中産階級が發達しつゝあるかも知れぬと云ふ事實は、マルクス說は修正しなければならぬといふ論斷に、何等の根據をも與へるものではない。但し之は勿論、その新中産階級が、舊來の中産階級との間に區別の立てられる**ほどに、異つて居る場合のことである**。機關の社會化に取つて——最も重要な事柄は、第一には、是等の生産機關が社會的性質を持つて居ることである。そして社會的性質を多く持つて居る（卽ち資本の聚積（コンセントレエシヨン）が行はれて居る）ほど、都合がよいのであ

る。第二には、是等の生産機關が、社會的に管理し得られること、即ち成る可く少數の人々の手にある(富の集中(セントラリゼエション)が行はれて居る)ことである。之に較らべるなら、勞働階級の生産した剩餘價値——即ち資本家階級の收入が、どんなに分配されてゐるのか、財産を有する中産階級の消滅による、富の集中に就いてのマルクスの診斷の精確なことは、既に示した通りである。そして之れぞ資本主義から社會主義の進化に於ける、決定的の重要事の一つである。中産階級を構成する人々が、無産階級に沈んで了ふと云ふことは、彼等が其財産から引離されることほどに、必要な條件ではない。今日の社會が、資本主義的生産形態から社會主義的生産形態に推移する爲に——即ち生産機關を社會化する爲に——最も重要な事は、唯だ第一には、是等の生産機關が、社會的性質をもつて居ることである。そして是等の生産機關の性質が、社會的であればある程(即ち資本の聚積(コンセントレエション))よいのである。第二には是等の生産機關が、社會的の管理經營に適し、居ることである。即ち其管理經營が、成る可く少數者の中に歸つて居ること(即ち富の集中(セントラリゼエション))である。そして勞働階級の産出した剩餘價値——即ち資本家階級の收入——が、どんなに分配して居るかといふことは、左まで重要なことではない。そして此收入の分配狀態が、幾らか重要になつて來るのは、次の二つの點についてだけである——第一、收入の分配狀態によつて、財産所有者たる地位を保つことの出來る人數の多少が定まり、之が富の集中の上に反應作用を及ぼす範圍に於いて。第二社會の種々なる階級の心理に影響する範圍に於て。

第一の點に於いては、既に論じた通り、『新』中産階級は無害である。それが存在は、富の集中作用を妨げた。否な却つて新中産階級なるものは、富の集中の直接の結果に外ならぬ。そこで幾らか重要だとすれば、それは唯だ第二の點である。

一八　新中産階級も畢竟は無産者

然しながら吾々は、此點の研究に進む前に云つておかねばならぬことは、資本と財産の所有と云ふことが、資本家階級の本質であるから、この謂ゆる『新』無財産の中産階級なるものが這入つて來ると、玆に際限のない混雜を來たすといふことである謂ゆる新中産階級と名づけられ、また收入統計の面ではさう見えるものゝ大部分は、實は普通の無産階級の一部であつて、謂ゆる新中産階級なるものは、其性質がどんなものにもせよ、收入統計表から想像せられるよりも遙かに少數である。この混同は一面には、マルクスは筋肉勞働のみに價値創造の性質を認め

たかの如くに想像する暫い、そして根づよい偏見に負ふものであり、又一面には、事業監督の職分と、財産の所有との分離――前に至つた通り、會社組織の結果として――に基づくものである。斯ような情況の爲に、無産階級中の大なる部分が、中産階級――即ち資本家階級の下層――に屬するものと見做されて居る。近來その報酬を『賃銀』と云はずに『俸給』と呼ぶ職業が澤山あつて、尙ほ頻りに增加して居るが、是等の職業は殆んど皆なこの例である。全て是等の俸給取りは、其俸給の如何に拘らず恐らくは『新』中産階級の全部、少くとも確かに其大部分を成すものであるが、其實は無産階級の一部たることに於いて、純粹の其日稼ぎの勞働者と選ぶところはない。但し俸給の額が多くて、其うちから貯蓄し投資することが出來、又た實際そうしてゐるようならば勿論例外である。斯ような投資をしてゐる限りは(例へば、自分は何か有用な職業に就いて衣食しながら、資本の殘りを投資してゐるような場合)、彼等は資本と勞働との境目に居るもので、其地位は彼の落魄した小農が、其鄕村を去る前に、『何か片手間仕事でもして』農業者として踏み止まらうと試みるのと似寄つて居る。しかし此種の場合はそう多くは無く、且つ彼等の境遇は單に過渡的である。今一つ云つておく可き例外は、俸給が非常に多くて、明らかに其人の勞働の價値を超過して居る場合である。然し此種の場合には、斯ような俸給は、事實上その會社を支配してゐる資本家に拂はれて居るものだと云ふ、とが分かる。そして之はやがて大資本家が、少資本家から、其利潤の一部を卷き上げる過程そのもの丶一部であることが分かる。要するに以上の如き、些細な例外を除いては、俸給取りは自分自身で何と思つてゐようとも、實は無産階級の一部である。

尤も是等の人には其門地や、交友や、習慣や、考へ方からして、彼等の屬する階級よりも、寧ろ上流の階級との間に、一致團結の感情をもつてゐることは事實である。けれども此爲めに彼等の社會經濟的の身分の變はる譯はない。そして彼等が社會主義の事業に取つて有用である限りは、賃銀奴隷制度からの階級を目的とする勞働階級の組織團結といふ一般的問題と、唯だ程度こそ違へ、性質に於て異るところのない問題が、彼等の間にも起つて來る。そして中産階級の性質の變化は、勞働階級全體の組織團結といふ一般的問題を解決する上にも、また彼等の特殊な組織團結の問題を解決する上にも、可なり重要なことである。

一九　心理狀態か一變した

中產階級の性質は變化した。否な資本家階級全體の性質は、會社組織の企業が個人的企業に代はつた爲に變化した。唯だに其ればかりでなく、吾々の全社會組織の性質が、右の理由の爲に可なり重要な變化を受けつゝあるのである。そして是等の變化は、今日の社會を構成する種々なる階級の心理に、既に大きな變化を生じ、全然全く之を革命しようとするのである。英國の一政治家の、『今や吾々は皆な社會主義者であるか』といふ有名な文句は、或人々の考へるほど無意義な言葉ではない。勿論こう云つた御本人たる紳士は、自分ではこの言葉の充分の意味を覺つて居らぬかも知れぬ。けれども彼れが知らずして此言葉を發したと云ふ事實が、此言葉の正確を證してゐる。そして彼れ自身は此言葉に、吾々の解する意味とは、全然違つた意味を結びつけてゐやうとも、それは固より勝手である。そこで此言葉の意味は斯うである――私有財產制度の心理、就中個人的企業の心理である個人主義の哲學の命數は定まつた。そして生產機關の集合的所有の心理、人間の事業の社會的編制の心理たる、集合主義の哲學は、漸々として之に代はつて居る。此變化は、既成の經濟的事實と直接に反映する、法律の領域に起つてゐるばかりでなく、一層かけ離れた藝術や哲學の領分にも起つて居る。尙ほ混沌狀態であつて、何人も『理想の破壞』を見落すことは出來ぬが、さりとて能く其全體の意義――新しい社會と之に照應する所の心理とが、非常な勢ひで進んでゐるといふ、全體の意義を理解し得るものは少數である。

資本主義の純粹の表はれで、ほんの近頃まで全盛の哲學だつたスペンサー說は死んだ。そして忘れられて了つた來る日も來る日も、前日までは尙ほこびり着いてゐた此哲學の遺物が、公然と棄てられて吾々の眼を驚かす。社會主義は當面の問題となつた。唯だに勞働階級の組織の發達を反映した社會主義の危險ばかりでなく、集合主義の原則と、集合主義的思想の表はれとの承認が、當面の問題となつて來た。最近の米國々會は、その著るしい證據を示してゐる。と云ふのは、國會で實行せられた事柄ではなくて、原則の上に讓步せられた點である。卽ち勞働階級の利益を目的とする立法や法律案ではなくて、斯ような心理の變化を示す一切の立法上の企である。

これに關聯して云つておきたいのは、曾て資本家仲間の間でルーズヴエルトはブライアンよりも、一層『危險な』社會主義者であるといふ叫びが揭げられたが、之には幾らかの據る所があ

ると云ふことである。無論吾々は、どちらも社會主義者とは思はぬし、どちらも全然『安全』とは思ふが、然し實際ルーズヴエルトは、資本家の立場から見てそれほど『健全』ではないと信ずるものである。要するに二人の相異に反動的資本主義と進歩的資本主義との相異であり、反トラスト法と鐵道料金法との相異である。是等の立法は何づれも、大資本家に對しての資本家を保護する爲めの、純粹な資本家的政策であるが、兩者の遣り方に至つては、根本的に異なつた社會原則に基づいて居る。前日も述べた如く、反トラスト法は、國家は唯だ警察上の任務を有するに過ぎぬとする學說を基礎とする、純資本主義的政策であるが、之に反して鐵道料金取締法は、社會的の生產機關は、先づ第一に社會全體の利益の爲に存するものであるから、從つて社會的の管理に附すべきものだといふ學說から出發する。斯く云へばとて、鐵道料金取締法そのものが、何ヶ重要なものだと云ふ譯ではない。否な鐵道の取締にしても、資本家的國家による鐵道の國有にしても、一向重要なものではない。けれども取締りをしようと云ふことが、殊に米國の如き純粹の資本主義國に於ては、思想の傾向を示すものとして意義がある。更に人ゝの注意が、ブライアンの資本主義攻擊の遣り口たる收入の方面から、社會組織改造の眞の戰ひの戰場たるべき、生產の管理に移つたことにも意義がある。

二〇　財產の無い『中產』階級の心理

斯ような心理の變化を生じたのは、人々が事物の眞關係を一層明瞭に認めて來たからではなくて、全くの心理の基礎たる社會の經濟關係が變化し、また變化しつゝあるからである。生產機關の私有は資本主義的社會の基礎である、從つて亦た、全ての資本主義的心理の基礎である。そして所有といふことは、單にそれから收入を得ることを意味して居るばかりでなく、實際上に所有すること、卽ち管理を意味して居る。謂ゆる『新』中產階級といふが如く、何等の資本を有しない資本家階級といふことは、用語の矛盾である、變則である。然し財產は持つて居たがこの財產を管理しない資本家の立場に至つては、之に劣らぬ變則である。眞の天才の識見を備へた驚く可き藝術家ゴルキーが其小說中の人物をして、富の眞意義は、それによつて他人を支配する力の得られることだと云はせたのは、正さに此眞理を道破したものである。けれども此支配の力は、其人が富から得る收入にあるのでなくて、富そのものゝ管理にある。そして此富とは今日の社會では、生產機關と同意義である。

そこで『新』無財産中産階級なるものは、實は資本家階級ではないのである。否なそれは些つとも、中産階級ではないのである。是等の人々が、資本家階級と勞働階級との、中間に立つて居ることは事實である。此意味からすれば、彼等は舊中産階級よりも、一層適切に『中』である。何故ならば舊中産階級は、資本家階級の下層に外ならぬからである。けれども之は階級ではない。階級と云へば、多かれ少かれ類似の方法で、多かれ少かれ同じような收入を得て居る個人の、集まりと云ふだけのものではない。個人の集まりが眞に一個の社會的階級を成すのは、彼等は一定の社會經濟的職分を執つて居らねばならぬ。『新』中産階級の存在は、それに一つの社會的階級たる地位を與へるには、餘りに空である。彼等は單に他の階級の『寄食者』であるが、さもなくて彼等が『空談』によつて收入を得てゐる場合には、彼等は全く空に懸つてゐる。この『階級』は、さきに述べたような紳士閥の特質をも思想をも少しも持つては居らぬ。彼等は財産を持つて居らぬから、財産そのものに對する愛着をも持つて居らぬばかりか、眞の紳士閥の特質たる經濟上の獨立と個人的企業とに對する愛着すらも持つて居らぬ。彼等は財産、若くは財産權に對する尊敬をも、經濟的獨立に對する愛着をも、從つてまた『家長的干渉主義』乃至は社會主義に對する、生得的の憎惡をも持つては居らぬ。この『階級』の眼中にあるものは、唯だ收入である。そこで彼等の思想的代辯者——有ゆる種類の社會改良家——は、收入問題に重きを置く、いつも之を第一の問題とするのである。自己の財産を支配してゐる舊紳士閥に取つては第一の問題は自由と獨立とであつた。彼は社會主義を未來の奴隷制度と見做し、全ての人々が社會主義のうちに期待する慰安そのものを、彼等は却つて憎惡する。新中産階級はさうでない彼等は收入さへ減らなければ、否な少々は減つても、相當の期間確實に保障さへせられるなら、その風采的の生活を、何時でも官職なり、會社なり、其他の職業なりに變へることに躊躇せぬ。何故ならば、この新中産階級は、勞働階級以上でないまでも、同じほど、收入の不安定に悩まされてゐる上に、尚ほ地位の不安定があるからである。斯ように全然基礎のない宙ぶらりの『階級』に根蒂ある自己獨特の心理の成り立つて居らぬのは自然であつて、それは勢ひ、絶えず浮泛して居るから、從つて新たな社會組織の實現に反對する社會的勢力としても、又た其實現を助ける社會的勢力としても、殆んど無價値に近いと云ふことも勢ひ止むを得ぬ。之に反してこの『階級』は、その社會的存在

の性質からして、極めて不安定的であり、何時でも變化することに躊躇せず、そして遂にはこの不安定を一掃し、少くとも之を輕減して、安定を與へるような變化を絶えず待ち望んでゐる『政府による干渉』も彼等の辭せざるところである。否な彼等は生存競爭の戰場を整理する爲には、個人以上に强い力の必要を感じて居る。そして若し此種の方法を思想することが出來たなら、卽ち『國家社會主義』となるのである。

二　舊中産階級の心理も變化した

然しながら舊紳士閥の心理を失つたのは、財産のない名のみの中産階級だけではない。舊中産階級の遺物である。株主たる小資本家も、其財産の支配權と一緒に、從來の心理をも失つた何故ならば舊紳士閥的心理の基礎となつてゐたものは、財産の支配であり、個人的の企業であつたからである。そして其上に此階級でも『新』中産階級と同じように、問題は唯だ、收入の多少と云ふことだけにあつた。何故なれば、支配することの出來ぬ財産といふことは、之れまで用語上の矛盾なやうである。彼等は自分でも亦た他人からも、財産を持つてゐるかの如く思はれて居るが、實は持つては居らぬのであつて、彼等の持つて居るのは、唯だ一定の收入に對する權利である。彼等は卽ち、公共若くは私營會社組織の、年金受領者に外ならぬ。そこで彼等は何時でも、其假想的の財産を、一層形式的な年金又は其他の收入の泉源に代へることを躊躇せぬのである。

經濟上の獨立を奪はれ、其財産に對する支配を失ひ、個人的企業の機會を持たぬ彼等は、其慰安たる個人の保全以外には、何等の希望もない。彼等は若し理想を持つて居るとすれば、其理想は、丁度舊紳士的中産階級の正反對であると云つてよい。彼等が其事務を處理する方法は、合宜と能率と、就中社會化の必要とを彼等に覺らせた。更に此階級の人々は、株主中の少數者であるところから、勢ひ政府なり社會組織全體なりを、大資本家の横暴ぶりや貪婪に對して自己の權利を擁護する保護者を見る。とは云へ此方面に對する彼等の思想が、革命的無産階級の思想でないことは事實である。——彼等の夢みて居るのは、勞働の社會的組織ではなくて、利益を分配する爲の社會組織である。彼等は奇妙な心理的徑路により、國家を單に警官と見做す彼等の舊るい思想の外形に、先祖たちが活きてゐたなら吃驚する迄まで警察力を擴張することによつて、全然新らしい實質を滿たして居る。此階級の心理は、新中産階級のそれと同じく新舊思想の奇態な混合物であるが、此混亂狀態の中にも、彼等

の社會主義に對する反對は、主義の問題ではなくて都合の問題だといふ事だけは明白である。

そこで『理想の破壞』資本主義的社會に於ける、心理狀態の大變化が來た。之は既に指摘した通りである。近來は、種々雜多な形の社會主義が現はれて來たのも、それが資本家仲間の下に社會的不安の聲の起つたのも、また之が爲である。

三二　社會的不安——自殺、絞臺を免がるゝ爲の自殺

『社會的不安』は全然——でないまでも大部分でも——下から來ると思ふのは間違である。勿論、勞働階級の間にも不安の瞬間がある。けれども仔細に檢らべて見たならば、謂ゆる社會的不安の大部分は、社會の上層の不安を反映したものに過ぎないことが分かる。更に勞働階級は、上層階級の精神上道德上の羈絆を脫すれば脫するほど、それは自己個有の心理を發達して來るから、從つて勞働階級の間には『不安』は少なくなり、思想に於ても行動に於ても愈々益々堅實となつて來ることが分かる。然しながら勞働階級が、尙ほ中產階級の羈絆の下にあつて、其獨特の心理がまだ充分に成長して居らぬ間は、前に述べたような新中產階級や舊紳士閥分子の間に於ける心理の變化は極めて重大な意義がある。そして是等の階級の心理が、極めて不安定の狀態にあるといふことだけでも、相應に重大な意義がある。何故ならば、其れは先づ下層階級の間に不安定の狀態を惹き起し、斯くて神經的の活動を喚び起す、そして此神經的の活動が一度で鞏固な明白な心理になると、それは最早や有力な抵抗をすることが出來ないからである。

そこで要するに會社組織の爲に、中產階級が數に於いて救はれたゞけのものは、質に於いて破壞せられて居る。而かもそれは主として、會社組織といふ其同じ作用によつて破壞せられたのである。卽ち火事から救はれたものは、水難の火に亡ばされた。結果は同一である。中產階級——マルクスが目指してゐた中產階級——社會主義への道を妨げてゐた中產階級——の運命は定まつて居る。

然し之れだけではない。會社組織は、唯だに中產階級を救ひ得なかつたゞけではない。それは今日の社會が、資本主義から社會主義へ推移する變化の事業に、大に役に立つて居る。卽ち此事業は、私有財產の廢止と、之に代ゆるに生產機關の集合的所有を以てすることに外ならぬ。そして之ぞ資本主義の根柢の破壞と、社會主義的社會の礎を基づくものである。資本家がこんな事業をして居るとは一寸受取れないが、而かも彼等のやつてゐるところ卽ち之である。資本家階級は自分自身を救はうといふ狂熱的の努力のうちに、自分自身の存在を危うくし、自ら

の脚の下から其地盤を切崩し、唯だに資本主義の基礎を撤廢して居るばかりでなく、一切の階級的社會の基礎――私有財産――を撤廢しつゝあるものに外ならぬ。此事實は今日まで看過され、相當の注意を與へられてゐなかつた。そして之れ亦た收入問題が吾々の眼界を遮ぎつてゐた爲である。今日の大資本家は、會社の利益や收入を得て居るところから、彼等は此利益や收入の泉源たる財產を所有しては居らぬといふ事實は、看過せられてゐた。大小の富豪金傑の巨萬の富を、有頂天になつたり乃至は憎惡の眼で見てゐるので、驚く可き事實が却つて看過せられてゐた。卽ち是等の巨萬の富は、單に收入に對する權利であつて、財產に對する權利ではないといふ事實である。そして法律は明瞭に此事實を認めて居る。スタンダアド石油會社と其全版圖の支配者たる ジョン・ディー・ロックフェラーが、其下にある大會社の財產に對しては、ほんの少しばかりの部分たりとも何等の所有權をもつて居らぬことは、其工場に傭はれて居る憐れなエレヴェータア小僧と選ぶところはない。そして若しロックフェラーが、唯だの一弗がものでも、私用の爲に占有しようとしたならば、法律は他人の財產に對する冒認又は竊盜事件として彼れを取扱ふであらう。

單に法律上の形式であると言ふ勿れ。法律上の形式は、何時でも經濟上の實現を表はすものである。法律上の形式は、時としては實質の無くなつた跡までも殘存して、空虛な形式に過ぎぬものとなる場合がある。斯かる場合には、法律上の形式は、過去に於ける經濟的現實の記錄である。法律上の形式が過去の記錄でない場合には、それは何時でも現在に於ける現實を表はすもので、此場合には、形式のうちには實質が滿ちて居る。否な法律上の形式は、唯だに現在の現實を表示するばかりでなく時としては未來を前兆することもある。今のところでは、資本家の代用した集產的形式は、尙ほ其形式が未熟幼稚であつて、この集合體は依然として『私人的』のものである。卽ちこの集合體から生じた利益は、私人たる各個人が享有するのである。然しながら適當な利益の分配――新しい所有形式（そして此新しい所有形式も、矢張りまた、新しい生產形式の表はれに過ぎぬ）に相應して分配――は、種子播きの跡に收穫の來るように、必ずや續いて現實されるだらう。斯ような新しい生產方法と新しい所有制度とに應じて、分配の方法を調節する事業と、此三つの作用を出來得る限り社會の全員の利益の爲に發達せしめることとは、充分に發達し、充分組織され、そして充分に教養せられた勞働階級に俟つ可きものである。けれども過渡期に於ける經濟的の事業、就中舊るい社會組織の有ゆる要素を、たゞ無暗に破壞する豫備的の事業には、吾人の敵といふ味方が、中に役に立つたし、又た役に立ちつゝあるのである。彼等が何とかして其運命から逃がれようとする死者狂ひの努力は、要するに、自殺によつて絞首臺を免かれて居るものである。（完結）

社會政策の形而上學

小樽高等商業學校教授　大西猪之介

（一）

嘗て民本主義一方の闘將たる某大學教授がふと『無學文盲の職人や工夫やが犬猫同様な野合に依て同棲し』と筆せられた時に、一評論家は透さず之を捉へて『此様な偉大な輕蔑的な口をきいて、それで居て民本主義も凄じい』と手痛く叱りつけられた事があつた。

各國と等しく日本に於ても、受刑者總數の九割内外は赤貧無産の人々なのであるが、有産者の犯す些少の犯罪に非常なる青筋を立て乍ら、無産者の犯罪は冷淡に之を看過し、又は熱心に之を辯護する人が少くない。時に此性癖は或る勞働者の暴行に依て他の勞働者が不利を被る場合にも尚ほ且つ之を默許せんとする精神病に嵩ずる事さへある。其は抑々何故であるか。

マクシム、ゴルキーの傑作『夜の宿』の一人は世に自ら人間であると感ずるほど光輝赫灼たる事はない。故に人間を侮辱してはいけない。人間は只だ之を尊敬しなくてはならない。之に同情憐憫するが如きは正に之を汚し恥しむる所以である』と云ふ『夜の宿』とは美化されたる言、通俗に云へば木賃宿である。其木賃宿に罪惡と怠惰とに埋もれて睡生夢死する醜悪鬼畜の徒に何の期する所あつてゴルキーは斯迄に莊嚴なる言を吐かしめたのであるか。凡ゆる人間が何等かの意味に於て其境狀を是認せずしては生き得ざる心理に卑くも媚びて、會ふ人毎に五哥を乞ふ浮浪の人とて尊しと强ひたのであるか。それとも自ら『社會の下層泥と闇とに充ち滿ちたる人生最低の地』より這ひ上つたる文豪が其社會の掃き溜も卑しからずと思ひ上らんと欲したのであるか。然かく忖度するは筆者　ゴルキーに抱く尊敬とは兩立しない。

ドストイエフスキーの「死人の家」には『凡そ新囚人は入牢して二時間も經てば、他人と完全に平等の權利を得、互に理解して親しく暮し得るが、もし彼が紳士であれば、如何に謙遜で善良で又賢明であらうとも、徹頭徹尾總ての人々から憎惡輕蔑せられて、信頼は勿論理解さへされず、友とも見られねば仲間とも見られず、年月經るにつれて嘲弄の的となる事だけは止むにしても、他人だと云ふ感は永久に殘る』とかう書いてある。此牢の中で其半生を批評した末、新生涯を始めようと決心したものゝ、周圍幾百の人の中に其を語り明す可き友一人だになく餘の寂寞に閉ち込められた彼は只管聖書にでも讀み耽る外はなかつた。其聖書さへもが只盗みたさの盗に盗まれ終つたのであつた。

此辛い經驗を嘗めたる彼は、民衆の暗黑面を知り拔いて、決して之を否認しなかつた。然も彼は「罪と罰」とに於て民衆を輕侮する知識階級を否定した。又彼は彼の牢獄中の孤立は、罪人共の慘忍性よりも、彼と他の罪人とは異る種に屬すとの動かし難き事實より發生したとさへ説明した。然も彼は一切を蔽ひ盡すが如く博く洽き四海同胞の愛を波搏たせた。此矛盾を我等は如何に解く可きであるか。

（二）

筆者は思ふ、孤立寂寥の嘆が其儘四海同胞の愛に逆轉した。堪え難き淋しさこそは、自他の懸隔を飛躍して、人の心の奥深く掘つて掘つて飽かずんば、彼我を結ぶ一道の春風駘蕩として相通ふものあらんと希はしめたのである。餘りに無學に野蠻に汚れたる生に沈めれ農民を眺め遣る彼の熱い涙が凝つて、彼等の不幸は自己の責任である。救ひ得て救はざるは罪惡である、彼等を放任する樣な世界は生くるに甲斐なき世界であるとの思になつたのである。而て賤民を救はうとの信念は今こそ彼と我とは相離れたれ、元は一つであつた、又は將來は一つであり得るてふ前提に裏附けられねばならぬから、此賤民熱愛は當然賤民と我との一致融合即ち四海同胞の信念となつたのである。虎と見込んで弓引けば、少くとも矢之を貫く點に於ては、石亦虎と同一の根本性を帶び來る可し。是がドストイエフスキーの信仰であつた。

さればこそ彼は農民の心中には弱き者不幸なる者惱める者に向つて聖母の如き優しさあつて、献身犧牲博愛の此魂は、時に蔽はれ又傷けらるゝにせよ、神聖にして毀す可からさるものありと主張する。かく考へれば、貧民に犯罪人多き如きは何事をも

證明しない。夫れは世の中には富者より貧者が多いからである。『蜘蛛の巣の如き法は貧くして弱き者は之を捕ふるが、強くして富める者は巣を破り去る』からである。『橋の下に寢る可からず』との法に家もつ者は背く必要がないからである。其證據に『強盜殺人で死刑の宣告を受けて之を終身懲役に減刑されて、北海道で服役中に逃走して、又強盜殺人で捕へられて、再び死刑の宣告を受けたと云ふ樣な惡漢でも、內地で身受けをした來た藝者どもを度々女房にしながら、其女房にも矢張り客を取らせた滿洲住ひの淫賣屋と會へば、「俺は成程強盜をした放火もした、殺人もした然し自分の女房に淫賣をさせるなぞと云ふ惡い事はした事はない、君はそれでもちつとも惡いとは思はないか、氣持が惡いとはないのか」と責め詰る』ではないか。又例ば主人の家が燒けて困れば、四十五歲の自由な下女が老後の準備として貯へた五百留の金を惜氣もなく投出して救はうとする事もあるではないか。其は道德的發作の一例である。

富士の山上に一時間佇み得る事は決して一生其處に住し得る證據にはならないなぞと冷酷なる批評を逞しうしてはならない。自らは大に他人を疑ふ性に富み、又動機の善惡を問はず、いと豊かなる誤すら一生の破滅を醸し得るを知り盡したドストイエフスキーが此の如き一插話から多大の印象を受けて、過去何千年の冷遇虐待すら人間良心の火種を消し去り得ないとするならば人性本來の美は如何に燦爛たるものがあつただらうかと推論したのに、何の無理があらう。

又さればこそ、「夜の宿」の哲學者は其人間崇拜の對象を說明して云つた、『人間、其は眞理である。然し人間とは何であるか。其は御前でもない、俺でもない、又連中でもない。御前も俺も老人のルカもナポレオンもモハメツトも折打つて一つとしたものなんだ。一切の始と一切の終とを含むだ或るもの、總ては其內にあり又其爲にある或る大きいものなんだ。此世界に眞に存在するのは此人間だけで、其他のものみなは其人間の手と額との生むだものにすぎない』と。此の如き人間は寔に以て素晴しいものである。尊い偉大なものでもある。是れさへ偉大でなければ、世界廣しと雖も、どこに偉大なものがあり得ようぞ。

（三）

炯眼の讀者は既に筆者が何處に讀者を誘ひつゝあるかを看破せられたのであらう。

無學文盲の職人や工夫やが犬猫同樣な野合に依て同棲すると記するは斷じて誤ではない。又野合者を非野合者同樣に尊敬し

得ないのも當然である。突き詰めて論ずれば、我等は彼等を輕蔑するの權利をもつに止らず、彼等を輕蔑するの義務を負ふものである。然らずして、現在生けるが儘の工夫や職人が無條件に尊敬し得らるゝ位なら、我等が住むは黄金世界なのであつて改良進歩の必要はないのである。故に無識の工夫がと偉大な口を利いて、それで居て民本主義者であつて毫も愧じくない。犬猫同樣な野合者を輕蔑せざらんと欲するも得ざる人が、民本主義者となるのである。

然し乍ら、民本主義者は此賤民とて人の人たる價値及威嚴は之を備ふるを忘れてはならぬ。然せずして、等しき人ながら、貴賤上下の體質的差違あつて、賤民は永遠に賤民として貴族の奴隷たるを要すとなすならば、即ち職人工夫は云はずもがな、乞食にも盜賊にも賣春婦にも磨かば玉と光りぬ可き人格あるを否定するならば、之を名けて何と呼ぶにもせよ、存すれば、白眼以て世を冷嘲する「チニイカー」が、又は之を驅使して自家目前の利を漁らんとする權謀術數主義者（マキアベリスト）かである。華族の若様がつひした氣まぐれに繩暖簾を潜れば民本主義ではない。

要之、眞の民本主義には必ず現在に對する猛烈なる嫌惡と將來に對する炎々たる憧憬とがあつて、其何れの一をも缺くを許されない。とすれば、人道主義の宣布者が家族友人に向て往々非人道的なるは、露不思議でない。其は大義親を滅するが故に、身を勞し、思を焦せる禹が外に居る事十三年、家門を過ぐれども敢て入らざりし業と同一視するを要しない。餘りに人類を理想化せるが故に、現に交る人間を嫌惡するに至つたのだと解するも可。餘りに周圍の人間の穢きが爲に、理想的なる人間に想及するに至つたのだと說くも亦可。兎にも角にも抽象的なる人類を慕ふと具體的なる人間を嫌ふとは水火氷炭相容れざる矛盾ではなくて、恰も沼の泥愈々深うして蓮の花益々美なるが如くである、

（四）

同じ人てふ言の二義より生じた右の混亂を叙するにつけても思ひ出でらるゝは、福田河上兩博士の間に行はれたる論爭で、是れ亦單なる言の爭ではなかつたかと臆測せられ得る。『マルクシスト』の一派に聽けば、『資本制てふ地獄の罪人は先づ浄罪界を經て始めて未來國てふ天國に入る。其浄罪界とは無產階級が他の階級を支配し、市民階級及其寄生者を亡ぼして全部を勞働者に改めんとする時代を指す。もし此無產者專制效を奏して總てが無產者と改まるならば、全部が全部を、乃ち無產者が無產

者を支配專制するとは無意義なるが故に、國家は自ら死滅(アブステルベン)せねばならない。』

　國家が死滅したつて人民は固より死滅しない。實は人民を死滅させたくないが爲に國家を死滅さして、糸紡車や青銅の斧と同じく博物館にとぢ込めたがるのである。然る後に——彼等の豫想するが如く而て筆者の疑ふが如く——自由平等なる生產者の團結生ずるとすれば、之を彼等は國家ではない、Kommune だ Gemeinwesen だと云ふ。かく國家とは一切の場合に於て主として壓迫せられ掠奪せらるゝ階級を抑へつける機關として存するもの、即ち眞の「ディモクラシイ」でないものと定めておけば、社會主義の國家と雖も國家たる限り、市民國家同樣に階級的で眞の「ディモクラシイ」でないのは當然である。

　扨河上博士の「ソーシィル、ディモクラシイ」とは所謂天國時代を指し、福田博士のそれは淨罪界時代を意味する。故に河上博士に取つては、其は目的であると共に眞の「ディモクラシイ」であり、福田博士に取つては、其の手段であると共に僞の「ディモクラシイ」であるのは自明の眞理であつた。馬を見て鹿と云ふ人を馬鹿と呼ぶ。河上博士が馬を捉へて馬と云ひ、福田博士が鹿を捕へて鹿なりと云ふは馬と鹿との並行對立で共合體ではない。是非とも誰かを馬鹿にせねば此論爭の始末がつかぬとならば、「ソーシアル、ディモクラシイ」に此二義あり得るを知らずして周章狼狽、河上時代だの福田時代だのを盛に出入往來させた批評家連中こそ最も適切なる候補者であらう。

　是は餘談。筆者は急いで本論に還る。

（五）

　上述人道主義の二元的構造は形をかへずに社會政策に映る。例をヘーゲルに借れば、現在の勞働者は眞の勞働者ではない。眞の勞働者は現在の勞働者の中に只潛在せるにすぎぬ。此潛在せる本性を發揮せしめて出來得る限り速に之を顯在の勞働者と改むるが社會政策の使命である。勞働者を尊重せよとは、現在の勞働者を尊重せよと云ふにあらずして、尊重し得る勞働者を作りたしとの意味、又は將來作り出さる可きものを豫め尊重するが最も早く其目的を達する所以だと云ふ意味である。故に社會政策とは云はば未だ見ぬ戀に憧れたる政策である。

　溫情主義の排斥は社會政策學會の入市稅とも目す可く、『同じ藥にても與ふれば毒藥となり、自ら得しむれば靈藥となる』が故に、『妄りに與ふるに急ならんよりも、先づ彼等自身をして自ら得るが爲に奮鬪する所あらしめよ』と叫ぶ學者は、第一同勞

働會議の爲に婦人顧問の擇ばれたる際に、『婦人顧問は婦人勞働者の意思に依て選出せられた代表者ではない。隨つて婦人勞働者に取つては全く赤の他人である。赤の他人に隨つて一時の急を救はれようとするは、路傍の乞食なら知らぬこと、苟も自覺ある勞働者のなす可き事ではない』と記した某評論家にも贊成せらるゝであらう。而て此風潮の旺なるや、協調會をしてすら其排斥を公言せしむるに至つた。

然るに溫情主義とは第一回の遠足會だとしても、勞働者自身は嬉々として之を樂みつゝある。況んや假に寄宿舍及工場の設備が改良さるゝとすれば、何人が之を施すにせよ、双手を擧げて之を歡び迎へ、學者が何故彼等に代つて憤慨するかを只怪しむに過ぎぬであらう。「其でも構はない、溫情主義を捨てよ、飽迄虐待せらるれば彼等と雖も奮起すべし」と事ふ人もある。然も人後に永く奴隷の境遇に停滯すれば、終には之より脫却せむとする向上進步の精神を失ふ可き虞もある。もし一切の自發的進步は當該個人が若干其生活條件を改善せられ、自己の現在及將來を考察するの餘裕を得たる時に始るとすれば、此餘裕すらなき人々を自覺に導く一步としての溫情主義、卽ち目的としてではなく手段としての溫情主義は確に之あるは之なきに優つて居りはすまいか。獨立獨步の要求を以て直に現在の勞働者を律し、松之助一派の反審美的映畫にすら隨喜する女工にも溫情主義を蹴り飛ばせと云ふは早まりすぎる態度である。

此早まりすぎたる態度は我等よく之を理解し得る。一切の理想は必ず實現され得る保證がなければならぬ。然も過度に遠からざるに將來に實現され得る保證がなければならぬ。故に遠大なる理想に在ては、之に對する執着が不知不識の間に其完成の年限を甚しく短縮して以て活力を維持する事、オーウエンにも、バクーニンにも、近くは「サンディカリスト」にも、將「ボルシエヴイスツ」にも其例を見る。彼等は孰れも理想の彼岸は現に眼前に橫るかの如く、人は一躍以て此彼岸に達し得るが如く、之を妨ぐるは或種の障害のみたるかの如く主張する。

其際一般民衆は果して然く進步せしやとの重大なる疑に會へば、然か云ふ特權階級は如何と逆擊する。事實彼等は自己の占むる優秀の地位とは他の階級を虐げて得たる不義の榮華にあらざるかと自責するにつれて、斯く他を虐待して得たる地位とても決して誇るが如く優秀ではないではないかと惑ひ疑ふのである。然らば如何にすべきか。單に特權を抛てば足りるか。[illegible]を賣て之を貧者に施せば足りるか。然らず。然するは只[illegible]

代に時にはより下等なる特權階級を作る所以にすぎない。其ならば現在の地位に甘んず可きか。其は餘りに利己的ではないかと錐の如く光らされたる良心を以て夜の眼も合さず煩悶する揚句、己が有する特權の正當なる處分法すら教へ得ぬ知識の如きはいと無意味なるもの、知識階級とて淺薄愚鈍なる誇大妄想狂のみと云ふ風な自己嫌惡の氣分に移つて來る。自己の弱點を悄み呪ふ「サンディカリスト」の知識階級が他人の同一弱點を一層醜しと觀じ、獵犬の如く鋭き嗅覺を以て之を嗅ぎ出し攻め立つるは此一例である。

（六）

此精神は決して新しいものではない。既に佛蘭西革命の際にロベスピエールは『學者なんかいらない』と喝破した。特權階級に阿附迎合する學者に對する反感と云ふ程簡單なもので其はない。何となれば知識其ものが冷淡にして移り氣なるが如く、學者自らも曖昧にして微温的、「然り」又は「否」と答ふるよりも、「然り而て否」と答ふる第三者となり、生命を賭して迄も權力階級に仕ふる例は少いからである。但此第三黨が超然高踏の客觀的境地より相爭ふ兩當事者を眺め下すを放任すれば、兩者の弱點暗黑面は赤裸々に暴露摘發せられ、果ては其爭の無意義が教へらるゝ事さへある。而て「總てが然らずんば無か」と號す熱狂者は名譽の敗北はよく忍び得る。獨り奮闘其ものゝ全然無價値なりと示さるゝに至つては、之に加ふるに又ないだけ、之に施すに術がないだけ、それだけ怒を骨髓に徹することになる。

加ふるに知識は自由と平等とを目標とする革命の成就には最も厄介なる難關である。夫れ富は富者より奪ひ得べく、位は貴族より剝ぐを得るが、知識は永劫奪ふ可からざる神秘である。故に革命は學者を門出の血祭にあげるに非ずんば、「知識とは無用の長物、新時代には無智蒙昧の愚民も學者同等又は學者以上の價値を有す」と説かねばならぬ。同一の選擧權と云ふが如き空疎の客觀的平等を與ふるに止らず「個人間の能率德性の相違は天賦に發せずして、偏へに何を喰ひ何を學びたるかより出づる」として、「從來の服從者も等しく選擧され得べく又統治し得る」との主觀的平等を認めねばならぬ。「當初些少の弊害には眼を閉じ、先づ自由平等を授くるが自由平等に圓熟せしむる所以である」と斷ぜねばならぬ。

何人も他人を踏臺とせざる自由平等は確に光明燦たる理想である。只其實現に焦るの極、低きものを低きがまゝに高きものな

りと强辯するは、恰も浪花節や講談を民衆藝術と崇め以て墮落せる市民の文化を救濟せんとする企に類似する。此種民衆藝術論に我等が不滿を感じ更に滑稽を覺ゆるは、所謂民衆が在るが儘の民衆であつて、在る可き筈の民衆ではないからである。職工工夫にさへベートーフエンを味はしむるをこそ藝術の民衆化と讃めよ、ベートーフエンをして奈良丸に隨喜せしめんとは藝術の墮落風俗化にすぎないからである。之を是れ顧みない人々が次の如き評論を試むる。

『本來婦人顧問が女工の中に附添人を物色した事からが勞働者の自覺を傷けねばならぬ筈である。田中女史にして自己一個で顧問たるの資格に缺くる所があると自覺されたなら最初から受任されないが當然であるし、よし受任さるゝにしても他に今一名女工出身者の顧問任命を條件として自己の缺點を補ふ準備をされる位の責任感はあつて好い筈である。又政府の方で二名の婦人顧問を任じ得ないとすれば、然も自身も渡米の希望を有されたならば、女工を顧問として表面にたてて自身は通譯なり女中なりの資格で行かれては如何であつたか。』

人の尊さは勞働其ものにはなくつて、其以外の又は其以上の或る他のものである。故に糸を紡ぐ事のみに誇り、糸を紡ぐが故に、糸を紡がざる何人よりも高等なりとなす者は、『夜の宿』のペペルさへ『働くのが愉快なのなら默つて働けば好いではないか、其を其樣に誇る必要が何故あるんだ、仕事で評價するのなら馬の方が如何な人間よりも偉からうではないか、馬は車を牽くが自慢はしない』と憤慨した事を思はねばならぬ。

ストリンドベルグの脚本「ユリエ孃」に現はるゝ下男は『主人を尊敬し得ない此家に自分はもう止りたくない』と云ふ下女に『何故人は主人を尊敬しなければならないのか‥‥主人共が自分等より毫も高尙でない事は愉快な事ではないか』と報ゆる。但ユリエに向つては『今迄自分の尊敬したるものが無價値なものだつたと悟るのは悲しいし‥‥貴女が貴女の料理人よりも墮落したのを見るのは秋の花が寒い雨に吹き散らされて泥にまみれたのを見る樣に痛ましい』と告げる。是を彼が子供の時以來叩き込まれた迷信と偏見、主人が咽喉を切れと命ずれば言下に切りも兼ねない奴隸根性の表現とのみ見てはいけない。

下女は主婦を學び、學生は敎師を習ふ。主婦なるが故に又敎師なるが故に摸倣するのではない。より高きあるものを慕ふ心根が假に最近の象徵として主婦を捉ふるにすぎぬ。其主婦が下女と劣らず下等なりと摘發したゞけで、下女が天下の權を握り

得とするは――十八世紀は市民階級を渇仰した。其市民階級は生産力古今未曾有の進步は完成したが、宣言せる自由平等を與へざる暴君たるに於ては貴族僧侶と相讓らなかつた。二十世紀は更生一縷の希望を勞働者に繫ぐ。其勞働者とは石炭を掘る事車を牽く事のみに尊嚴を認むる者なりとすれば、プラトーが二千三百年前に書き殘した樣に「最も重い刑罰は自分より下等な人間に統治さるゝ事にある」が故に、又多數の專制には抗言す可き裁判所さへ殘されざるが故に、社會政策は此幻滅の悲哀よりは寧ろまだ見ぬ戀の淡き儚さをこそ欣求する。

此の如きは煮え切らざる社會政策學者の低廉なる「ロマンチシズム」のみと罵倒せられてはならぬ。マルクス自ら共產黨結社 Communist League を退くの辭に於てこの符節を合する見解を披瀝した。曰く『我等が勞働者に「現狀を代ゆる爲のみならず汝自身をかへて、政權を握る値あるものとなす爲には十五年二十年の內亂及戰爭を要す」と云ふ時に、諸君は「我等は直に權力を得ざる可からず、然らざれば戰を止めざる可からず」と云ふ。我等が獨逸勞働者の注意を其幼稚に惹く時に、諸君は最も甚しく彼等の國民的精神と手工業組合的僻見とに媚ぶる。民主々義者が民衆と云ふ言を一種の魔符(フエテイツシユ)とした樣に、諸君は無產級てふ言を魔符となし、革命的進化に代ふるに革命的文句を以てする。此の如きは疑もなく、より人氣ある戰術である』が、用なき屠殺に勞働者を誘ふ者は無類の馬鹿者か又は敵の廻し者かにすぎないと。

誰も知る如く、マークスは甚だ多くの、屢々矛盾する言の數々を吐いた學者である。氣長に探せば、勞働者に關し己が好む何事でも彼をして語らしめ得るかも知れない。然し以上の歷史的現實的見解は、彼を彼に先てる空想派社會主義者と區別すると共に、彼と時を同うせるバクーニン一派の無政府主義者とも區別する一根本特徵で、此點に於て彼と社會政策學者とは呉越舟を同うする。然らば此同一なる勞働者觀より源を發する社會政策と「マルクシスムス」との分れ流るゝ分水嶺は何處に存するのであるか。

（七）

人或は社會政策とは避雷針にすぎぬと云ふ。社會主義を信ずるが警視廳なる雷を恐れて社會政策を標榜するんだと云ふ意味にもとれる。社會主義を畏ふる政府が民衆の不平を緩和せんが爲に社會政策を布くんだと云ふ意味にもとれる。何れにせよ、社會政策とは立入つて其本領を研究する値なきもの又は研究し

てはならぬものたるかの如く響く見解である。假に此説當れりとして、然らば何故社會政策は避雷針となるか。避雷針なんだから避雷針なんだと云つたのでは意味を持たぬ。意味ある答は何が故にと云ふ理由を示さねばならぬ。雪の降る頃、毛が白くなれば兎は保護色を帶ぶると云ふ。社會政策が保護色たり得るは私有財産制を大黒柱とする現代經濟組織と同じ色彩を帶ぶるからである。さればこそ普通選擧を危險思想とする内閣と雖も其政綱の一として社會政策を掲げ得る。『普通選擧を危險視する内閣だから社會政策てふ解熱劑が要るんだ』と云ふ人もある。共う云ふ皮肉の好きな人は任意に然か云ふが好い。筆者は天下の良民、之を模倣しない。

然らば資本制を破壞せずして如何にして勞働者を滿足せしめ得るか。

社會政策の形而上學に曰く、勞働問題を資本家對勞働者の問題となすが抑々誤の根本である。疑問が既に資本家かそれとも勞働者かと云ふ一他を排する形式で提出さるゝ以上、答も自ら資本家なりと答へて自由主義となるか、勞働者なりと答へて社會主義となるかの外はない。自由主義者が個人の自由に發して最良の政府とは最も少く治むる政府なりと云へば、社會主義者は全體の幸福を掲げて最良の政府とは最も多く治むる政府なりと應じ、後者が社會組織を過重して法的秩序を改善せよと要求すれば、前者は自然法則を盾に我等は自然の秩序に從はざる可からずと反駁する事になる。

「實は勞働者現時の窮乏を、自由主義の如く勞働者のみの責任とするも、社會主義の如く資本家のみの罪とするも、共に偏せる見解である。「總て現存するものは合理的である」Alles was ist, ist vernünftig とヘーゲルを學ぶ樂觀も誤なら「現存するものは亡ぶ値がある」Und was besteht, ist wert, dass es zu Grunde geht とゴエーテを引く悲觀も誤で、現社會は決してあり得べき最良の世界ではないが、又決してあり得べき最惡の世界でもなく、處するに策を以てすれば、よく之を理想に近け得る世界である。

「只其爲には問題を資本家兼勞働者の問題と改め、勞働者か資本家かときくを止めて、勞働者と而て資本家とと答へねばならない。何故ぞ。人は獸でないからである。虎と獅子とは何等の意思及努力と無關係に定まれる一定量の生活資料を爭ふ故に虎多くを喰へば、獅子少くを喰ふ理である。反之、人は分業と交易とに依て生活資料を增加し、自然の許す以上の人口を養ひ生活

程度を支へ得る。爲に甲がより富めば次で乙もより富み、獨逸が榮ゆれば轉じて英吉利も榮え、茲に存するは生存競爭でなくて正しく相互扶助である。

「故に企業家の利益は每日の勞働時間の最後の一時間より生ると敎へて、極力勞働者を虐待せねば最高の生產高を得られぬかの如く暗示した市民派學者（セニヨル）も、之を鸚鵡返しにして、專ら勞働時間の延長より餘剩價値を得る資本家を斃し去らずんば、公平なる分配あり得ぬとする社會主義者も共に誤で、如何に分配す可きかも固より肝要であるが、何を分配すべきかも亦等しく重大である。誠に此生產と分配との獨立別異の問題ではなくて、同一問題の調和せる兩側面である。蓋しブレンターノなり、アツペなりが證明せる如く、高い賃銀即ち安い勞働に外ならないからである。

「此名句の前半は勞働者に向つて賃銀は益々引上られ得べく勞働時間は益々短縮され得べしと敎ゆる。然も其後半は資本家に向つて之による勞働生產力の昂進が勞働の元價を高めざるのみか時に却て引下げ得ると諭す。よしや若干勞働の元價が上つても、此勞働者好遇が消費者の好感情を促して販路を擴張し得る事もあらうし、勞働者の募集を容易にする事もあらうから、之を一種の廣告費と見たつてよからうではないかと說く。此『勞働者よ働け、然するは汝自身の利益たると同時に資本家の利益でもある。』『資本家よ勞動條件を改善せよ、情は人の爲でない』と云ふ所謂『啓發されたる自利心』の敎は、勿論基督が十字架上に人類に殉した樣な道德的英雄主義ではない。然し人間は二十世紀に於ても矢張り米を喰はねば死ぬ動物で、而て米を喰つて消化して排泄する行爲はどう考へ直しても英雄的でも藝術的でもない。人間が野獸的利己主義に低徊しないで、一步を是より踏出せるよりよき者とはなり乍ら、只々他人の利益をのみ慮る天使的愛他を實現し得ないのは此爲である。現に職工組合とて其失職給與金の大部分を每年略ぼ同一の職工に與ふるを辭せぬと云へば立派だが、此失職常習犯を突放さないのは、低廉勞働の競爭による組合員賃銀の下落を恐るゝからではないかとすれば不可能なる韻文的革新を期待して、目前可能なる散文的進步を拒斥するは賢明とは許されまい。

「更に思を廻らすに、自由社會の兩主義孰れも己が長所を誇大して、其依て出る原因を忘失せる嫌がないでもない。と云ふ所以は——「諸種の要素の綜合せる際、其一要素が進むほど全體も進むかの觀があつても、其要素のみが勝つて他の要素を亡ぼ

し去れば、進歩は却て止ふ場合少くない。

「例ば文藝が平凡低類の「私小説」に墮した時代には、現實を純粹完全な形式で表現しようとする理想派の勃興が大に之を高尚化し得るが、此理想派昂じて一切の特殊性個人性偶然性と云ふ風なものを排し去るならば、文藝は現實から離れ浮んで、理想派當初の目的も亦葬られ終る。反對に自然派は文藝の含む客觀的要素と正比例して文藝の價値增進するとなすが、萬一客觀的要素のみ跋扈すれば、藝術即現實と化して、現實と離れて藝術が獨自の存在を保つ根據も消え去るであらう。

「之と趣を同じうして、自由主義の威力は中世以來の傳習束縛を背景として個人の解放を高調した點より生じた。而て其成功に伴ふて昔の制限干涉は漸次驅逐せられたけれども、若干は殘つて居るので、もし其さへ殘らぬ迄に自由主義が跳梁したならば、却て自由主義其ものも亡びる外なかつたであらう。逆に又或る社會主義的手段を全體として自由主義的な周圍を俟つて活躍したのだから、卽ち社會主義の怨敵たる自由主義が社會主義の成功を可能としたのだから、社會主義の一部を實施しても是れ程上進步するのなら、全部を行へば非常に進步するのが目覺しからうぞと察するは、右の微妙なる消息を會得せぬ速斷である。

「這般相反する要素の如何なる結合が各要素の最も完全なる進展を來すかは簡單に定め得られないが、一要素が全滅してならぬ事だけは確である。現に人其ものが神と惡魔との中間に彷徨ふ二元的生物ではないか。成程哲學的欲求は二元を統一せる一元を目標として一元的にあらずんば眞の哲學にあらず、故に社會政策に哲學なしとなす傾もあらう。然し本來二元的なるを單に哲學的欲求から一元化せんとするは無理である。カントの哲學さへ二元哲學ではないか。倫理は凡て實在と規範との對立を含むと云ふ意味に於て二元的たるの外ないではないか。出來れば一元化したいとの要求は是認せられ得る。但之を基として始めから一元的だと斷じ終らむとするは獨斷専擅である。」

（八）

是れだけ説明すれば、所謂舊派職工組合が何故社會政策の閑見たるかゞ解される。

先づ是等の組合勞働者は自ら賃銀勞働者たるを必然の運命と觀ずる。彼等が俗に謂ふ根本的解決を求めないのは、當初より勞働問題を根本的に解決せられねばならぬ問題又は解決せられ得る樣な問題としないからである。

次に彼等は賃銀基金說に信ぜず、絶えず市況の變動に注意し

て好景氣には猶豫なく增給を迫るに依て資本制の圏内に於ては地位の改善を圖り得るとする。是れ彼等が志と片（シルリンゲ ペンス）との爭に奔命する所以である。

斯くして企業家の卓よりおつるパン屑を拾ひ蒐めても、是等忠實なる犬の群の胃腸が充されない時に、消費組合が呱々の聲をあげる。其は資本制企業の領域を縮めはするが、市民階級を脅かす迄の危險なくして、勞働者の實際所得を增加して其不平を輕減し得る。

總じて社會政策は萬事を努めて善意に解釋する。職工組合は雇主に對する防禦手段であつて、雇主組合は職工に對する防禦手段である。職工組合は雇主にも利益である。組合は不況とあれば操業短縮にも賃率引下にも折合ふ上に、一定の賃率を固守して低廉勞働を供しない故に企業者は同業者を狐疑する要を免るゝし、能率あり訓練ある勞働者を統一して企業家との協約を履行する故に企業の經營も堅實となる。組合の最も進歩せる英國棉業が最も鞏固なる產業たり得るは一つは此爲である。同樣に雇主組合は明に雇主の利益團體ではあるが、以て勞働條件を改惡する力はなく、反對に一部雇主の低廉勞働使用禁止に依て一齊に比較的優良なる雇傭條件を提供する事もあり得る。

消費組合、失職救濟、職業紹介等の制度に依て勞働者が企業家に損失を醸さないで自利を圖り得る如く、企業家亦何等損害を被むらないで勞働者の福利を增進し得る。作業組織の改良食事時間の變更等により時間を集約的に利用して名目勞働時間を短縮するとか、通風溫度濕度等を調節して疲勞の減少を計るとかは此例である。恰も某種の獨占が競爭に伴ふ無用の生產上販賣上の支出を節約する爲に、生產者の利益を增し乍ら、消費者への賣價を減ずる事もある樣なものである。

尤も組合の初期には同盟罷業や鎖出の增加もあり得る樣に、勞働條件の改善も一時は生產費の增加となり得やう。但其は過度時代の變態で、大局より見れば資本家の利益と勞働者の利益とは同く結ばれて分つを得ない。と云ふからこそ社會政策は常に必ず穩健であり、危險なる社會政策とは言自體に於て矛盾なのである。

ソンバルトは勞狀黨失敗以後約四十年間の英國に於ける社會政策の黄金時代は同國獨特の賜だと解いた。卽ち當時英國は世界の工場として、生產力の增加に伴ふ販路不斷の擴張に接し、恐慌稀に失職少く、技術の改良分業の進歩は絕えず生產費を減じ利潤を登したる故に、賃銀を引上げても罷業をさくるが有利

であつた上に、二大政黨交々勞働保護を競つたが爲に、勞働者は平穩に其日暮しの政策に耽るが策の宜しきを得たものであつたと云ふのである。

歐洲大戰に先だつ若干期間歐洲を通じて存したるも同一の形勢なりしと目して大過あるまいと筆者は推する。當時各國の勞働者は生活程度未曾有の高昇に醉ふて、心中窃に資本制の崩壞を危惧し、高き賃銀を要求する際にも決して安き勞働てふ半面を忘れなかつた。資本家征伐を唱へ、萬國勞働者の聯結を叫ぶの聲然く高うして而て國際社會黨が見るも憐れに潰え亡びたるは此爲であつた。

故に勞働の能率を問はずして、殊に資本家が收支償はさる爲に投出す可きを期待して賃銀引上を迫るならば、其要求が如何に小刻に又成し崩しに円と錢との爭として提出せらるゝとも、もはや社會政策ではない。

從て社會主義と社會政策との相違は內に燃ゆるの精神に在つて、社會主義の世とならぬ限り、外より見たる兩者の行動は全然同一であり、五十步百步の差違すらないが故に、東京から京都迄行くなら大阪迄行くかの相違ではないとも云ひ得る。例ば等しく十時間勞働法でも、是により勞働能率の増加を理由として贊すれば社會政策であり、マルクスの如く『白晝晴々たる天日の下に中產階級の經濟學が勞働者階級の經濟學に屈服せる嚆矢なり』となせば、確に『社會主義の勝利』である。要約せば市民の墓を掘る階級鬪爭の精神に徹底せるか否か、是が社會主義と社會政策との分岐點である。

（九）

史的發展を貫いて二個の要素が韻律的に交流する時にも、即ち此二が同一の根據を有し、其對立に依て意味を得る時にも、區別し評價する動物たる人は、之を共通の平面に並列して安んぜず、必ずや何れか一つを出發點又は到達點と重んずる迄は之を理解し得たるものとは考へない。例ば運動と靜止とは一切の現象に分ち離く混在するが、甲は寂滅爲樂の安定狀態を實們となし、乙は躍進努力の進化發展を本來の面目とする。

同樣に總ての生に於て平和の內に鬪爭の伏線敷かれ、鬪爭の間に平和の礎地置かれて、其一を缺く事はない。故にマルクスにして欲すれば、總ての歷史は階級鬪爭の歷史だと斷じ得る。但其マルクスと雖も、人類原始の太古と社會革命の彼岸とには調和協調の理想境を假定する。

然りとすれば、產業の平和は更に烈しき衝突への準備にして

心ならずも結ばるゝ休戰なりと社會主義的に見る。抑又勞働爭議は一層完全なる平和に達するに止むなき必要なりと社會政策的に見るかは、人夫れ夫れの人生觀の相違であつて、學者の學者として決定し得べき事實の叙述ではない。

統計は賃銀が上り物價が下り、相俟つて勞働者の生活程度を漸次引上げつゝあるを示すが、生産費の低減を思ふ勞働者は之より何等の慰安をも得ない。例ば六圓の商品價格が今日三圓になつたにせよ、其間器械は生産費を五圓から一圓五十錢に下げた――是れ決して稀な事實ではない――とすれば、資本家の餘剩は昔の一圓又は販賣價格の一割六分六厘から一圓五十錢又は五割に增した事になる。從て其父よりも多額の賃銀を得、低廉の物品を購ふ勞働者が却つて其父以上に搾取せられて居ると云ふ理になる。

經濟組織の所得にある一點を取つて靜的に論ずれば、一定せる分量なのだから、他人が少しでも多くとれば、自分の所得は當然減る。只動的に永い期間をとれば、他人により多くを與ふるが自分も結局より多くを得る所以である事もある。然し自分の所得が少々ましても、他人が自分の頭をはねるのは忍び難いと云へば夫れ迄で、是れぞ正に社會政策の根本主張に對する挑戰である。

社會政策の爲に獨逸の學者が好んで附依した國家本位論の採る可からざる理由は玆に明白にせられ得る。ライン地方の工場勞働に因る人口體質の改惡が國防力を減ずるてふフオンホルン中將の報告が普魯西の兒童工場勞働制限の導火線となつた如く、帝政獨逸の社會政策は多く天降つたる社會政策であつた。從て學者は勞資の對立の上に、之を包括せる第三のより高き勢力としての全體の幸福てふ一元的旗幟を飜し、其具體的代表たる國家の爲に勞資は協調せねばならないと說いた。例ば其自身としては死せる資本は勞働の加はるに依て價値を發し、又生ける勞働も資本を俟つて生産力を增進するんだから、陳腐を厭はねば、鳥の兩翼又車の兩輪に譬へ得ると云ふ類である。

但此立論は甚だ重大なる結論に至る憂がある。

假に『成程勞資の協調は必要であらう。然し勞働と資本との協調と資本家と勞働者との協調とは全く異る觀念である。勞働は勞働者を離れては存在しないが、資本は資本家なくとも存し得る。器械を修繕改良再建する必要はあるが、之を私有すと號する資本家を養ふ必要はない。寧ろ其費用を以て軍人を養つた方が國家の爲ではないか』と反問する論者あれば、殊に此今

が『資本は生産物の中に再生産さるゝのみ即ち同一價格を以て再現するのみ』と云ふ樣な擬學術的前提に彩られて、然る後に此一見無邪氣な前提から『故に生産に依て維持さるゝのは資本だけで、もし資本家迄維持さるゝ者とすれば、其は當然勞働者の所得を横奪した譯である』と云ふ如き結論が抽出されて來るならば、如何なる資本家と雖も之を無學文盲の勞働者が犬猫同樣な野合に依て軍人、國家又は三文學者と情意投合し』なぞと高飛車に壓服する事は出來ないで、甚だ敬虔に極めて窮屈なる戰を戰はねばならぬ事となる。

或人は之に對し、資本家も亦働く、決して拱手徒食するのではない、財を直接に作るのは勞働者である、如何なる財を如何に作る可きかを決するは資本家で、其選擇決定の如何に依て勞働の生産力亦甚しく異り來るではないか』と辯ずる。但是は資本家と企業家とを巧に掏り替へたる答辯で、『働く企業家は精神勞働者として待遇せう、只坐せる株主に配當を拂ふを止めよう』と云はれたならば、戰爭が國家の俸給を受くる官吏に依て行はれても戰術が衰へない事實に鑑み、企業家を官吏とすれば大に企業術が衰へるとは少々考へ難い。只坐せる株主とても少くとも如何なる株を買ふ可きかを決するに依て投資の方向に善良なる影響を與へつゝある』と云へば云はれぬではないが、敵をかく旗下に切り込ますは苦しい防戰である。

一層無難なる抗辯は「資本家の所得は甚だ大であるが中に在て個人的に消費せらるゝは極めて僅少で、殘餘の大部分は社會に代つて彼が增殖しつゝあるものに拘る。即ち私有財産はやがて公有財産の爲にある。故に此資本家を亡ぼせば勞働者は無思慮に生産高の大部分を喰ひ潰して遂に資本其ものが亡びる事になる」と云ふ法である。

然り乍ら生産に對する資本家の寄與貢獻を右の如く强ひても探り出すは、暗々裡に敵の術策に陷る所以である。鷄は卵の爲に飼はるゝが如く、勞働者は一定の勞働を最も低廉に供するが爲に傭はるゝ。故に卵が器械で出來れば誰も鷄を飼うまい樣に勞働者よりも安い器械が出來れば勞働者を解雇するが經濟的進歩たるを認めざる經濟學者は第一流の學者の中にはない。只人間の欲望は無限なる爲に、一種の勞働より排斥されたる勞働者は大體他種の勞働に轉ずるに依て其生計を維持し得る。若し資本家は資本を生むが故に養ふ可しと云ふならば、更に有効に資本を生む方法が發見せらるゝ刹那から資本家は資本家としては絶對的に失職する事となる。恰も貴族は政治を行ふが故に又は

音樂を奬勵するが故に尊重す可しとの論は、貴族以外の人間が政治を行ひ音樂を奬勵するに至れば貴族無用論を裏書すると相同じい。

されぱこそ貴族主義の動かぬ根據は貴族は貴族なるが故に尊いと云ふにあるが樣に、風吹き雨降るとも千古動かざる可き資本主義の最後の要素は資本家は資本家なるが故に存在する價値ありと見るにある。而て資本家は資本家としては米を作らないから、即ち資本家の足は資本家の頭を踏みすえては立ち得ないから、働くものと働かざる者との永久的對立を認容する二元的人生觀に其當然歸結する形而上學である。從て社會政策は如何に勞働者の教化を鼓吹するにせよ、勞働者は未來永劫資本家に取つて代り得る程には進歩せざる可しと前提するか、又は潛在の不完全なる勞働者こそ動もすれば資本家を敵視もすれ、顯在の完全なる勞働者に至つては、私有財産は私有財産なるが故に即ち資本家は資本家なるが故に之を尊重する雅量を發揮し來る可しと前提せるものと推定せねばならない。

（十）

筆を擱んで玆に至らば、一部の讀者は、佛蘭西革命以來百三十餘年、露西亞革命以來滿三年、大正も正に十年の今日、然かく虫の好い思想には北海道の霧の中なる熊だつて感心しはすまいではないか、にも拘らず、他人を釣る爲に其を社會政策の形而上學なぞと名くるは羊頭狗肉も亦極つたと詰らるゝかも知れない。

然し乍ら本稿の目的は社會政策を勸むるにもなければ、其を斥くるにも存しない。社會政策が社會主義を蔽ふ「カプセル」でもなく、自由主義を包んだる「オブラート」でもないとするならば、其根本精神は果して抑々何處に存するかと尋ねて、虚心平氣に在るが儘の社會政策を在るが儘に觀察すれば、自由主義から社會主義へ橋上に立つ社會政策は、潛在の勞働者と顯在の勞働者との區別に發して、高い賃銀安い勞働の解決に到達する二元哲學と解するを措いて、之を獨立新奇の一主張となす途なしと答へたゞけである。右眼以て資本家に媚を呈し、左眼以て勞働者に秋波を送る政策を博愛的と稱する、或は賣笑婦的と罵るか、一に全く讀者の自由に任す。只顏が如何に映ればとて、鏡は之に對する責任を負ひ得ない。（完結）

軍備の撤廢制限

國民經濟と「ミリタリズム」

法學博士　堀江歸一

國際聯盟と軍備問題

國際聯盟規約は講和會議に列した關係諸國の代表者で、方今列國の世界に於て、第一流の地位に居ると稱される有力者が各自の有する知識才能のあらん限りを盡して、案出したものであらうが、私共の眼から見れば、此の規約に果して幾何の實際的價値が備へられて居ると見る可きであらうか、大なる疑なきを得ない。國際聯盟の根本主旨は聯盟の力で、國際間に平和を保障する、若しも或る一國が此主旨に違反して、國際間の平和を攪亂するとか、又は兵力を以つて、他國を脅威するとか云ふような違法の所業を敢てした場合には、聯盟に屬する他の諸國は擧つて此違約國に制裁を加へ、其國に對しては勿論國民に對しても通商上金融上の關係を斷絕し、又個人的交通をも防遏し、更に聯盟に屬する兵力を以つて、聯盟の約束を擁護することを辭さない次第である。即ち國際聯盟は國際間に平和を維持すると共に、今後諸國民をして再び兵火の難に罹ることを避けさせようとするのであつて、此點から見れば、世界の平和を保障する結構至極の工風としなければならぬ。既に然る以上は諸國は一方に國際聯盟に加入すると共に、他の一方に於て戰爭の方便である軍備其ものを撤廢して、將來戰爭の誘發され可き根源を杜絕するのが至當の策である。現に聯盟規約の第八條に「聯盟國は平和維持の爲めには、其軍備を國の安全及び國際義務を協同動作を以つてする强制に支障なき最低限度まで縮小するの必要あることを承認す」と規定したことの如き、即ち此邊の用意を表したものであつて、要するに軍備の制限又は撤廢に對する前

提を以つて、目さなければならないのである。然らば諸國は右の聯盟規約を尊重して、實際に軍備制限の方嚮に向ひつゝありと認められるであらうか。此事は第一回國際聯盟會議の議題に上り、英米兩國聯合の海軍制限協定と云ふような具體的問題も現はれて居るに拘はらず、其進行は甚だ遲々たる狀態に彷徨し、結局有耶無耶の間に葬り去られる虞すらなきを得ないのである。

經濟と軍備との關係

然しながら私は各國の國民が軍備の問題に就て、今少し透徹した考を持つて、之を制限する輿論を振作するに至ることを希望して已まない。此種の輿論を盛にするに就ては、私は經濟上の方面から、軍備其ものを觀察し、軍備あるが故に、國民經濟が如何に壓迫され、又國民生活に如何なる災禍を及ぼすかと云ふことを考へるのが捷徑であるであらうと信ずる。或は獨逸經濟學者の内には、經濟上から軍備を肯定しようとする人もある。現に兩三年前物故したアドルフ、ワグナーの如き其一人であつて、軍隊が人に團結統一の尊む可きものであると云ふことを敎へる點に於て、大なる敎訓的効果があり、又軍隊生活の間に於て、人に犧牲的精神の如何に重んず可きかを示すことも、大なる利益であると論じて居る。然しながら軍隊に於ける團結とか、統一とか云ふようなことは、何れも個人の自由意思から來るのでなく、上官が上官たる權力を以つて、下僚を威壓強制して生ずる結果に外ならない。隨つて軍隊内に居る間は如何に統一團結が保たれたとした所で、一旦軍隊を離れて仕舞つたならば何等痕跡の見る可きものなきに至るのである。

軍備が擴張され、年々歲々軍隊に收容される者の數が增加すると共に、軍隊から歸休する者の數も亦自ら增加する。處で斯る歸休した軍人に何か適當の職を授けて、自活の道を立てさせることは、何れの方面から見ても、最も肝要の處置であつて、此點に缺くる所あつたならば、國民をして自ら兵役に就くことを嫌惡するに至らしめざるを得ない。左ればこそ強制徴募の下に、多數の兵員を徴募する國に於ては、歸休兵の授職問題に相當の工風を凝して已まないのである。獨逸の如き歸休兵を鐵道や郵便事業で現業員の他位に就かせて、此問題を解決して居るが其代り世間は非常識極まる現業員に接して、常に惱まされざるを得ない。或は彼等は規律訓練を重ずる生活に慣れて居るから、工場の職工監督にでも使つたならば、任に適すると云ふような說もあるけれども、彼等の規律訓練と云ふのは、要するに

上官から强要されたものであつて、彼等自身が下位に立つ者を統率する地位に就いた曉には、全然勝手違に爲つて、爲す所を知らないのである。我國でも歸休兵を多少の文字や、教育を要する方面に使役した場合には、常に此種の歎を免かれないと云ふ話を聞く。詰り軍隊生活は獨創の力、工風の能、應用の働きを人から奪い去つて、彼を一個の機械殊に社會の用を爲すに適せざる機械たらしめざれば、已まないのであつて、此位ひ人物經濟に於て、不經濟を極めるものは、他に其類を求めるを得ないのである。

强制徵募の兵役制度が行はれゝば、任意徵募の下に、兵卒に相當の給料を支給する制度よりも、軍事費の國家に對する負担は輕いかも知れないが、强制徵募の下に、一家に於て働き盛りの人間で、然も今適當の職業に就いて居り、將來之を安んじて、益々其技能を練磨しようとする者を徵募すると云ふことは、一家の經濟には勿論國民經濟にも大なる負担を及ぼされなければ已まないのである。且つ今日軍事費として、重きを置く可きは兵員を給養する費用ばかりでなく、種々の方面に亘つて、機械的設備を全うする費用であつて、近年の如く種々の改良が兵器の上に行はれ、各國共に新を爭ひ、奇を鬪つて行く以上は、此點に於て各國をして其費用の大なるに苦しまざるを得ざらしめるのである。

兒戲に類する軍備競爭

軍事費は國防の必要に於て、已むを得ないものであると云ふ。國防が全きを得なかつたならば、民をして其堵に安んずるを得ざらしめる譯であつて、此點から見れば軍事費は經濟上に所謂生産的効果を生ずる經費であると認められる。然しながら今日の如く國際間に一つの國家と他の國家と對立して居る場合には、軍備は勢ひ他國に對して、相對的關係を持ち、一國で軍備を擴張したことが直に他國を驅つて、之と對抗する程度の擴張を計畫するに至らしめざるを得ない。英獨兩國が如何に海軍擴張の競爭に苦心し、兩國を擧げて、國帑を費すに至らしめたか、殆ど測り知る可からざるものがある。而して今や日米兩國が互に太平洋上に於て、海軍擴張に從つて居ることは、吾人の眼前に映ずる所である。國際間の感情に細心の注意を拂つて居る日本の言論社會では、流石に公然米國を假裝敵國として、海軍を擴張せよと論ずる者はないようなものゝ、日本が今日何を標準として、海軍を擴張し、又海軍力を充實するかと云へば、太平洋上に於て、或る支配權を得るの一事であつて、勢ひ米國

と海上權を競爭せざるを得ないことゝ爲るし、無遠慮なる米國の言論社會に於ては日本を假裝の敵手とするを聲明して憚らないのである。斯う爲つたならば國防の絕對必要の最小限度に軍備を止めると云ふ意味は全然喪失して、殆ど國際間に於て、一場の兒戲を演ずるものに異ならない。

諸國が國防と云ふ埒外から逸して、軍備擴張の競爭をする、國民の心機が一轉して、之を一片の兒戲と認め、翻然態度を變するように爲れば、甚だ結構であるが、騎虎の勢に驅られては、斯る豹變は至難の業であつて、軍備擴張、軍事競爭の窮極は必ず戰爭と爲つて、兒戲の大團圓を告げることゝ爲るのである。之を歐洲戰爭に就て觀察しても、諸國は戰爭勃發に先だつて、戰爭の準備に就て、如何ばかりの競爭をしたであらうか、其程度は甚だ大なるものであつた、英吉利と獨逸、佛蘭西と獨逸、露西亞と獨逸などの間に外交上の關係の切迫したことは一再に止まらなかつたが、干戈に訴へようとする間際に臨んで、平和の狀態に復歸する、斯くて世人は之を武裝的平和と名づけ、軍備を以つて、平和維持の保障とさへ考へて居つたのである。然し是れは相敵對す可き國が相互の軍事的勢力を互角のものと認めて居つた結果に過ぎない、一旦兩國の一方が他方に對して、軍事上の勢力なり、又は之を維持幇助する他の諸勢力なりが優秀であると考へ、他方も亦一方に對して、同樣の考を持つたならば、其處で平和の現狀は忽にして打破されて、戰爭の勃發を見るに至るのである。斯う爲つたならば、國防の目的を以つて、軍備を整へると云ふ意義は何處にあるであらうか。國防の爲めにする軍備が一變して、他國を攻略する具に供されざるを得ないのである。

「ミリタリズム」の經濟に對する壓迫

斯く一國が軍備を整へて行く場合に、國防と云ふ守勢から、外國の攻略と云ふ攻勢に進むのは、人間の慾望として、最も多く陷り易い弊ではないであらうか。國が既に立派な軍備を設けた、他國の軍隊に比較して何等の遜色がないばかりでなく、寧ろ優秀であるとしたならば、其優秀であることを事實上に於て、立證したい念を生じるのが自然の感情ではあるまいか。さうすれば兵を以て兇器であるとする古人の言は正しいものであつて、軍備の極まる所は戰爭と爲つて、國民をして兵火の苦痛を覺へしめざれば已まない。固より戰爭は何年か、又は何十年かに一度起る事變であつて、國の生活から考へたならば、通り魔の如きものに過ぎないと云ふ見地から、其影響を雲烟過眼視

する人があるかも知れないが、私は之と意見を異にするのみならず、戰前に於て各國の戰爭の爲めにする準備が經濟上に大なる弊害を及ぼすに至ることを恐れるのである。

國民思想の蒙昧であつた當時に於ては、一國の經濟を盛ならしめると稱して、鎖國同樣の政策を行つたこともあるが、經濟の依つて期する所は所謂利用厚生であつて、各國共に他國に對して、其國土を開放し、自他互に天與の富源を開發もすれば、各自の知識才能をも利用する。一國の領土も、一國と他國との境界線も本來人間が自分の都合上勝手に定めたものであつて、同じく人間の勝手に變更するに何等の差支はない、經濟に國境なしとか資本に國籍なしとか云ふやうなことは、此理を道破した言であつて、世界經濟上の諸關係が共通のものと爲つてこそ、吾人の經濟生活は今日に比較し、又從前に對照して、面目の一變する位に改善されることゝ爲るのである。然るに今日如何なる國も此位の程度まで思ひ切つて、國際經濟共通の道に進んだものはない、獨り英國だけは內に自由貿易主義の下に、外國物資の輸入に檢束を施さないと同時に、外に門戶開放、機會均等を主義として、臨んだ爲めに、內外經濟上の關係は緊密と爲り、外國から物資の供給を仰がなければ、一日も國民をして其生活を遂行させ難き狀態と爲つた。然し他の諸國に爲れば、決して斯る開放自由の政策を經濟上に試みない、外國から或る物資が輸入されると、一朝戰爭でも始まつて、供給が杜絕したならば、如何なる困難を醸すに至るかも知れないと云ふ掛念から、之を制限しようとする、外國の資本が內國に放下されると、一旦戰爭と爲つて、是等の資本が遽に囘收されたならば、經濟社會に大なる打擊を及ぼすに至るから、平生資本の輸入を制限することが必要であると云ふ具合に、總て戰爭を前提として經濟上の關係の濃密に爲らんとする勢を掣肘し、何時戰爭が始まつて、國際間の關係が斷絕しても、大した差支を生じないだけの用意をして置かうとするのである。然も斯る用意をする爲めに、國際經濟共通の利益を犧牲に供する其損失は幾何であらうか、到底之を測り知るを得ないのである。

軍備の國民經濟に對して、壓迫を數へる數量は決して軍事上に於ける經費の全額ばかりで、計る可きものではない、此以外に軍備を實用に供する爲めに、卽ち戰爭をする爲めに、經濟上の關係の自然に發展す可き進路に妨害を加へることの損失は果して幾何であらうか、之を計算しなければならぬ。日米兩國の關係は將來如何なる狀態に爲るであらうか、私は本論に於ては

此問題に立ち入らない、然し今日のように兩國民の感情が疎隔して來る他の一方に、日米開戰論が時に唱へられるような有樣であつたならば、兩國の間に立つて、經濟上の取引をするものは、思ひ切つて其規模を擴張するに、憚らざるを得るであらうか。何人も近き將來に戰爭の始まることを變へたり、又戰爭の始まる風聞を耳にしたならば、到底安んずるを得ない譯である、殊に米國各地で、諸種の事業に從つて居る日本人の如きは、常に逃腰で、仕事に當らなければならぬ。軍備は國民を保護すると云ふ、又國民の對外的發展を助成すると云ふが果して然るを得るや否や大なる疑を挾まざるを得ないのである。

戰爭は經濟を破壞す

軍備が實戰の用をしないで、單に軍備として恰も端午の節句の武者人形と同じ飾り物に爲つて居つても、尚は一國の經濟生活を脅迫する弊害の大なることを認めなければならぬ。若し夫れ軍備が活動して、實戰に用ひられた曉には、如何なる結果を生ずるであらうか。多數の國民を驅つて生産上の仕事から、破壞用の仕事に移し、啻に彼等の生産的勞働力を消すばかりでなく、彼等は日に夜を繼いで、戰鬪行爲なる名の下に、人命を絶ち、富を毀ち財を傷けると云ふ非經濟的、反經濟的行爲を敢てして已まない。歐洲戰爭に於ける費用は幾何に上つたであらうか。直接軍費即ち政府が經費として、直接に支辨した金額だけに就て計算しても、

聯合側		協商側	
英帝國	四六、〇八五（百萬弗）	獨逸	四六、六一六（百萬弗）
佛蘭西	三二、六一七	墺匈國	二四、八五八
露西亞	二六、五二二	土耳古	一、八〇二
伊太利	一五、六三六	勃牙利	七三二
白耳義	一、三八七		
羅馬尼	九〇七		
塞耳比亞	六三五		
合衆國	三二、二六一		
合計	一五六、〇五〇	合計	七六、〇〇八

即ち双方の軍費を總計すれば、二千三百二十億五千八百萬弗に上る計算と爲る。左れば交戰諸國が戰後の今日に於て、疲弊、困憊の極に陷り、經濟上の狀況慘憺たることも怪むに足らない。僅々數年間に國民の年々生産しつゝある富で、是れだけの軍事費が支辨されたならば、俗に云ふ後腹を痛めずに濟むかも知れないが、斯ることは、到底望み難き所であつて、詰り諸國は公債や、不換紙幣を發行して、軍事費を支辨した爲めに、

戰後の今日に於て、公債の山積する他の一面に於ては、不換紙幣は横溢し國民をして前者の償還、後者の銷却の爲めに、今後數十年の久しきに亙つて、歐洲戰爭の苦痛を荷はしめなければならぬ。然も之を負擔するだけ、國力は如何ばかり増進したであらうか、寧ろ、壯丁が死亡し、負傷し、土地は兵火の巷と爲つて、荒廢し、男女の道德風儀は廢頽したと云ふ諸點に於て、生產力の減損したのは當然の數であつて、此減損した國力を以て、戰後の負擔に當らうとする以上は、經濟上の景況の恢復するが如きは、遂に之を望むを得ないのである。

平和論の將來

從來歐洲諸國には國際平和を維持する協會の如きものが澤山あつたようである。何に公爵であるとか、何々侯爵夫人だと云ふような人々が幹部に据り、國際平和の宣傳を事業として居たが、斯る事業に果して幾何の誠意や熱誠が認められたであらうか。多くは貴族と云ふ閑散階級の遊戲に過ぎなかつたのである。此れも其筈で歐洲諸國には近年獨立國同志が國運を賭して、戰うような大戰爭は絶無であつた。倫敦の町を散歩すると、左右孰れかの手か足かを失つた不具の男が舗道の上にペンキで繪を畫き、其傍に自分は南阿戰爭で負傷した者であると云ふ札を立て、行人の同情で生活して居る人を見受ける如何にも戰爭の悲慘な事を事實に示して居るには相違ないが、斯る人が居ることに依つて、如何なる程度まで行人の胸臆に平和論を植へ付けることが出來るであらうか、斯る人々よりも、工業勞働者で、機械の爲めに手足を失つた者の方が遙に多數であつて、マンチエスターや、リーヅや、シエツフイールドの如き工業地に行けば、殆ど街上に群を爲す程の始末であるとすれば、國際平和論とか、戰爭廢止論とか云ふようなものよりも、工場法改正論なり、癈疾勞働者保護論なりの方が寧ろ早く、又強く主張されなければならぬ道理であると考へられる、詰り歐洲諸國民は日本人などに比較すると、戰爭の結果の悲慘であることを實際的に知らなかつたのである。平和運動に關係する紳士貴婦人の如きも、戰爭が始まつたらば、斯んな悲慘事も起るであらうか、さう云へば何時か活動寫眞で、其んな映畫を見たこともあるが位の氣分で、平和運動に從事するのであるから、其運動に何等の熱がなく、隨つて世間を左右し、輿論を指導する力のないのも、亦怪むに足らないのである。然し今度の歐洲戰爭を經ては、歐洲諸國民は勿論米國人も流石に戰爭の恐る可きものであり、平和の重んず可きものであることを最も適切に感銘したことで

あらうと想像される。平和運動が活潑に行はれるのは、即ち今日にありとしなければならぬ。唯私が怪訝の念に堪へないのは、列國の軍備に制限を加へようとする計畫が容易に具體化せず、又之を具體化させるだけの强い運動が歐洲に起らないのは何故であるかと云ふことである。國際聯盟にした所で、軍備の制限なり、進んでは其撤廢なりが實行されなかつたならば、龍を畫いて、眼睛を點ぜざると同樣の非難なきを得ないのである。正義、博愛、仁慈の念が人間の野獸性を抑制することが出來ないようであつては、吾人は遂に文明生活の何ものたるを誇る境域に達せざる憾を免かれない。

「ミリタリズム」に經濟的意義ありや

前段に述べた通り、軍備は不生産的のものであり、非經濟的のものであり、戰爭は更に不生産的非經濟的所業に輪を掛けたようなものである。斯くて軍備を擴張し、軍事費を膨脹して、之に對する國民の贊成を得ようとする場合には、小利口の政治家は必ず軍事費を經濟的にし、又之を生産化することに勉める。換言すれば軍事上の勢力で未開地方を占領して、領土を擴張したり、又は利權を奪取したり、又は戰爭に勝利を得て、土地の割讓、償金の交付を受けたりすれば、即ち軍事費が生産化されたものと解せられるのである。然しながら私は此種の議論に對しては、多くの點に於て、異論を挾まざるを得ない。第一或る國が國民の生活を改善するには必ずしも領土の廣濶であることを條件としない、狹い領土を擁して居つても、資本が内に充實し、其運用に巧であれば、領土の割合に多數の國民を給養するを得る、第二或る國は自國の資本商品や技術が他國に出て、其國に於ける資本や技術と對等の地歩を占め、自由に競爭するに至ることを必要とするけれども、此以上に他國に於て排他的獨占的地位を占めることを要しない。第三一國が他國に領土を擴張した場合に、歴史人情風俗の異なつた他國民殊に異人種を支配するが如きは、之を支配する方の國から見て、容易の業と云ふを得ないばかりでなく、支配される方の國民から見たならば、人情に違反した政治を施される苦痛を免かれない。第四戰捷國が償金を徴收するのは、之に依つて戰費を賠還する趣意に基くものであらうが、戰敗國は戰爭に敗けた上に、更に償還の賦課を命ぜられる次第であつて、國際上の大局より見れば、利害損得は決して差引が付く譯でなく、却つて負擔の方が重く殘るのである。何となれば戰捷國の方では、償金を一種の泡く錢と見て、濫費する一方に、戰敗國の方では、肉を殺がれ、骨を

削られると同じ苦みで、償金を負担するからである。

軍國主義國の亡ぶる所以

斯く論じて見れば、軍備に經濟上の意味を附會することの誤りであるが如く、戰爭に經濟上の利益ありとするが如き說も亦間違つて居る。經濟は平和の間に發展す可くして、戰爭に依つて、挫折されざるを得ないと斷言するの外に道はないのである、古來軍國主義なるものが治國の要道と認められた場合は少なしとしない。卽ち軍備の擴張、軍事的施設の完成に國力の大部分を傾注し、斯くて收められた軍事上の勢力を外に用ひて、或は領土を侵略する、或は利權を强要する、軍隊を先達として、商品の販路なり、人民の移住なりを奬勵する、外國に通商を開くには、軍艦を以つて航路を保護し、商船の航行を安全にする、斯くて得られた富の一部分は租稅の形で、政府に徵收し、之を陸海軍維持の經費に充て、軍事上の勢力と經濟上の資源とを相併せ進めようとするのが軍國主義の要訣であつて、外見から云へば、其政策は如何にも華美であり、其手段は壯麗であつて、人目を眩惑するに足りる。然し斯る軍國主義が能く成功して、國家萬年の謀たるを得たかと云ふに、事實は寧ろ正反對であつて、軍國主義を實行しつゝある國は之を實行すること、幾年の久しきに及ぶ間に於て、必ず破綻を現はして、國家を衰運に陷らせるのである。何故に軍國主義は國家の存立を危殆ならしめるかと云へば、詰り軍事を主として、經濟を從とする、軍事上の勢力を張る爲めには、何ものをも犧牲にすることを顧みない爲に、經濟の伸張を妨げ、經濟力を衰へさせる爲めに、結局軍事其ものを危うするに至るのである。

若しも一國が軍國主義の下に、軍事一天張りの考で、經濟上の政策を律して行つたならば、如何なる結果を國運の上に生じるであらうか。有事の際に、外國と經濟上に關係があつては、危險だと云つて、之を制限し、結局其國をして孤立經濟に近い狀態に陷らせる、體力の强健な兵卒は商工業に從事する者の間から求められない、彼等は平生大都會に密住して、不滿足の生活を營んで居る爲めに、體軀の發達が少年時代から不良である、完全な兵種は何としても地方農村から輩出すると云ふ見地から、農業を維持繁昌させ、其結果として、商工業を衰微させる、徵兵檢査前なり、又は豫備後備役の期間內に、國民が自由に外國に移住したならば、有事の際に、兵役に在る者の召集が不可能と爲るから、國民の海外移住をも制限する、資本の國際間に於ける出入も亦戰爭の場合に、經濟社會を攪亂する原因と

爲るから、平和時代に此勢に或る掣肘を加へる、斯う云ふ趨勢に爲つたならば、一國の經濟は何時まで經つても、農業時代少なくとも農業を産業の要地に置く時代に停滯せざるを得ない。而して斯く一國が農業を主要の産業として居る以上は、人口も增殖せず機械工業も起らず。資金も充實しない譯であるから、戰爭と爲つた所で、充分の兵員を徴募するだけの人口がなく、武器を無限に供給製作する機械工業も起らず、長期の戰爭を營むだけの軍資金にも缺乏する道理である。さうすれば軍國主義を徹底させようとして、經濟上の自由に制限を加へることは、偶々以つて軍國主義を實際に施して、戰爭を行ふ場合に、一國の戰鬪力を破壞することゝ爲る。卽ち軍國主義は經濟上の關係から見れば、一方に國を興すと共に、他の一方に之を亡ぼす事情を作りつゝあるのであつて、軍國主義の標本たる獨逸が歐洲戰爭の半途まで、種々の點に於て、旭日沖天の勢を示したのに拘はらず、一朝の蹉跌から、再起の許されざる破目に陷つたのも、敢て異とするに足らないのである。

「ミリタリズム」と軍閥

軍國主義の餘弊として、吾人の指摘しなければならねことゝは、軍閥の發生である。何故に軍閥なるものが生じるかと云へば、由來軍人の教育法は極めて不完全のものであつて、小學教育を終了した位いの者に直に軍事教育を授け、一旦軍事教育に着手した以上は、勉めて外界の事物に接觸することを妨げ、結局軍人として必要の知識以外には何ものをも持たない人物を作り出す。隨つて斯る人は軍人仲間では、多少の口も利けるかも知れないが、一般の社會に出ては、手も足も出ないのである。其處で彼等は軍人閥と云ふ狹い城廓内に立籠つて、軍事以外には何事にも眼を付けず、同臭同穴の者、相集まつて、一つ閥を爲し、軍備の尊きことを知つて、他に何事のあるを知らず、軍事の爲めには、何ものをも犧牲に供して、憚らないと云ふような感情を懷くことゝ爲る。是れは一種の偏執のようなものであるが、一つの閥に於て、少數者だけが團結して居れば、斯る傾向の生じることは已むを得ないのである。

處で斯う云ふ閥が單に軍事上の方面だけに、力を用いて居るならば、尙ほ恕す可き點もあるが、實際には必ずしもさうでない。蓋し軍閥は我國の實例でも知られる如く、軍人其ものが外界との交渉を絕たれて、何等知見を擴める道がなく、他の方面に行かうとして、容易に行くことが出來ず、一旦軍人と爲つた以上は、軍人で生涯を果さなければならない關係があるので、

彼等の團結は極めて鞏固であり、其運動に於ても背水の陣地に居る趣がある。彼等が此團結を通じて、軍事に干與するならば許す可きであるが、彼等は一般政治に容喙するのである。日本に從來から軍閥跋扈であるとか軍閥外交であるかと云ふような言葉のあるのに徴して、如何に軍閥が政治まで其力を揮うかゞ理解されよう。私が往年支那に行つて、北京で或る學問的事業に關係して居つた時の如き、日本には寺内内閣があり、支那には段祺瑞内閣があり、共に其首長が軍人出身であると云ふ點から、肝膽相照すに至つたと稱し、支那に駐在する軍人輩が盛に軍閥外交を行つたものである。然も此間我國の對支外交は何處まで發展して、支那に我國力を伸すに至つたかと云へば、徒に支那人中の識者をして、日本の軍閥が或る禍心を包藏して、支那に臨んで居ると云ふ疑惧の念を懐かせ、排日の感情を醸成することゝ爲つた外に、何等痕跡の認められ可きものを存しなかつたのである。

一國が他國と相交はる上に於ては、天下の正道を濶歩しなければならぬ。前者が後者に比較して、先進國であり、優等國であるならば、前者は後者に對して、仁慈博愛の精神を以て接しなければならぬ。此念が通じてこそ、國際間には假令ひ自然の境界があり、又人爲の障壁があつたとしても、一體に融合して、自他の國民をして生を樂ませることが出來るのである。然るに軍國主義は國と國と相對した場合に一寸一分の隙があつても、直に乘じて、威壓を加へた以上は、常に之を續けなければならぬと共に、威壓を加へられる方では、常に反撥しようとして已まない。鬪爭の間に何として平和を條件とする經濟の發達を求められるであらうか。野蠻時代に一の種族が他の種族を征服する場合には武力を以つて、根を絶ち、葉を枯らすまでに、征服される種族を壓迫したのである。是れは軍國主義と云ふ見地から、考へたならば、徹底した遣り口であると評されよう。然るに今日の軍國主義は文明の假面を裝つたゞけ斯く徹底した形で行はれず、威壓を加へた國民をして漸次に悦服させようとする、此位い矛盾を極めて居ることは、他に類例を見ない、威壓の一面には反抗があり、悦服の前提としては滿足がなければならならぬからである。

軍國主義と社會政策

要するに軍國主義の下で、諸國が莫大な經費を軍事上の用に投じて居るのは、吾人の熱望する生活改善の趣意に反することとの甚だしきものである。社會政策を通じて、國民生活の狀態を

改善することは、從來或る方面の人士の懷抱し主張する意見であつて、假令ひ之を行ふに就て、緩急の差ありとしても、社會政策なるものは、大體に於て歷代内閣の是認する所と爲つた。然しながら年々幾億の財を軍事費に投ずる、幾萬の壯丁を生產業から隔絶させて、兵役に就かせる、時には經常軍事費に幾十倍幾百倍する費用を投じて、戰爭を試み幾萬の人命を殺して其處に何の生活改善があるであらうか。軍國主義の下に跼蹐して、社會政策を實行した所で、社會の病弊を治療する方法としては、膏藥張り療法位ひの効果しか期し得られない。超弩級艦一隻を建設し、二師團を新設する計畫を止めたならば、單に財政上に費用を節約するばかりでなく、兵役に就かしむ可き勞働力を自由の天地に解放して、生產上に利用し、富を破壞する用に供される材料を轉じて、富を生產するに至らしめる。是れ程利用厚生の道に適つたことは、他に比を求め難いのである。軍國主義が如何なる方嚮に向つて居るか、軍備が如何なる狀態に動いて居るかと云ふようなことには、風馬牛相關せざる態度を持しつゝ、獨り社會政策を唱へるが如きは、社會政策と云ふ法被を着た職人の爲す所であつて、經世上に何の益する所があるであらうか。歐洲諸國に於て、一方に社會改造の主張されると共に、他の一方に於て軍備縮小を要求する聲の兎に角識者の間に起つて居ることは、吾人の首肯する所である。

二月一日頃の衆議院議事の速記錄を讀むと、外務大臣は一議員の質問に應じて、日本は講和會議の際にも、全權委員をして軍備制限の議に參加させ、今回の國際聯盟會議に於ても、同樣の態度に出でさせたと言明して居るが、果して如何なる程度の誠意が我國の當局者に認められるであらうか。外國で軍備制限の問題が起れば、外國との仲間入りで、付かず離れず位いの曖昧の態度は示すが、日本自ら進んで此問題を解決する衡に當るような氣力などは毛頭なく、却つて過重の軍事費を計上した豫算を作り上げて平然たるが如きは何とした皮肉の所爲であらうか、私共の寧ろ滑稽に感ずる所である。

私は國民が自己の生命を大切にする。生存を貴重とする念の進めば進むに隨つて、文を以て武を制する時代の到來を見るものと考へる。軍國主義の下に、國民に犧牲を養はせ戰爭と云ふ暴力を發揮する修羅場を現出させて、吾人の生存生命を脅かすが如きことに對しては、平生經濟上の見地から、生活の改善、生命の存續を必要として居る立場に照して、極力反對を表せざるを得ないのである。

軍備縮小の合理性

法學博士　末廣重雄

一

昨年十一月、瑞西ゼネヴアに開會せる國際聯盟總會第一回會議は、軍備縮小問題に關して、第一回及び第二回萬國平和會議以上に出ることが出來ず、不徹底なる勸告案を可決するに止まつた。然るところ、十二月中旬に至り、米國に於て、海軍縮小問題が俄に沸騰することになり、紐育ウオールドの如き有力なる新聞が、此の問題の爲め激烈なる運動を開始し、上院議員ボーラーは、五ケ年間造艦計畫を五割方縮小する協定を、日英米三國間に結ぶ爲めに交渉を開始すべく、大統領に要求する決議案を、上院に提出した。蓋し米國は、今次の戰爭の結果として歲出非常に膨脹し、世界に其の偉大なる富力を誇る國でありながら、財政上に漸く困難を感ずることになつた。若し今後今日以上大規模に海軍を擴張して、益々歲出を增加せねばならないことになつては、到底其の國力の堪へ得ないことになるのであるから、ボーラーの提案が、米國に於て非常に歡迎を受けたのは、尤も千萬である。去る一月二十日に至り、上院外交委員會は、ボーラーの決議案に贊成したが、（下院外交委員會も、世界的に軍備縮小を議する爲めに列國會議を召集するの決議案を可決したさうである。）此の決議案は來る三月ハーヂングの大統領就任後匆々、上院の議に附せらるゝ筈である。

然るところ、海軍卿ダニエルスは、日英米三國間の協定を以てしては、希望する結果を生ずることが出來ぬ。斯くの如き協定は勢力均衡の舊思想に還るものであるから、海軍縮小を目的とする世界的協定が成り立たざる限り――ボーラーは之を世界の總ての國の問題とする時は、自然陸軍の縮小にも及び、問題益々紛糾して遂に失敗に歸することを恐れ、協議すべき國を、日英米の三大海軍國に限らんとするにも拘はらず――米國を世界第一の海軍國たらしむる大擴張計畫を、拋棄するを得ないと

して、ボーラー案に不同意である。海軍省戰略局長クーンツ將軍の如きも、現在の海軍擴張計畫を半途中止するが如きは、米國に取り、不賢明、且つ有害なる政策であるとして、ボーラ案に反對の意を表して居るさうであるから、來るべき上院の本會議に於ては、定めし激烈なる討論が行はるゝであらうけれども、今日の形勢では、上院は之を可決するであらうと、期待せられて居る。

共和黨は、昨年十一月の大統領選擧の時、其の政綱中に軍備縮小を揭げて居るし、且つハーヂングも亦、世界的軍備縮小は平和に到達する唯一の階段である。之が爲め世界の大國は、卒先して其の實行に着手せねばならぬ、と云ふ意見を公にして居るのであるから、議會の贊成を得るならば、就任後間もなく、日英兩國を誘ふて、海軍縮小會議を開くであらうと思はれる。

英國に於ては、戰後の財政上經濟上の狀況は、尨大なる海軍擴張計畫を遂行することを許さぬから、人類の福祉に對する大なる脅威である造艦競爭の休止運動には少なからざる贊成者がある。首相ロイド、ジョージは、議會に於て、今後の海軍擴張計畫を決定するに先ち、(目下英國は造艦計畫中止中)縮小問題に就て、日米兩國と協議するの件に就き、充分考慮しつゝありと聲明して、米國が海軍縮小に關する交渉を開始するのを待つて居るやうである。

二

海軍縮小に對する我國の朝野の態度を見るに、原首相は米國パブリツク、レツヂャー紙通信員に對して、事情が許すならば海軍縮小に異存がないとして、內田外相は、數日前衆議院に於て、一議員の質問に對し、海軍縮小協定が外交上の問題となることある場合には、政府は愼重に考慮する筈であると答辯し、態度は、孰れも極めて受動的である。更に英國駐在林大使が、英京倫敦に於て新聞記者に語るところに依れば、主義としては海軍縮小に贊成であるけれども「現に大海軍を有する諸國が、之に關し協定を爲し得るかが頗る疑しい」とか「日本は英米兩國が卒先して、海軍縮小を實行するのを待つ」とか云ふのみで、我國が進んで海軍縮小の爲めに、努力するの熱心が少しも見へぬ。

政黨方面では、憲政會は、主義として海軍縮小協定に贊成であると云ひながら、加藤總裁は實際問題として果して幾何の價値ありやを疑ひ、甚だ不熱心のやうである。國民黨總理犬養氏も、產業立國の國是を遂行する爲め、國防費節約の必要を

いては居るが、海軍に就ては、唯一思ひ切つて老朽艦の整理を爲すならば、幾ゝ經費の節約を得ることが難事であるまいと云ふのみで、海軍縮小の必要には說き及んで居ない。

要するに、我が政府當局も、政黨も、海軍縮小には、餘り贊成でなく、縱し主義として贊成であるとしても、今日は未だ其の協定を爲す時期でないとするやうである。然し斯くの如きは果して我國家人民の爲めに謀つて、親切なるものであらうか。私は斷じて左樣でないと信ずる。我國の海軍擴張計畫は國力不相應に尨大である。我が財政經濟上の事情は海軍縮小を必要とし然も成るべく速に之を實行し得べき手段を講ぜねばならぬ狀態に在るから、私は、昨年十一月國際聯盟總會第一回會議開會前に、軍備縮小問題を、我國より同會議に提案して、縮小運動の第一步を踏み出すべく主張したのである。然らば、我國は何故に海軍縮小を必要とするのであるか、進んで少しく之を說明する。

三

我國の軍備縮小論者が既に指摘して居る如く、最近我國の軍事費は非常に尨大なものとなつて、大正九年度に於ては、總歲出の四割七分に當り、大正十年度に於ては、目下議會に提出中の豫算案に依れば、總歲出十五億六千一百五十萬圓中、

經常費　三億二千八百十萬圓

臨時費　四億三千三百六十七萬圓

合計　七億六千百七十七萬圓

であつて、殆んど歲出總額の五割を占め、今次の戰爭前の獨逸に於けるが如くである。海軍費のみに就て見れば、大正九年度は、三億五千三百三十萬圓であつて、歲出總額の約二割八分に當り、大正十年度は、四億九千八百六十三萬圓で、歲出總額の約三割二分に當つて居る。而うして、今後は、少くとも、之と殆んど同額の大負擔を國民に强ることになるであらうし、若し不幸にして、米國と競爭的に海軍の擴張を續けねばならぬやうなことにでもなるならば、將來我國の軍事費は益々增加し、遂に財政上の大困難を惹起することになるであらう。米國の十分の一の富を有するに過ぎざる我國が、之と造艦の競爭をして、其の海軍の二分の一、若しくは其れ以上の勢力を有せんとするのは、全く正氣の沙汰とは思はれぬ。

四

抑も、一國の國防力は、其の陸海軍のみに依つて定まるものでないことは、私が茲に呶々するまでもないことである。一國

の強弱は、決して其有する兵數や艦數のみを標準として測り得るものではなく、其の背後にある國力を計算の中に加へて、始めて決せらるべきものである。今次の戰爭に於て、獨逸が英米佛三國を相手にして、健鬪をし得たのは、全國偉大なる國力があつたからである。其の陸海軍の背後に、巨大なる富力と、隆盛なる產業と、優秀なる科學があつたからである。

然らば、我が海軍――千九百十三年に於ける獨逸の海軍費の二倍以上を費す我が海軍は、果して當時の獨逸以上の强大なる國力を背後に有つて居るか。惟ふに、我國が從來國力不相應に大なる軍事費を支出して、文化的生產的施設を怠つた結果、工業の如き、戰前の獨逸は勿論、英米佛の何れに比べても、數十年も後れて居る。科學の如きも亦、遠く彼等に及ばない。其結果は、一例を擧れば、造艦事業に現はれ、最近我國の造船所に於て建造せる軍艦に、頻々として故障の起るのは、全く我國の機械工業に於ける智識と技術とが、甚だ幼稚であるが故であると聞いて居る。斯くの如く、我が智識や技術が遠く歐米諸國には及ばぬことは、獨り造艦事業に限らず、兵器、航空機の製造を始め、一般軍事工業に於ても亦然りとする。斯かる幼稚なる軍事工業や、科學を背景とする我が海軍は、恰も粗末なる基礎工事の上に建築せられた摩天閣のやうに、不安千萬のものであると云はねばならぬ。

或は曰はん。我が軍事工業は極めて貧弱であり、科學は頗る幼稚であつて、我國は到底軍事上自給自足し得ないとしても、必要なる軍需品の供給は、歐洲より海陸之を仰ぐの途があるから、日米戰爭の際は、我が海軍力を支持して、終局の勝利を得ることは難事でないと。然し、私の見るところでは、今後當分のところ、西伯利鐵道は、全く之を利用することを得ない。幸にして遠からず再び歐亞交通の爲めに開通せらるるとしても、現在露國にて大に不足して居る機關車を充分に補充し、永らく酷使して破損の甚だしい線路を修繕し、充分其の能率を發揮せしめ得るは、果して何れの日であらう。印度洋を經由する歐洲との海上交通は、比律賓を根據とする米國海軍の爲め、甚だしき障害を加へらるるであらうから、我國は、少くとも一時は、支那及び西伯利との通商を除くの外、世界各國との通商を遮斷せらるることになるに相違ない。從つて、戰時歐洲より必要なる軍需品の供給を仰ぐことの至難なるを覺悟せねばならぬ。斯くして、軍事上自給せねばならぬ窮狀に立至つた場合、我が海軍は果して幾何の働を爲し得るであらうか。懸念に堪へぬ次第

である。

要するに、現在の我が海軍擴張計畫即ち八々艦隊計畫は、國力に相應せないものであると斷言するを憚らぬ。國力を十分打算せずして定めたものであるから、之を國力相應の所まで縮小するのは、却つて我が國防力を強くすることになるに相違ない然るに、我國の一部には、現在の計畫を以て未だ足れりとせず米國に對抗する關係上、今日以上に之を擴張するの必要を說く者さへあるが、斯くの如きは、國帑を濫費し、遂に我國を危ふするに至るものと云はねばならぬ。

五

憲政會總裁加藤子の如きは、我が八八艦隊は、戰略上の一單位であつて、然も純然たる防禦的見地から建造せられたものであるから、周圍の形勢に重大なる變化のない限り、之を海軍縮小協定の範圍外に置かねばならぬと云ふて居るが、之は子の個人的意見ではなく、實に憲政會の意見である。之に依れば、憲政會は現在の海軍擴張計畫以上に擴張せぬことには贊成であるけれども、周圍の事情に重大なる變化のなき限り、八八艦隊計畫の縮小其のものには反對である。然らば周圍の事情に重大なる變化があると云ふのは、如何なる事を意味するのであるか。英米兩國が其の海軍を縮小することは、周圍の形勢に重大なる變化を生ずるものであると思はれるけれども、憲政會の主張するところでは、其れ以上の或る場合を指すのであつて、其れは果して如何なる場合を指すのであるか、明瞭でない。所謂憲政會は、英米二國が海軍を縮小する場合に於ても、我が海軍縮小には贊成せぬものと思はれる。

憲政會が海軍縮小に反對する理由の一として、八八艦隊は戰略上の一單位であると云ふことを擧げて居るが、現在八八艦隊を以て戰略單位とするのは、是が艦隊編制上最大の能力を發揮し得るからであつて、實際上我國が幾何の海軍力を有せねばならぬかの問題とは別個の問題であり、我國所要の海軍は假想敵たる國の海軍と相對的に決定せらるべきものであらねばならぬ。果して然らば、今日に於ては、對米關係上八八艦隊を必要とし、而らして、之を戰略單位として、一指揮の下に統率せしむることを最も利とするけれども、一旦米國が其の海軍を縮小する場合には、之に伴ふて我が海軍を縮小しても、少しも支障のないことではあるまいか。畢竟憲政會の云ふところは、艦隊編制上理想的であるからとて、實際上必要なきに至つても尚、八八艦隊を維持せねばならぬと云ふことに固執するやうに思は

れる。更に、憲政會は、我が海軍は單純なる防禦的設備であるから、之を容易に縮小することは出來ぬと云ふて居るが、然し天下何處に自國の海軍は防禦的のものでない、他國を攻擊する野心の下に建造せられて居る、と云ふ者があらう。米國も防禦的であると稱し、英國も然りと答ふるであらう。若し各々自國の軍備は防禦的であるから。縮小し得ないと主張するならば、未來永劫軍備縮小の協定は成立せないことになる。要するに憲政會の反對論の根據は極めて薄弱であつて、人をして憲政會は反對せんが爲めに、強て理由を設けるのではあるまいかと疑はしめる。

憲政會が最近「獨立の生計」云々を口實として、普選運動に妨害を加へ、十分理由にならぬことを理由として、海軍縮小に故障を挾み、一般國民の利益を無視して顧ざるは、在野黨たる憲政會の爲めに、甚だ悲しむところである。

六

序ながら茲に述べたいことは、我が陸軍の縮小である。我が二十一個師團は、露國の國力未だ旺盛、極東に對して侵略的野心を包藏した時代に、之を假想敵として設けたものである。然るに今次の戰爭の結果、露國は全然崩壞し、レニン政府には侵略的野心がない。レニン政府が倒れて、他の政府が起り帝國に義を包持することになつても、今後五十年間、極東の平和を脅かす力のないことは私が斷言するを憚らぬところである。果して然らば、今次の戰爭前と全く事情を異にする今日、現在の如き大兵を養ふ必要果して何處にありや。更に日米戰爭ある場合に於ても、二十一個師團の兵を用ふるところがないではないか田中陸相は過日の議會に於て、二十一個師團は、我國を防衛する最小限度の兵力であつて、之を擴張しないと同時に、縮小する意志もないと公言した。今後空軍の擴張等、所謂陸軍の内容充實の必要はあらうけれども、國費多端の折から、依然二十一個師團を存置することは極めて理由の乏しいことである。米國も伊太利も經費節減の爲め、陸軍縮小を斷行する今日、我國も亦自發的に其の縮小を行ふては如何。田中陸相が國家的見地に立ちて、此の問題に就き再考することを希望する。

七

海軍縮小協定の容易の業でないこと、並に成立するにしても其れ迄には迂餘屈折のあることは私も十分知つて居るが、兎にも角にも、一般國民の要求するところは、我國に十倍の富を有する米國との造艦競爭ではなく、海軍縮小の協定である。國民

不相應の軍備を縮小して、血の出るやうな金を、一般國民の有形的、無形的福祉の増進に使用することである。此の國民的要求に應じて、我が政府當局も、政黨も、米國から提議のある場合、始め攻究すると云ふやうな、不眞面目、不親切な態度を棄て、進んで我が國利民福の爲め、世界の平和の爲めに、眞劍に海軍縮小問題を考慮せねばならぬ。

人或は、日英兩國が、米國と共に、海軍縮小を議することは國際聯盟を無視するものであると云ふけれども、斷じて左樣でない。之に關する三國の協定は決して國際聯盟規約に違反するものでない許りでなく、三國の間に協定が成れば、佛、伊其他の諸國も追從し來り、結局世界的に海軍縮小が行はれ、國際聯盟の目的貫徹を助成することになるのである。

私は日英米三國が、成るべく速に海軍縮小協定を爲すことに大賛成であるが、唯遺憾とするは、我國が其の主唱者たらぬことである。私は海軍縮小運動は、人類の幸福の爲めにゝ、我國に對する世界の誤解を取去る爲めにも必要であると考へて、昨年十一月國際聯盟總會第一回會議開會前、我國は同會議に於て海軍縮小に關して聯盟國間に協定を爲し、然る後之に贊同すべく米國を勸誘するやう、斡旋すべく主張した。然るところ、同會議に於ける我國の態度が不徹底であつた爲め、更に世界の排日論者に、日本は軍國主義の國であると云ふ非難の口實を與へ而して今や米國をして、軍備縮小の主唱者たる榮譽を擔はしむるやも計り難き形勢になつて居る。

米國が對支外交に、此の問題に、着々先鞭を附けつゝあるに反し、我國は常に其の後塵を拜して居る。斯の如くにしては、我國の蒙る不利は決して小でない。遺憾の極である。

（一月三十日稿）

軍備撤廢又は制限＝縮少論

海軍大佐　水野廣德

一　緒言

本問題は國家否な世界の重大問題で、之を根本的に解決するには哲學及生物學の見地より人類の本性本能にまで論及するの必要があるであらう。單に現代の如き競爭的軍備を撤廢制限＝縮少せんとする當面の問題としても、尚ほ之を論攻するには、財政を含める經濟、外交を含める政治、物資を含める國防の三點より研究せねばならぬ。而して此等の三點も亦自國を立場としたる主觀と、國際より見たる客觀との兩方面より觀察立論するを要すると思ふ。

經濟方面に關しては僕等素人が茶々を入るべき舞臺でない。政治方面に關しては知識淺きのみならず、自由に論議すべき身分でない。是に於てか僕の鍬を入れ得る畠は唯國防方面のみである。而かも國防の問題たるや、作戰、用具、防備、軍需など「閑人禁入」の鐵條綱が各所に張られて居るので、耕やすべき地面は甚だ狹少である。從つて具體的根本的に之を論議することは出來ないので、自ら表面觀の大體論に陷らざるを得ない。

二　不具なる國際聯盟

抑も軍備輕減問題の起源や歴史は爰に管々しく述べる必要がない。唯最近に至つて特に其の聲の喧しくなつたのは、米大統領「ウイルソン」に依つて唱道せられ、且つ「ベルサイユ」平和會議に於て締結せられたる國際聯盟の爲めである。國際聯盟の爲すべき事業は多々あるも、其の根本目的は世界の平和、戰爭の防止であることは云ふまでもない。而して「戰爭の發生を防止し世界の平和を維持するには、先づ戰爭の道具たる各國の軍備を撤廢することが必要であり、且つ目的に達する捷路である。」と云ふのが「ウイルソン」の意見であるらしい。當初「ウイルソン」の提言を以て哲人の空想視したる聯合各國の政治家も、扨て愈「ベルサイユ」會議に臨んで見ると「ウイルソン」の鼻息中々荒らく、若し國際聯盟案にして容れられずば旗を捲いて米國に歸るとの意氣を示した。今「ウイルソン」に逃げら

れては平和條約を結ぶことは出來ない。五年の大戰に疲弊困憊の極に達せる聯合國は一日も速かに平和の克復を熱望したると、强大なる米國の御機嫌を損することを恐れたると、國際聯盟、主意に對し表面より反對するの理由なき等に依り、爰に「ウイルソン」の言を容れ、南阿將軍「スマット」の起案せる聯盟案を基礎とし、僅に二週間とか三週間とかの短時日内に急作速成せられたのが、世界的憲法とも云ふべき現制國際聯盟規約であり、且つ坊間に傳へらるゝ聯盟成立の徑路である。

聯盟規約綱領の冒頭に於て、「締約國は戰爭に訴へざるの義務を受諾し、……中略……且つ各國間の平和安寧を完成せんが爲め……」とある。故に聯盟國にして衷心聯盟の趣旨に贊同し、且つ義務の履行に忠實ならば、戰爭の道具たるべき軍備の撤廢制限、縮少の如きは容易に實行せらるべき筈である。然るに聯盟規約八條には各國の軍備に關す。

聯盟國は平和維持の爲めには其の軍備を國の安全及國際義務を協同動作を以てする强制に支障なき最低限度迄縮少するの義務あることを承認す。

聯盟理事會は各國政府の審議及決定に資する爲め各國の地理的地位及諸般の事情に參酌して軍備縮少に關する案を作成すべし

と規定して居る。已に聯盟の綱領に於て戰爭に訴へざるの義務を承認しながら、なほ一方に於て平和維持の爲めと稱して軍備の存置を認めて居る。素より國際義務强制機關として國際警察の意味を有する兵力の必要なるは勿論であるが、國の安全の爲めに軍備の存置を許すは聯盟の主旨に合致せざるが如き觀がある。併しながら世界の總ての國が聯盟に加入せざる限りは全然對外軍備を撤去することは、現代の國際道德の程度より言へば國家として極めて危險であり、從つて不可能事と云ふべきであらう。然らば何故に世界の總ての國を聯盟に加入せしめないのであらうか。是れ現制國際聯盟に對して第一に起る疑問である。

現制國際聯盟の原聯盟國なるものは、歐洲大戰の際に於ける聯合國側と、中歐同盟(獨逸側)に對して宣戰若くは國交斷絶を宣言したる國ばかりである。又聯盟加入を招請せられたる國は大戰當時に於ける中立國のみである。聯合國の敵たりし獨、墺勃、土及政局の動搖せる露國は聯盟に加へられざるのみならず中立國の中に於ても幾分獨逸的色彩を帶びたりと云はるゝ墨西哥の如きは特に招請より除外せられて居る。是れ現國際聯盟が

眞に世界の平和と人類の幸福とを念としたるにあらずして、聯盟の假面に依つて聯合國が舊敵國に對する苛酷なる條約を强制せんとするの陰險手段に過ぎないとの非難を往々耳にする所以である。米國の如き自發的に聯盟加入を拒絶せる國や、露國の如き政局動搖して國際義務履行の能力を缺く國は別とするも、平和克復したる後に於て迄も、舊敵國たりしの故を以て、感情的に之を正義人道を標榜せる聯盟外に驅逐し、以て自ら敵を作りながら尙ほ世界の平和を云爲する人々の腹の底がわからない。

國際聯盟の趣旨と目的とは正大なるも、其の出産に於て既に公明を缺いて居る。果然舊冬「ゼネバ」に開設せられたる聯盟第一次總會は、創業不備の際とは云へ、隨分混亂を極めた狀がある、中にも大國と小國との暗鬪は最も著しく、回を重ぬるに從ひ益其の度を加ふること、恰かも資本家と勞働者との關係の如き狀勢を馴致するであらうと思はれる。大國よりは侮られ、小國よりは嫉まるゝ日本の立場こそ餘程苦しきものである。鷄口となるが利か、牛後に甘んずるが德か、少くも一度は十露盤を彈いて見る必要がある。聯盟總會の狀斯くの如しである。左れば聯盟の主要目的たる軍備制限縮少案の如きも、北歐三國より正式に提議せられたるにも拘はらず、米、露、獨の如き大國が聯盟外に立つ限り、軍備縮少尙早の理由の下に有耶無耶の裡に葬り去られた、而して今や各國互に他の腹中の搜り合をやつて居る。獨逸の軍備を十萬人に制限しながら、八十萬(と稱す)の軍隊を擁する佛國が尙ほ獨逸の軍備を云爲する樣では、世界的に軍備縮少の實現も亦遼遠なるかなの感なきにあらずである。何故に獨逸を聯盟に加入せしめて國際義務を正當に負擔せしめぬのであらうか。

三　三千年の歷史を如何

抑も戰爭があるから軍備を置くのか、軍備があるから戰爭が起るのかと問へば、多くの人は直に戰爭があるから軍備を置くのであると答へるであらう。併しながら過去の歷史を探ぐれば軍備あるが爲めに戰爭の起る場合も少くない。最初は自衞の目的を以て設けた軍備も、相手より非常に强くなれば之が力を頼んで、他に對して無理なる壓迫を加へ、遂に相手をして憤慨の極戰爭を據なくせしむることもある。例へば最近に於て米國が動もすれば其の武力を恃んで日本を威壓し、我が國民をして憤起せしめんとするが如きである。又兩者の軍備略ほ相如く場合に於ては、鎖末の事件に對しても兩者各其力を恃んで相讓らず

遂に武力の下に己が主張を遂げんとし、爲めに戰爭を誘發することもある。過般大戰の張本人と云はるゝ獨逸の如きも、必ずしも最初から侵略征服を目的として軍備を整へたのではなく、之を背景とし、之を後援とし、平和の裡に自國の利益の伸展を圖つたのであるが、四圍の状况と時局の趨勢とに驅られて、騎虎の勢引くに引かれぬ男の面目、遂に劍を拔くに至つたのであらうと信ずる。米國に優大なる軍備なくば日本に對して不德の壓迫を加へ得ぬであらう。獨逸に强勢なる軍備なかりせば世界大戰は起らなかつたであらう。是に至ると戰爭あつての軍備か軍備あつての戰爭か、頗る主客の判別に苦しまざるを得ない。

併しながら是れ結果より原因を論ずる便宜論で、正當に判斷すれば矢張り戰爭は主で、軍備は客である。戰爭は目的で軍備は手段である。然るに天下の事物を通じて目的は常に唯一であるが、手段には種々ある。例へば小供が隣家の柿を取らんとするに、先づ第一の手段として梯子を懸ける。梯子が無ければ第二の手段として竿竹を持つて來る。竿竹が無ければ更に第三の手段として石を投げる。石が無ければ最後の手段として籬を破り木に登るであらう。是に由つて、之を觀れば戰爭の一手段たる軍備の撤廢に依つて、果して克く軍備の目的物たる戰爭を根絕し得るであらうか。右の如く戰爭は軍備の目的の目的物であるが戰爭其ものにも更に又目的がある。戰爭の目的には卽ち生存慾を滿たさんとする人類の本能である。而して此の本能を滿たす爲め窮極唯一の手段は戰爭あるのみである。

純理的哲學や、人道的宗敎觀より言へば、人類の行爲中戰爭ほど非道德にして罪惡的なるものはないであらう。然るに上古草昧混亂の時代は知らず、人史傳はりて以來悠久三千歲、釋迦基督を始めとし、幾多の哲人賢者の戰を惡み兵を呪ふの聲常に絕ゆる時なく、古くは杜文美をして兵車行を歌はしめ、近くは「トルストイ」を勝利の悲哀を叫ばしめしも、而かも王侯の和戰種族の公戰は今に至つて絕へず、爭と共に劍戟益銳に、銃砲愈大に、人智開明、人文發達の現代に至つて殆んど其の極に達した。宗祖基督が戰爭を以て絕對惡と爲し、「人若し汝の右の頰を打たば更に左の頰を向けよ、人若し汝の上衣を奪はゞ下衣をも拒む勿れ」と敎へたるにも拘はらず、先度の大戰に當りては基督の弟子等は、胸に十字の聖章を掛けながら敵も味方も出征兵士に向つて、「正義の爲めに戰へ、」「人道の爲めに戰へ、」「祖國の爲めに戰れ、」「平和の爲めに戰れ」と激勵して居る。基督あらば何と云ふであらうか。嗚呼戰爭遂に絕滅し能はさるか。

宗教家としての釋迦基督が人道の爲め博愛の爲め、殺生を禁じ、爭鬪を戒たる間に於て、東洋の大哲孔子ばかりは、衞の靈公の兵を問ふに對して「軍旅の事は未だ之を學ばず」ととぼけながら、弟子子貢の政を問ふに對しては「食を足し、兵を足し民之を信ず」と答へ、大に軍備の必要を教へて居る。孔子の言は之を現代的に譯せば、「國民生活を安定し、國防力を充實し、然る後國家安泰なり」で、三千年後の今日に於ても尚ほ生々として新なる意義を有して居る。之を過去に顧み、之を現代に照らし、更に之を將來に推すも、孔子の言は永久に生命を有するものと思はれる。若し米國の理想家「ウイルソン」の一言に依つて、世界の戰爭を根絕し、世界の軍備を撤廢するを得ば、彼や實に基督よりも偉大に、孔子よりも賢明にして、世界三千年の人類の歷史は靴底の塵程も價せぬこととなる譯である。

四　列國の腹の底

戰爭にして既に根絕せずとせば、假令戰爭遂行の一手段たる軍備を撤廢するも、更に他の手段に依つて人類の戰爭は續行せらるゝであらう。即ち前例に述べた如く、假令梯子を取りたるも、尙ほ他に竿竹を振り、石を投げ、籬を破ぶるの手段がある而して竿竹を振るが爲めに或は大切な木の枝を折り、石を投げるが爲めに時としては屋根の瓦を破るの虞れが無いでもない。併しながら柿の實を保護すると云ふことが第一目的である以上柿の實を取るに最も容易にして最も便利なる梯子を取り去ることは必要にして且つ正當なる手段である。之と等しく國際間に於ける戰爭殊に現代の如き殘酷悲慘なる戰爭を防止若くは輕減することが目的である以上、戰爭發生に最も危險なる軍備を撤廢制限縮少することは決して無用の計ではない。

國際間に於ける武力戰爭廢絕の後は、或は國際間、民族間、階級間等に於ける經濟戰が起り、其の結果人類に對して一層大なる不幸と苦痛とを與へることがあるかも知れない。併し將來に於ける未發の事に杞憂して、現在の弊害を除去せざる譯には行かない。此の點より論ずれば、人類の戰爭が根絕すると否とに拘はらず、現に事實に於て戰爭誘發の因となるべき軍備の撤廢＝制限＝縮少は世界の平和に向つて進む道程に於て踏まねばならぬ第一階梯であると云はねばならぬ。但其の幾何程度に於て成功し、實現するかは別問題である。

是に於てか事が實施の法如何と云ふ問題が起る。宇宙の事物は理論と實際と一致すべくして往々一致せざるものがある。殊に利害と感情との念强き人間社會に於て其の最も甚だしきを

る。個人に優越慾があるが如く、國家にも亦優越慾がある。而して此の優越慾には物質的と精神的とがある、國家の物質的優越慾とは所謂國利なるもので、主として經濟方面の問題である。精神的優越慾とは所謂國威なるもので、專ら政治方面の問題である。今日我が國民が五大國の一たるを以て得意とせる如きは、卽ち此の精神的優越慾の發露に外ならない。而して國利の伸展に要するものは殖業通商の隆昌であるが、國威の發揚に要するものは國防軍備の强大である。素より國利と國威とは甚だ密接なる關係を有し、國利を增せば自ら國威揚り、國威揚れば從うて國利を增すのが普通の狀態である。

國際聯盟なるものが將來充分に發達して、完全なる國際警察機關が設置せられ、之に依つて國際間に於ける秩序が嚴正に保持せらるゝに至れば可なり。然らずして各國互に相備へ、自ら刋衞る現代に於ては、國家の優越權（優越慾の具體化したるもの）なるものは主として國利の大小よりも、國威の强弱に從うて消長して居る形勢がある。卽ち產業通商の盛なるものよりも國防軍備の强きものが强國として國際間に優越權を占めて居る、恰かも無警察の社會に於ては、富よりも、知識よりも、腕力の强きものが幅を利かすと同樣である。されば世界の强國が其の國防軍備を撤廢することは、國家優越權の一部を拋棄する譯で優越慾の盛なる國家に取りては大なる苦痛であり且つ大に好まぬ處である。就中我が國の如き軍備の力のみに依りて優越權を維持せる國に取つては最も苦痛とする處であらう。之に反し米國の如きは縱令軍備を撤去するも、經濟力に依つて尙ほ物質的優越權を保續することが出來るのである。

併しながら何れの國民も戰爭よりは平和を愛する、少くも愛することを標榜する必要がある。殊に大戰の重痾を負ひたる歐洲諸國民は、此際回復の爲め小康を得んと欲するの念慮が强烈である。左れば平和を目的とせる國際聯盟には加入することを望んで居る。と云つて聯盟終局の目的たる軍備撤廢に依つて自國の優越權を犧牲にすることは好まない。左れば自國の優越權を縡せざる程度と方法とを以て、軍備の制限若くは縮少を行ひ、之に依つて軍備に基づく經濟上の壓迫を免れようとして居るのであらう。所謂海豚は食ひたし命は惜しと云ふのが、列强なるものの腹の底の又底であらうと思はれる。

五　撤廢は痴人の夢

斯くの如く心中既に軍備全廢の誠意を缺いて居る。是に於てか聯盟規約を制定するに際しても、種々の口實と理由（此等の

理由中には相當道理のあるものもある）と依り、軍備問題に關しては前掲第八條の如き「國の安全に支障なき最低限度」とか「各國の地理的地位及諸般の事情」とか極めて抽象的なる又極めて不徹底的なる條項を規定した。先づ第一に「國の安全」とは如何なる意味を有するかゞ大なる疑問である。若し國内の治安を維持する爲めならば、是れ軍備と云ふよりも寧ろ警察力である。之が大小は純然たる内政問題で聯盟の干與すべき點でない。又若し外國に對する防衛を意味するものとすれば、是れ國際間に於ける相對的の問題で、百隻の戰艦も時に尚ほ小とすることもあらう。一師の兵も時に尚ほ大とすることもあらう。從つて最低限度なる語の意味は全然不明である。是に於て之が程度標準を審議決定する資料として、聯盟理事會に於て「各國の地理的地位及諸般の事情」を參酌して、軍備縮少に關する案を作成することゝなつて居る。

そこで地理的地位と云へば、島國には海軍を要し、大陸國には陸軍を要し、長き海岸線と多くの海外殖民地とを有する國は大なる海軍を備へ、廣き境土を有する國には多くの陸軍を置く位の根本主義は容易に立つであらうが、然らば其の比率を如何にすべきかの問題に至りては絶大の困難が横つて居る。海軍は其の噸數を海岸線の長さに比例し、陸軍は其の其の兵數を國民の頭數に比例するのも、或は其の一法かも知れぬが、實際に於ては長き國あり、圓き國あり、平地の國あり山地の國あり、交通便の開けたる國あり、開けざる國あり、物資自給の出來る國あり、出來ざる國あり、千樣萬態で一律に論することは出來ない。

殊に諸般の事情と云ふに至りては、經濟、外交、國防等の諸問題紛糾錯雜して到底圓滿に解決することは不可能であらう。斯くて成立したる軍備縮少案なるものは、理事會多數決で壓迫すれば兎に角、各國の誠意ある滿足は期し難いであらう。加之聯盟理事國九個國（米國を加へて）中、其の過半數を占むる五個國は軍備に依つて優越權を維持せる所謂五大强國なるものである。到底思ひ切つた軍備縮少案の成立せぬは明らかである。現在の軍備を其の儘維持して將來の增勢を制限するか、否らざれば各國現在軍備の幾割かを總括的に天引する位が關の山ではないかと疑はれる。尤も該縮少案は十年毎に更に審議更正せらるゝ規定なるが故、漸次縮少の實を擧げ得るかも知れぬが、聯盟の基礎さへ尚ほ動搖せる今日、十年後の事を今より豫想するは寧ろ腦力の徒消であらう。之を要するに各國の主權を離れ、

る國際警察的軍備の成立せざる限り、軍備制限若くは縮少は或は行はるゝことあらんも、各國の軍備撤廢は到底實現せぬであらうと確信する。

六　軍備縮少協定會議

國際聯盟第一次總會に於ける軍備問題は遂に何等具體的成案を見ずして散會し、目下理事會に於て調査中である。理事會に於て如何に調査決定するとも、國際的制裁を加へ得ざる米國の如き強國や、貧ても燒ても食へぬ露國の如き大國や、窮せりと雖ども獨逸の如き文明國が聯盟外に立つ以上、之が實際貫徹を期することは出來ない。畢竟するに紙上の調査、机上の空論に過ぎない。國際聯盟會議が徒に船頭多くして船山に登らざるまでも、今尙ほ大洋中に彷徨して指針の定まらざるに反し、昨冬米國上議員「ボラー」氏に依つて提案せられたる日、英、米三國間に於ける海軍制限問題こそ、軍備に關する當面の最大重要案件である。「ボラー」氏提案の當初、鼻の先きであしらいたる英米の輿論も近時大に變調して、眞地目に之を論議するに至つた樣である。「ボラー」案は最初三國間に於ける「向後五ヶ年間造船半減」なりしも、其後漸次變化し、米國上院に於ては三國の外に更に佛伊を加へ、軍備縮少協定會議招集の權を大統領に付與することを決議したと云ふことである。蓋し國際聯盟の向を張つて米國の威を世界に示さんとするヤンキー氣質の發露であらう。

米國に斯かる議案が提出されたら動機と理由如何と、將た誠意の有無とは姑く措き、新大統領「ハーデング」氏就任の曉に於ては、五大國軍備協定會議の招請は恐らく各國に向つて發せられるであらう。少くも發せらるゝ覺悟を以て、我が國は之に對する研究を爲し置く必要があるであらうと思ふ。若し同招請狀が發せられたりとせば、米國の僭越に對する感情は別とし、少くも主義に於ては之に贊同せざるを得ないであらう。是に於てか帝國の國防力は何を以て程度とし、何を以て標準とするかの問題が起る。凡そ國防軍備の力は如何なる場合に於ても、國際間に於ける相對的のものにして決して自國のみの絶對的のものではない。例へば日本の八八艦隊の如きも、或方面に於ては是に單に戰略的の一單位に過ぎずして、帝國々防の最少限度であるとの說がある。戰略上の一單位とは兵術上の標準と爲すことを得るも、之を以て直に國際軍備の標準とすることは出來ない。若し某國に於ては八八艦隊二隊或は一隊半、若くは一艦隊き言葉に於て幾何の艦隊を有するに依り、我が國は之に對し最

少限度に於て八八艦隊一隊を要すと言はゞ意味を爲さんも、唯漠然と戰略上の一單位に過ぎざるが故に最少限度であるとは云へない。是れ國防の爲めの海軍にあらずして演習の爲めの海軍たるやの感がある。

故に論理的に言へば、八八艦隊を以て直に帝國々防力の最少限度と云ふことは出來ないのである。他國の海軍力が弱ければ六六艦隊でも四四艦隊でも差支へないのである。併しながら現在に於ける世界軍備の現狀、就中英米海軍力の程度に照らせば、八八艦隊は帝國々防の最少限度であると云ふことは、事實の上に於ては言ひ得るのである。

原内閣總理大臣は今期議會に於て議員の質問に對し、帝國の軍備は最少限度のものなるを以て縮少の必要を認めないと明言せられて居る樣であるが、是は無論「現在の國際狀態の下に於ては」との條件附であることを疑はない。若し絶對斷言であるとすれば、軍備縮少協定會議開催せられ、他の列國が軍備縮少に贊同したる場合、我が國は大なる苦境に陷るであらう。或は現在以上に世界より侵略主義と誤解され、非難され、國際間に孤立するに至るかも知れぬ。或は米國との海軍競爭を誘起し、我が經濟界を一層攪亂疲憊せしむるに至るかも知れない。加之現在の軍備は帝國國防上最少限度のものなることを、論理的に說明するは餘程困難であらうと思はれる。

七　先づ標準を確立せよ

財政とか經濟とかを離れ、單に國防のみの見地より言へば、軍備は多々益辨ずで、强ければ强い程其の意義と目的とに叶ふものである。併し斯くの如きは單に空想論で、如何に經濟豐かに財政に餘裕あればとて、さう無鐵砲なる軍備が張られるものでない。況して經濟貧弱財政困難なる場合に於ておやである。今や我が國に於ては八八艦隊建造案議會を通過して以來未だ僅に一年に達せず、新艦の設計さへ尙ほ確定せざる今日、經費の點よりして國内早くも怨嗟反對の聲を聞く、一方に財界の不況に依り國庫の收入を減じ、一方に物價の騰貴に依り製艦其他に巨費を要するとは云へ、國費の半を軍備費に投ずる如きは、蓋し近代に於ける「レコード」破りであらう。

若し夫れ經濟の原理より論ずれば、軍備の如き生殖に直接關係なきものは、一刻も早く制限縮少どころか全然撤廢すべきであらう。併しながら一國の經濟を產むべき產業通商等が國際間の平和に依つて行はれ、且つ國際間の平和なるものが或る程度迄軍備の存在に依つて保たるゝ如き現狀に於ては、軍備も亦生

産に要する一機關にして經濟の確定を助くる重大因子と謂はねばならぬ。此の問題に關しては斯道の專門家の意見に譲るとするも、兎に角國費の半を軍費に割く如きは、如何に國防の爲めとは云へ、餘り收支均衡の取れない樣な感がある。左れば我が國の如きは率先軍備輕減問題を世界に向つて提唱すべき境遇に在るものではあるまいか。幸に米國に於て軍備縮少協定案の提議せられたるは、此の問題解決の爲め我が國に取つては寧ろ絕好の機會であると思ふ。我が國は進んで之が成立に助成すべきである。

扨て愈之が協定に應ずるに當り、最も重大なる要件は我が國軍備の標準である。陸軍に關しては茲に述べず、海軍に關しては戰略單位たる八八艦隊を以て、國際軍備の標準と爲すの誤れるは前節述べた通りである。凡そ國防の實を擧げんが爲め軍備の標準を定むるには、必ず假想の敵が無ければならぬ。國內の治安や海上警備の爲めの軍備ならばいざ知らず、苟くも國防を目的とする以上假想敵なき軍備は無意義である。四圍の狀況に照らし、現在の趨勢に鑑み、今日の我が國の軍備設定上假想敵と認むべきものは、海軍に在りては先づ指を米國に屈せねばならぬ。既に海軍々備設定上、米國を以て假想敵と爲す以上、彼我

の地理的關係、政治的範圍、經濟的狀態等を參酌して、我が國防を完備する爲めには最少限度に於て米國海軍の幾割、安全程度に於て幾割の海軍を要するかの標準を定めねばならぬ。僕個人の私見を以てすれば我が國にして米國に對し積極的行動を取らぬ限り、即ち我より進んで攻勢動作に出でぬ限り、換言すれば防禦作戰に依りて敵を我が近海に邀擊し、以て國土の防衛と國家生活に必要なる交通路の安全を確保する爲めには、我が地利と人利とを差引きたる最少限度に於て、我が主力艦隊は米國主力艦隊の七割を要し、安全程度に於て少くも八割を要するであらうと思ふ。沿岸防禦に要する小艦艇は此の以外である。尤も軍事當局者としては別に確乎たる意見と成案とがあるであらう。

之を以て軍備制限若くは縮少の協定を爲すに當りては、此の標準(假定)を以て先づ米國と折衝するを必要と信ずる。米國對等若くはヨリ以上の勢力を持つことは、素より國防上最も安全なる計であるが、是れ我が國力の上より見るも望むべくして到底行ひ難き處たるのみならず、斯くの如きは自ら兩國海軍の競爭を誘起するものにして協定の精神に反するものである。

次に之が標準を協定するに當り、何れの時期に於ける何れの

海軍を以て基準と爲すべきやは是れ亦重要なる問題である。英國は大戰後尙ほ未だ新計畫を發表せず、目下建造中の主力軍艦は一隻もない。米國の第一次三年の計畫は大正十三年迄に、又我が國の八八艦隊は大正十六年度を以て夫々完成の豫定である故に最近に於て完成すべき米國三年計畫を以て標準の基礎とすることが、差し當り最も適當であると信ずる。而して該時期に於ける日米海軍の主力艦隊が如何なる比率にあるかは、之が計算法多種多様にして詳細綿密なる專門的研究に屬するが故、忽に直に斷案を下すことは頗る困難である。唯概略に於て米の三年計畫に對し、我が八八艦隊完成するも尙ほ米海軍の八割に達せぬであらう。（之に關しては尙ほ詳細なる數字的說明を要するも本文に於ては之を略す。）

若し右の協定にして成立するとせば、我が國が米國主力海軍の七割若くは八割の勢力を保持すると否とは、時の財政の緩急に依つて決すべき問題で、我は唯其の權利を留保すれば可なりである。之と同時に米國は我が國に於ける時の艦隊勢力の一・三若くは一・二以上の船隊を建造することは出來ない。若し之を犯せば米國は協約を破ぶるの責に免れない。而して英米の間に於ても同時期を基準とせる別の標準を立てゝ、其の比率を協定すべきは勿論である。

斯くの如く日本が誠意を披瀝し國防の自由を犧牲にして米國海軍の優越を認め、彼の勢力の幾割かを以て甘んぜんとするに拘はらず、米國にして尙ほ之を容れずとせば、是れ米國に平和維持の誠意なく、武力を以て我を威壓せんとするの證據で曲素より彼に在る。此の時に際しては我が國も亦曾て國力の許す限りを盡して國防の力を充實せねばならぬは勿論、世界も亦最早我が國を以て武斷侵略のと誤れる非難を加へぬであらう。

八　結　論

要するに各國の軍備撤廢は恐らく痴人の夢を說くと等しく、殆んど永久に實現せぬであらう。併しながら制限若くは縮少は列國にして侵略の野心と暴戾の惡心とを去り、誠意を以て之に莅めば或程度に於て實現可能であると信ずる。而して之を實現するには强國に於て先づ雅量を示さねばならぬ。最近問題の軍備協定案の如きは、日本として寧ろ之を歡迎利導すべきものであらう。唯協定に入るに先ち米國を說得するに足るべき我が對米軍備の標準を定めることが必要である。現存海軍力より總括的天引主義に應ずることは、我が國の國防を危ふするものであると信ずる。（了）

社會現象批判

井の底から觀た日本

山川均

文相問題の社會的意義

子供の火いぢりから火事が出ることを思つたなら、學生の昇格運動から、原内閣の大伽藍が倒れたとて、必ずしも不思議はない。

新聞の傳へるところでは、原首相は『飽まで所信を斷行して、潔よく玉碎』するつもりで、『政府の決心牢乎』たるものあり貴族院が『豫算に對し、何等かの復報的態度を取るが如き事なきや否やの問題の如き、殆んど眼中に置かず、飽まで正々堂々玉碎主義を以て進む覺悟』を決したといふことである。文部の一角を改造して、内閣の命脈を保つことは、必ずしも難事でない。政友會と原氏との過去を顧みる時に、否な政友會と原氏との過去を顧みるまでもなく、政治と政治家との本質を顧みる時に、それは誠に易々たることである。若し新聞紙の傳へるように、政友會と原氏とが、正々堂々たると不正々不堂々たるとを問はず、豫算の不成立をも、内閣瓦解をも賭して、玉碎乃至は瓦解の覺悟を以て進むものとすれば、この火いぢりから出た火事に、彼等が意外の危險性を認めて居るものと解さなければならぬ。然り、火勢は慥かに、資本家的支配の床下に廻つてゐる。吾々は固より原首相が、この火いぢりから出た火事の社會的意義を、どの程度まで明瞭に意識して居るかを知らぬ。けれども此危險は、原首相の異常に發達した資本家的本能に、何等かの刺戟を與へぬ筈はない。

日本の政治が『民主化』するにつれて、議會の資本家的色彩は漸やく鮮明になつて來た。そして議會の資本家的色彩が鮮明を加へるにつれて、貴族院は階級的利害を超越した、國家の利害若くは國民の利害を代表するものであるかのような形勢が、段段と加はつて來た。この『民主化』——即ち政黨の資本階級化——の滿潮は、政友會と原氏の『平民内閣』に現はれた。原内閣はこの意味に於いて、日本のブルジョアジーの政治的成熟を代表したものである。山縣官僚と政黨とは幾度びか肝膽相照した

り離合集散した。けれども其間にも、何人も左右することの出來ぬ分化の作用——社會の階級的分化を代表する政界の分化——は、一定の方向に進んでゐた。そしてブルジョアジーの勝利を意味する『平民内閣』となつて現はれた。

政黨が資本階級を完全に代表する程度に比例して、官僚は漸やく其脚下から社會的、階級的の地盤を取去られて來た。官僚は無産階級を代表して居らぬように、資本階級をも代表して居らぬ。そして資本階級と勞働階級とを代表して居らぬことは、やがて資本制度の下に於ける特徴的、能動的の階級を代表して居らぬ事を意味してゐる。この社會的事實は、勢ひ官僚の心理の上に反映せざるを得ぬ。其脚下から社會的勢力の地盤が取り去られる、云ふ可らざる不安と焦躁とは、平民内閣の成立に至つて極度に達して來た。資本階級に對する彼等の本能的の反感は、或時は社會政策的の主張となつて現はれ、或時は國民社會主義的傾向とすらもなつて現はれた。そして彼等がその脚下に資本制度の下に於ける代表的の階級——代表的の社會的勢力——を有しないといふ、自己の弱きことの意識——乃至は無意識——は、やがて政黨の利害に對する國家の利害、階級の利害に對する、人民全體の利害といふ心理となつて現はれた。そして政治が『民主化』して政黨が階級化するにつれて、この心理は段々と明白になつて來た。斯くて官僚を代表する貴族院は、國民的利害の『擁護者』となつた。

この『國民的利害の擁護者』は、今再び満身の力を罩めてブルジョアの陣營に突撃した。今日に至るまで、能くこの突撃に堪え得た内閣はない。ブルジョアは階級的に成熟してゐなかつた如く、政治的にも成熟してゐなかつた。そして政黨は、尚ほ階級的地盤から遊離して居つた。

『平民内閣』は、今や其實力を試驗すべき時が來た。

貴族院の『政黨化』とは、要するに官僚に對する、ブルジョアの同化作用に外ならぬ。無産階級は、尚ほ政治的には成熟して居らぬ。日本では無産階級は、或る政治上の『意識的棄權』の方向に進むかも知れぬ。そこで少くとも近き將來に於ける日本の政局は、官僚對ブルジョアの鬪ひを中心として開展するに相違ない。そして官僚ブルジョアの鬪爭が、正面衝突によつて決せらるか、それともブルジョアの同化作用によつて定まるか。興味はこの一點に集まつてゐる。

勞働階級に對する政府の誠意

勞働組合運動に對する政府の方針が、初めて日本の議會の問題となつた第四十議會に於て、床次內相は、組合法不必要の理由として『勞働組合は現行法規の下にあつては、禁止もやられず、又認められても居らず』從つて組合法によつて公認するの必要があると答へたことは、何人も尙ほ記憶に存して居る。其後內務省は、この必要のない組合公認の法律案の作成に急いだが、幸にして此法案は暗から暗に葬られた。すると內相は再び元の確信に立返つて、今年の議會では、組合は法律によつて公認しないでも『私の考へでは差支へないものと思ふといふ答辯を與へられたようである。

斯ように政府の方針は、前後一貫して居る。動搖したのは唯だ中頃だけである。政府が法律によつて組合を公認され（吾々は必ずしも公認を望まぬが）理由は、組合が不合法だからではなくて、明白に合法と認めてゐるからである。政府が組合法を制定せぬ理由は、即ち組合權の確認を見なければならぬ。

この見解は資本勞働の鬪爭に於ける政府の嚴正中立の宣言と見ることができる。ブルジョアの政治的成熟を代表して生まれた『平民內閣』が資本勞働の鬪爭に、よく中立を守り得るであらうか。政府は第四十議會に於て、勞働爭議に對する治安警察法の不適用を約束した。斯くて治安警察の鋒先は、警官のサーベルと同じく、しつかりと麻紐で縛られた。治安警察法は『拔かぬ太刀』となつた。成るほど政府は、勞働爭議の場合に、僅かにこの太刀を拔かなかつたこともある。誠心誠意は、いつでも政府と政治家の持前である。太刀は鞘のまゝでも毆ぐられることを忘れてはならぬ。

勞働者の組合權に對する政府の誠心誠意を最近に最もよく證明したものは、機關車乘務員會に對する政府の態度である。組合法の制定を必要としない程にしかく自明のこととして勞働者の組合權を承認して居る政府が、政府事業の勞働者の組合權を、如何に誠實に尊重したらうか。警視廳の刑事部室では、撫でると毆ぐることであつて、可愛がるとは拷問することだといふ。勞働階級と根本的に思想と感情とを異にするブルジョアが、特別の言語を有したとて少しも不思議はない。

舊臘、仙臺管內の新津に初めて乘務員會支部が出來た時にも政府は數百の警官と憲兵とを召集し、この包圍狀態の裡に、加入者全部に對する解雇辭令を積み上げた一室に一人々々を呼び入れて、乘務員會の脫會を迫つたといふことである。最近沼津の發會式、東京の演說會に對する政府の露骨な妨害と陰險な壓

迫とは、何人も知るところである。勞働者の罷工勸誘の上には忽ちにして活動を開始する國家の司法權と警察權とは、一種の强脅によつて、組合を脱退せしめる、明白なる違法行爲の上には、何故に發動しないのか。少くとも勞働階級に對する政府の不法の行爲に對して、治安警察は政府の聲明の通りに『拔かぬ太刀』である。

『平民内閣』は機關車乘務員會に對する態度によつて、一度び勞働階級に對すれば、政府の爲すところ資本家の爲すところと毫しの相異もないことを證明した。若し兩者の間に何等かの相異があるとしたならば、日本の資本家は、其政府の如くに大膽でないことである。政府は之によつて、資本家に對しては、行動の信頼を示したと同時に、勞働者に對して、彼等が政府と資本家との間の相異について抱いてゐた、最後の幻影を打破つたものである。

地主運動の慘敗

ブルジョアジーの階級的成熟によつて、官僚と資本階級との分化を完成した、其同じ分化の作用は、一面には、土地的資本家と工業的資本家、都會の資本家と農村の資本家、地主階級と近代的資本階級との間の分化を完成した。最近に於ける米不賣同盟の運動は、明治維新以來手を携へて來た、此兩つの階級の神聖同盟に、救ふ可らざる龜裂の入つたことを物語るものである。そして不賣同盟の失敗は、土地的資本家に對する、工業資本階級の完全なる勝利を物語るものである。

封建制度の瓦解と明治維新の革命は、土地資本主義に對する新興資本階級の勝利を意味してゐる。新たなる社會的生産とが土地を去つて商業資本に移ると、封建制度は其脚下から、經濟的基礎を取り去られて、封建的權力は、其根蒂たる經濟中から遊離した。この經濟上の事實と此事實を反映してゐる政治組織との間の睽離を、今一度整理し引直したものは、即ち明治維新の變革であつた。そこで明治維新は、明らかに資本主義の勝利の第一聲であつた。

然しながら、商業資本は流通界を支配するものではあるが、全然生産界を支配の下に置く力はない。資本主義が眞に近代的の形を取るには、生産界の全領域を支配する工業資本の發達に待たなければならぬ。

日清戰爭と日露戰爭とは、工業資本の勃興を表示する指數であつたが、世界戰爭に至つて、日本の工業資本主義は、初めて

成熟の域に近づいた。此時まで工業資本の階級は、土地的資本家に隨從して、生長して居つたが、今や獨立の階級たる實力と自信を生じて來た。そして此實力は、不賣同盟の運動に際して遺憾なく證明されると謂ふことが出來る。日本は尙ほ、農業國の色彩を多量に存してゐる。從つて地主階級は、分量に於ても決して侮どることが出來ぬ。それにも拘らず、日本の政治を支配して居るものは最早や是等の地主ではなくて、近代的資本の階級たる事實が證明されたのは、社會の代表的生産力が、最早や完全に、土地を去つて資本階級の手に移つたことを物語るものである。地主黨と云はれた政友會すらも、地主の慘敗をたゞ觀過するの外なかつたことは、經濟的勢力の中心、從つて政治的勢力の中心が、何處に移つたかを語つて居る。

　不賣同盟の失敗は、土地的資本の階級と工業資本の階級との階級的分化を物語り、前者に對する後者の支配の確立を物語つて居ると同時に、農村に於ける大地主と農民との間の、階級的對立をも明らかにした。

　資本主義の下に於ては、農業は工業に隸屬し、農民は地主に隸する。資本主義下の農民は、二重の十字架を負ふて居る。

國家生活の幸福

二月十一日の新聞は突如として、而かも一齊に、內務當局の發表として次の如き記事を大活字で揭載した。

『久邇宮良子女王殿下御婚約の儀につき。種々の世評ありたるも、御變更等の儀は全然之れ無き趣確聞す、尙中村宮內大臣は、此際辭表を提出する事に決心せられたる由なり』

　この記事を讀んで異樣な心持のしたのは、必ずしも自分一人ではないだらう。お達しの趣きは、兎も角も何事も無いのだから、國民は安心して居れといふ意味に解せられる。從つて吾々は謹んで安心して居ればよい。しかし新聞紙の上でも、一向に『種々の世評』を聞いて居らぬ吾々は、殊更に何事も無いのだから安心しろと云はれて見ると、何事かゞあるのではないかと云ふ氣持がする。

　この記事で見ると、何か皇室に關する事柄らしいので、吾々は謹んで唯だ〳〵安心を表する次第であるが、之と同じ種類のことは他の場合にも屢々ある。

　他の事柄で、之と同じ場合があつたら何うだらう。新聞には大活字で『此次は山縣公の辭職か』と書いてある。何事かあるら

しい。政府からは、何事もないのだから安心せよといふ、非公式のお達しがある。益々以て何かあるらしく、少くともあつたらしく思はれる。然しながら吾々は何も知らされない。それは丁度、母親の病氣の危篤の時、何事も知らされずに、菓子を持たせて遊びに追ひやられる子供と同じ事である。然り少くとも此意味に於いて、國民は赤子である。

この一事によつて、吾々は國家の重大事とは、全く沒交渉であることが知れる。吾々は國家に生活して居るが、國家の生活には、吾々は沒交渉である。吾々は唯だ、用事のある事にだけ呼び出される。そして愛國心と國家的觀念とを振ひ起こすだけでよい。其あとは唯だ、安心して井の底で眠つて居ればよい。之が現代の生活である。

吾々の前には、住所、姓名、族籍、職業などを刷込んだ用紙が置かれてゐる。吾々は唯だ命ぜられるが儘に、其欄内に、命ぜられたことを記入する。現代の生活とはこれである。

社會時評

大庭柯公

舊道德の破產

七十五名の東京市會議員中で、十二名が收監されてをるといへば、東京市政の腐敗も其極に達してゐた次第であるが、其中の一人が突然保釋を許されて出獄したと思ふと、其中の他の一人が、一日措いた翌日獄中で縊死して、僅かに人工呼吸で息を吹返したと云ふ。そしてその保釋を許された男は、市會議員であることよりも、敎育家であることに依つて有名な男である。その敎育家で有名であることも、其男の母堂が女流敎育家の第一流であることによつて、一段と有名な次第である。そして此敎育家は自身創立經營の中學校に校長たる名譽を有し、そこに倫理の講義を擔當して居つた。然るに一朝市の大疑獄に關聯して收監された際、舊道德的に考へれば、學校さへも直ちに閉校して、その敎育家としての人格的不信の罪を、天下に少くとも學生並其父兄に謝すべきであらう。然るに彼は收監に際して、校務は勿論倫理の講座すら、校員の一人に代理委任をしたと云ふ

そして彼の母である女流教育家は、彼の收監當時こそ老病の理由で閉塞してゐた樣子であつたが、やがて自身監理の女學校へ依然立現はれて、有罪と決定せぬ未決監の教育家の上に、何んの憚る處のないことを高唱力說された。引續いて想ひがけなく保釋を許されて出獄して來た教育家本人は、これ亦公々然と、今後も斷じて教育界を去らぬと宣言的に言ひ放つた。

儒教で固め、良妻賢母主義で育て上げられ、教育勅語で練り上げた筈の教育家が、かう現實に道德の畑から乘り出しては困るではないか。未決監への收監は罪でないといふことは、それは法律的にだけ言ひ得られることで、恰度禪宗の坊さんが女色に耽つて、僧侶だからとて戀をしてはならぬといふ法律はあるまいと言ふのと同格で、教育家母子が打揃ふて、憶面もなく斯んなことを口にするに至つては、それは最早道德の破産であり、教育家の身代限りである。それから見ると收監市會議員中の他の一人が、獄窓へ兵子帶をかけて縊死を圖つたといふことは、ヨリ道德的である。破產教育家に言はせると、縊死を企てた男こそは、身に覺えがあつて有罪を豫期したからであらうが、潔白な自分としては今後も教育家で通す積りであると。無論の事、彼が決心の自由は他からそれを彼是言ひ得る筈はないが、唯今な倫理の講義を彼に遠慮して貰ふことだけは、學生と其父兄とに要求權があらうと思ふ。

藩屏階級の自滅

藩屏階級とは第一階級か第二階級か、それを委しく吟味する必要はない。兎も角も平生無事の日は、彼等は自から稱して「皇室の藩屏」であると稱し、一朝事ある時には「知らぬ顏の半兵衞」をきめ込む或る階級を、假りに此處で藩屏階級と名付けてをくに過ぎぬ。

今度『重大事件』と稱する事件を起したものは、この藩屏階級の者共である。藩屏と云ふからには板塀か土塀か、いづれであるにしても常に塀の內側で仕事をしてをるために、仕事の仕組みが久しい間、外間に漏れずにゐた。併しながら外間の者共、換言すれば藩屏階級以外の人々にこそ、それを窺ひ知ることが困難であつたらうが、同じ土塀內の同階級の者共としては、夙に承知のことであつたに相違ない。しかも所謂『重大事件』を探知し、その容赦すべからざる事件であることを痛憤して、遂に國民的の問題としたものは、藩屏階級以外の單純な人民であつた。

一旦國民的問題となるが早いか、一齊に吠え立てんとしたのが新聞紙であつた。處が獸醫の學問を修めて圖書檢閲業に從事してゐる役人が、早くも新聞紙に狂水病の疑ありと診斷して、手早く彼女に鍼口具をはめて了つた。折角嗅ぎつけて土塀外まで引出した事件も、危く彼等特權階級者の手裡に揉み消されさうになつた。其時に當然正義の聲を放つて吠え立てねばならなかつた貴族院に屬する「藩屏階級」者は、終始知らぬ顏の「半兵衛階級」をきめ込んで了つた。彼等が斯樣な重大事件に際してさて、藩屏階級の特權と責務とを感ずることなしに、或はそれを曖昧に附して過ぎるやうなことであれば、今後彼等をして、「皇室の藩屏」などと公言することを許すまい。否、それ處ではない、彼等の大部分が、一町四方にも亘るほどの、土塀を廻らした親讓りの家屋敷に、殆んど定職なしに勞働なしに、坐食高臥してゐることを、國民は彼等から否認する時が來るであらう。

それにしても舊道徳の破産したり、藩屏階級が自滅したりする際に、勤王武士族として有名な長閥の元勳者が、事件の發頭人として、何としても其責任を免かれぬことの明かな場合に、尙ほ躊躇して皺腹も切り得ず、或は罪一等を減じて爵位を嗣子に讓つて、全くの隱居とさへも成り得ぬとしたならば、これも亦武士道の破産であり、軍人の身代限りである。いづれにしても藩屏階級の最高階級者から、非藩屏的事件を開始したことは藩屏階級自滅の時期の到來を語る所以である。

忠勇の士

大和民勞會の發會式場の入口には、忠勇の士と書いた襷をかけた袢纒着の若い衆が、凡そ二百名も、手に手に棍棒を持つてズラリ列んで氣勢を揚げてゐたと、新聞は報道してゐる。まさかに聽衆を狂犬と心　ての用意ではあるまいが、これは寧ろ面白い趣向であると思ふ。なぜとならば、近來の演説會と云ふものが、どうせ多數の警官の臨監警戒を煩はさねばならぬ以上、さう御面倒をかけるよりも、いつその事警戒事務をも、會主側で擔當することが、便利であるかも知れぬ。さて其物々しい警戒の中で、新歸朝者の上杉愼吉博士が、『忠勇の士』といふ題で一大演説を試みられた。假にも忠勇の士と書き、先達ツの演題も亦忠勇の士とあつては、大和民勞會こそは正しく忠勇の精神で固め上げた、賴もしい團體に相違ない。上杉博士は縱令帝國大學の學生間に不人氣で、博士の持論を愚弄するやうな不心得な學生が多數であるとした處で、斯かる數百の忠勇の士に推さ

れて、年來の主張を高調して行かれるならば、學者としての名聲は兎も角も、忠勇の士としての光榮は、蓋し之に過ぐるものはあるまい。德孤ならず必ず隣ありで、其後民勞會の勇み肌に感奮して起つたものに、大迫大將を先頭に立てた思想問題講演會があり、銀座街頭に大看板を立てゝ、會場は國技館と註された。續いては宮岡中將、小林文學士等の皇民會講演會などがあつた。

そこで是等忠勇の士に對して評論がましいことは敬意を失する所以であるから避けるが、たゞ一つ伺ひたいことがある。それは餘の儀でもない、今度評判になつてをる『重大事件』に對して、忠勇の士たる諸君が如何なる立場を取られたかといふことである。國と君とのために、諸君としては默してをられべき事態ではなからう。若しあれ程の重大な事件を惹起しながら、責任を回避して國民の風上に居るやうな者があるとしたならば、諸君は斯かる不忠の朝臣を膺懲せずばなるまい。敢て忠勇の士を統率される上杉博士と、博士幕下の健兒とにお尋ねする。

北海炭礦の罷業

十三個所の炭礦に亘り、坑夫一萬七千人の大罷業と見ると、一月末勃發の北海炭礦の罷業は、可なり大規模な罷業である。此事件で礦主側の悩むべきことは、毎年二月になれば北海道の屋外勞働者は、勞働不能のために礦山へ集る者が多い例であるその機會を利用して二月一日から、從來の勞銀に二割低下を斷行すべく宣言したことである。北海道のやうな土地で、斯んな季節に伴ふ機會を利用されることになつては、それは毎年の常例になつて了ふ恐れがある。まして二月一日から實行する斷んな決定を、一月末になつて宣告するといふことは、冬季といふ勞働者に取つての惡時期と、北海道といふ邊陬な場所とを利用しての、暗默の强迫である。

幸に日本坑夫總同盟が存在してをることゝ、全山の坑夫一萬七千の中の一萬人が、同盟會員であるといふことが、礦主側の暴戾な宣言に抗して、能く坑夫を起たしめ得た。鮮人も婦人も皆參加したといふことが、勞働者の種族や性やを無視する嬉しい點である。二月の十日前後に、形勢が段々險惡になり出すと會社側では消防夫の警戒を厳にするやら、重要書類を倉庫に納めなどした。それはよいとして例の警察側である、道廳から特派された警部は、「苟くも治安を害するやうな行爲があつたら、容赦なく處斷する」と、坑夫側代表に申渡したと云ふ。一萬七

千の坑夫が生活を脅かされた結果が、自から治安を害することになつたとしたならば、それは最初に脅かした（生活を）ものが害した（治安を）ものであるのだ。併しこの警官の言ひ草は、北海道邊の警官であるために特に物分りが悪いのではなく、官憲の勞働爭議観が皆これなのだ。否、第三者たる世間の人々も多くは、この警官並みである。どうかすると、最も公正な批判者であるべき筈の新聞記者までが、案外少しも勞働者側に理會も同情もないのには驚く。

會社側に誠意のないことは、總同盟幹部からの仲裁を嫌つてをることゝ、二月十日後になつても坑夫側との會見を遂げぬことで推知される。言ふまでもなく、それは荏苒日を延べて坑夫側の屈伏を待つ對策であらう。本炭坑の所屬する炭礦汽船會社なるものゝ、内容やら組織やらは之を詳にせぬが、假令僅かな噸數にしてもが、汽船業が營まれてをるとしたならば、汽船に屬する一切の勞働者は、……………………………双方の爲めに他日の幸福の礎地を築く所以であらう。

學校騷動の頻發

學校騷動は日本と埃及との名物で、西洋では一寸見られぬ珍現象であると、外國人の誰やらが言つたとか云ふ。爰に學校騷動といふ中には、例の昇格問題は含まぬ。昇格問題は別格問題に取扱ふことにして、單純な學校騷動を數え上げて見る。曩には盛岡中學であつたか、紛擾事件が報ぜられてあつたが、今は復た水戸中學で辭職校長の復歸運動なるものが、硬化しつゝある。知事が其處置に窮したとあるが、教育家としての菊地謙二郎氏は、知事などよりは餘程知名である。小久保某といふ壯士上りの代議士が、俺の眼の黒い中は菊地を復職はさせぬとか言つたと云ふが、斯んな下等な男に教育界を蹂躙されて堪るものか。それにしても菊地氏の辭職沙汰は、西洋一巡後の氏が多少とも新思想に觸れた言草があつたと云ふに原因するが、如何に「大日本史」發祥の土地とは云へ、多少の新らしい空氣が入つたからとて、先祖の黄門さんに相濟まぬ譯でもあるまい。

水戸以外に神戸の親和女學校、横濱の皇道中學校などが紛擾中である。是等は教育家の權威と信用とが、社會的に失はれた結果、それが學生の心理に影響しての結果である。苟くも文教の府に長たる者が、二枚舌などといふ道徳的に沒人格な呼ばはりをされながら、平然として責任を感ぜぬなどいふ事實が、日日の新聞で報ぜられてをる以上、この眼前の事實を覩た學生共

が、教育界を輕侮し無視するのは當然なことである。新東京市長が市小學校の任免權を市長の手許へ收めることにした機會に一の驚くべきことが爆露したといふのは、市小學校々長の椅子が、金壹千圓程度で賣買されてゐたといふ事實である。總ての學校といふ譯ではあるまいが、何んとしても喫驚事である。これは水晶閣であるべく理想されてゐたものが、泥土の舍であつたといふことで、學生の頭には教育の神聖性は、この一事だけでも打壞はれて了ふ。事の性質な違ふが、學生の政治運動を憤つて、英國政府が埃及全國の中學を閉鎖したといふが、双舌文相も一大英斷を敢てして、騷動學校の廢校でも斷行してはどうであらうか。

人の運命と壽命と

生は喜なり死は忌なりと昔の支那人は云つてをるが、死が忌むべきものやら欣ぶべきものやら、また長壽が賀すべきものやら呪ふべきものやら、一寸判斷に迷ふ場合が少くない。

伊藤公は六十臺で兇手に異鄕で斃れた。山縣公は八十幾つかの馬齢を保たれてをる。然るに今度の事件のために、小田原古稀庵が問題になり、どうやら魔の手が山縣公の長壽に、呪の爪牙をかけたかに見える。『東京日々』の「雜記帳」子は、斯んな活きた報道をしてをる。『山縣公の書は故伊藤公に亞いで大層な値段、それが段々下落して此分では木堂學堂の下位にならうと云ふ噂だ。景氣のよかつた二三年前は尺五に七言絕句、含雪とでも署名したものは五百圓から三百圓位、一寸した歌でも百數十圓であつた。處が重大事件以來は人氣に影響して二割方下つた處もある。軍人の中には公の額を下すものもある』云々新聞紙などが箝口具の下から社說の遠吠などでの隱退勸告論をやらかしてゐる中には、世間の人氣といふ正直な批評家は、もう一刻も容赦なしに其日〳〵の評價をやつて行く。考へやうによつては長壽を呪ふ算定のやうにも思へる。尤も最近誤つて其死を傳へられた露の大立物クラポーツキン公の如きは、八十臺の長壽を保つてゐたればこそ、あの面白い新社會の舞臺を見物された次第である。長生の是非は考へものである。（二・一四）

國民が希望すべき文相、內閣

杉森孝次郎

內閣の一部または全部が、いつ更迭するかについては、研究した事もない。しかし、文部大臣はどういふ人であつて欲しいか、內閣はどういふ內閣であつて欲しいかといふ問題なら、多少の意見が立つ。

一省の長官ともあらう人は、一藝一能の通達者であるよりも組織者、統導者の品性才能を餘計に有する事を必要とする。しかしながら、各省は、明白に國家行政の內の一々特殊の機能を代表する。文部と大藏と外務との別は、明らかに內容上、機能上の別だ。さうすると、文部長官は、單に一省の長官として要する組織統導の品性才能の持ち主であるばかりではいけない。それだけの條件なら、文相と藏相と外相とは、自由にその椅子を交換して毫も差支へないのだ。けれども、文相と藏相と外相とは、一省の長官として組織統導力をば共通に必要としても、文と藏と外との別に應ずる機能を各特有する事を必要とする。すなはち文相は、一省の長官たるに適する組織統導力を有する人であると同時に文化教育について殊能を有する人である事を要するのだ。わが現文相は、すくなくともその殊能に於いて不足だらう。だらうといふのは、いまだ曾て彼れを研究した事がないからだ。しかし、閱歷から推しても、彼れは黨人であり、商人であらう。

黨人と商人とは、文相には最も不適任だ。司法の獨立といふ言葉をよく聞く。一省に獨立の形容詞を付ける必要があるなら文部はすくなくとも司法に劣らずその一省だ。無論、黨にもよる。また商人にもよる。けども、現在の事實としては、黨人は。概ね黨利を國利以上に置く。社會の利益以上には尙ほ更ら置く黨人の正邪は黨の利害の看板だ。また今日の一國の、すくなくともわが國程度に進んだ一國の文化、教育方面の行政は、到底一素人の、すなはち例へば一商人の代表的責任位置に立つ事を許さい內容豐富なものとなつてをる。

更らに深觀すれば、目下の各國は、殊にわが國は、文化、教育方面に最大の注意を要する事情下にある。日本は國難に襲はれてをるといふ。日本は、そとに孤立無援の狀態に近づき、否なむしろ八面皆な敵の窮境におち入り、うちに、青年の心の離

乖が緊張して來た。ゆゝしい現象だ。しかし、これを救ふ第一方法は、日本人を思想的に教育する事だ。そして不正不善不美有害無用なるすべての制度と習慣とを、正善正美の新理想によつて、批評し去る事だ。文教の行政權を握る人の責務、今日のわが國に於けるよりも重く且つ大なる場合は、恐らくない。然るに、文部大臣といへば、わが國においては、無能か意氣地なしかの傳統的定評がある。首相と諸大臣とを教育するほどの品性智見の人でなくては、實はわが今日の文相たる資格はないのだ。

新日本も半世紀のよはいに達したが、顧みて、福澤諭吉一人を除いては、教育家らしい人はなかつた。大臣になりたがる程度の人物は話にならない。大臣になるためには、首相に媚びを賣つたり、首相の忠犬となる事を苦にしないやうな教育者ではわれらの註文には遠く離れてをる。大臣になる事を得意と感じ、ならない事を失意不遇と覺える分際の人は、なつても、ならないでも、國家社會から見て當人が感ずるほどの得失はない。容易に偶像崇拜におち入るやうな人は、すくなくともこの際日本の文教の制度的中心位置に立つべき人でない。良心と聰明、文相の人物は、この二面に於いて卓越してゐなくてはいけない。そして、手段としての革命、卽ち暴力的革命を合理的に避けるために、教育を準備するの必要を、具體的に感覺し、認識しうる人でなくてはいけない。日本の目下の國難は思想難だ。外的にも內的にも思想上の低能が、日本を危地にいさなひつゝある。黨利と商利のみ眼中にある人に、この邊の解決は無論期待されないが、卑小な人物にはすべて期待されない。一見不思議な事には、教育界にもまして、卑小な人物の多い社會方面はすくなからう。

國民教育、國民道德の根本概念に大刷新を施す必要を眞に平素から痛感してをる人でなくては、そして、それと同時に、教育や道德以外の實務の世界が視野と同情の閾內に顯在する人でなくては、今日のわが文相としてまことに物足らない。一事の確實なる事は、そのやうな人が、すくなくとも既成政黨の黨人ではありえない事だ。

さうすると、一人の望ましい文相を得るためにも、われらは內閣を新造せねばならぬ事實的論理だ。新造すべき內閣は、そも〳〵どんな性質のものであらう。象徵的に言ふならば、漫然として「過激派」呼ばはりして、犬の遠吠に似た行動を恥ぢ心もなくしつゞけるやうな內閣は、われらの希望する內閣でない。

日本の急務は、全露の中心としての莫斯科政府を、列國を統導する覺悟で承認し、經濟的政治的萬般の國交を、新露西亞と開

始するにある事を、確識するやうな內閣でなくてはいけない。新露西亞が、支那朝鮮を思想的道德的に風靡して、日本を大陸から脅威し、亞米利加が背面からして矢張り脅威し、しかも國內に於いて、青年と勞働者の思想的道德的中心が、爾餘の階級のそれと符合せず、或ひは兩極に背馳する危機が、今日すでに伏在してる事に、日月大の明眼を向開してをる內閣でなくては甚だ心細い。

わが國目下の對外難を救除する根本策は、對內的改良だ。國家の大盃を盛るに、惡臭汚穢の敗酒を以てせずに、芳烈清明なる鮮酒を以てする事が、これこそわが國の時勢だ、內閣の首腦及び手足も、この大綱だけをば、學及び術として支配しうる人人である事が望ましい。

文相といへば、英國の現文相フイツシヤーについて一言したい。一九一六年の十二月に、ロイドジョージが、國民內閣、人材內閣を組織する周圍の情勢的必要に應策した手際は、鮮やかな功績であつたが、その功績の點睛的位置を占めたものはフイツシヤーの採任であつた。フイシシヤーは文敎上のエクスパートであり、吏才もあり、立法能もあり、組織と變通にも有能だ。彼れは、英國の時勢を先覺した一人だ。彼れは、今日の英國が最も要する事柄は、熱でなくて光だと說いた。聰明、知識、能率、進步的品性、これらこそ英國の福音である事を彼れは痛感した。彼れは理解ある同情の廣く多角にはたらく人だ。そして上品な理想主義者だ。ロイド・ジョージが、卒然として彼れを拔いたのは、ロイド・ジョージの具眼を示した。一九一八年の敎育法令は、史上に意義ある現象だが、あれも、最も直接にはフイツシヤーの創作だ。勿論、フイツシヤーが無制限に理想的な文相だとは思はない。しかし、あれほどの人でも、わが國の現情では、容易に得られまいと思ふのだ。フイツシヤの人物詮議は別の問題として、文相に、國民的適材適所の見地から、有能なるエクスパートを招いた、そして成功した最近の一例として、われらは、あの一事件に多少の參考すべき價値があると思ふ。ついでながらにしるすが、フイツシヤーは、いはゆる文敎方面のほかは闇といふ人ではない。一九一八年の十一月に戰爭終熄して、巴里を舞臺として外交期に入らんとする一九一九年のあけがたに、ロイド・ジョージは、フイツシヤーを文部から外務へ轉任せうと企てた。當人の望みでもあつたらしい。これが民間に洩れて、全國の敎育者が總連名の形で、文部留任を政府に主張し、强烈に轉任に抗議した。すくなくとも新敎育法令

が實施の道程にのぼるまでは、轉任はいけないと主張したのだかなりに人心を刺激した運動であつた。その運動が成功して、留任となつた。わが國に於ける文相の能力も、德望も、また民間の教育者の誠實なる專門的良心も、せめてこの例に對してあまり遜色なきやうでありたい。

新年號「愛國心の功過」印刷正誤

		誤	正
三頁	第一行	最强思	最强理
三頁	第九行	らな	るま
四頁	第五行	除いて	除いては
仝	第十行	英國と英	英國と和
五頁	第十一行	天の	天與の
六頁	第四行	同然である、	同然（一行缺）。
仝	第十四行	力ある理想	力なる妄理想
八頁	第十行	綱	網
九頁	第二行	内一	内の一
仝	第七行	來な	來ま
仝	第九行	て一	ての一
仝	第十四行	者が	者は
十頁	第四行	諦論的	論理的
仝	第十一行	生活しなくてい	生活しなくてはい
十一頁	第二行	國人	個人
仝	第十六行	わかる。	わかる（二行缺）。
十二頁	第一行	心で	心は謬妄で
仝	第六行	め迷	めに迷
十三頁	第十一行	陸軍	陸海軍
十四頁	第四行	條とを	條を



婦人と公生涯

ディ・ダブルユー ブラック

男女平等に關する婦人教育によつて成就せらるゝ一大重要事にして且かくの如き教育が常に成就せむと企圖すべき一事は、婦人の中に、彼等の事業が最早單に彼等と彼等の家族と彼等の夫とにのみ屬すべきものではなくて、人類奉仕の精神で爲さるべきものだといふ信念を植ゑつけることとである。彼等の思想と觀察とも亦單に彼等の家庭にのみ限られずに全社會に關はるべきもので、又勇敢に率直に公然表白せらるべきものである。男子は、屢々、婦人の見地が餘りに狹隘にして聰明を缺くといふ理由で、彼等に公務に關係するを許さない。これは恰も支那婦人の足が小さいといふ理由で、彼等は走つたりテニスしたりすることが出來ないと言つて、その足が幼時よりの束縛によつて人爲的に小さくせられたことを忘れてるが如きものである。同樣に、婦人の心意は退化と教育の缺乏とによつて愚昧空虛にせられたのである。

私は肉體的にも心意的にも女子は男子に生來劣つてゐるとは信じない。若し婦人が運動を勵んで野外運動家の生活をするやうに訓練せらるゝならば、彼等は肉體的に强健になるであらう。若し彼等が幼年時より良教育を受け、有らゆる書籍に自由に接近せしめらるゝならば、彼等は心意的にも亦强健になるであらう。世界大戰中及びその後の英國に於いて、自働車を運轉したり、佛蘭西の危險地帶に於いて手荒な仕事をしたり、或は內地の軍需品製造工場で熟練した而も危險な仕事をしたりした婦人等は、彼等の美德に於いても或は惡德に於いても、眞に全く男子と變りはなかつたといふことが認められた、則ち、何かしら溫順な、天使のやうな、聖らかな存在者としての舊い婦人觀は暴々しく動搖せしめられた。或る人人は、亦、昔の「女らしい女」の方がヨリ有用にしてヨリ心地のよい婦人の典型であつたものをと口惜しげに論ずる。而してかういふ議論をするものは大抵男子である。一度肉體的及び心意的に强健なることの愉快、即ち、勞

働の自由、一日の勞働後の解放、公然の非難を受けずに自己の意見に忠實であり得ること等を味つた婦人の中には、今も猶蒲柳の體質と無知と經濟的賴他と「女はかくあるべきもの」てふ男子の觀念との牢獄の中に「貴婦人らしからざる」やうに見えざらむがための日々の言行に現はるゝ百千の虛僞より成る裝置に包まるゝ婦人を夢にも羨望賞讃するものは一人もない。英國婦人が最初男子仲間の如くに喫煙し惡罵し始めた時に、舊式の婦人は一驚を喫した。然しながら戰爭が勃發した時、最も「正しく」「貴婦人らしく」なかつたその婦人等こそ男子の地位に代つて有用な仕事をする力のあるものであつた。而して若しその事理を攻究せむか、かくの如きは火を見るよりも明かなことである。それは常に男子に關しては承認せられてることである。卽ち、幼少の際訓練に多大の困難を感ぜしむるものは、思想或は動作に於いて最も活潑勇敢なるものとなり、又甚だ面倒にして腕白なるものは、屢々成人して最も聰明勇健なる人となるものである。餘りに「善良」だといふことは、少年或は青年にとつては寧ろ憐むべきことと考へられる。餘りに支配せられ、制禦せられ、訓練せらるゝものは順良に成長するかも知れない、けれども活潑に力強くは成長しない。善とは餘りに屢々單なる空虛である、卽ち、善惡何れにせよその衝動の缺損である、何者訓練によつて凡べての衝動が殺されて了つたからである。これは婦人に就いても同樣である。世に婦人が喧騷腕白なるを善しとするものは一人もない、けれども猶そは善いことである。若し彼等の心意が空虛であるか、或は凡庸事をもつて滿たされてゐるとせば、そは彼等がこの貴婦人らしいといふ巧みと正しさとの怖るべき標準によつて脅かされ、且それを批評し或はこれより遠ざからむとする企圖の故によつて殘酷に罰せられたからである。

私としては、身裝は整はずとも健康的な頰の赤い娘が自働自轉車に乘つたり、又その最も油臭い修繕の凡べてを熱心に學んでゐる有樣を見る時に、着物といへば流行の壯麗なるものを纏ひ、體質といへば人爲的に纖細にし、智慧といへば人爲的に制限し或は隱蔽し、力量といへば單に客間で茶を注ぐ位しか出來ぬ女を見る時よりも、一層幸福を覺えるものである。而して私はよしこの自働自轉車乘りが喫煙し、又螺旋器械に指を嚙まれた時に神を呪咀し、捲て

て加へて、道徳的に疑はしい性格の女と言はれたにしても他の種の女が世間一般に通用してゐる意味での道徳の範鑑である間は、如上の見解を支持せむと欲するものである。私がかく言ふは、婦人に男子の凡べての悪習を採用せよと勧めむがためではない、新たに味つた自由の悪用を責むるに當つて餘りに酷なるは、青年學生が初めて巻煙草の味を覺えてそれに醉つたことを責むるに餘りに酷なると同樣公平でないと考へるからである。更に私は遙かに重大なる意味で眞實にこれを言ふのである、則ち、私は自らの所作とか衣服とか社會の風評とかいふものよりも自働自轉車の機械に興味を感ずる婦人は、單に一婦人としてよりも一個人としての存在を有するものと信ずるのである、何者彼女は非人稱的興味てふ最も重要にして人生死活に關する事物を發見したからである。

こゝに如上の所説は婦人と公生涯の問題を如何に關係するやの疑問が起るであらう。現代の婦人は現今彼等の心意を傾倒すべく餘儀なくせらるゝところの殆んど凡てが全く重要ならざる瑣末事であり、又彼等の前に置かるる行爲の理想の殆んど凡べてが同樣に不合理な瑣末事であることに氣付かねばならぬ。訪問と衣裝と、華奢と儀禮と夫等は家族に對する義務行爲とに時間と勢力とを消費するは、吾人の力を浪費し濫費することである。公生涯に入ることは、公然と物事を考ふることは、私が自働自轉車に乘る娘の側によつて記述したところの非人稱的興味を遂行することである。吾等をして重要にして非人稱的なることを爲さしめよ、よしこれを爲すことが「吾婦人のやうで」「正しく」「且つ美しく」あることの放棄を意味するにしても。若し、再び私の引例に戻つて、かの自働自轉車の機械を好む娘が、小娘といふものは手を綺麗にし髪を整へて置くべきものだと教へられたことを記憶してゐたならば彼女は機械技術といふものを到底習得し得なかつたであらう。若し、更に、婦人なるものが蒲柳の質にして、力に於いて男子に劣り、單に善良にして美人であるために創造せられたことを記憶してゐたならば、彼女は街も自働自轉車に乘ることを不可能と思考したであらう、或は若し世の並に凡俗な夫を喜ばすことを考へてゐたならば、彼女は乘らうと試むることすら敢へてしなかつたであらう。

婦人に對する私の助言は次ぎの如くである。「婦人の職

能と地位とに關して卿等に告げらるゝ凡べてに不信を懷け、而してその如何なるものなるかをば卿等に興味を持たしむる仕事を遂行することによつて自身に見出せ。無意味なることに卿等の時間を浪費することを拒絶せよ。政治にせよ、科學にせよ、藝術にせよ、何にても卿等の理智的食物たるものを、一般的問題に關して渉讀せよ。論議せよ論爭せよ而して卿等は男子だけ明瞭に思考することが出來又思考せねばならぬことを記憶せよ。卿等が眞理なりと信ずるところを正直に思考し且表白するに當つて、男子或は家族に對する尊敬或は愛着をして容喙せしむること勿れ。卿等が已れの欲するがまゝに眞に自由に考へ、語り、行ひ得るやうに自活に資する職業を得んがために奮鬪せよ。男子の快樂によつて又そのために存在する單なる怠慢な寄生蟲の如き婦人としてゞはなく、奉公の精神をもつて爲さるゝこの勞作に對して個人として生きよ。如何に日當りよく又心地よくとも、雨露を凌ぐ家と壁と窮屈な小庭園とを忘れて、外の世界が如何なるものなるかを出でて見よ、其處には風と嵐とがあり、努力精進すべき大思想と大理想とがあり、建設すべき國家と社會とがあり、遂行せらるべき科學的發見がある。かゝる人生は卿等により愉快でないかも知れぬ、それは恐らく霜枯れて、怖ろしく、淋しいであらう、殊に卿等の中勇敢にその道に進んだものはさうであらう。けれども廣く活動的であればある程、人生はたとへヨリ困難であるとも、靜止的な眠つたい存在よりは高尚であつて、その要求に酬ゆるための新しい力を生ずるものである。婦人は善事を成就し且公敵に對抗するに充分強く又勇ましくなり得るであらう、若し彼等にして心意と身體とを强健輕快ならしむる教育によつて自身を準備するならば。而してかゝる教育たるや、烈しい勉强と自由な論議とに組み合するに、充分新鮮なる空氣と野外運動とをもつてする教育であり、就中、婦人をば主として女性としてゞなく、國家奉仕の中に發展する力を有する個人とし、家庭の奴隷ではなく奉公の一事を婦人の領域と考へる教育でなければならぬ。」

凡べての婦人は皆、心懸け次第で、既に英國に存在してゐるやうな、爽快にして大膽な、快氣あり誠實ある、そして强い理知的興味と研究的な聰明な心意とを有する婦人となり得るのである。而して彼等の顏の熱心な表象性と生命及び自由の白熱的風貌とは、世界中の立像的な溫順な臆病な美人の凡べてに匹敵するものである。



ホワイト・ファング（小説）

Jack London 著
堺利彦 譯

▲私は曩にジャック・ロンドンの名作『野性の呼聲』(Call of the Wild)を譯して可なりの歡迎を受けた。そこで今度は、それの姉妹篇たる『白牙(ホワイトファング)』(White Fang)を譯して、『改造』の紙上を借る事にした。『野性』は、犬が北地の氷雪の間に酷遇を受けて、遂に狼になるといふ話だが、『ホワイト・ファング』はそれの反對に、狼の子が人に愛されて、段々に飼犬らしくなるといふ話です。其の間には、社會主義者たる著者の痛烈な思想が自然に現はれてゐる所もあります。氣永く御讀取りを乞ふ。

第一篇

一　肉の跡

蝦夷松の暗い森が眉を顰めて凍つた水路の兩側を蔽うてゐた。其の木々には近ごろの風で白い雪霜の衣を剝がれて、薄れゆく光の中に、黑く且つ忌はしく、互ひに凭れあつてゐるように見えてゐた。大いなる寂寞が其土地を領してゐた。土地その者が生命のない、運動のない、荒廢物であつて、悲哀の氣すらも其の中に宿らぬほ

ど、淋しく且つ冷たかつた。そこには何んとなく笑ひの意味があつて、而も其の笑ひは有らゆる悲しみよりも恐ろしくスフィンクスのほほゑみのような凄ひ笑ひであり、又霜のような冷たい笑ひ、最高無謬の自然律に似たような酷烈な笑ひであつた。それは實に、生命と生命の努力との無効を嘲笑ふ所の、嚴にして不可思議なる永劫、渡の大智であつた。斯くの如き者、即ち謂ゆる人跡未到の荒地——凍結せる北方の蠻地であつた。

然し猶ほ其の地上を侵して挑戰を試みる生命があつた。即ち其の凍つた水路の上を、狼のような犬の一連がもがいてゐた。彼等の逆立つた毛は霜で綴ぢられてゐた。彼等の吐く息は口を出ると直ぐに空中で凍つて白い霧となり、それが彼等の全身の毛にクツついて結晶してゐた。犬共は革具を付けられてゐた。そして革の挽綱で後ろの方に一つの橇を引張つてゐた。其の橇には滑り道具が無かつた。頑丈な樺の木の皮で作られたもので、其の全面がベタリと雪に付いてゐた。橇の前端は渦形に卷きあがつて、それで以て、前の方から波のやうに崩れかかつて來て柔かい雪の頭を或は抑しつけ、或は滑りぬけるのであつた。橇の上には細長い長方形の箱が確かりといわえつけてあつた。まだ橇の上には、毛布だの斧だの、コヒー壺だの、フライパンだの、色々の物があつた。然し橇の面積の大部分を占めた、最も重要な物は、其の細長い長方形の箱であつた。

犬共の先には、一人の男が大きな雪靴をはいてもがいてゐた。橇の後ろには第二の男がもがいてゐた。橇の上の箱の中には、モウもがきやんだ第三の男が橫たはつてゐた。蠻地は其の男を征服して、再び動く事も闘ふ事も出來ないように叩きつけてしまつたのであつた。蠻地は運動を好む者でない。生命は蠻地の敵である。生命は即ち運動であるが故に。從つて蠻地は常に運動を絶滅せしめようとする。水を凍らしてはそれの海に注ぐことを妨げ、樹液を驅逐しては木の心髄まで凍らせる。更に最も恐ろしい事には、蠻地は能く人間を屈服させる、——生命の中で最も活動的であり、そして常に、一切の運動は終局に於いて運動の停止に歸せねばならぬといふ金言に叛逆する人間を屈服させる。

然し前陣と後陣とに、まだ死んでゐない不撓不屈の二人がもがいてゐた。彼等の身體は毛皮と、柔かくなめした革と

で蔽はれてゐた。睫毛も頬も唇も、息の凍つた結晶物で閉ち堅められ、顔の見分もつかなくなつてゐた。それで彼等は丸で化物の面をかぶつたようで、何かの妖怪の葬式をしてゐる、化物世界の葬儀屋のように見えてゐた。けれども彼等はそれでゐて矢張り人間であつた。荒廢と嘲笑と沈默の土地にもぐりこむ人間であつた。空間の大奈落のような、遠隔な、異域の、脈搏のない別世界の力に對してブツつかる、大冒險好きの小冒險者であつた。

彼等は身體の勞役の爲に呼吸を節約しつゝ、無言で進んでゐた。四邊には只だ沈默があつて、それがまざまざと觸知されるやうに彼等の上に迫つて來た。それは丁度、淵の強い水壓が潛水者に影響するように、彼等の心に影響した。それは果てしのない茫漠と、假借のない命令の重味を以て彼等を押しつぶした。それは彼等を心の底の片隅にまで押しつぶして、葡萄の實から液汁を絞るように、人の心靈に屬する有らゆる僞りの熱情や高慢や、又は不正當な自己評價を絞りだしてしまつて、自分が有限であり弱小であり、粟粒であり微塵であり、只だ小智慧と小器用とを以て、盲目的なる天然の大勢力の作用及び交錯作用の間にうごめいてゐる事を覺らせた。

一時間たち、又一時間たつた。太陽のない短かい日の薄い光が消えはじめた頃、遠い幽かな一つの叫び聲が靜かな空氣の中に聞えた。それは先づ咄嗟な音調を以て起り、次第に發揚して最高調に達し、そこで震動しつゝ緊張して暫く持續し、そしておもむろに消えてしまつた。若しそれにどこか悲痛な猛惡さと、餓に迫られて熱烈さとが戰つてゐなかつたならば、恐らく亡靈の泣聲と聞えたであらう。前陣の男は頭を振り向けた。其の目がうしろの男の目と行きあつた。そして二人は、細長い長方形の箱を隔てゝ頷きあつた。

第二の叫びが針のような鋭どさを以て靜寂の間を突き裂いた。二人は其の響きの方角を聞き定めた。それは今ま彼等が跋渉して來た、うしろの雪の原のどこかであつた。第三の、そして應答の叫びが、矢張りうしろの方に、そして第二の叫びの左り手に聞えた。

「奴等、俺達を追ひかけてるぜ、ビル」と、前陣の男が云つた。

彼れの聲はしやがれた、そしてうつろな音を發してゐた。そして明かに彼は努めてそれを云つたのであつた。

『食ひ物が無いんだよ。』相棒は答へた。『俺は此の四五日、兎の影一つ見ねえだつた。』

其後、彼等は何も語らなかつたが、其の耳は絶えずうしろに起る追跡の叫びに對して張りきつてゐた。

暗くなつてから、彼等は水路のへりの蝦夷松の小藪に犬共を緩く繋いで、そしてキャンプ(野營)を作つた。棺は火のそばに置かれて、腰かけにもなり、食卓にもなつた。狼のような其の犬共は火の向ふがわに群がつて、仲間同志で唸りあつたり噛みあつたりしてゐたが、暗がりの方に離れて行きさうな素振も見せなかつた。

『何んだぜヘンリイ、奴等、馬鹿に近くキャンプのそばに當つてるぜ』と、ビルが犬共を批評した。

ヘンリイは火の前にしやがんで、氷の塊まりでコヒイ壺を据えつけながら頷づいた。そして棺の上に腰かけて食事をやりはじめるまで默つてゐた。

『奴等、どこに居りや大丈夫だか知つてるんさ。』彼は云つた。『食はれるよりや食ふ方が好いからなア。奴等、賢こいや。』

ビルは頭を振つた。『サア、どうだか。』

相棒のヘンリイは不思議そうに彼を見やつた。『お前が犬共の事を賢こくないなんて云ふなア、俺ア初めて聞いたぜ。』

『だつてヘンリイ』と、一方は食つてゐた豆を念入りに噛みながら云つた。『俺が奴等にジキを與れてゐた時、奴等が變にハネちらしてゐたアノ樣子に、おまへ氣がついてゐたかい。』

『ウン、いつもよりか餘計ドサクサしてゐたようだな』とヘンリイはそれを承認した。

『犬は幾疋つれて來たつけなア、ヘンリイ。』

『六疋さ。』

『所が、ヘンリイ……』ビルは自分の言葉に重味をつける爲に暫く止まつた。『可いかい、ヘンリイ。犬は今ま云よ

通り六疋だ。俺は袋から魚を六つ取りだした。そして一疋に一ツづつ呉れてやつた。所がヘンリイ、魚が一つ足りんかつた。』

『お前が數へそこなつたんだらう。』

『いゝや、犬は六疋だぜ。』ビルは冷靜に繰返した。『俺は魚を六つ取りだした。それに『片耳』の野郎だけ魚にありつかなかつた。俺は又袋から一つだけ出してやつた。』

『だつて犬は六疋きりぢやないか』とヘンリイは云つた。

『ヘンリイ。』ビルは更に云つた。『俺は犬ばかりと云やしない。何にしろ魚を取つた奴は七疋居つた。』

ヘンリイは食事をやめて、火の向を見やつて犬を數へた。

『今は六疋だけだぜ。』

『俺ア今一疋の奴が雪の中を逃げて行くのを見た。』ビルは冷然として云つた。『俺ア確かに七疋ゐるのを見た。』

ヘンリイは氣の毒さうにビルを打眺めた。そして云つた。『あゝ俺ア何んでも早く此の厭な旅行を終りたいよ。』

『お前の云ふのは、そりや何んの事だい。』とビルは問ひつめた。

『此の荷物がさ、お前の神經に響いたんだよ。それでお前が氣のセイで變な物を見るやうになつたんだと云ふ事よ。』

『俺もさうかと思つたよ。』ビルは眞顏で答へた。『だから俺ア雪の中を逃げて行く奴を見た時、ジツト雪の上に氣を付けたら、足跡が見えたよ。其の足跡は今でもあそこの雪の中にあらア。お前に見せてやらうか。』

ヘンリイは返事もしないで、ムシヤムシヤ食事をやりつゞけ。それが終つて最後のコヒイを飮みこむまで默つてゐたそれから彼は手の中で口を拭つて斯う云つた。

『ぢや。お前はアノ何と云ふんかい、……』

其時、恐ろしく悲痛な、泣くやうな長い叫びが、どこか闇の中に聞えて、彼れの言葉を妨げた。彼は暫くそれに耳を

傾けてから、叫びの聞えた方に指をさして、『あやつが來たと言ふんかい？』と前の文章を結んだ。

ビルは頷づいた。『俺アどうあつても、そうより外に考へられない。お前も犬共が騷ぐのに氣がついたと云つたぢやないか。』

叫び又叫び、そして又それに答へる多くの叫びで、今までの靜寂な曠野に變じつゝあつた。叫びは四方から起つて來た。そして犬共は恐れを爲して押しあひへしあひ、毛の焦げるまで火に近く當つて來た、ビルは火の中に薪を投げそへてから。漸くパイプを吸ひつけた。

『オイ、お前は大ぶんへコたれてるな』と、ヘンリイが云つた。

『ヘンリイ、……』ビルは暫くのあひだパイプをくわえて考えこんでから斯う云つた。『ヘンリイ、此人はお前や俺よりどのくらゐ仕合せか知れないと俺は思ふよ。』

彼は自分の腰かけてゐる箱に親指を押しつけて其人を表示した。

『お前と俺とはな、ヘンリイ。若しか死んだつて、犬に死骸を食はれないように、石ころでも其の上に置いて貰へれば仕合せといふ位なもんだぜ。』

『だつて俺達や此人のように、人を雇つてるぢやなし、金があるぢやなし、其ほか何があるぢやなしさ』と、ヘンリイは合槌を打つた。『此の長道中の葬式なんざア。お前や俺に到底出來るこつぢやないのさ。』

『俺は斯う思ふんだがなあヘンリイ。一體、こういふ男がさ、國にゐりや殿様か何かでさ、食ふ物や着る物に不自由をするぢやなしさ、それに何んだつてこんな神様に見棄てられたような地球の果にやつて來やがつたんだらう。それが俺にやどうしても分らない。』

『内にジットしてゐさへすりや好い年までは生き延びられたんだらうになア』と、ヘンリイもそれに同意した。

ビルは口をあけて物を云ひかけたが、又氣を變へてヤメにした。それで、四方から迫つて來る暗やみの壁に指さしを

した。眞の暗の事であるから、物の形は固より見えないが。只だ燃えてゐる石炭のような、一對の輝く目が見えてゐた。ヘンリーは更に第二の一對、第三の一對を自分の頭で指摘した。輝く目の圓周が既にキャンプのまわりに迫つてゐた。折々其の一對の目は動いた。或は消えうせた。かと思ふと、直ぐに又現はれた。

犬共の不安は先程から增大しつゝあつた。彼等は急な恐怖に襲はれて、一度にドツト火のそばに群がつて來て、人間の足のまわりに這ひまわつてゐた。其のせりあひの中に、一疋の犬は火のふちに轉がりこんで、痛みと怖さとでキヤンキヤンと泣き叫び、其の焼けた上衣の臭ひは空中に充ち滿ちてゐた。すると其の騒ぎで、目の圓周は暫くどよめいて、少しばかり引退いたりしたが、やがて犬共が静まると共に、又元の通りに陣取つた。

『ヘンリイ、彈藥の無くなつたのが恐ろしい不運だなあ。』

ビルはもう煙草を飲み終つて、先ほど食事の前に雪の上に敷いて置いた蝦夷松の枝の上に、毛皮や毛布の寢床を相棒と一緒に延べてゐた、ヘンリイは鼻を一つクンと云はせて、鹿皮の靴の紐を解きかかつた。

『まだ二發殘つてゐると云つたつけなア』と、彼はビルに問うた。

『三發よ』と云ふのが其の答であつた。『若しかこれが三百發だつたらなあ、ウント奴等を云はせてやるんだ。畜生奴！

彼は輝く目に向つて腹立たしげに拳を握つた。そして鹿皮の靴をシツカリト火の前に立てかけてゐた。

『それに此の寒さが止みやがりや可いに。』彼は猶ほ語り續けた『此の二週間といふもの、氷點下五十度だらうぢやないか。俺アなあヘンリイ、此の旅に來なきや好かつたと思ふよ。嫌になつちまふぢやないか、此ザマは。何んしろ俺ア氣が滅入るよ。だけど俺あ又考へるよ。早く此の旅を片づけてしまつてさ、お前と俺とがマツガアリの屯でさ、丁度こういふ風に火に當つてさ、カルタ遊びでもしてゐたらどんなに好いだらう。あゝ俺ア早くそうしたいよ。』

ヘンリイは鼻をクンと云はせて、寢床の中にもぐりこんだ。そして彼がウトウトとした時、相棒の聲で呼びさまされた。

『オイ、オイ、ヘンリイ。あの、やつて來て魚を取りやがつた奴なあ、――なぜ犬共が取つちめなかつたらう。俺アそれが氣になる。』

『餘計な事を氣にするない、ビルや。』ヘンリイは眠むそうに返事をした。『お前もそんなちや無かつたがなア。サア早く床にはいつて寢ろよ、朝になりや又元氣が出らア。お前は惡いんだ。それでそんなに物事を氣にするんだ。』

二人は一つの毛布をかぶつて、高鼾をかきながら並んで寢た。火は燃え落ちた。そして輝く目は其の圓周を引縮めた彼等は既にキャンプのまわりに押し寄せてゐた。犬共は怖さに群がり寄つて、其の目の一對が近づいた時、幾度も幾度も威嚇的の唸りを發してゐた。其の騷ぎが餘りに烈しくなつた時、とうとうビルが目を覺ました。彼は相棒の眠りを亂さないように、ソット氣をつけて寢床を出た。そして薪を火の中に投げそへた。それが燃えあがると、目の圓周は遠のいた。彼は押しあひへしあひしてゐる犬共をチラリと見やつた。彼は目をこすつて更にシッカリと彼等を眺めた。それから又毛布の中にもぐりこんだ。

『ヘンリイ。オイ、ヘンリイ。』

ヘンリイは唸りながら、眠りから目覺めに移つた。そして問うた。『何がどうしたい?』

『ナユ、何んでもないがね。』ビルは答へた。『又七疋ゐたよ。俺がチャンと數へた。』

ヘンリイは鼻をクンと云はせて、正に其の報告を承認した。そして其クンが直ぐに鼾になつて、再び眠に入つてしまつた。

朝になると、今度はヘンリイが先きに目を覺まして。相棒を寢床の中から引きずりだした、それはもう六時であつたが、夜明までにはまだ三時間もあつた。そしてヘンリイは暗がりの中で朝飯の用意にかゝり、ビルは毛布を疊んで、それから橇に犬を付ける支度をした。

『オイ、ヘンリイ。』ビルが不意に問ひかけた。『犬は幾疋ゐるとお前は云つたつけなア。』

『六疋さ。』

『違ふ。』ビルは勝ちほこつたように宣言した。

『ぢや又七疋か』と、ヘンリイは聞いた。

『いゝや五疋だ。一疋ゐなくなつた。』

『何んだと？』ヘンリイは憤然として叫んだ。そして料理は放つちらかして置いて、こちらにやつて來て犬を數へた。

『全くだ、ビル。ファッチーが居ない』と、彼は結論を下した。

『そして奴、稻光りに油をかけたようにスルスルと行つちまやがつた。影も形も殘しやしない。』

『其の筈だよ。』ヘンリイは結論を下した。

『ファッチーは生きながら奴等に呑まれつちまつたんだ。ファッチーの野郎、奴等の喉を降りて行きながらキャンキャン泣いてゐたに違いない。仕様のない奴だ。』

『奴は平生から馬鹿な犬だつたよ』と、ビルは云つた

『幾ら馬鹿な犬だつて、こんなフウに態々出かけて行つて自殺をするんぢや仕様がない。』彼は吟味の目を以て組犬の殘餘を見わたしたが、直ちに各犬の特質を論定した。『外の奴等は確かにそんな眞似はしない。』

『奴等は棍棒で撲つたつて火の側を離れやーしない』と、ビルもそれに同意した。『俺アいつもからソウ思つてた。ファッチーの野郎にはどこか變な所があつたよ。』

之が即ち此地の橇道に於ける、死んだ犬の墓碑銘であつた。他の多くの犬、他の多くの人間の墓碑銘に比べてまだまだ好い部であつた。

二　嘷す狼

朝飯は濟んだ。手輕なキャンプの諸道具は橇にいわえつけられた。二人は懷かしい火をうしろにして、暗に向つて進

みだした。忽ちにして物凄い悲しい叫びが又起つて來た。暗と寒さとの間を貫いて互ひに呼びかはし、答へかへす其の叫びであつた。二人の會話はやんでしまつた。夜は九時になつて漸く明けた。晝頃になると、南の方の空が薔薇色の暖か味を帶び、そこに地球の胴中の膨らみが正午の太陽と北極の世界との間に伸長を試みた事を示してゐた。然し其の薔薇色は速かにあせ去り、殘る灰色の日光もヤツト三時頃まで續いて又あせ去り　跡に　北極の夜の黑幕が其の寂しい靜かな土地の上に降りてゐた。

かの追ひかけて來る叫び聲は、暗くなると共に、右にも左にも後ろにも段々と近づいて來た。餘りにそれが近づいて來たので、挽犬共は一度ならずオジケに襲はれ、其の度毎に暫くは恐怖狀態を引起すのであつた。

そういふ一と恐慌が靜まつたあとで、ビルとヘンリイとがヤツト犬共を挽綱の處に戻した時、ビルは斯う云つた。

『奴ら何か外の獵をめつけて、俺達を放かして行つてくれないかなア。』

『全くだ。本統に氣が氣ぢやないよ』と、ヘンリイもビルに同情した。

二人はそれきり、キヤンプの出來上るまで物を云はなかつた。

ヘンリイが俯向いて、豆を煎る土鍋に氷を入れてゐた時、不意に物をなぐる音と、ビルの怒鳴り聲が聞えて、同時に苦痛を訴へる悲鳴の叫びが犬共の間から起つた。ヘンリイがビツクリして立ちあがると、丁度その目の前に、黑い物が一つ、雪の中を闇の方に消えて行くのが見えた。それからビルはと見ると、犬共の間に突立つて、半ば勝ちほこり、半ばはしよげ、片手には太い棒を持ち、片手には鮭の乾物の尻尾の方の半身を提げてゐた。

『奴、半分取りやがつた。』ビルはヘンリイに告げた。『其のかはり俺あウントなぐりつけて與れた。お前聞いたらう、あの泣き聲を。』

『どんなフウの奴だつたい？』とヘンリイはビルに問うた。

『よく見えなかつたよ。だけど、足が四本あつて、口があつて、毛があつて、犬のとほりだつたよ。』

『狼の人に馴れた奴だよ。屹度そうだよ。』
『そうかも知れないが、悪い馴れ方だよ。食事時にやつて來やがつて、魚の割前を取りやがるなんて。』
其の夜、夕飯が濟んで二人が横長い箱の上に腰かけて煙草を吸つてゐると、輝く目の圓周が前よりも一層近く押し寄せて來た。
『奴等、大鹿の群か何か追ひかけて、俺達を放かして行つて呉れると好いがなア』とビルは又云つた。
ヘンリイは一向それに同情したらしくない音調で鼻を一つクンと云はせた。そして二十分間ばかりも二人が默つて腰かけてゐた。ヘンリイは火を見つめてゐるし、ビルは火の向ふの闇の中に燃えてゐる目の圓周を見つめてゐた。
『あゝあゝ、今どろマツガリイに着いてゐたんだと好いがなア』と、ビルは又やりだした。
『よせやい。好いがなア、好いがなアなんて泣言を云つたつて始まらない。』ヘンリイは腹立たしそうに怒鳴りつけた。
『お前は胃が悪いんだ。溜飲が起つてるんだ。曹達でも一匙呑んで見ろよ。そうすりや素晴らしく氣分が好くなつて、泣言も出なくならア。』
翌朝ヘンリイは、ビルの口から發した激烈な怒鳴り聲で目を覺まされた。彼は寢床の中で肱を突いて半身を起して見ると、相棒は今まで燃やし足した火の側で犬共の間に立つて、兩手を擧げて呪ひの言葉を連發しながら、額の筋肉は憤ほりに引き釣つてゐた。
『オオイ！何事だい？』ヘンリイはビルに呼びかけた。
『蛙が居ない。』と、ビルは答へた。
『馬鹿な事を……。』
『いゝや、居ない。』
ヘンリイは毛布を刎ねとばして犬の處にやつて來た。彼は注意して犬を數へた。そして今度は相棒と一緒に、此の

地の勢力が更に一疋の犬を奪ひ去つた事を咒咀した。

『フログは此の組の中で一番强い犬だつたがなア』と、ビルは最後に嘆息した。

『それに奴、馬鹿犬でも無かつたんだがなア』と、ヘンリイはそれに附け加へた。

斯くて二日の間に第二の墓碑銘が作られた。

陰氣な朝飯の總つて後、殘つた四疋の犬が橇に附けられた。其日も前の數日の繰返しであつた。二人は凍りつめた此の世界の表面を横ぎつて無言の中にもがき進んだ。只だ其の靜寂を破るものは、目には見えないで後ろから襲ひかゝるかの追跡者の叫びばかりであつた。晝が過ぎて間もなく夜になると、追跡者は例の如く接近して、其の叫び聲が間近に聞えた。犬共は恐怖して昂奮して、幾度も恐慌狀態を來しては挽綱をもつれさせ、それが爲に又一層二人の氣を腐らせた。

『ソーラ、これで馬鹿野郎共も動かれやしない』と、ビルが其の夜、仕事を濟ましてから立ちはだかりながら滿足げに云つた。

ヘンリイは料理の手を放してこちらにやつて來て見ると、相棒は只だ犬共を縛りつけたばかりでなく、印度人のやるように、棒で以て縛りつけてゐた。即ち彼は各犬の首に革紐をつけ、其の革紐に（そして犬の齒がそれに屆かないように首に密接して）長さ四五フィートの丈夫な棒をいわえつけてゐた。そして棒の片端は又、地上の杭に革紐でいわえつけてあつた。犬は自分の首にある棒の片端の革を嚙みきる事も出來ないし、又その棒に妨げられて他の片端の革に口を持つて行く事も出來なかつた。

ヘンリイはそれを譽めるように頷づいた。

『片耳の奴を縛りつけて置くにや、此の工夫より外に仕方がありやしない。奴が革を嚙み切るなア丸でナイフで切るようだ。而も半分の時間も掛りやしない。マアこれであすの朝ア大丈夫だらう。』

『大丈夫、請合だ。若しか一疋でも居なくなつてたら、俺あコヒイを飲まない事にする。』

就寝の時刻になつて、ヘンリイは自分達を取り圍んでゐる輝く目の圓周を指さしながら斯う云つた。『奴等、俺達が彈藥を持つてない事を知つてやがる。二三發放してやらうもんなら、奴等すこしは遠慮するんだがなア。何しろ毎晩、段々に近よつて來やがる。ソラ、其の火影をよけて、よつく見ろよ。見えるかい、あやつが。』

二人は暫く面白そうに、火影のふちに動いてゐるボンヤリした形を見守つてゐた。一對の目が闇の中に燃えてゐるあたりをジツト見つめてゐると、其の動物の形體が漸く薄つすりと見えて來るのであつた。其の形體が折々動くのさへ見えるのであつた。

犬共の間に物音がして、それが二人の注意を引いた。片耳がジレジレしたような鋭い泣聲をして、棒の先で闇の方に突進してゐた。そして折々は其の突進をやめて、狂氣のような齒の襲撃を其の棒に加へてゐた。

『あれを見ろよ、ビル』と、ヘンリイはさゝやいた。

火影の眞正面に、犬のような一つの動物が、忍び足でハスかひに寄つて來た。それは狐疑と大膽とをつきまぜたような態度で、用心ぶかく人間の方に氣をつけながら、注意は犬共の方に向けられてゐた。片耳は其の侵入者の方に向つて棒の全長を引張り、如何にもモドかしげに泣いてゐた。

『片耳の馬鹿野郎、そんなに怖がつても居ないようだ。』ビルは小聲で斯う云つた。

『あれは雌す狼だよ』とヘンリイも小聲で答へた。『だからフアツチイもフログもやられたんだ。奴はあの群のオトリだよ。奴が犬をおびきだすと、外の奴等が皆んな飛びかゝつて、そして食つてしまふんだよ。』

火がパチパチと刎ねた。一つの丸木がドタドタと大きな音を立てゝ崩れ落ちた。其の物音にかの不思議な動物は闇の中に飛びのいてしまつた。

『ヘンリイ、俺ア斯う思ふがなア』と、ビルが云ひだした。

『どう思ふよ？』

『俺ァ斯う思ふよ。俺が棒でくらわした奴があれだよ。』

『そうだよ。それに違ひない』と、ヘンリイも同意した。

『そこでだね、俺アどうも不思議でならない。』ビルは語りつゞけた。『奴がキャンプの火に馴れてるのが怪しいよ。』

『奴は身だしなみのある普通の狼に比べると、餘つぽど何か知つてるよ。』ヘンリイも同意して斯う云つた。『何しろ食事時に犬に交つてもぐりこまうといふ狼だもの、餘つぽど經驗のある奴だよ。』

『先にオル・ヴイランの犬が狼と一緒に逃げた事があつたつけ』と、ビルは大きな聲で獨り言のように云つた。『そうだ。思ひだした。リトル・ステッキの大鹿の牧場で、奴が狼の群の中にゐるのを俺が鐵砲で撃つてやつた。そしたらオル・ヴイランの野郎、赤ン坊のように泣きやがつた。野郎、三年目に回り會つたんだと云つてたつけ。そんなに永く犬が狼と一緒に居たんだよ。』

『ウム、其の話で分つたよ、ビル。あの狼は犬だよ。人間の手から幾度も幾度も魚を貰つて食つた覺えがあるんだよ。』

『何アに、犬でも狼でも構やしない。今に折があつたら殺して食つてやる。此のうへ犬を無くしちややりきれやしない。』

『だつて彈藥は三發しか無いぢやないか』とヘンリイは反對した。

『だから一發で見事に打ちとめる機會を待つんだ』とビルは答へた。

　翌朝、ヘンリイは相棒の鼾を聞きながら、火を焚きそへて朝飯の仕度をした。

『今朝はお前馬鹿にグッスリ寢こんでゐたなア』と、ヘンリイは相棒を朝飯に呼び起した時にそう云つた。『俺アお前を起す氣になれなかつたよ。』

　ビルは眠むそうに食ひはじめた。彼は自分のコップが空であるのに氣がついて、コヒイ壺を取らうとした。所が、コヒイ壺はヘンリーのそばの、手の屆かない處にあつた。

『オイ、ヘンリイ。おまへ何か忘れてやしないか』と、ビルはおとなしくヘンリイを咎めた。

ヘンリイはあたりを念入りに見まはした。そして頭を振つた。ビルは空のコップを差出した。

『お前にやコヒイは無いんだよ』と、ヘンリイは云つた。

『もう飲んぢまつたのか』と、ビルは心配そうに聞いた。

『いゝや。』

『ぢや、俺の消化に悪いと云ふんか。』

『いゝや。』

怒りの血がビルの顔に漲つた。

『ぢや一體どうしたと云ふんだ。サ、わけを聞かせろ。』

『スパンカアが居なくなつた。』

不幸の前にへこたれたといふ身振で、ビルは緩々と首を振り向け、腰かけたまゝで犬を數へた。

『どうして奴が逃げやがつたらう！』ビルは氣のない聲で斯う云つた。

ヘンリイは肩をゆすぶつた。『分らない。片耳が嚙みきつてやりでもしなきや、奴、自分ぢや迚つてもやれやしない。

『畜生奴！』ビルは腹の中で煮えたぎる怒氣を隠して、落ちついた口調で云つた。『奴、自分の革が嚙み切れないしんだから、スパンカアの革を嚙み切りやがつたんだ。』

『マア何しろスパンカアの煩悶は片づいたと云ふもんだ。奴、多分今頃は消化されちまつて、廿疋ばかりの狼の腹の中で、そこらぢうを飛んだり刎ねたりしてるんだらう。』ヘンリイは斯ういふ墓碑銘を最近の死んだ犬に與へて、『まあコヒイでも飲めよ、ビル。』

けれどもビルは頭を振つた。

『マア飲めよ』と、ヘンリイはコヒイ壺を手に持つて勸めた。

ビルは自分のロップを脇にやつた滅相もない！俺ア一疋でも犬が居なくなつたらコヒイは飲まないと云つたんだ。だから飲まない。』

『だつて好いコヒイが出來てるんだぜ』と、ヘンリイはそゝのかすように云つた。

けれどもビルは強情を張りとほした。彼はコヒイなしの朝飯を濟ませて、其の跡口に、片耳のやつたイタヅラに對して滅茶苦茶の呪咀を浴せかけた。

『今夜は奴等がお互に屆かないように縛りつけてくれらア。』二人が橇の進行を始めた時、ビルは斯う云つた。

それからヤット百間あまりも進んだ時、前の方にゐたヘンリイが俯向いて、雪靴にブッつかつた何物かを拾ひあげた暗いので目には見えなかつたが、手さわりでそれと知れた。彼はそれを後ろに投げた。それは橇に當つて、又刎ね返つてビルの雪靴のそばに落ちた。

『何かお前の役に立つだらう。』ヘンリイはそう云つた。

ビルはギヨットしたらしい叫びを發した。それはスパンカアの片見の總であつた。即ち彼れの縛られてゐた其の棒であつた。

『奴等、皮も骨も皆んな食つちまやがつた。棒は笛のように綺麗になつてらア。それに奴等、兩端の革まで食つちまやがつた。奴等は恐ろしくかつゑてるんだぜ、ヘンリイ。お前も俺も此の旅の終らない中に奴等の腹を肥す事になるんかなア。』

ヘンリイは傲然として笑つた。『俺はこんなふうに狼から跡を付けられた事ア始めてだが、然しモットモットひどい目に會つた事もあらア。そして此の通りピンピンしてらア。あれんばかりの畜生共のお蔭で、此の世をお去らばにして堪るものかい。』

『どうだか知れないぜ。どうだか知れないぜ』と、ビルは不吉らしくつぶやいた。
『マア好いよ。今にマッガリイに着けばお前にも分るよ。』
『俺アどうも餘り元氣が出ない』と、ビルは猶ほ語つた。
『お前は氣が滅入つてるんだ。それが元來いけないんだよ』と、ヘンリイは獨斷した。『お前には幾那が入用なんだ。今にマッガリイに着きさへすりや、俺がチヤンと藥を拵へてやらア。』
ビルは其の診斷に不同意らしく鼻を鳴した。そして默りこんでしまつた。其の日も前々の日と同じであつた。光は九時になつて現はれた。十二時になつて南の地平線が見えない太陽で暖められた。そして直ぐに午後の冷たい灰色が始まつて、二三時間の後にはそれが又夜になるのであつた。
太陽が地上に現はれ樣として無効な努力を試みた直ぐ後の事ビルは橇の縛り革の下から銃を拔き出して斯う云つた。
『ヘンリー、お前はズンズン先に行けよ。俺は跡に殘つて見てやるから。』
『だつて、橇のそばに居た方がいゝぜ』と、相棒は抗議をした。『彈藥は只つた三發しきやないのに、どんな事が起るか知れやしない。』
『弱音を吹くなア今ぢや誰だい?』ビルは勝ちほこつたように云つた。
ヘンリイは返事もしないで、獨りポツポツ進んで行つたが、幾度も振り返つては、相棒の隱れた灰色の荒地に心配らしい瞥見を投げてゐた。一時間ばかり立つてから、橇が廻り道をせねばならぬ處で、ビルは近道をして追ひついた。
『奴等はバラバラに、ズウツト廣がつてやつて來やがる。俺達を追ひかけながら、同時に外の獲物を探してやがる。奴等は何んだぜ、俺達を締めたつもりで、只だ取つて食ふ機會を待つてるんだ。そして其の道々、手あたり次第に何んでも食へる物を見つけては拾はうと云ふんだ。』
『ぢや何かい。奴等は俺達を締めたつもりでゐるとお前は云ふんかい。』ヘンリイは少し角立つて突込んだ。

けれどもビルはそれを無視した。『俺ア奴等を四五疋見たが、隨分痩せてるぜ。奴等は此の何週間かの中に、ファッチイと、フログと、スパンカアの外には、何んにも食つてやしない。あれだけの數だもの、その位ぢや幾らも腹の足しになりやしない。全く奴等ア痩せてるぜ。肋骨つたら洗濯板のようだし、腹は丸で脊骨にクッついてゐやがる。實際、奴等ア一生懸命だ。死にもの狂ひといふ所だぜ。だからこつちも用心しなくちや。』

それから幾分かの後、今度は橇のうしろに働いてゐたヘンリイが、低い口笛で警報を傳へた。ビルは振り向いて後ろを見やつた。そして靜かに犬共を停めた。橇の後方に當つて、最近の曲り角の處から、今ま彼等が通つて來た其の橇道の眞上を、一つの毛深いコソ／＼とした動物が早足で駈けて來るのが、ハッキリと見えてゐた。鼻を橇道につけながら一種の滑るような輕い足取で走つてゐた。そして橇がとまると、それもとまり、頭を持ちあげて鼻の穴を確かりとこちらに當てがひ、こちらの臭ひを嗅いでは研究してゐるように、其の鼻の穴をピクつかせてゐた。

『あの雌狼だぜ』と、ビルは云つた。

犬共は雪の中に腹這になつてゐた。ビルは其の脇を通つて橇のそばにゐる相棒の處に行つた。二人は一緒に此の不思議な動物（數日間彼等を追跡して、既に組犬の半ばを亡ぼし盡した此の不思議な動物）を見守つてゐた。

精細な吟味を遂げた後、其の動物は五六歩ばかり前に進み出た。彼はそれを幾度か繰返して、とう／＼百ヤード足らずの處までやつて來た。彼はそこに立止まつて、頭を擧げて、蝦夷松の藪に寄り添うて、自分を見守つてゐる人間の裝ひを目と鼻とで研究した。彼は丁度犬のような、妙にあこがれた態度で二人を眺めた。然し其の憧れの中に、少しも犬の情愛は無かつた。それは餓から生じた憧れで、其の牙と同じように殘忍であり、雪霜と同じように無慈悲であつた。

彼は狼としては餘ほど大きかつた。其の肉の落ちた骨組が同族中の最大な動物から血統を引てる事を明示してゐた。

『あの肩の高さは確かに二フイート半に届いてるね』と、ヘンリイが見立をした。『そして長さは請合、五フイートを幾らも缺けてやしない。』

『狼にしちや變な色合だぜ』と、ビルは批評した。『俺ア赤茶けた狼を見た事がない。奴は丸で肉桂色をしてゐやがる。』

彼は必ずしも肉桂ではなかつた。其の外彼は正に狼の外被であつた。其の主色は灰色なのだが、それに幽かな赤味が掛つてゐた。そして其の赤味が夢か幻しのようにチラチラと見えたり消えたりして、或時は灰色に、ハツキリした灰色に見えるかと思へば、直ぐに又迚も普通の言葉では云はれない、ぼんやりした赤い色合がほのめいて來るのであつた。

『奴、どこから見ても大きなハスキイ種の橇犬だよ。奴が今にあの尻尾を振つたつて俺ア少つとも驚きやしない。』

ビルは斯う云つて、更に其の動物に呼びかけた。『オイコラ、ハスキイ。來いよ、來いよ、名は何と云ふか知らないが。』

『奴、ちつともお前を怖がつて居ないぜ』と、ヘンリイは笑つた。

ビルは威嚇するように手を振つて怒鳴りつけたが、其の動物は少しも恐れる様子を見せなかつた。只だ二人に氣のついた彼の變化は、イザと云ふ場合の爲の身構へばかりであつた。そして彼は猶ほ饑餓の無殘なるあこがれを以て二人を眺めてゐた。二人は食物であつた。そして彼は饑ゑてゐた。彼は今にも（若し勇氣が出さへすれば）飛びこんで來て二人を食ひたいのであつた。

『オイ、ヘンリイ、』ビルは心に思つてゐる事の爲に、我れ知らず聲を潜めて小聲で云つた。『彈藥は三發しかない。然し今なら適中だ。これを外しちや駄目だ。奴三疋も取りやがつた。モウどうあつても我慢がならない。お前どう思ふ？』

ヘンリイも頷いてそれに同意した。ビルは用心ぶかく橇の縛り革の下からソツと銃を拔きだした。銃はビルの肩に持つて行かれかけてゐたが、とうとうそこまでは行かなかつた。といふのは、正に其の瞬間に、かの雌す狼は橇道を飛びのいて、蝦夷松の藪の中に姿を消してしまつたのであつた。

二人は顔を見合せた。ヘンリイは意味ありげな長い口笛を吹いた。

『成程、俺が馬鹿だつた。』ビルは銃を元の處に置きながら、大きな聲で自分を叱つた。『食事時を狙つて犬に交つて來る程の狼なら、鐵砲の事は知りぬいてゐる筈だ。ヘンリイ、俺アもう愈々そうだと云ふ。今度の災難は全く奴の爲んだ

だ。奴さへ居なけりや、俺達ア今でもチャント六疋の犬を持つてる事が出來たんだよ。ヘンリイ、俺アもう愈々奴を殺して見せる。奴はスバしこいから迚も見える處ぢや撃てないが、俺ア奴を待ちぶせてやる。俺の名は確かにビルだが、それと同じく、確かに俺は奴と組打つて見せる。』

『そりや可いが、餘んまり遠くに離れちやいけないよ』と、相棒は忠告した。『若しかあの群が一度に飛びかゝつて來て見ろ、三發の彈藥なんぞ地獄で三つ嚔をする程の役にも立ちやしない。奴等は餓ゑきつてるんだ。一度飛びかゝつて來る日になりや、お前は大丈夫やられるよ、ビル。』

二人は其晩早くキャンプをおろした。三疋の犬では、六疋の時のように、そんなに早く挽く事も出來ないし、そんなに長く挽く事も出來なかつた。そして彼等は明かに精根の盡きた徴候を示してゐた。それで二人は早くから床に就いた尤もビルは其の前に、犬共が互ひに噛む事の出來ないように別々に彼等を縛りつけたのであつた。

然るに狼共は段々大膽になつて來て、二人は幾度も其の眠りから覺まされた。狼が餘りに近く來ると、犬共が怖がつて氣違ひの様になるので絶えず火を焚きそへては、其の冒險な掠奪者等を稍や安全の距離に退ける事が必要であつた。

『鱶が船の跡をつけるといふ水夫の話を聞いた事があるんだが』と、ビルは火の焚きそへをしてから再び毛布の中にもぐりこんだ時に語りだした。『あの狼共は陸地の鱶だよ。奴等は俺達よりも仕事をよく心得てらア。奴等がこんなにして俺達の跡をつけるなア、慰み事ぢやない。奴等は俺達をとつちめる積りなんだ。確かにソウだぜ、ヘンリイ。』

『お前がそんな事を云ふから、それで奴等はモウ半分お前をとつちめてるんだ。』ヘンリイは烈しくキメつけた。『人は自分で負けると云ふ時にや、モウ半分負かされてるんだ。お前はそんな眞似をするから、それでモウ半分食はれてるんだ。』

『だつて、お前や俺よりモツト立派な人間が奴等にやられてるぜ』と、ビルは答へた。

『オイもうそんな泣言はよせよ。俺アお前の爲にどんなに迷惑するか知れやしない。』

ヘンリイは斯う云つて腹立たしそうに寢返りを打つたが、ビルが一向おこつた様子もないのに驚いた。どうもそれはビルらしい遣方でなかつた。ビルは一體、きつい言葉を聞くと直ぐに怒る男であつた。ヘンリイは寢入るまでに其事を永く考へまはしてゐた。そして彼れの瞼が次第にさがつて、うつらうつらとして來た時、彼れの心に思つてゐた事は斯うであつた。『いや〳〵全くだ。ビルの顔色は眞ッ靑だ。明日は一つ、奴に元氣をつけてやらなくちや。』



國定忠治

宮島資夫

天保は八年八月末の事でございます。その年の春の末から降り出しました長霖雨は、これからさき、いつ止むのだか見當もつかないほど、根氣よくぢめ〳〵と降つて居りました。平素ならば田圃に出て、稲の手入れに忙しいお百姓も、いまゝで幾度かの出水の度に、今度こそはと、手をかへ品をかへて植附けをし直したものが、半月もたゝない中に、またきれいに流されてしまいますので、どうにも手の下しようもなく、その中に春は夏に夏は秋に近づいて参りました今となつては、よしんば空が急に晴れたとて、今年の秋はどうなるものでもございません。人はたゞ此の陰鬱な天氣の下に、暗い思ひを抱いて、ぢつとしてゐるばかりでございました。

上州佐位の郡國定村の貸元でありました忠治は、この雨の降りつゞく日を、毎日毎日部屋に閉ぢ籠つて、何か物思ひに耽つて居りました。ふだんから、勝氣な疳の強い男ではありましたが、またどこか明るい優しいところのある人で、よしんば繩張り争いで生命のやり取りをする前だと云つても、かうまでぢつと鬱ぎこんでゐる事はありませんでした。

女房のお町が氣を揉んで、

『お前さんそんなにくしゃ〳〵しないで、お酒でも飲んで氣を晴らしたら好いぢゃないか』

と、とき〳〵すゝめて見ましても、

『うるせえ、手前達の知つたこつちゃねえ』

と云つて、またごろつと轉がつて、緣側近いところから、雲の多い空をぢつと見上げてゐるばかりでありました。

何に致せ世間は不景氣を通り越して。餓莩道に横たはると云ふ有様でございますから、忠治の繩張中とても、賭場のはづむわけもなく、從つて寺錢も上がらなければ、三下の子分などは土地を賣つて、何處かにゐなくなるものが、續々出ると云ふ始末ではありますが、それほどの事に鬱ぎ込むような男でもありませんので、女房や子分達も、たゞぢつとして腫れ物にでもさわるようにして暮して居りました。

丁度その八月の末の、陰氣な雨空が暮れようとする夕方に、忠治の片腕と頼まれて居りました日光の圓藏が、ぶらりつと忠治の部屋に這入つて參りました。

『やあ忠治どん、雨もよく降るが、お主もくすぶつてよく考へこんでゐなさるな』と笑ひながら坐りました。忠治は圓藏の顔を見ると、むくりと起き上がつて、

『日光の、好いとこへ來てくれた、實はお前に逢いてえと思つて、心待ちに待つてゐたとこだ』

『逢はねえと云つたつて、まだものゝ十日と經ちはしめえ、俺も毎日來たいとは思つたが、お主が脊ばかり起して考へ事をしてると云ふから、つい遠慮してゐた始末だ、それほど用があつたのなら、使ひでもよこして呉れたら好いに』と圓藏が云ひますと、

『使ひをやりあわざとらしくなるのでよ、それでお前のくるのを待つてゐたわけだが、どうだ日光の、ちよつくらそこまで俺とつき合つて呉れねえか』と忠治はもうすぐにも立ち掛けて居りました。

『つき合うも合はねえも、だが大層氣ぜはしねえな』と圓藏はにこ〳〵笑ひながら、脇差を手にして、すぐとまた立ち

上りました。

　二人が茶の間を通る時に、長火鉢の向ふに坐つてゐた女房のお町は、

『あら圓藏さんもうお歸り、久し振りだから晩の仕度でもしようと思つてゐたのに』と聲を掛けると、後から出て來た忠治が、

『なに圓藏どんには、一寸用があつてそこまで、つき合つて貰ふのだ、歸つて來てから一杯やるから、支度をしておいてくれ』珍らしく酒の事まで云ひつけて、二人はそとに出てしまひました。

　空はもう暮れかけて、冷たい小雨は相も變らずしと〱と降る。國定村の田や畑は、幾度も幾度も植え換えんとしたすぐあとから、追つ馳けるやうに出た水の爲に流されて、稲田には枯れ〱とした大稲の莖が、ところまんだらに立つてゐるばかり、畑には痩せこけた甘藷の蔓が、情なく這ひまわつてゐる丈けで、野良稼ぎの人の姿すら見えません。誠にさびれ果てた光景でございます。

　先きに立つた忠治が、默つてすた〱と歩くあとから、圓藏もまた格別行先きを聞くでもなく、ぽつ〱とついて參りましたが、畔道にさしかゝつて來たときに、忠治はひよいと足を留めて、

『どうだ圓藏どん、隨分ひでえ荒れようだのう』と田畑の方を指す、

『全くひでえ荒れ方だ、これぢや百姓衆は、粥だつてすゝれやしめえ』と圓藏が答へたが、忠治はそれきり默つて、またすた〱と歩みを早めました。やがて二人がやつて參りましたのは、小高くなつた村の鎭守の社でございます。昨年から打ち續く凶作で、祭さへ行なはれない拜殿は、埃にまみれて荒れ果てゝ居りましたが、忠治は拜殿の中から周圍を一度調べて見てから、埃を掃つて階段に腰を下し、

『圓藏どん妙な所へやつて來て、お前も變に思つたらう』と圓藏にも自分のそばに腰をかけさせ、

『さつきもお前に云つたやうに、この間から相談してえと思つてゐた事があつたんだが、お前はあの荒れ切つた田圃や

畑をどう思う』

と、いつにもなくしんみりと、また謎をかけるような調子で口を切りました。圓藏におきましても。之を洗へば當時の人々が、手を觸れたゞけでも罰の當るやうに恐れてゐた、日光の寶藏を破つて莫大な貨を盗み出した大天狗の額太郎、忠治が一片の意氣に感じて、近頃身をへりくだつて後見となつてはをりますものの、度胸と云ひ人間と云ひ、たしかに忠治より一枚上の男で御座います。こないだ中から忠治が一人して、何か考へに耽つて居ります事を、略ぼ察しては居りましたが、こちらから口には出さず、ぢつとしてその考への熟するのと、忠治がどんな風に出るのかを待つてゐた所でありました。が流石に苦勞人の圓藏のことゝてすぐにそれとは口に出しません、

『どう思ふと云つたつて、さつきも云ふ通りこの秋から冬へかけちやあ、百姓衆は粥だつてすゝれやしめえと思ふのだ』と白を切つて居ります。

『そこだ圓藏どん、俺がこの間から、ちつと考へこんでゐた事は、』と忠治は膝を寄せまして、

『之れが繩張の上の爭ひか、意地づくのなぐり込みなら、家で乾分を集めて話をしても好い事だが、俺にもまだすつかり合點の行かねえ事があるので、こんなとこまで出て來て貰つたわけなのだが、此の頃の世の中の事を考へると、俺には不思議で堪らねえのだ』と口を切りまして、

『なあ圓藏どん、お前も知つての通り、去年はあゝした大旱魃、その翌年がこの通りの長じけだ。之れがこの上州一國ばかりぢやねえ、家へ來る旅人なんかに樣子を聞くと、北國路はまだ之れどこの騷ぎぢやねえそうだ。こゝら邊では、田へのめずり込んで野倒死をする奴があつても、誰れするともなく埋めてやる奴がある。ところがお前、奥州路から來た奴の話を聞きや、喰ひ物がねえ爲めに、木の芽も土も噛つた揚句、人間まで喰ふようになつてゐると云ふぢやあねえか。だが圓藏どん、人間が人間を喰ふつて云ふたあ、よく／＼喰ふ物がなくなつてきたからの事だ。ところが俺の見るとこちや、世の中にや米も麥も、まだある所にやうんとあるんだ。世の中に米一粒もなくなつてしまつた揚句な

ら、たとへ人間が獣にならうとよ、好いも惡いも文句の云へた事ぢやねえ、そりやお前もう人間の世の中ぢやねえ、餓鬼畜生になつてからの事だ、けれどもまだある所にや、要りもしなきあ喰へもしねえ代物が藏の中で唸つてゐて、そのそばで人が人を喰ふなんて、隨分わからねえ話ぢやねえか』と云つた忠治の顏は、眉毛にも口元にも、暗い色が漂つて居りました。

　誠に此の天保七年から八年へかけての大凶作は、近世稀に見る饑饉となりまして、その當時の人の話に傳はる所によりますと、甚だしい土地では、木の芽、草の根は喰ひ盡し、次ぎには何とか云ふ土を團子に作つて喰つたそうであります。けれどもそれすらなくなつた所では、牛馬犬猫、生ある者は盡く取り喰つた揚句、遂には饑に倒れた人の死骸を爭つて奪い合ふに到りました。又た或る土地では、行き倒れの死骸すら手に入らなくなりました時に、一人の男の子を抱へて居りました者が、或る日隣りの人に頼みますには、

『なあ八兵衞どん、俺も今まで隨分苦しい思ひをして堪らへて來たが、もうどうしてもやり切れなくなつた。と云つて俺が先きに死んで了へば、まだ小つけえ餓鬼の手では自分一人も過せまいし、と云つて親の手で生みの子の命を取る氣にはとてもなれねえ、俺が一生の頼みだが死骸はお前にやるから俺の餓鬼を殺しちや呉れめえか』と云ふ話に、隣りの男は喜んで、その男の子を殺しました。が、それを見ると同時に頼んだ男は大聲を揚げて、

『やあ汝れは、よくゝ俺の悴を殺しやがつたな』と叫びながら、その男を擲り殺して、遂に二人の死骸を喰つて了つたと云ふ話すら傳つて居ります。

　世の中は斯くの如く、非道無慘の有樣となつて居ります一面には、江戸大阪に限りません、目立つた土地の米問屋、富限者共は、大名の用人共と結托して、扶持米をどし〳〵買ひ占めてしまひます。之れが大正の今日でございましたら、日本に米がなくなつても、外國から輸入すると云ふ便利もございますが何に致せ運輸交通の不便な當時、米の値は思ふに委せて上る計り、小作日傭の人間は一たまりもなく倒れて行く、五反や一町の田地持も打ち續く凶作にとり入れ

もありませんから、地所は安く手放して、高い米を買ふ始末、之れが凡て、この金持共の懐ろに這入つて行つて了つたのでございます。誠にいつの世におきましても、世の中を亂すものは、暴民に非ずして、冷血無殘の金持共のする事に違ひはありません。

従つて此の當時は、切取强盗は到る所に跋扈致し、世の中は騒然として、人々は明日の命も計られない、不安の中に暮すばかり、此の有様を見るに堪えないで起つた人々の中で、物語に殘つて居りますのが、大阪心齋橋に於て馬子宰領を切殺し、伊達家の用金三千兩を奪い取つて、貧民に與へましたのが松平長七郎、その後に到つて、大阪町奉行跡部山城守の所行に憤激し、併せて濟生救民の爲に奮い立つたのに大鹽平八郎がございます。忠治の思ひ悩みましたのも、この塗炭に苦しむ人々を、どうしたら救えるかと云ふ事にありました事は之れ等の人々と相違はございませんでした。然しながら惜しい事には、當時の人々の心眼まだ開けず、徳川幕府を萬代不易の神の勅によつて出來上つたものゝように心得、その政に全く頼り切つて居りまして、自分の生活を自分自ら爲すべき權利のある事をすら心得て居りませんでした爲めに、之等の者と仁人の血も、只だ目前の急を救ふに止まつて、將來の禍根までを絶つに到らなかつた事は誠に惜むべく悲しむべき事でございました。

却説、餘談はおきまして、忠治の話を聞いてをりました日光の圓藏は、そのとき莞爾と笑ひまして、

『なるほど忠治どん好いとこへ氣がついた、大きな口を利くわけぢやねえが、俺も世間からばかりじやあねえ、同じ御法破りのお主達の仲間からまで爪はぢきをされるような、盗み泥棒を初めたのも、元はと云やあそんな不思議からやつたよ。遠い世間の事は云はなくとも、宮子村の代官のやり方を見ても解る、去年の旱魃の時にだつて、年貢一合引きもしねえで、取るものは取り立てやがつて、藏の中で唸つてゐる米は、人が喰へるか喰へねえかの境になつて、好い面をして積み出してる。自體奴等がふだんから、御代官だの奉行だのつて大きな面をしてるのに、へえこら云つて御辭儀をするのは、まさかの時の爲めを思ふからだ。なあ、そいらがいさとなりや仲間の好い事ばかりしやがつて、御辭儀を

させて働かせた人間が、死なうと生きようと知らねえ面でゐるのなら、代官も奉行も庄屋もあるものか、なあ忠治どん、人が人を殺すと云ふのは、この世の中での一番の悪い事だ。そうして死人の肉を喰ふような事に較べたら、藏の中で唸つてる米を擔ぎ出す位の事は考へるまでもねえ事だと俺は思ふ」と云つて口を切りましたが、

「かう云つたら、お主は氣を惡くするか知らねえが、お主としたつてふだんから、柔けえものを看て懐手をして喰つてゐられるのも、決してお上のお蔭ぢやねえ、みんな村の百姓衆が慰みをして呉れりやこそ、寺銭も上るし、男も賣つてゐられるのだ。その百姓衆が死ぬか生きるかの境によ、身體を張らずと、ほかに男の立つ所はなからうぜ」と云ひました圓藏の眼は、怪しい光に閃いて居りました。

「そう云はれりや一言もねえわけだが、俺だつてもこの春から、手の届く丈けの事はして小米の人や何かには盡せる丈けの事はやつて來たが、此の頃ぢや、こつちの賭場は立たねえし、子分の奴等も闕越えをして行くと云ふ始末、その中に村方ではあつちでも野倒死、こつちでも人死だ、五十や百の金ではどうにもならねえ、代官の米倉は、俺もかねてから睨んでゐたが、こいつをやれば第一御公儀へ刄向ふ事になる、いつもの賭場爭ひのようなわけにはいかねえので、俺もつい考へこんでゐたとこよ」

「忠治どん、お主も妙な理窟を云ふな、御公儀が恐くつて、お主やよく無職渡世で暮して來なすつた。俺がさつきも云ふ通り、無職渡世は天下の御法度、その網の下をくゞつても榮耀に暮してゐられるのは、皆んなお百姓衆があるからだ。それに又た御公儀にしてからが、百姓衆がゐればこそ、代官も將軍もあるわけだ。おぎやと產れて來たときから、まさか違つた人間でもあるまいぜ、お前の眼にはどう映るか知らねえが、大盗人の額太郎には、どつちにしてもが一ずぶ六だ。況してお前、そのお百姓が苦しみもがいてゐる時に、首くゝりの足を引くやうな眞似をする、御公儀なんかはあつたつてなくつたつて、同じ事ぢやあるまいか。徳川なんて大きな面をしやがつたつて、昔はお前、どこの盗人だかひよろつきもんだか判つたもんぢやありやしねえ」

『ウンや矢張りお前はどうしても、代官邸をやれと云ふのか』

『お主がやらなきや俺がやる。然し忠治どん本當に男を賣るて云ふ事は、賭場を擴げる事でもなければ、意地張りづくの喧嘩計りをするのぢやねえ、命を捨てる値打のある時を間違はねえように見定めをつける事だからな、こゝがお主のふん張るとこだと俺は思ふ』と圓藏がきつぱりと云ひ放ちましたので、

『有難え圓藏どん、俺の量見も今日で極まつた。賽の目の爭ひからでも捨てゝ了ふこんな身體一つで多くのお百姓衆の役に立つなら、それで俺は滿足だ。俺の胸を極めてえばかりに、お主にこゝまで來て貰つたが、これでもう大丈夫だ。細けえ事は家へ歸つて相談しよう。あゝ日もすつかり暮れちやつた』と云つて、忠治は先きに立ち上りました。舊曆八月末の事でございますから、たゞさへ肌寒い野の面を、薄暗が閉ぢ籠めて冷たい雨は冬のようにしいしく〳〵と降つて居ります。が心の極まつた忠治は、足取りさへも勇ましく、我家を指して歸つて參りました。

久々で面晴れのした忠治の顔を見た女房のお町は、待ち受けて居りました酒の支度を取り急ぐ。忠治圓藏の兩人はその夜は何にもないように樂しげに酒酌み交はして別れて了ひました。

その翌日から圓藏はもとのように毎日忠治の許にやつて來て、その夜の手筈にかゝりました。初め忠治はすぐにも代官邸を襲ふと云ひましたが、圓藏の申しますには、年貢を納める時期も僅かの目の前に迫つてゐる事故、此の秋に代官がどんな風に出るか、やり方に依つては、新米が多少藏に納まつてからでも遲くはあるまい。それまでは先づ村の人達の命のつなぎに、どうにかして纒つた金でも手に入れたいと云ふのでありましたが、その近郷の人だけでも、二千人の數はある、その人達に當座の凌ぎを與へる丈けでも五六千の金は要るのでありました。忠治圓藏の兩名も之れには頭を惱ませましたが、忠治はふと心附いたように云ひ出したのは、

『なあ圓藏どん、近在の物持の所へ押し込みをやつた處で、一箱も纒つた家はねえ、そんなこんなでぐづ〳〵してゐた日にや、こちの身體が危くなつて、思つた事もやり遂げる事は出來やしねえ。所で俺の考へちや、桐生の市へ月々屆く

金飛脚、あいつを一つ脅して無理借りをやらうぢやねえか』

『成る程忠治どん、そいつは好いとこへ氣がついた。京屋も島屋も大名御用、世間の不景氣に法外な儲けをしてゐる奴等だから、否應なしにふんだくつても、迷惑する奴ああありやしめえ』とこゝで相談が決りまして、忠治は乾分のもの二三人を江戸へ探りにたゝせました。忠治は心に定る所が出來ましてからは、がらりと態度を變えまして、日々近在の村方をそれとなく歩き廻つて、農家の窮した有様をそれとなく見廻つて居りました。

さて月日は變つてその年の十月末、江戸日本橋の島屋から、上州伊勢崎の木暮久兵衛方へ屆ける急ぎの金飛脚が、江戸を發つたと云ふ事が、忠治の許に知れました。當時島屋と申せば名だゝる大金持、此の物騒な世の中に、之れ程の冒險をすると云ふのは、その屋臺骨の確りさ加減もほゞ判ります。之れを聞いた忠治いちまきの者達は、しめたと心に喜んで、直ちに手筈に取り掛つて、金飛脚が上州路に入つて來る日を、一時も早くと待ち受けて居りました。

そんな企てのある事とは知りませんが、何分にも急ぎの大金を送る事ですから、宰領德兵衛は充分に用心堅固に致して馬の傍につき添ひ、急ぎ急ぎやつて參りましたのが桶川在、この邊まで參りますと、日はとつぷりと暮れかゝつた、

『馬子どんや、もう日も暮れかゝつたから、こんどついた宿で泊るとしよう、さあ急いで呉れ』と德兵衛の言葉に馬子も、

『さうだお飛脚急ぎますべえ、何んしろこゝらは、此の頃の不作ではあえれえ物騒だと云ふ話だから』と話しながらさしかゝつて參りました松並木、折しも向ふの方から宙を飛ぶように馳けて來ました一挺の垂駕籠、宰領德兵衛があつと云つて身をかはす暇もなくドーンと棒鼻を胴に打つけられました。德兵衛もこんな無法な駕籠とは心づかないから、油斷をしてゐた爲めに、バツタリそれへ引つくり返る。

『この無法者つ』と起き上らうとする奴を、起しもたてず、棒鼻の駕籠舁がいきなりそれへ取つて押へた。

『やあ、われ等あ』と、二人の馬子がたちかゝらうとする奴を、駕籠の中から現はれた一人の武士が、

『え、邪魔しやがるな』と刀を抜いて切りかゝりましたので、馬子はあはてゝ逃げ出します。此の隙に件の武士は馬の手綱を手に取つて、何れへともなく立ち去つた。宰領の德兵衞は、その金取られてはと、ぢたばた暴れる奴を、二人の駕籠舁が手取り足取り、ぐる／＼卷きに縛り上げて、

『氣の毒だが辛抱しろ』と並木の松に結えつけて、空駕籠を舁いで、逃げ去りました。改めて申し上げるまでもなく、之れこそ忠治身内の者にして、棒鼻に居りましたのが三津木の文藏、後が成塚の三代太郎、何れも腕達者の者にして、武家姿をして居りましたのは、日光の圓藏でございます。德兵衞の押えられましたのも誠に無理のない事でありました。

扨て忠治におきましては、それより四五日經ちましてから、島屋の飛脚より奪ひ取りました三千兩を、小さな袋に分けまして、夜に紛れては近郷近在の貧家に施して廻りました。何に致せ喰ふに米なく着るべき着物もなく、霜月近い寒空に、今日明日にも餓え倒れようとしてゐた人々が、何處の誰人からとも解らないが惠まれたその金は、何れ程身に沁みて有難く感じたか解りません。始めの中こそ誰れの仕業か解りませんでしたが、その内に誰れ云ふとなくあの惠み金は國定の親分の手から出たに違いないと云ふ事が自づと世間に擴がつて參りまして、佐位郡一圓から附近へかけて窮民は、忠治を神のように敬ふようになりました。したがまた之れと共に、八州捕方の役人の眼も、忠治の上に注がれるようになりました。桶川在の往還に於て、江戸島屋の宰領を縛り上げて、三千兩の金を盜んだ者が今以て分らない。そこへ世間の噂では、此頃夜に紛れては村方に施しをしてあるく者は、確かに國定村の忠治の手から出てゐるとの事、之れは不思議と睨んで居りましたが、何にしろ村の者の忠治を敬ふ事一と通りではない、之れにうか／＼手をつけたなら、苦しまぎれに荒み切つた此の村に、どんな騷ぎが起るとも計られないので、手をつける事が出來ません。誠にかうなりますと、お百姓衆の力も大きなものでございます。

忠治が盜み取りました三千兩の金もこんな風で、瞬く中に失くなりましたが、何に致せその當時は物價悉く法外の高

價でございましたから、貰つた者も僅かの金は見る見る中に消えて了ふ。たゞ此のお蔭で儲けたのは、近在の物持ちで、かねて買占めて居りました五穀木綿等をしたゝかに儲けて賣りつけた人達で御座いまして、忠治が苦心の金も結局は、金持共の手に逆戻りを致したに過ぎませんでした。

こゝに於きましてか忠治は、再び上州太田の大光院に忍び込みまして、寶藏を破つて二千兩を盗み出し、村方に施行を續けて居りましたが、斯くする中に、十一月も中頃となりまして、愈々農家の年貢時となりました。

國定村から程遠くない宮子村と申しますのは、當時大阪の町奉行を勤めて居りました跡部山城守の所領地でございました。所がこの山城守は奸佞邪曲の役人でございまして、當時關東は申すに及ばず、關西の民百姓も昨年來の凶作の爲めに塗炭の苦しみにもがいて居ります事を知るにも拘らず、身は奉行職の權を擅まにして、大阪市中の豪家から賂賄を受けて、彼等が買占め賣惜みの策に出で、暴利を貪るのを見逃して居る計りでなく、自分の所領地、上州宮子村の百姓に對しましても、打ち續く凶作を知つて知らぬ顔を極め込んで、年貢を免除致さうとも致しません。

また此の宮子村を預る代官松井軍兵衛は、山城守に輪をかけたような強慾な奴で、山城守の藏に納まる年貢米の頭をはねるような事にばかり心を苦しめて居りました。されば世は打ち續く凶作で、西に東に野倒れ死に、行き倒れた人々は、日に日に出て來ると云ふ有様なのに、此の代官の藏の中には、昨年からの貯へが夥しく隱されてあると云ふ始末、村の者は申すに及ばず、近郷近在の者誰一人として此の代官を憎まぬ者とてはございません。さて愈々年貢時となりましたが、村方では納める米一俵ある所か、多くの者は忠治の惠み金でわづかに九死に一生をつないでゐるといふ有様、いかな強慾な代官でも、今年こそは年貢を免じて呉れる事と、村の者一同は考へて居りました。

ところへ一日、村名主の許へ代官よりの呼び出しが參りました。村名主の傳兵衞は何事かと思ひながら、早速代官所へ出頭致すと、

『本年の年貢米、今以て納めざるは村方の不行屆、早々立ち歸つて納めさせざれば、名主傳兵衞は入牢申し付ける』と

云ひ渡されたのでありました。物に慣れました傳兵衛も、之れにはほと〳〵驚いて、

『お代官様へ申し上げます、御承知でもございませうが、村方は申すに及ばず、此の近郷近在は昨年からの凶作でお納め致すどころか、その日の物にも差支へて餓え死致す者すら出ると云ふ始末、手前村方の者に代つてお願ひ致しますが何卒本年は年貢御免の儀御聞き屆け下さいまするやう』

『身勝手な事を申すな』と一段高い所に着座致した軍兵衛は強慾の青筋を太く立てゝ怒鳴りつけ、『村方凶作ならば何故速かに願ひ出ない。かゝる事に口實を設けて年貢を逃れようとは土百姓の分際で生意氣千萬な奴等、米がなければ金で納めろとさう申せ、向ふ三日の中に納めずば、村方總代の名主を捕へて、入牢申しつけるから左樣心得ろ』と云つたまま座を立つてしまひました。

傳兵衛は再び取りつく島もなく、すご〳〵村に立ち歸りまして重立つたもの數名を集めて、今日の出來事を話しましたが、村方の者も承知しません。

『何をあの惡代官の野郎奴、己が物欲しさに役目を笠に着て、難澁してる百姓をまだ苦しめやうとするばかりか、名主どんまで牢に入れようなどとは以ての外の奴だ。名主どん、牢なんかへ行く事はねえ、その前に俺等みんなして代官屋敷を打ち壞して了ふべえ』

といきり立ちましたので、宮子村は一時にぱつと殺氣立ち、いつ如何なる騷動が始まるかも判らないと云ふ有樣、すると此の事が直ぐ樣ほど近い國定村の忠治の耳に這入りました。忠治は之れを聞くと直ぐ樣圓藏を一室に呼び、

『さて圓藏どん、秋の年貢まで待つてゐたがいよ〳〵遣らなきやならない時節が來た。宮子村の代官は、昨日名主を呼び出して、三日の中に村方の年貢殘らず納めなけりや、名主に入牢申しつけると云つたとかで、宮子村では百姓一揆でも起りさうだ、今日知らせて來た奴がある。俺達の身體を張つて、お百姓に御奉公をする時が愈々來たと俺は思ふが、お前はどう考へる』

『そいつあ好いきつかけだ。それに此頃は、お上の身體の詮索もだん〳〵厳しくなつて來た様子、それぢや事を急がうぢやねえか。したが忠治どん、宮子村の代官をやつけりや、いくらお上でも此の土地に安閑としてゐるわけには行かねえ、と云つて宮子村の代官だけをやつけて土地を賣るのも飽氣ねえ　それで俺の考へぢや、身内の者二三十人が、赤城の山に立て籠つて、非道と聞えた代官庄屋は、片つ端からやらうぢやねえか』といつも考へ深い圓藏の忠言に、忠治は直ぐに同意して、女房お町に十數人の乾分を添へ、山籠りの支度をさせて、夕暮方から、赤城の山に立ち退せました。

殘る乾分の十數人も、何れも決死の若者でございます。女房のなくなつたがらんとした部屋に、百目蠟燭をあか〳〵とつけて、酒盛を始めました。部屋の中には何となく物凄い殺氣が溢れて居りました。その時忠治は一同の乾分に向つて、

『お前達にちよいと話して置く事があるが、今夜の切込みはいつもの賭場や縄張の爭ひとちがつて、相手はたとへ悪人にしろ代官だ、こいつをやつつけた揚句に、公儀へ手向ひした謀叛人と云ふ事になるが、お前達はそれでも異存はねえかどうか、判然りこゝで云つといて與れ』と念を押しましたが、

『親分のなさる事なら、俺達に異存はございません』と誰れ一人として不服を云ふ者はありませんでした。

『そうか、それなら有難い、俺も圓藏どんの話を聞いてからすつかり度胸を定めたのだが、今度俺達のやる事は、本當に男を賣る事だ。俺達がふだんから、握り睾丸でノラクラしてゐられたのも、米が喰へたのも着物が着られたのも、考へて見りやみんなお百姓があればこそだ。之りや俺達ばかりぢやねえ、世間の奴は皆んなさうだ、領主だの代官だのごたくをつきやがつたつて、奴等もみんな百姓の上前取りかすり取りだ。そして大きな面をしやがつて、領内の者が今日明日にも死にかけてゐるのも構はず、まだ運上を取る氣でゐやがる、巾着切だつてもう少しは物の道理が判つてゐる。だからお前達も代官だなと怖氣を取る事あちつともねえ、犬畜生たと思つてたゝき殺せ』と云つて、忠治は一同に勇氣をつけました。全く忠治にしましても、今夜こそ、男と生れた生甲斐のある事をするのだと思ふと、仁俠に燃え立つ血

は、身體の中でときを提げて、走り廻つてゐるような氣がするのでありました。

茶碗酒と燒するめに勇氣をつけました一同は、その夜もとつぷりと暮れてから千草の股引に足拵えを嚴重に致し、長脇差に、鉢卷、キリヽとした姿を致して、清水の岩鐵、板割の淺太郎、三つ木の文藏、成塚の三代太郎などと云ふ腕利の兄貴らを先きに立て、圓藏、忠次は殿りとなつて、暗に紛れて國定村を立ち出でて宮子村へ着いたのは夜も稍や更け初めん頃、代官屋敷の裏表に二手に別れ、塀を乘り越へ門を壞して、なだれ込む、此物音に眼を醒まされた松井軍兵衛、たゞ事ならずと、手槍を取つて立ち出でる、用人小者も追つ取刀で起き出した所へ、玄關口を叩き壞して乘り込み來たつた國定忠治

『やい聞け宮子村の惡代官、領內の百姓小者が餓え死にするも顧みずに、己等ばかりの奢りにふけり、尙ほそれでも足りねえで、年貢の代りに名主を牢に入れようとしやがつた犬畜生にも劣つた奴、國定村の忠治が天に代つて成敗してやるから出て來やがれ』と、破るが如き大聲で怒鳴りました。之れを聞くより松井軍兵衛、

『やあ土民の分際で僭越至極』と手槍を取つて突きかゝつて來た、此者元來寶藏院流の槍の使い手人でありましたが、勇氣に滿ちた忠治の切つ先に切り立てられ、ついてその場に落命致す。用人小者は、圓藏初め、乾分のものに悉く仕止められた。

夜中とは云ひながら、この物音を聞きつけて、代官屋敷に何事が起つたのかと馳けつけて來りました村の人々に、忠治は懇ろに挨拶を致しまして、

『えゝこれは宮子村のお百姓衆でございますか、手前は國定村に住居致す忠治でございます。此の度御當所の代官が沒義非道の事を致す事を聞きまして、手前皆樣に代つて成敗に來りました。後々御公儀のおとがめは手前一身で引き受けますから、どうぞこの藏の中の者は皆樣の方へ御引き取り下さい。之れも皆んなお前さん方の血と汗だ』と、穀倉を開いて俵を表に投り出し、家の中からは衣類道具を皆な表に運び出してから、此の屋敷に火を放ちました。

赤い火が宮子村の夜の空に炎々と燃え上つた時、今まで幾度か刄の下に身を張つて來た事のある忠治も、付て味つた事のない、何とも云へない快さにしばらくは恍惚として居りました。

扨て夜もまだ明けない中に、忠治はかねて乾分をさきにやつてある赤城の山の瀧澤不動に引き揚げて了ふ。宮子村に於ては昨夜國定村の忠治が、代官屋敷に押し込んで、代官を殺害致し、家屋敷を焼き拂つて立ち退いたと云ふ丈けで、米雜穀その他のものは、皆な村方の人の物となつた。之れが爲めに此の村の人達はどれ程助かつたか知れません。その後忠治は時々に赤城山から下つて來ては、惡代官惡庄屋の邸に押し込んでは、火を放つてその財貨を村人に分けて了ふ。之れが爲めに上州一體の政治向ががらりと代つて、到る所に年貢米御免となり、遂に救助米まで出るに到りました。が、一方では、八州の役人も遂にぢつとしてゐる事が出來なくなつて、赤城山の山狩が始まると云ふので、忠治は自分の志は略とゞいた所から、圓藏始め多くの子分と袂を別つて、信州路に立ち退きました。國定忠治代官屋敷襲撃のお話は之れを以て終りと致します。

布施太子の入山正誤表

頁	誤	正
三七	股倉（またぐら）	跨（またぐら）
	跨	泥足
	操つて	操（くすぐ）つて
	鼻正雁贋	鼻正雁偐
三八	面付	面（つら）付
	困らないものゝ	困ら（おそれ）ねいものゝ
	塵埃	塵（み）
	ゐがやるぜ	ゐやがるぜ
三九	無になる	無（むい）こなる
	お安くないぜ	お安くねいぜ
	働きたかあねいん	働きたかあねハん
	だ	だが
	（波羅門 丁馬に乘	波羅門丁（馬に乘
	つて	つて
四〇	正に肌を	乙に肌を
	怒鳴りがつて	怒鳴りやがつて
四三	もら見える	もう見える
	羨や膾や滋味の豐	羨（みつもの）や膾（なます）や滋味の
	かな肉羹	豐かな肉羹（しる）
四四	雪山	雪山（せつざん）
	仕成して	化成して
四七	仲間の人夫	仲間の人夫
	殿下が自分で	殿下が御自分で
	ものだかり	ものなのだから
四九	違り甲斐のある	一番遣り甲斐のあ／る
五三	金も、食物さえも	金も―食物さえも
五四	貪欲な	貪欲な
五五	頸輪	頸輪
	大富りだね	大富りだね
五六	枕は	杖は
五七	凝り困つた	凝り固つた
五八	今日の様な	今日の様に
五九	牙を剝ぎ	牙を剝（ひ）き
	刀検し乍ら	刀を検し乍ら
	聞える。外はひつ	聞える外はひつそ
	そり	り
六〇	試つて見やう	試（や）つて見やう
六五	鞭を以て	杖を以て
	お願だから	お願ひだから
六七	お呼びで	お呼び止めで
	檀特山	擅特山
八六	ござりますから	ございますから
	罵く	罵（つ）く
	末だ	末だ
六九	謝く	響く
七〇	看護	看病
	患謝どだけでも	患謝とだけでても
七一	鞭で	杖で
七二	狂う	狂ふ
七三	そうだ	さうだ
	おゝ妃よ	おゝ。妃よ
	檀特山	擅特山
	方へ道を	方の道を
	申上ますする	申上げまする
	いゝ價の	い價（ね）の
	眼付をしやがつた	眼付をして云やが／つた
七四	流石がに格のある	流石に格のある面（つら）
	面を	を
	望みならきそして	望みならさうして
	恐いぞ	恐いそ
七五	曳ばり	曳つぱり
	剝き出し	剝（む）き出し
	資本にして	資本（もとで）にして
七六	縛つて	縛（しば）つて
	咽喉	咽喉（のど）
	胸が苦しく	胸が惡くて
	へたばつて	いゝへたばつて
七七	異形の者	異形（いけつ）ハ者
		いゝゝゝ
	あづり糞	あづり糞
	くつ付いて！	くつ付いて
七八	汝を一番 貴重な	汝は一番貴重な
	誓言 實行	誓言の實行
八〇	羽衣	肌衣
	ならなねい	ならねい
	つかつか妃に	つか／＼と妃に
	ならないのなら	ならないなら
八三	慟哭す	慟哭す
八四	蹉き	礎き
八五	太子畢生の力	太子に畢生の力
	どうしてもどうし	どうしても―どう
	ても	しても
	我を成し	我を成し
八七	苦戦にムりまする	苦戦でムいます
	國を出られて	國を去られて
	我が脊よ	我脊（せ）よ
	殺から	發かれ
	塗炭の苦しみに	屍胴の下に哭かな／ければ
	無闘の土と	無間の土と
	修羅の巷で	阿鼻の巷で
	屑を焦して	放たれて
八八	法外であるぞ	法域だ

編輯局の疎漏によりて校正に非常なる誤謬を來したるは倉田氏に對して申譯がない、玆に陳謝すると共に、讀者に對しても厚く謝する次第である。（記者）



創作



星

佐藤春夫

第一齣

泉州城に近い英内の豪家陳氏には三人兄弟の息子があつた。陳氏は代々、富もあり譽もある家がらで、一番年上の兄は早く立身をして、近ごろ兩廣巡察使になつた。まだ年若な二番目と三番目とは、志を立てゝ故郷で勉強してゐる。この三番息子の少年を陳氏の第三男といふわけで、陳三と呼んで居る。

第二齣

陳三は誰からであつたかは知らないが、星を見ることを習ひ覺えた。さうして秋の或る晩、はつきりした星月夜に、無數の星のなかから一つの星を見出した。それは疑ふべくもなく陳三自身の運命の星であつた。何故かといふのに、幾夜試みて見ても、その星は陳三の目の瞬く度ごとに瞬き光るのであつた。さうしてこの一つの星より外には、そのやうな星は一つもなかつた。陳三は、そこでその星にむかつて祈りを上げることにした。

第三齣

「どうぞ、私の星よ。私に、世の中で一ばん綺麗な娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出來る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。」

陳三の星に祈つた願事はこのとほりであつた。

第四齣

今年、秀才の試驗に應ずるための讀書と詩作とに疲れて秋の夜の庭に出た兄は、陳三のこの言葉を聞くともなく偸み聞いた。兄は陳三の祈願を陳三に向つて哂つた。

「お前は馬鹿なことを祈つた。若し私がお前なら、私や妻や子供のことなどは決して願はなかつたらう。その代り自分自身のことを願つたらうに。自分の子供などではない、自分自身が世の中で一番えらい人になるやうにつて！」

「さうです、兄さん」素直な陳三は、そこで答へた「私とても最初はさう願はうとは思はないではなかつたのです。しかし私は考へ直した。自分がえらい人になるだけの事なら、どうやら自分だけの努力で出來さうな氣もする。それにひきかへて、世の中で一ばん美しい娘にめぐり逢つたり、その娘の心をひくことが出來たり、その上その娘を妻にすることが出來て、その妻によつて子供を持ち、しかもそれが世の中で一ばんえらい人になる――こんな仕合せこそは、自分の身の上のことでしかも自分の努力ではどうにもならない。これこそ星の力にたよらなければならない事だと私は考へたのです」

「なるほど。しかし」と兄は遮つた「私はまたかうも思ふ。運命といふものはお前が考へるよりももつと大きな力であるかも知れない。假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來て居るとしたら、お前の熱心な祈願も、それをど[illegible]

け善くかへることが出來るだらうか。一たい私は星を信じない方だが、それともお前よりももつと信ずると言つた方がいいかも知れない。何にしろ、星に祈るのも無駄なことではなささうだ。私の星は、それなら、どの星であらう。」

兄弟はこんなことを語り合つて、もう一度目を上げて空一めんの星屑に見入つた。

第五齣

「……假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來て居るとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ善くかへることが出來るだらうか。」――何氣なく兄の言つたこの言葉は、恰も陳三の祈りを聞きとどけた星が、豫め兄の口を借りて陳三に告げて置きでもしたかのやうに、後になつて思ひ合されることがあつた。

第六齣

幾年かは經つた。自分自身の努力でえらい人になると言つた陳三の兄――二番目の兄は、志を遂げて兩廣總督の役につくことになつた。それには、數年來引きつづいて兩廣巡察使を勤めてゐる長兄の手びきが有力であつたことは言ふまでもない。

第七齣

陳三は得意な兄を見送つて潮州城まで來た。そのころ厦門附近のどこかに根城を置いてゐるといふ噂のあつた怖ろしい海賊を避けて、今日まで馬上で來た兄の一行は、ここで馬をすてて船路を廣東の任地へ行くのである。

「順風(スンホン)！」

陳三は兄に別をつげてから叫んだ。

兄の船は六月の海の朝あけのなかに帆を上げた。岬をまわつて南の方へ小さな帆はかくれた。

第八齣

物珍らしい潮州の城内を見物しやうと陳三は馬に跨つた。兄を見送つた日の午後である。夢多い初夏の空の下を若い陳三は馬上でさびしく考へ耽つた。兄は志を遂げて、今、兩廣總督となるのである。さうして兄はもう既に美しい妻をも求め得た。然るに自分は・・・

自分は自分の星に向つて祈願をこめてからもう幾年か經つのに、まだ世の中で一番綺麗だと言はれる女を見た事さへない。星に對する自分の祈願は果して聞かれたのであらうか。陳三はかういふ風に考へ耽つてぼんやりと馬の行くに任せて居ると、ふと空の何處かゝら絃の音が聞こえるやうな氣がするので、首を上げた。

陳三の目の前には、立派な門の向ふに茂つた樹の上に聳えて一つの高い走馬樓があつて、すべては陳三の目に幻のやうであつた。何故かといふのに一人の世にも美しい娘が、走馬樓の欄に輕く背を倚せて絃を玩んで居るからである。黑い衫につり合つてその横顏が白い木蓮花のやうに白い。

たゞうつとりとして眺め入つて居た陳三は、思ひきつて聲を張り上げて歌つた。絃の音に合せてゞある。欄干の娘は驚いてふり返つたが、蓮葉な調子で素早く物を投げる手つきをして、つと房の中へ這入つて了つた。

陳三の馬の前には一つの早く熟した茘枝の實が投げ落ちて、陳三の目には限りなく美しい嬌顔と、掌上の舞をも能くするやうな細い姿とが輝くやうに映つて消えた。

第九齣

陳三は馬をとめて、今來た道の方を指して行人にたづねた。あの娘の家は黃氏の屋敷である。あの娘は黃氏の五番目の娘である。世の中で一番美しいと花朝の日以來、潮州の人々が噂する娘である。行人はさう答へた。さうして確に、

黄五娘こそ世の中で一番美しい娘である！　陳三は手綱と一緒にあの地上に投げられた茘枝の實をもしつかりと把つた手が汗ばんで、心臓が高くとどろくのを感じた。

かうして陳三は世の中で一番美しいと言はれる娘、黄五娘を見たのである。

第十齣

黄五娘の家には代々傳はつてゐる家寳の古鏡がある——陳三は、宿にかへつて再び黄五娘の噂を聞いた時に、この鏡のことをも聞知つた。何氣なく聞き捨てた鏡のことが陳三に一の思ひつきになつた。さまざまに考へ明した一夜ののちに陳三は宿の下男を呼んだ。さうして彼の立派な袍と衫と褌とを脱ぎすてて、その上に馬掛まで添へてこの貴公子の着物を、宿の下男のふだん着と取り換へやらうと申込んだ。

第十一齣

ある朝、遠いところから歩き廻つて來た鏡磨ぎの工人だ、家代々の秘法を傳へた鏡磨ぎだと名乘る一人の若者が、黄氏家に來て御秘藏の古鏡を磨ぎたいと乞ふた。

彼は永い初夏の日を一日中丹念にそれを磨いた。夕方になつてやつと磨き終つて奩に納めやうとした時に、鏡は奩とともに石甃の上に墜ちた。奩は幾つかに砕け、鏡は鵲の翼に沿うて二つに破れた。工人は誤りてとり落したのだと言つた。人人は罵り叫んでその工人を責めたが、最後に主人が出て來て、一たいどんな方法でこの貴重な寳の代を仕拂ふつもりかと詰つた。

「仕方がない。私にはもとよりそんな大した銀はない。私はただ自分の身の代でその償ひが出來るだけである。私は何年でもこの鏡の代を仕拂ふに足るだけの年月を、この家の奴隷になつて働かう。」見なれない工人は潔く卽座にさう言

ひきつた。さうして何故か微かに笑をつつんだ顔を上げて「私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡奩とを當家に贈らうと思ふ」さう言ひ足して人人を見まはした。

この騒ぎを人かげに隠れて見て居た五娘はこの時初めて若い工人を見た。眩しいものを見た時のやうに瞬きした。この工人はどことなく、昨日、自分の家の門前を自分の絃に合せて歌つて過ぎたあの馬上の若者にそつくりだ。五娘は訝しい事に思ふと同時に、或は昨日のやさしげな若者の姿がまた目にのこつて居て、この工人までがあの若者に見えるのではなからうかとも疑つた。

第十二齣

鏡磨きの若い工人は、そこで黄五娘の家の奴隷になつた。五娘は、その日からこの奴隷のことが何となく氣がかりで深窓のかげからたへず彼を注視した。又、彼をさういふ風に注視する機はいくらでもあつた。何故かといふのに、この奴隷の方でも亦たへず五娘の目にふれやうと望んで居るらしいからである。さうして五娘は、遂に、確にこれはあの馬上の若者に相違ないと信じ出した。

「私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることはない鏡と鏡奩とを當家に贈らうと思ふ。」かう言つた時の彼人の言葉と微笑とを思ひ浮べて、さかしい五娘にはすべてがわかるやうにも思ひ、またそれは思ひすごしのやうにも考へたりした。鏡奩を人に贈るといふことは、婚約をしようといふ事であるからである。五娘は彼を怪しい奴隷だと思ふ。

五娘はこれらの事をもとより誰にも洩しはしない。たつた一人、五娘の召使ひとも友達とも言ふべき益春にだけは打開けたい氣がする。（以上訂正再録）

第十三齣

益春は洪氏を名乘るものであるが、幼い時に身なし兒になつて黄氏に養はれた。五娘とは兄弟のやうに育つて來て、生れながらの兄弟よりももつと仲がよかつた。五娘も益春も同年で、今年十五であつた。この益春も亦なかなかの美しい娘であつた。五娘を妖艶といふならば、益春はどうしても冷艶と言はなければなるまい。五娘の美しさには地上の豊かさがあり、益春の美しさには天上の靜かさがあつた。五娘の美しさのなかには人をそそり人を醉はせるものがあり、益春の美しさのなかには人を醒めさせ人をひき入れるものがあるやうに思へた。それ故に、人によつては五娘よりも益春の方がもつと美しいとも言ふであらう。或はさう言ふ方が正しいかも知れない。この益春が五娘の召使ひになつてゐるのである。それに就ては一つの挿話がある。

第十四齣

五娘も益春も兄弟のやうに育つて來て、互に相手の美しいのを愛し合つたが、二人とも年ごろになるに從つて互に相手の美し過ぎるのが氣になり出して來た。お互に、どうかすると自分よりも相手の方がもつと美しく見え出したからである。

「私とあなたとは一たい、どちらが美しいのでせう。」或る日、無邪氣な益春はたうとうかう言ひ出した。

「いづれあなたの方が美しいに違ひない。しかし、それは私たち自分ではわからない事です。誰かほかの人、澤山の人たちから見てもらつたのでなければ。」かう五娘が答へた。

こんな可憐な問答の末に、二人は、花朝の日を卜して城中を歩いて、道を行く人たちに、二人のうちのどちらが一層美しいかといふことをきめて貰はうといふことに決した。さうして娘たちは冗談のやうに自分たちの一生を賭けた。この競爭に負けたものは、一生、勝つたものに仕へよう。――二人は仲がいいのだから一生離れまい。さうして勝つたも

のは、自分の愛するものを好きに擇んで、或は擇ばれて、自分の夫にしていい。負けたものは勝つたものと、その擇んだ男子とに仕へて、勝つたものの夫の第二夫人にならうといふのであつた。

第十五齣

花朝の日が、間もなく來た時に五娘が言つた。

「さあ。この間の相談を實行しませう。それでは、先づあなたからさきに街を歩いてゐらつしやい。」——この言葉には、さかしい五娘のたくらみがあつたのである。

益春は五娘の言ふがままに、新らしい裝を凝らして街を歩いた。群集は老幼も男女も皆、益春を見て立ちどまつた。蜃氣樓を見るやうに目を見張つた。ふりかへつて見送つた。若者たちは囁いたり、叫んだりした。

「どこの娘だらう。」

「世にも美しい娘だ。」

「ほんとうに美しい。」

「あの赤らめた顔を見い。」

「この娘は何の花であらう。」

第十六齣

「さあ今度こそ私の番です。」自分の聞いたとほりを傳へる益春の言葉などには耳をかさずに五娘が言つた。「そのあなたの着て行つた着物をお貸しなさい。ふたりとも同じ着物でなければ不公平だから。」——この言葉にもさかしい五娘のたくらみがあつたのである。

五娘は益春の着てゐた淡紅の衫を着て街へ出た。群集は老幼も男女も皆、この淡紅を着た娘を見てもう一度立ちどまつた。人人は叫んだ。

「やあ、さつきのあの美しい娘がまた通る。」

この聲と一緒に、五娘はにこやかな顔を上げて人人を見まわした。

「いや、違ふ。さつきの娘ではない。」

「さつきの娘ではない。だが何といふ美しい娘だらう。」

「さうだ。さつきの娘にも劣らない。」

「寧ろもつと美しいくらゐだ。」

「もつと美しい。」

「もつと美しいとも。」

五娘は簇る瞳のなかを世に最も小さな二つの足でよろめきながらゆつくりとくぐり抜けた。自分の豫期したとほりの言葉を浴びてほほ笑みながら。

第十七齣

潮州城中の人人は、その日、今年の花朝には、歩く花のまぼろしを二度見たと噂をした。或者は、さきに歩いたのは秋花の精であり、あとから歩いたのは春花の精であるとも取沙汰をして喜んだ。この人たちは斬新な空想もないのに、徒らに世の常ならぬことを言ふのを好む人人であつた。

第十八齣

五娘は群集の心持をよく知つてゐたのである。人間といふものは言葉に釣られるものだといふことをも勘づいて居たのである。先づ、五娘は同じ着物で益春のやうに裝うて人目を引いた。益春と自分とを比べさせようとした。さきに一度、益春を讃めた群集は、すぐそのあとに現れてしかもその美しさを何れとも言ひにくい五娘を、益春と同じ程度に讃めるためには、つひ、實際以上に言葉に力を籠めざるを得ない——

「この方がもつと美しい」と。

さかしい五娘はそのさかしさで人の心を捉へた。五娘は「世にも美しい」「ほんとうに美しい」益春よりも「もつと美しい」ものになつた。かうして五娘は益春に勝つた。素直な益春は笑ひながらあきらめて、いづれは養はれた身でもあり、滿足して五娘の召使ひになつてゐる。

心驕りのした五娘はその爲めに一層美しさを增した。心の卑下つた益春はその爲めに一層美しさを增した、今日々に。

第十九齣

益春のこの美しさは新らしい奴隸の目にも映ぜずには居なかつた。時には五娘よりも、何の粧ひをもしてゐないこの召使ひの方がもつと美しいやうな氣持ちがする。しかし若者はさう思ふたびに、はつと氣がついて、五娘に思ひを懸けてこの家に來ながら、益春のことを考へることのある自分を貞操のないものと考へて恥ぢて居る。この若者は一本氣な男であつた。その上に、氣を負うた彼は、いつも顏を合すことの出來る召使ひ益春よりも、奧深い窓の陰に僅に見ることの出來る五娘の方に多くの夢をよせた。それを得なければならない心持が切になる。出來にくさうなとがしたかつた。

第二十齣

「どうぞ、私の星よ。私に世の中で一番綺麗な娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出來る私の

男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。」

陳三は、人にかくれては自分の星に、今でもやはり同じ願事を祈つてゐる。以前よりももつと切なく祈つてゐる。

第二十一齣

荒くれた卑しげな奴隷たちに雜つて、同じ荒くれた卑しい仕事をしてゐながらも、鏡磨きであつた奴隷には確に哀んでも哀みきれない品格があつた。それが益春にも感じられる。柔かな目つきで益春は、秋の入日のなかに重い石臼を曳くきやしやな奴隷を、いたいたしさうに見る。

第二十二齣

五娘はまた、あの怪しい若い奴隷をいつまでも何となく氣にかけてゐて、冬の夜がたりに、益春をつかまへてはその若者の噂をしたがるのであつた。五娘が言ふには――どうもあの奴隷は唯の身分の賤しい若者ではない。――鏡磨きの工人にしたところであまり品がありすぎる。――何かわけのある人に相違ない。――といふのは、實は、自分はあの人が、大きな馬に乘つて、眞珠のやうに白く光る袍の上に空色の馬背を着飾つて、この家の門の前を通つて行くのを見たことがある。――それは夢まぼろしのやうな話ではあるが、決して夢や幻ではない。この初夏のころのことであつた。さう、五娘は今、まのあたりにそれを見つづけてゐるかのやうな目差で話しつづけるのであつた。

第二十三齣

このやうな月日のなかに、益春は嬉しいやうな悲しいやうな、切ない立場に置かれてゐる自分にはつきりと氣がついた。といふのは、心ひそかにいたいたしいと思つてゐるあの、きやしやな奴隷といつからか物かげで口を利くやうになつたかと思ふと。その人は益春に向つて五娘の戀しさを打明けた。「お前がなつかしい」と囁いたのではないのである。

益春はひとりで、よく、いつか五娘と冗談のやうに取交したあの一生の約束を思つて見る。さうして奴隷といふにはあまりやさしすぎるあの人が、ほんとうに五娘の言ふとほり、何か身分の高い公子であつてくれればいい。いや、それほどえらい人ではなくとも第二夫人ぐらゐ持てる人であつてくれればいい。おお、あの人が眞珠のやうに白く光る袍の上に栗色の馬掛を着飾つて……大きな馬に乘つて……。それが目に見えて來るやうだ。五娘はその立派な公子の夫人になる。それから、それから、自分はせめて第二夫人にでもいい。その公子の妻になりたい。それともあの人は自分の事などはどうせ何とも思つてはくれまい。――益春は冷い牀のなかで、熱い溜息をつく。さうして體が顫へる。膚の寒さのためであるか、心の熱さのためであるか、それは彼の女自身にもわからない。益春は誰に向つても一言も洩しはしない。益春はやるせなさを貯へて泣く。

第二十四齣

五娘は嬌羞によつて、益春は淸愁によつて、ふたりはそれぞれに益々美しくなつた。天から美しさを惠まれてゐたふたりは、何につけてもただ美しくなるばかりである。

第二十五齣

たうとう、益春は、あの奴隷からの言葉を五娘に傳へなければならなくなつた。

「私はいかにも去年の六月にこの門前を馬で通つた。――私は私の星の命ずるままに五娘を見出したのである。――私は泉州城外の英内の陳といふものの第三男である。長兄は閩浙の巡察使である。次兄は去年、兩廣總督になつた。私には、然し、何の官位もない。――但、私の今の唯一つの願ひは、人間といふものはどれだけ深く妻を愛することが出來るか、また妻からどれだけ深く愛されることが出來るか、私はそれを自分の身で知りたいだけである。私は神仙を望

まない。人間の幸福が欲しい。――私の故郷には五落の家がある。私の心には五娘を慕ふ一途な心がある。私は今こそ人傳てでなくそれが言ひたい。」彼の奴隷は益春にさう言つたのである。

益春は五娘にさう傳へたので、

五娘は顔を隱して、餘韻のやうに顫へる細い聲で益春に言つた。「あの人と逢はう。」

第二十六齣

益春は、自分の意中の人を、ひそかに、自分ではない娘の房の扉に導いて置いてから、彼の女はひとり牀に伏し倒れた。倒れて泣いた。その次の日の朝は、陳三も五娘も益春も、互に、目を伏せて相手の目を避けた。益春は苦しく、怖ろしく、悲しく。他の二人は苦しく、怖ろしく、嬉しく。

第二十七齣

僅に數日の間に、益春は永い喪に服した人のやうに痩せ衰へた。心がうつろになつて、一日が一月のやうに永い。ただ影のやうに靜かに召使ひの仕事に動いてゐる。吻と吐息をして窓から、咲き誇つたさまざまの花を見て見る。益春の氣に入る花は一つもない。皆、去年の春の花とは違つてゐる。ぼんやり見つめてゐると涙が目にたまつて來た。その益春の肩へやわらかにしかし不意に手をかけて、五娘が低い聲に力をこめて言ふ。

「春が來たのに、どうしてさう悲しいの。悲しまなくてもいいのです。あなたはあの方の第二夫人になるのだから。私は去年の花朝の日の約束を忘れはしません。」

益春は訝しげに五娘の顔を見た。大きな蝶が庭から迷うて來て、五娘のかさしてゐる金色の花に戯れて去つたのを、益春はうつけたやうに見送つて、何もないところをぢつと見た。

第二十八齣

若しさう言つてくれたらどんなにか嬉しからう、とさう思つて時々自分で自分に囁いて見るその通りの言葉を益春は聞いたのである。容貌みにふと考へてみるのと寸分も違はない言葉を聞かされて益春は自分の身を信じない。この言葉が怪しくないのなら、益春の住んでゐる天と地とそのものが怪しい。漸くして、しかし、この言葉を言つたのはほんとうに五娘で、またその五娘は本氣でこれを言つたのだといふことが益春にも信じられるやうになつた。さうして五娘がもつと詳しく話し出した時に、益春には出來事がもう一層夢としか思へなくなる。――五娘は、今、陳三につれられて泉州へ行かうと決心をしてゐるのである。はげしい愛慾にひかれて、この情熱に富んだ娘は父の家を惜しげもなく出て行かうといふのである。益春はこの養はれた人の家を見捨てるのさへなかなかためらはれるのに。

第二十九齣

「かうなれば一日も早く家出をしよう。その上で改めて私の家からあなたの家へあなたを貰ひに行かう。それより外には方法はない。――でなければ。年とつた人人といふものは氣の毒にも疑ひ深くて、この奴隷を、自分の娘を與へるに相應した若者であらうとは、容易に信じてはくれまい。――さきの日に家の寶の鏡を壞した時にやつと命を助けられた私は、今それ以上の家の寶であるあなたを盗んだことが知れたら、今度こそは殺されるであらう。――奴隷には娘をくれまい。けれども英内の陳の家にならばきつと拒むまい。――どうしても私の妻になつてくれやうといふのなら、早く私と一緒に逃げてくれ。――道は長いが危くはない。私は來る時に通つて來てその安全なのをよく知つて居る。――私は路銀にと思つて金と銀とを土中に埋めて置いた。――私と一緒に行かう。――愛があるならば疑ふな。」さいふの夜陳三は五娘にさう言つた。五娘は言葉のとほりに陳三を信じた。しかし五娘ひとりで、たとひ思ふ人と一緒にでも、…

んな遠いところへ行くのは心細い。五娘は益春にも別れたくはない。また益春と二人の方がまだしも年とつた母が安心する。益春のことを五娘は陳三にも話したのである。

「…だから、さあ私たちと一緒に行きませう。でも萬々一、あなたが行かなければ私はひとりでもあの方について泉州へ行く。」五娘は益春にさう言つた。

五娘がさう言ふなら、陳三がさうしなければならないのなら、益春だつてやはり泉州へ行かうと思ふ。益春も五娘には別れたくない。それよりももつと陳三に別れたくない。

「おお、私もつれて行つて下さい。」瞳をかがやかせて益春は囈言のやうに呟いた。

第三十齣

「たうとう明日になつたの」五娘は、或る日、益春に囁いた。「私たちは、あの方も私もあなたも明日の朝まだ夜の深いうちにこの家を出て行くの。」五娘は沈みがちな聲に元氣をつけて「あの方は、おとなしいそれでゐて足の疾い馬を手に入れて置いて下さつた。それから私もあなたも……」五娘はさも無邪氣に笑つて早口に「私もあなたも男の着物を着るのですつて。さうしなければいけないつてあの方がさう言ふの。」男の着物を着る話は、内氣な益春の顏を赭くさせた。

籠の中の玉燕がふと朗らかな聲を上げて囀り出した。何となくぢつとしてはゐられない五娘は、氣まぐれのやうに手を差しのべて籠の口を開けた。玉燕は驚いて歌をやめたが、とまり木の上でしばらく考へてから、怯々と籠の口へ出て見る。それから輕く飛んで、この愛育されて人に慣れた黄色い小鳥はしばらく欄干の上にゐて短く歌つたが、五娘が手を振つた機みに我を忘れて飛び立つ。――程遠くの花の一ぱいある樹のなかにかくれた。

「でも、もう昨日から餌をやる人はゐないのだもの。」五娘は誰にむかつてともなく申譯らしくかう言つて、立つて欄干に倚つた。益春も同じように立つて五娘と肩を並べた。「この走馬樓が、私のはじめてあの方を見たところなのだ。」五娘はしみじみとひとり言を言つた。

第三十一齣

三人はやつと城門まで來た。冒險者たちは一言も口を利かなかつた。もし、固く温く握られてゐる手を感じなかつたら、ふたりの娘たちはこの暗のなかに自分たちをぐんぐん引つぱつて行く者が、ほんとうにあの戀しい人かどうかと疑つたかも知れない。それほど不氣味に誰も口を利かない。城門を守る男は、この三人を見るとやはり物を言はないで、扉をぎしらせないやうに用心して門を隙けた。この男は昨日の夕方、見なれない若い男から、夜中にそつと門を開ける約束で懐に重いほどの銀を貰つてゐたからである。城門からすり抜けた時になつかしい聲が初めて言つた。「安心をおし。」それから多少歩みをゆるめて言ひつづけた。「ごらん」北の空の一方を指ざして「あれが私の星だ。この間からああして三つ並んでゐる。それに今夜はちようど私の故郷の方角にある。」それからまた默つてやゝしばらく歩いた。

「待つておいで、ほんの暫くだから。馬が來てゐる筈だ」彼はさう言ひ置いて急にどこかへ驅け出した。

第三十二齣

一人は交々手をとつて二人を馬に乘せる。馬は三頭である。「大丈夫だ。たゞ手綱をしつかり握つて！」二頭の馬は驅について、そのとほりに走る。先驅は輕快な騎手である。さて後から來る二頭のために細心な注意を怠らない。それ故、不慣れな二人の騎手としては最大の速さで走る。自然に走る。且つこの馬は戰に使ふためによく馴練された馬である。無頼な兵卒がやつと盜み出して、北門外の一番大きな龍眼肉の樹の下で待ち受けてゐたのである。分秒を惜む冒

手は、この三頭のために兩手に一ぱいの金をせびられた。その三頭の馬が晩春の曙の空の下を走る。足並みをそろへて。昨日までの騎手にくらべては嘘のやうにきやしやなものを乘せて走る。夜が白んで光うすれて行くあの三つの星の方へ。

第三十三齣

五娘の家で、あの無口な氣の置ける奴隷がゐなくなつたことを、外の奴隷たちが氣づいたころには、三人は既に城外百里のところにあつた。その奴隷と一緒に五娘も益春も居なくなつたことを、家の人たちすべてが氣づいたころには、三人は既に城外二百里のところにあつた。さうして今日のうちにもう五十里を行けばいいものとして、馬の歩みをゆるめた。――五娘の家では、娘たちは人買ひの船に乘せられたものと思ひ込んで歎いた。五娘の母は罪をひたすらに益春に歸した。

第三十四齣

三人の騎馬旅行者は人目を避けてゐるのに、どうも人の目につきやすかつた。一人は黒い袍を、他の二人は藍の袍を、いづれも普通の服裝をした少年たちであるのに、それがどうも行き逢ふ人に目を注がせる。立ち停らせる。振り返らせる。何故かといふのに馬上の三人はこんな地方で見ることの稀な美少年たちである。就中年の若い二人は、その手綱を大事に握つた手の指一つ見ただけでも、どうも女にまがふ程だからである

彼等はたうとう怪まれた。今日は漳州で泊らうといふ日に、一隊の兵卒が彼等を捕へたのである。世は亂れ初めて居た。良民を保護することに名を藉りて、寧ろ彼等を苦しめるために武器を持つてゐる兵卒たちは、以前から土着の民に迫つては酒肉を得、羇旅の客を脅しては金銀を掠めてゐた。公認された土匪のやうな輩であつた。――一年前に總督の

一行としての陳三を迎へた時には、正しい軍律を裝うて、且つ地方の平安をよく支へてゐるやうに見せてゐた。さうして陳三は、世間しらずにも、道は長いが危くないと信じてゐたのであつた。然るに今、總督の一行ではない陳三は捕へられた。

第三十五齣

男裝した娘たちは白日の光のなかで素裸にされた。兵卒どもは、うつ伏せになつて戰慄してゐる二人の娘の青く透くほど白い腰の細さを貪つて見比べた。路銀は預つて置くと言つて取り上げられた。それからこれは嚴しく取調べなければならない奴どもだと宣言された。

「今に〳〵悔するぞ！」

陳三は牢屋のなかへ投げ込まれながら、さう叫んだ。然し陳三の心のなかにこれと言つて方法があつたわけではない。唯あまりの口惜しさに叫んだまでであつた。けれども、この威を持つた一言と二人の美姫と三頭の良馬と、それに豫想外に巨額な路銀とが、兵卒どもを無氣味にした。ただの旅行者ではないと思はせたからである。若しさもなかつたら、この獸に類した兵卒どもは、あの晝間貪り見たものの幻にそそられて、二人の娘たちを深夜に牢屋から牽き出したことであらう。

第三十六齣

「ここに居るものは、金銀財寶と容色のある少女二名とそれに馴育のとどいた馬三頭とを盗んだ强盗でございます。罪科は明白ですがまだ白狀を致しません。何れ拷問に掛けやうと存じましたから、足械と手械をさせて置きました。若い女どもも兎も角も一緒にここに置いてございます。これは二人とも足械だけさせて置きました。」から獄吏が說明を

て丁寧に一揖すると、一隊の整列した兵卒たちに護られた、位の高さうな役人が一人、檻房のなかを覗き込んだ。いかにも、うす暗い房の奥に一かたまりの黒いものが動いてゐて、それが三人の人間らしかつた。四人たちは何事であらうかと、今更新らしくふるへて檻窓の外を注視した。えらい役人は鷹揚に頷いて、ゆつくり一歩あるき出した。

「兄さん！。待つて下さい。兄さん！。私です！」

「あまり囚徒を虐待してはならない。――こゝにゐる者は氣が違つてゐるのか。」

えらい役人は獄吏の方をふり返つて言つた。

「いゝや！。私ぢや。兄さん！」

囚人はもう一度叫んだ。――實際、狂人のやうに。えらい役人は立ちどまつた。懐しい故郷の訛に耳を打たれた。耳のひゞきに顔色を動かした。しかしえらい役人は獄吏の何か答へるを聞き流しながら騒がずに言つた。――「何しろ、この囚人を私は一度よく見よう。」

第三十七齣

「今に後悔するぞ！」さう偶然に言つた陳三の叫びは、全く偶然にも實現された。このえらい役人は、疑ふべくもなく陳三の長兄であつた。彼は廣東の任地から特別な任務でやはり巡察使として、この亂れてゐるといふ噂の最も高い閩海の地方へ突然來たのであつた。久しく相見る機のなかつた彼等は、長兄は次弟の偲から末弟を信じ、末弟はまた次兄の偲から長兄を認めた。彼等は泉州の言葉で半時あまりも語り合つた。既に壯年を越えた長兄は、年若な末弟が正直に告げたところを聞いて、その情痴を憫れんだ。さうして戀する弟の望みを果させてやりたいと思つた。日を期して彼自ら潮州の黄家を訪ねやらうとも言つた。昨日の囚人は今日の貴賓であつた。五娘と益春とはもう帰るところなく髪を梳

り、粹を飾つてよかつた。昨日彼等に辱を與へた者どもは今日自分で辱を受けなければならなかつた。

第三十八齣

「どうぞ、私の星よ。私に世の中で一番綺麗な娘を私の妻として授けて下さい。またその妻の腹に宿つて出來る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。あなたはもう私の祈願の半分を聞きとどけて下さつたやうに見える。尙も、私を惠んで私の祈願を完うさせて下さい。私に、どうぞ、人間らしい幸福をお授け下さい。」

陳三は、長兄との傳奇的なこの邂逅のあつた夜、彼の星にむかつて彼がその守護を得てゐることを深く感謝した。さうして彼はいつもよりも熱心に、永い間跪いた。陳三の星を數へられ、さてその左右に並んでゐるところの星が各自分のものであることを信じた五娘と益春とも亦、窓をとほしてその星を拜みながら、ひそかに祈念した。

「どうぞ、私の星よ。私が私の夫によつて一生涯深く愛せられるやうに私を守つて下さい。」

彼の女たちの願事は期せずして一致した。世の中の多くの花嫁たちがさうでなければならない如く。

第三十九齣

悲しみのなかにあつて樂しかつた日を振り返るほど堪えがたいものはないと曰ふ。然も悲しみのなかにあるものは、せめては樂しかつた日を振り返らないではゐられない。

五娘はいつの間にか、徒らに今日の憂悶を新らしくするために空しく昨日を思ひ耽る人であつた。月日は何の爲めに去るのであらう。新らしい幸福を齎すために月日が去るのでなかつたならば、どうして幸福の滿ちてゐる瞬時に羲和の車は駐らないのであらう。――「いやいや、私には決して幸福を齎す羲和の車ではなかつた。奪ひ去つて行く車だつた。その車が、益春には山のやうに堆く幸福を積んで來た。」五娘はさう怨みながら飛び去つた一年半の月日を見る。

みながら夫の陳三と第二夫人の益春とを見る。怨みながら黄昏のうちにあの三つ並んでゐる星のうちの一番光のうすいものを見る——「あの時、あの一生のうちで一番うれしかつた時、あの星に祈つた私の願事は聞かれてはゐなかつたのだ。」五娘はさう思つて目ぶたが熱くなり長い睫毛のふるへる目をしばたたく。

第四十齣

「それにしても夫の愛が——あれほど深かつた夫の愛が、いつからどうして益春の方へうつつて行つたらう。」五娘は自然と明瞭であることの問を、幾千度となく自分の心に繰り返す。五娘は憂さをまぎらさうとして機にのぞんで、しかし長く織る手をやめて、その代りに梭のやうに休みのない思ひで心に悪い布を織つてゐる。「夫の愛は嫉ましくも益春が夫の子をその腹に宿したその夜からに違ひない。どうして自分には夫の子が宿らないのであらう。自分には夫の寵愛も尠いのだ。それにしても、守るにも及ばない戯れの約束を思うて、自分の夫に益春を第二夫人として勧めた自分が怨めしい。あの時の自分はあり餘つてゐる幸福を悲歎の底にゐる益春にも少しは分けてやりたかつたのだ。それがそつくり持つて行かれようとはどうして思はう。それにしても、怨めしいのは輕薄な情をもつた夫である。いやいや、夫はやはり戀しい人だ。怨めしいのは何と言つても益春である。あの時恩を思ひ出さうともせずに夫の愛をひとり占めにして、果は心が高ぶつてゐて自分を憫れむべき者か何かのやうに、時々氣の毒さうな目つきで偷み覗てゐる。自分にははつきりとそれが解つてゐる。」氣の毒にも、五娘は幼くから幸福のなかで溫室の花として養育されて、從つて順境に置かれればいくらでも優しくなり得る代りには、世に寒さのあることを知らずに逆境には脆くひねくれ易く生れて來てゐた。

第四十一齣

益春は戀しい人の子が自分の體のなかにあることを考へると、ぞくぞくするやうな嬉しさが湧いてその人を一層戀し

く思ふ。もともと素直な心が更にやさしくなる。夫の愛が自分の厚いのを感ずるうれしさと一緒に五娘には濟まないと思ふ。陳三を說いて種々五娘を愛させやうとする。しかし陳三にはどうしても五娘の房の秋はうすら寒く灯がしめつぽい氣がする。五娘は陳三を見ない夜にはその戀しさを多く思ふのに、陳三を見る時にはつひ胸一ぱいに閉ぢ籠つてゐる怨言の方を先に言ふ。その盡きない怨言をまだ言ひ終らないうちに夜が明ける。さうして何故この戀しさの方を言はなかつたらう、このつぎにこそこれを言はうと後悔する。しかしやはり未だ怨言の方をさきに言ふ。氣の弱い陳三は五娘をも憐んでは居ないだけにその刺のある言葉が聞きづらい。さうしてそれをあの沁み出るやうな益春のやさしさに比べて見る。それに心の險しくなつた五娘は前ほど美しくない氣がする。さうして五娘を慰めてかき抱き乍らも心は、愛と望みとに美しく奥深く光つてゐる益春の黑い瞳をばかり思つてゐる。一たび礎のゆるんだ家は傾く。傾いた家はその倒れかゝつたもの自身の重さでだん〳〵崩壞しようとする。そのやうに五娘と陳三との互の愛はくづれさうに見える。琴は張り過ぎてゐる。悲はゆるんでゐる。五娘はさびしみの極つて眠ることのない夜の考へで、陳三がまだいくらでも自分を思つてゐてくれる心があるかどうかを試して見ないでは居られなくなつた。證を求めないではゐられない愛は苦しい。

第四十二齣

或る夜明けに、陳三は益春の房から出て五娘の房を訪づれた。前の宵の五娘との約束を果さなければならないからである。陳三は五娘の牀の帳を押し明けた。訝しい事には、五娘はそこに居ない。たゞ枕もとに、その上へ金簪を置いた一通の手紙があつた。殘燈のほのかな白さのなかで、陳三はふるへる手でそれを開いた。驚いて、彼は扉を排して出た。まだ暗いことに氣がついて燭を乘つて再び出た——庭の井戸へ。五娘がそこへ身を投げると書き遺したところへ。石だたみの上には赤い小さな履が片一方ある。五娘のものだ。陳三は燭を高く斜にかざしてその下から井戸をのぞき込ん

黒く罎の形が一つ、灯を金色に映した水の圓いなかにしよんぼりと浮んでゐる。水は重たく靜まつてゐた。陳三は罎を石の上に置いた。それから石の上の罎を拾つた。赤いうへに蔓草とその花とが黒く縫ひ飾つてある。——これこそあの第一の晩に五娘が閨のなかで穿いてゐたものである。陳三はもう一ペン井戸のなかを見る。そこに靜かな黒い水の面に星が一つ天から影を落してゐる。つく〴〵見るとそれが陳三の星である。

「五娘！」

陳三は叫んだ。星を映した水が彼をおびき入れる。突きのめされたやうに、又狼狽して足を踏み外したやうに彼は墜ちて行つた。

短い叫び聲が井戸に近い穀倉から鋭く叫んだ。しかしそれは人を呑んで深い井戸の吼えるやうな響で消された。

陳三は、苦悶のうちに水面から擡げた頭の眞上に、彼自身の星を最後に見た。その星だけは、どんな激しい感情が陳三を井戸のなかへ追ひ入れたかを、或は知つてゐるかも知れない。

第四十三齣

井戸のそばには、遺された燭灯が大きく搖れながら燃えてゐる。穀倉のなかゝらよろめき出て來た人の形は、この燭の灯に照された時に幽鬼のやうに青ざめた五娘であつた。その五娘は井戸には目もくれないでよろめき走る。よろめき走つて彼の房へ行く。彼の女は筆をとつて書く。その意味は——私は私の淺はかな智慧から夫の深い愛を量らうとした。私は死んだやうに見せかけて夫の悲歎がどれほどだかためして見やうとした。さうして私は私の夫を死なせた。あなたの夫を死なせた。あなたの子の父を死なせた。みんな私の曲つた心と淺い智慧とを許していただきたい。あの方には私は今から陰府へ行つてお許しを乞ふつもりです。——それは陳三を驚かせ死なせた嘘の書き置きではない。本當のものの

である。益春に宛てゝあつた。

第四十四齣

燃え盡きて蠟涙のこぼれ傳うた銀の燭臺が井戸ばたに置かれてあつた。陳三と五娘との屍が水の底から上つた。屍と一緒に五娘の履が二足あつた。益春は書き置きを見ても五娘を庇ふつもりで多くを人々に語らない。人々は同じ時に同じ所で死んだこの若い夫婦を且つは怪しみ且つは悲しんだ。一つの穴に葬つて一つの墓をたてた。墓畔には想思子の樹を植えた。

第四十五齣

益春は夫に殉じて死ぬることは容易で、ひとりで生きることの反つてむづかしいのを悟つた。しかし益春は、腹のなかにうごめくものを考へ、また夫がその死の前夜に偶然にも言つた言葉を思ひ合せると、どうしても生きなければならない。夫は彼の女を愛撫しながら言つた――「天の目からはお前こそ世の中で一番綺麗な娘で、それ故私の眞の妻だ。それならばこそ私の子は、私の所願のとほりにお前の腹に宿つた。それは男の子に違ひない。さうして後に世の中で一番えらい人になる子だ」と。それが今になつて見れば益春には、何となくその腹にある子を守り育てよといふ夫の遺言のやうに思へる。益春はもう直きに生れる子供をも見ないで死んだ夫を、夫の爲めに悲しむ。子の爲めに悲しむ。又、自分自身の爲に悲しむ。しかし夫を恨むことは尠かつた。「愛の薄くなつてゐた方の五娘の爲めにさへあの方は死ぬることをした。私の爲めにならば猶のことであつたらう。これほど眞實のある夫を持つことの出來た私たちは幸福であつた。その方が今はもう亡い。さうして情ぶかいあの方は私がひとりでもさびしくはないやうにと思つて、私には子供を遺して行つて下さつた。」益春は悲しい時にさう思ふやうに努力した。さうして双の頰に冷い涙を細く流した。

第四十六齣

陳三と五娘とに起つたこの不祥事を、益春の次に最も多く歎いたのはあの兩廣總督になつた兄であつた。彼はもう十年も以前に、弟の星に祈つた願事を偸み聞いた事があつた。さうして彼から結婚の消息を得た時には、彼もその文中にあるとほり全く、弟の星への祈願が聞かれたものと思つてその幸福を祝したのに、今日その不慮の死を報じた消息を手に取つて、ふと思ひ出されたのはやはりあの同じ夜に庭の樹かげで弟に言つた言葉である――「假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來てゐるとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ善くかへることが出來るだらうか。」――それは實に何氣なく口をついて出た言葉ではあつた。しかし今になつて思へば彼のその一言が讖をなしたかのやうで堪えがたく悲しい。更に具に事情を知つた時には、その感が一層に深い。彼は以前に弟が日ごろどんなに人間らしい幸福を望んでゐたかを知つてゐる故に、弟の死を思ふては夜も晝も心がふさいだ。さうして慰めがたい心を慰めやうとする感情は自然と幾つかの哀詩になつた。そのうちの一つに次のやうな意味を歌つたものがある――人の世には完全な幸福はない。たゞ夢みることゝ信ずることがある。これを悟らずに幸福を追及する者はみな絶望する。醉って鏡花を追ふ蝶と信じて水月に憧れる猿とを私は閔れまない。常に夢みることの出來た弟よ、私はお前の痛ましい死を傷まない、計の……る女の愛をさへ無上のものと信じたお前、お前こそは幸福を恵まれた人であつた。云々。

第四十七齣

益春の生んだのは男の子であつた。この生れながらに父を知らない子供は、母の喜びであり同時に悲しみであつた。益春は子供の笑ひ顏の上に屢々泪をおとす。益春は喪があけても決して再び粧はない。しかし益春の美しさはそのために衰へることはなかつた。さうして未だ年の若い益春にむかつて再び夫を持つやうに誘ふ人が澤山あつた。その都度、

益春はいつも身の傍にある子を示して「この子の爲めに」と答へた。さうしてその子供はだん〳〵大きくなり、益春の悲しみも古曲のやうにふるくなつて行く。それは慣れては居るけれども奏でるごとに新らしい力で身に沁みる。さうして益春の志は挫けなかつた。人々はこんな貞潔な妻を持つた夫は死後にも幸福がのこる、さう言つて益春を讃め陳三を羨んだ。その陳三の墓――同時に五娘の墓でもある――には苔が蒸して、苗木で植へられた相思子の樹はその蔓を成す枝が延びて、この墓石を四阿のやうに覆うた。秋が來ると、朝々に香華を供へる爲めに來る益春とその子との上から、莢から彈ぜた實が雨のやうに落ちて來る。この紅豆はあの悲しい五娘の濡れた瞼のやうに赤い。かうして益春のうへに月日が經つ。さびしくしかし樂しく。何故かといふのに彼の女の子供は早くから優れた才を示して、益春に悲しい人の言葉をうれしく思ひ出させる――「後に世の中で一番えらい人になる子だ。」

第四十八齣

益春の子は母の姓を次いで洪氏を名乘つた。字は亨九と言ひ、名は承疇である。彼は萬暦の中ごろに進士になつた。この立身の喜びと一緒に彼は氣のくづをれた母を失つて悲しんだ。しかしその母はその子が「世の中で一番えらい人になることを疑はないで死んだ。さう信じられた子は神宗、光宗、熹宗、思宗の四代に仕へた。國は神宗の世を最後の盛りにしてだんだんと衰へて行くのではないかと思はれる前兆があつた。光宗はたつた三十日帝王であつた。熹宗は七年帝位に居られた。それから思宗の世になつた。さうして洪承疇は薊遼總督であつた。

第四十九齣

思宗は、或る時、普通の人民の着物を着てこつそり宮殿から出た。さうしてそのころ評判のあつた或る易者をたづねた。思宗は口を開かうとすると、この有名な易者は不機嫌さうに手でそれを制した。彼は占はれる人から一言も聞かな

いで占うといふのが自慢であつた。易者はさまざまな方法で占つて見た上で先づ言つた、
「お前は國家の事を憂へて私のところへ來たのだらう。」
そこで、普通の民を裝うてゐる若い天子は、この言葉の横柄な易者が人の心中を見拔く力の鋭いのに感心しながら氣輕るに言つた――「さうだ。私は憂國の民だ。國内がどうも騒がしい。山西には賊が起つたと言ふことだ。それに滿洲の方の軍兵がちりちりと都の方へ近づいてくるさうな。才能のある人間は才能を全うしやうと思つて皆山へ隱れる。國の難儀を救はうとする人は少い。見なれない光の星が出たとも言ふ。天子の御心になればさぞ御心配であらせられるだらう。さう思ふと我々まで國の前途が氣になるのだ。」
「よろしい。」と易者が言ふ「私が國運は占つてやらう。さあ、今お前の思ひつく文字を言つて見るがいい。」
「それでは、」占つて貰ふ人は暫く考へてから答へた「ユウと言ふ字だ。」
「憂國の憂かね。」易者は枯枝のやうな指で筆をとりながら言つた。
「いや、いや。友情の友だ。」
易者は紙の上へ友と大きく書いた。さうして冷やかにひとり言を言つた「なるほど。反の字が頭を出してゐるな。」
「いや、いや。そのユウではなかつた。」天子は慌てて打消した「私の言ふのは有利の有だ」
易者は二度目に紙の上へ有と大きく書いた。さうして冷にひとり言を言つた「ふむ、大明が半分無くなるのか。」
「いや、いや。そのユウではなかつた」天子は慌てて打消した「私の言ふのは癸酉の酉だ――來年は癸酉の年だから。」
易者は三度目に紙の上へ酉と大きく書いた。さうして冷にひとり言を言つた「ふむ、尊いお方が上も下も……はて、これはどういふ事だらう」易者は筆を捨てて、上眼で占はれる人をちろりと見て言つた――「お傷はしい事だ。」

天子は、三つの字が大きく書かれてゐる紙の上へ銀を一枚投げ出すと、苦さめた顏と顫へる聲とを隱す爲に何も言はずに急いで出て行かれた。から呟き乍ら――「惡い冗談だ。つまらぬ洒落だ。だが、どうも氣になる。」

第五十齣

方方で起つた流賊のなかで、最も勢力のあつたのは、陝西の男で、或る大きな馬賊の頭の婿であつた。この男は李自成と言つた。政府では最初、彼等のことを癬疥のやうな病氣だ――困つたものだが、どう廣がつても命にかかわりはないと言つてゐた。それがいつの間にか盛んな勢力になつてゐて、癸酉の年には豫南、河北、湖廣のあたりへ犯し入つて來て、行く先き先きで火をつけたり物を掠めたりする。花婿を殺して花嫁を犯したりする。鳳陽を陷れた時には帝王の墓を發いて陵を焚き拂つた。さうして陝西の地方は全く彼等のものになつて仕舞つた。彼等は西南の方から都へ押し寄せやうとしてゐる。政府では今更にびつくりして澤山の兵を召して彼等の方へ差し向けた。洪承疇をその大將にした。――この間に北の方からゆつくりと攻め上つて來てゐた滿洲の軍兵は、國を名告るほどの勢力になつて、淸と稱し初めた。この新らしい國、淸の天子はこのころ自身で兵を引き連れて朝鮮の征伐をしてゐた。さうして洪承疇がやつと李自成を打拂つた頃には、淸がもう都の間近かまで攻入つてゐた。天子はもう一度、洪承疇に命令をして今度は淸を伐たせることになつた。天子は「今の世の中で一番えらい人はこの人だ」と思つて洪承疇を賴みにした。

第五十一齣

大軍に逢ふと直ぐにちりぢりに分れて、それが去るとどこに隱れてゐたものか直ぐまた四方から集つて來る。これが李自成の軍隊の慣策であつた。洪承疇の爲めに追ひ拂はれた彼等は、洪承疇が淸と戰ふために北へ行つた間に、復河南

で勢を盛り返した。そこで二人の王を殺して、その勢でふたたび都の方へ押し寄せて來る。李自成の軍のこの情勢を知つた時に、清と決戰をする爲めに陣中にあつた洪承疇は氣が挫けた。——たとひ今ここで清のこの大軍を征服することが出來たにしたところが、その間に殆んど守のない都が陥つたならば何もならない。——寧ろ、この優れた軍勢を從へてゐる清に一たん降つて、仕方がなければ大明の半分を清に與へやうとも、かうして國が全く亡びるよりは未だしもいい。——大明の半分を割くことを申し出て清と平和を結ばう。清のために敗けやう。その代り清の援兵を得て流賊どもを平定しよう。これが洪承疇の苦しい考へであつた。さうして彼は清に降服した。洪承疇が破れたといふ風聞が都に傳へられた時、天子は彼はきつと國の爲めに殉じたであらうと信じた。さうしてこの人を失つたのは國が亡びたも同じことだと歎いた。天子は洪承疇のために祭壇を十六壇も設けて、このえらい忠臣を弔うた。しかし、死を決してゐながらも未だ死ぬことの出來ない洪承疇は、清の軍勢を導いて都を援けるために急いだ。けれども時に遲かつた。その間に、もう李自成の軍が都を陥れてゐた。氣の弱い天子、思宗は心が怪しくなつて玉階に近い柳の樹に自ら縊れた——「お傷はしい事だ」十二年前にさう言つてぢつと彼を見入つたあの易者の冷たい眼の光におびえながら。李自成は安西に居て自分で王と稱へて、この反逆者は國號を大順と呼んだ。

第五十二齣

洪承疇はまだ死ぬことは出來なかつた。彼は彼をそれほど信愛してゐた天子が國に殉じたことを知つて知らないふりをしてゐる。何故かといふのに、彼は彼の天子の仇である李自成を討たなければならないからである。彼は清の大將の呉三桂のために大順を亡ぼす計をめぐらした。その謀によつて李自成は九宮山といふ山のなかへ身をもつて逃げ込まねばならないやうな目に逢つた。この暴虐な流賊の大將は村民たちから追撃された。さうしてこの大順國の主も遂に自分

で溢れて死んだ。洪承疇は今こそもう命を捨てゝいゝやうに思つた。然もやはり彼は死ぬことが出來なかつた——ちやうど、彼の母が夫のために命をすてることの容易なことを感じながら生きなければならなかつたやうに。洪承疇は李自成を打つために清の軍に從うてゐるうちに、心にもなく清の恩になつて居た。清の軍兵のために彼は彼の天子の仇を報いてたのである。その上に清の順治帝は洪承疇を見て亂れた世には珍らしいえらい人だと思つた。さまぐ\に說いて洪承疇に清へ仕へるやうに勸めた。どうしても辭退できなくなつた時に、洪承疇は最後に言つた「若し、私の願が叶いていたゞけるならば私は仕へませう。」さうしてその願といふのは、未だ國を開いたばかりで、未だ少しも定まつては居ない清國の制度や律法を彼自身に定めさせて貰ひたい、と言ふのであつた。實際彼には軍事上の才能があつたやうに政治的の才能もあつた。さうして洪承疇は清に仕へた。——「國の名は代つた。國を治めるものは代つた。しかし治められるところの民は、私をあれほど信愛して下さつた帝王の民と同一の民である。私は恥を忍んでこの先帝の民に仕へよう。この先帝の民の爲めに幸福な制度を設けやう。」さう洪承疇は考へたからである。

第五十三囘

洪承疇は日夜この新らしい仕事に喜んで勉めた。さうして彼は彼の耳に自づと這入つて來る彼に對する或る非難を聞き流した。人々は言つた「洪承疇は不忠の臣である。彼を寵愛された思宗は彼が國に殉じたものと思ひ込まれて亡くなられた。思宗は彼が清に降つたといふことを聞かれた時には、彼の生死などは問はれずに、あれほど盛大に彼を弔はれた。然もその彼は平然と生きてゐる。しかも敵國のために仕へてゐる。彼の母は貞節のある夫人であつた。さうして彼は無節の人である。」——洪承疇はこの言葉は聞いて憤らなかつた。また敢て嘲を解かうとも努めなかつた。もともと信じない人人に言ひ譯をして見たところで何にならう。但、洪承疇はさびしかつた。何人も自分の心事を思ひやつてくれ

ないといふさびしさが堪えがたかつた。それは微弱な毒を溶かした苦い酒のやうに、日日に彼を衰へさせて行くのではないかとさへ感じられた。夜ふけて彼は彼の仕事の草案の筆を措きながら、目を自分の內側にむけて心を噛むさびしさをつくづくと見守りながらひとり心に言つた。——「自分はえらい人であるかどうかを自分で知らない。しかしこのさびしさは最もえらい人間が支拂ふ最も率の高い租税であらう。さうして喜んでこれが支拂はれるやうになれば人間は神仙である。」年ひ老た彼は靜かに往事を思ひ出して、幼兒のやうに、母をなつかしく思ひ出すことが頻であつた。「母は私をどこまでも信じてゐてくれた。若し、今日母がゐてくれたならば、私の心持ちをわかつてはくれないまでも、私の言ふとほりを信じてくれたらうに。それにしても、よく私に、お前は後に世の中で一番えらい人になる子だと言つた私の母は、お前は後に世の中で一番さびしい人になる子だと何故言はなかつたらう。」

第五十四節

「どうぞ、私の星よ。世の中で一番綺麗な娘を私の妻に授けて下さい。その妻の腹に宿つて出來る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。」さういふ願事を彼の星に祈つた陳三や、その陳三と死を偕にし墓を一つにした第一夫人——世の中で一番綺麗だと人に言はれた五娘や、陳三のえらい男の子を腹に宿した第二夫人——天の目で一番綺麗だと思つた益春や、そのえらい男の子の洪承疇や、その外のすべての彼等が生きてゐて、さて死んで仕舞つてから、もう三百年以上になる。その間に清の國も亦亡びた。ただ泉州に近い英内には、陳三の五落の家が崩れさうになつてではあるが今でもまだ殘つてゐる。——しかし、私はその家は見ない。私は去年旅をしてあの近くへは行つたが、たうとう泉州へは行かないのだから。



大寒

室生犀星

二三軒前からいつものやうな鉦皷の音が、暗い軒下から漏れて、凍えちぢんだ空氣と、カチカチに氷つた地面とに痛いまでにひびいてゐた。豐造は、立停つて家の内部を窺ふたが、まだ燈もつけられないで、炭のやうな暗がりが、漂ふてゐるなかから、かんかん……と皷鉦の音がしてゐた。

「えへん。」

豐造は膝がしらをがつくりと遣つけられたやうな突然な咳拂ひで、きんたまをすつと斬られたやうな氣がした。どうしておれの足音が聞えるものかと思つたが、なにしろ凍えた土の音ががりがりした。

「おんがぶきやべいろしやの……。」

かんかん……と急に寒氣立つたあたりは、針を含んだ空氣の痛さで、息苦しいまで凝固まつて、古板で胸を壓しつけられるやうな氣がした。

いくら何でも糞婆めが氣のつくわけではあるまいし、それに暮れてゐるし……

く見ると表と土間の引戸が四五寸開いてゐて、そこから土間つづきの漬物桶から、裏の田甫の雪明りが雨戸の隙間からほんのりと見え透いてゐた。

五寸ばかり空いた引戸を高の閾へコヂつけるやうにそつとあけかかつた。閾で金輪が低くぎいぎいと滅入るやうにきしんだが、これくらゐなら聞えるわけはない。……こちらに背中をみせて、佛壇へ二匁ろうそくをかかげた婆め、背中を圓くして

「まかふだらじんばら……」

畜生、「あらはれたや」だらう……口のうちで言つて、土間から板の間にひよいと片足をかけた。ぎつしりと、また表かつた。が、婆はやはり空をながめてゐるやうな格構でかんかん……と鉦皷をつづけさまに叩いてゐた。

目がしばしばするので初めて氣がつくと、あたりは、蜘蛛の巣のやうな濃い烟でいつぱいであつた。ぱちぱちと榾の匂ひと松脂の燻ぶる臭さがした。鍵なりに奥まつたかまどにおしんが、まるまるとした脊なかを弓なりに伸べて、長い火箸をもつて、横顔がみごとな火照りで美しくたははに見えた。豐造は、一たん脱いたゴム靴をすつぽりと穿めて、土間をぬき足で忍んで行つた。二ケ月ばかり會はないうちに肥えたやうにさへ思はれた。ふしぎに、裸體でそれに闘つてゐるやうで、がつがつ息がはずんだ。

かまどのへりを舐める火さきと、燃えてじいんと赤くなつたおき火が紅かつた。火さきから花火のやうなこまかい火屑が、ち、ち、と消えたり燃えたりした。

うしろからそつと抱きしめてみた。そのまま動かなかつた。三十秒ほどすると、血ぶとりした顔がすこし口をあけたまま、そつと横向きになつたが、豐造をひと目みると、はじめてびつくりした眉さきが、しやくりのやうにひよひと痙

擧つた。が、まじまじと見つめた。
「いつ來たんだえ、びつくりしてしまつた。」
「たつた今來たばかりだ。」
「お婆さんが知つてゐるの。」
「あちら向いてゐる間にそつと引戸から這入つてきたんだ。」
おしんは、火屑を叩いてゐた。が、すぐ、する通りになつてゐた。
「ときどき前までくるけど這入ることができない。お前の聲がしてゐてもな。」
豊造は、火照りしたおしんのあかい頰に、うつすりと沁みでたすこし塵氣のあるやうな皮膚をながめた。おひとよしのおしんめ、目の中を蘚のやうにしてゐやがる。おしんをうまくとつちめれば、濡れ手で粟とも、ふいに考へあてた。
「お前はどういふ氣でゐたんだ。すこしも便りはなしさ、おれの方でするわけにはゆかないし……。」
先々月の末まで半年も一しよに、この家にゐた豊造を目の前にみてゐると、何も彼も言ふことができなかつた。短かい間にさまざまな氣膽が生々しく浮んだ。
「あたしだつてそりや……。」
「だからかうやつて來たんだ。婆さんに文句はあつてもお前にはないんだ。お前もさう思うだらう。」
「ええ。」
煙が込んでゐるので、おしんは目がしばついてきた。さつきからの頰照りで頭ばかり熱りくなつた矢さきで……。
「お前は忘れはしないだらうな。おれがここの家にゐたときのことをね。」

はじめて豊造の顔をひよいと見たが、眼がくぼんで、暗くなつて、なかから湧き出るやうに光つてゐた。

「どんなこと。」

「どんなことつてお前だつて知つてゐることぢやないか。」

おしんは新たに榾を入れやうとして立つたが、豊造がうしろから——火箸がかまどのへりに立てかけてをいた奴が、がつちりと鳴つて倒れた。しんとした。

「だつてお前さん、あとでも話ができるんだもの。」

おしんは恐かつた。豊造が此處の家を出て行つた晩、婆さんを土間へ投げ出してをいて、足蹴でお膳をはね飛した。白いご飯があざやかに板の間から散らばつた。

「ぢやお前は不承知か。かうして忍んできたからには唯では歸らないよ。」

すると、やはり婆あと同じ腹だつたかと、こんなことなら文句を言はないで、目ろみ通りに仕事をやつてしまへばよかつたと、その瞬間には、何も彼もめちやくちやになつたやうな氣がした。けれども、いま、おしんを怒らしては何にもならないと思つた。

「と言ふのも、やはり會ひたいばかりでやつてきたのだ。さうお前のやうに白々しい顔をしなくともいいぢやないか。」

「だからさ、お婆さんのお膳も濟ましてから話したらどうつて言ふの。すぐ怒り出してしまふんだもの。」

それが豊造には娘らしい口つきであることを思はせた。はつきりしないで、ぐずぐずしてゐるところもまだ別れてからどれだけも擦れてゐないらしかつた。

「それぢや彼方を濟ましたらいいぜ。が、おれがきてゐるなんてことは、おくびにも出してはいけないよ。」

「え、そりや分つてゐますとも。」

いつの間にかお談の聲も止んで、しんとしてゐた。と皺枯れた聲がさむざむとこちらへきこえたが、すつかり聞きとれなかつた。きき耳を立てた。

「おしんや。」

おしんは、はつとしてすぐ返事をしたけれど、向ふでは又呼びつづけた。

「ただいま。」

おしんは立たうとしたが、豊造は、耳の端で

「おまんまはまだ食べないんだよ。」

さう低く囁いた。

「どうにかするわ。ぢや暫らく待つてゐらつしやい。」

おしんが歩き出さうとしたのをうしろから故意とらしく、觸れた。

「あら。」

こちら向いたおしんは嬉しさうに、いそいそとして行つた。

豊造は　温かい飯と、それから初めどほりの金と、そしておしんをものにする腹であつただけ、ひとりで高い鐖背をゆるめながら、暗やみのなかで樂しげにほくそ笑んで、耳にはさんだバットをふかしてゐた。

俗にいふ鳥目といふので、日暮れになると見えなかつた。手扇で二匁ろうそくを消してしまふと、よちよち茶の間へ

出てきた。」
「何んだか火さきが亂れがちで、碌なことがないちうて昔からの話ぢや。蟹があつたらうの。」
「え。まだ一ぱい位ゐございます。」
「それで飯にして呉れまへし。」
冷たい醗醤油で、蟹の足へ箸のさきをつき込んでは、乏しい中身を押し出してゐた。氣永さうでおしんはやきもきしてゐた。
「出してあげませうか。こちらへお皿をお出しなさいましな。」
さう言つてみたけれど
「うんにや、少しづつ出すのが樂しみぢやから。」
やはり一本一本足のみを押し出してゐた。手さぐりで、ぱちぱちやつて、目は開いたままのため、どうかすると、見えるのを隱してゐるのではないかと思はれた。
「二階の君子はどうしてか音沙汰がないぢやないか。」
「晝間から寢てゐてまだ起きないんです。わるい一方のやうでございますよ。」
歯ぐきにはさまむ蟹のすぢを箸のさきで掘じくりながら
「ほんとに損俯物ぢや。十圓やそこらの手數料で、病人をかつぎ込んでしまつた日にや、盗人に追錢ぢや。」
四五日前に西の廓へ話をつけて、送り込んで三日目に酷い病氣でかへされた。とにかく二週間ばかり靜養さして呉れとのことで、ねが口入業とはいふものの宿屋みたやうなものだつたので、二階にねかして置いたが、きうに起きられさうもなかつた。

「何か食べてをるかの。」
「粥をすこし……。」
「湯花で濕めてゐるのか。それが一番ええ藥があるんだが。」
「え、それも手ぬかりなくおやんなすつてらしやるんですけれど、お氣の毒に不自由たものですから。」
「世話を焼けばうつるしな。……ともかく早く癒つて割増の方をも貰はんと、どこまで損儲ものだか分らんからの。」
おしんは、二階へあがると、むつとするやうな熱臭さと、湯花の匂ひと、それから膿のあまつたるいのが、とんと胸をついてならなかつた。
海岸の廓にゐたのがすみ變えなきたのだつたが、痩せほそつて小白い色さへ、きうに刺々しく鋭どくなつてゐた。
「養生すればなほるんでせうから、しばらく置いてあげなさいまし。お可哀さうですもの。」
何かといへば、今からすぐ車を呼んで、二里ある實家の方へかへしてしまへといふ婆さんは、勘定づくで、もうよほど食ひ込まれたやうに言つてゐた。
「それも四五日のうちに目鼻がつかんとすると考へなほさにやならんて。こちらも商賣だしの。」
ときどき床から起き上つて、半分閉めて、片陰になつた室で、むんづりとして何か考へながら坐つてゐるのを見ると、おしんは、ぎつくりするくらゐ恐いことがあつた。婆は二階へはいつさい上らなかつた。
「そのうちよくなりませうから。」
おしんはさう言ひながら、ふいと土間の方を見ると、豊造が、目顏で、早くすまして來ないかと手招ぎまでして、うしろの暗みに浮び出てゐた。

「いま行きますよ。」とうなづいて、これも目つきでさう言つたが、をりもをり、婆がきうに

「誰かきたのかの。」

顔をうごかしてたが、おしんは、晩にさいなれば神經が鋭くなる婆をきみわるく、はらはらして、早くあつちイ行つて――と豐造を追ひやつてをいて

「誰もきはしませんわ。氣のせいでせう。」

窪んだどす黑い顔をみたが、開眼してゐて凝乎と見つめられてゐるので、思はず目を伏せるほど恐かつた。

「誰かそこの土間のあたりぢや、さきから寒かつたのがきうに風が消えたやうに來なくなつたから。」

土間へ首をねぢ向けたときに、豐造はひやりとあき盲を見つめかへしたが、やはり見つめて居られるやうで、氣味わるくじりじりと見られてゐるやうな氣がして、ふいと、古い引戸の、勝手と疊表をよせかけてある影にかくれた。

「誰もゐはしませんわ。きみの惡いことをいはないで下さいな。」

「いや……。」

と耳をすましたが「人のけはひちうものはすぐわかるものぢや。心にひびいてくるから解るのぢや。」

おしんは茶漬けでさらさらとやつたが、婆が耳を立ててゐるので、自分でやりながら水つぽい音が氣になつた。

「ご飯は……。」

「あまり食べてをくと、よく睡られん。空腹でねた方がえい。」

いつものことなので、汚れものを集め出したが、婆は、長火鉢にきちんと坐つて、長い煙管でこんこんと音させてゐた。天井にひびいた。

流しもとへ、やつとのことで出かけようと襷をかけた。がちやがちや鳴る碗皿をかかへた。
「おしんや。」
「はい。」
「漬物は膳へもどしてをいてな。」
「はい。」
糞婆め、まだ何か言つてやがると、流しもとのかまどの乏しい火にあたつてゐた豊造は、膝がしらまで冷えて棒のやうになつてゐた。それをさすりながら、苛々して
「待たせるぢやないか。凍え上つてしまつた。」
「だつて婆さんがゆつくりしてゐらつしやるんで、どうにも仕様がなかつたんですもの。はらはらしてゐたわ。」
「そちらより待つ身になつて見ろ、とても長かつた——。」
いまは星ほどしかないおき火が、くらいかまど口にちよろついてゐた。しゆつと燐寸を擦つては消えた。
「じれつたい。」と叫んで、また幾本も擦りそこなつたが、やつと豆ランプが細々しくともされた。
「わたし、すぐ洗ひものをすまして了ふから。」
釣瓶をあげながらさう言つたが、やがて又井戸底でからの釣瓶が、どしんと深いところに落ちる音がした。
「早くやつてくれ。腹も空いてひよろつくほどだ。」
「さうだつたわね。何んにもないのよ。茶漬でね。」
「雲は。」

「足もないの。」

豊造はすこし低いこゑで

「酒はあるだらう。」

おしんはきつぱりとした聲で、とり置きがないつて言つたが、豊造はすぐせせら笑つてかまどの下から、一升徳利を出して見せてをいて

「さき見から持つてきてきいてをいたのだ。茶碗をかしな。」

おしんはどつきりして徳利の蒼白い胴ツ腹をみつけた。酒の上のわるい豊造にあれを飲まれたら困ると思つたが、もう口を拔いてしまつたので、唇を噛んだ。

「見つけたんなら仕樣がないけれど……ねお前さん、少しばかりでけふは止めてをいておくれな。」

豊造は、ぐびりと一とくち啜ると、とつこりと喉をならした。

「びくびくするな。大丈夫だとも。早くしまつて了へよ。」

おしんは、洗つた分を目籠に伏せると、そのままにしておいて、先のものを刻んで、板じきの上に置いた。

「ありがたい。これさへあればいい。」

がりがりと香のものを噛り出した。おしんは手を拭きながら、やはり同じやうに踞んだ。そして何か話し出さうとしたが、吃つていへなかつた。

「外ぢやない。おれもいろいろ遣つてみたけれども、どうもこの土地では何をやつても駄目なやうな氣がするんだ。」それでお前にもわけを話してね。」

おしんは、豫想したやうにぎつくりと、また金かと思つた。暗かつたが、豐造も拙く話を切つたものだとおもひながら、

「一つはやはり會ひたいとも思つてきたんだ。」

「そして何處へ出かけるつむりなの。」やつとこれだけ言つたが、豐造は

「ともかく土地を離れやうと思つてゐるんだ。かうして居ればお前にもみれんが殘るし、逢ひにくりや厭なかほをされるしな。」

思ひ切り上手に出たが、おしんは

「だつてあたしはいやな顏をしたことはないんだけれど、お母さんがあの通りにやかましいもんだからなんですよ。そんなにあたしに的つけなくともいいぢやないの。」

おしんは何時も隠れて豐造にいろいろなことをするごとに、婆からあくどく毒づかれてゐた。「犬みたいに男の尻を騷ぎやがつて、そんなに戀しけれや一日食つついてゐやがれ。」だのと、そばで聞いてゐられないほど、いぢめ拔かれてゐた。はじめ同じ口入業の二男の豐造を養子にもらつたときから、もう小言だらけで、しまひに、二人で何時わたしを殺ろすかわからないとか言つて、わざわざ自分の室の障子に竹のせんをかけて、晩もろくろく寢つかなかつた。すること言ふことが刺々しくなつて、しまひの果に豐造から出て行つたのだが、やれ手切金を出せとか何とか言つて騷いだが、婆は一文も出さなかつた。はじめての男の味で忘られなかつたおしんも、ときどき豐造のゴロツキ肌なところが、しまひには憬毛が立つてきたのである。

「ところでその相談があるんだ。お前から婆さんに言つて旅費の方の苦面をしてもらひたいんだ。」

豊造はさう切り出して、冷酒をぐいぐい呷つた。冷えたあたりの空氣に酒の香が激しく發散してゐた。

「だつてそりや駄目だわ。どう言つたつて出して呉れはしないんですもの。それはお前さんが出ていつてから最う二ケ月になるぢやないの。」

「何ケ月になつたつて話ができないことはなからうぢやないか。」

豊造は蔽ひかぶさるやうに言つたが、婆が承知をしないことは初めから分つてゐたけれど、かう口切りをしないでは、おしんから出して貰へないやうな氣がしたのである。

「それは無理なことだわ。わかりきつてゐることなんですもの。」

おしんは今更らになつて、そんな口をきかれた義理でもあるまいと、腹のなかで考へ込んでゐた。

「そこんところを一つ甘く話して貰ふぢやないか。どつち向いても今度はちつとも的なしなんだ。」

しつこく豊造は、うむを言はせずに一押しに言ひ迫つた。「婆さんが駄目ならお前の方で何とかして呉れるといいんだが……」ちよいと言ひ澁つたが、最後にさういふと、おしんははつとしたが、毎度のことなんで、陰氣に考へ込んだ。

「私の方でできればどれだけでもしたいんですけれど、お前さんも知つてるだらうが、世帶はまだお母さんが切り廻していらつしやるしね。」

「ナマでなくともいいんだ。夏の物なぞは當分いるまいから二三枚借してくれないか。それまでには此方も融通ができるから。」

この前、豊造に手渡したかまぼこ形の指輪と、いつの間に見て置いたものか古い銀の男持の煙管とを持つて行つたなり、それきりどうなつたか分らなかつた。

「着物はすぐわかるわ、そりや夏までに返してもらへればいいんだけれど、ひよつとしてお母さんが箪笥の中を査べたりなんかしたら困るわ。」

「だから夏までにちやんと、箪笥へお返し申しますつて言ふんだよ。なあに、いまから夏のものなぞを調べることがあるものかね。」

それもさうね。」おしんは、これほどまで頼んでゐるのを、斷はりかねるやうな氣がした。それにしても、どうして箪笥を開けたらいいか、晩になると鳥目になるかはりに、音といふ音に非常に神經深くなつてゐる婆のことも考へなければならなかつた。

「もうこれつきりさ。だからもう一度だけは聞いてもらひたいんだ。」

豐造は、さうおしんの心持が讀めたので落着いて、あやぶく浮かびさうな微笑とも安心ともつかない色を、闇のなかに紛らせながら言つた。

「持ち出すところを見つかつたらどうしたらいいでせう。」

「わけはないよ。婆さんが寢てしまつてからにしてもいいのさ。」

豐造はこんどは聲音までおちつかせながら茶碗で啜つた。

「それまでお前さんはどうしてゐるの。」

おしんは何氣なくさう言つて、まさか、それまで此の土間にうそ氣味わるく豐造が待つてゐるわけではあるまいとも考へた。

「此處にゐるさ、だつて外へ出たつて仕方がないから。」

「さう。」と言つたきりおしんは盗人をかくまつてゐるやうな變な氣がしてきた。

「誰かに見つかりはしないでせうか。二階に君子さんもゐるし。」

「大丈夫だ。婆さんは早寝だし、よし見つかつても暗いし、分りはしないよ。」

おしんは豊造が婆の寝入るまで土間で待つてゐるときいた瞬間から、きうに豊造の圖々しさといふより、妙に押しつけがましい様子をいやな氣がして仕方がなかつた。

「婆さんと一しよに寝はしないだらう。お前はお前の部屋に寝るんだらう。」

「え、ですけれど。」

何かおしんが言はうとすると、豊造はすぐ話をもぎ取つた。

「なあに大丈夫だよ。うまく遣れば見つかることはないんだ。」

豊造のその言葉があたりにしんとひゞいた。榾火はいつの間にか消え、雨戸のすき間からしてくる裏田甫の雪あかりも、ともすれば豆ランプの光にさいぎられてゐた。

「おしんや、えらい手間が取れるぢやないかの。」

土間への板の間から、首をさし出す宵のくせで、こちらを向いてさう言つたので、豊造はひやりとしておしんのかげにかくれた。おしんはその瞬間に目かごに伏せた茶碗を急にがちがち鳴らしておいて、左の手で桶水をぢやぶぢやぶ音させた。聞えないやうな振をして——

「おしんや。」

「はい。」

水の音がやんだ。
「聞えんかいの。」
「え、ちよいと……。」
　空聲で……豐造がぴつたり脊中へかくれた。
「早く床を取つてくれさつし、睡うてならんから——長い流し仕事ぢやな。ちやぶぢやぶやつて居れば茶碗の一つや二つはすぐ洗へるものぢやが……。」
「たゞいま、すぐですわ。」
　さう答へる聲は震えてさむかつた。
「糞婆め。」
　さう豐造が低い聲で言つたとき婆の固いカチカチな凹凸のある顏がすつと柱から消えてしまつて、板の間に踵を擦つてあるく音が、さらさらしてくるばかりであつた。
「いつまで生きてゐやがるつもりだらう。くそばばあめ。」
「そんなに言ふものぢやないわ。たとへ一ヶ月でも一しよに居れば、やはりお母さんぢやないの。」
　おしんは、すこしむつとして言つたが、豐造はせせら笑つた。
「いい年をしやがつてさ、さんざ姑きもちを燒いて晩も碌にねむらせなかつたぢやないか、やれ肩が凝るの、煙草をつけて呉れのと言つて、ちよつとも床が溫まるひまもなかつたぢやないか。」
　豐造はさう言つてから「ほんとに打ち殺ろしても足りないばばあだ。」と、酒くさい息をおしんの頬にふきつけた。

「そりや彼のときは愛だつたけれど、お前さんのやうに荒々しく言つたつて仕様がないわ。」
おしんは、酒の廻つた豐造をなるべく控へ目にさからはないやうにしてゐた。
「おしんや。」と又聲がした。
「はい。」
おしんは「ぢやあちらをいいのにして來るから。お酒はもうそれで止したらいいわ。」と言ひながら、土間から上へあがつて行つた。あとで豐造はひとりで板じきに腰をおろして、豆ランプのうすぐらい手暗がりで、茶碗酒をぐいぐい飲んでゐた。
婆は、佛壇のある室で、櫓を拔いだ敷炬燵をしてゐるのが例になつてゐた。二三年も日光にあてない濕つた布團のなかへ、婆はもぐり込んだ。銀行の通ひと在金は布團のしたへ敷いて、幾度も手で布團の上からあたりをつけて、脊中にしいた。
「まるで見えないちうことはないのぢや。すこしは見えるでな。」
婆は、ふしぎに寝るときにきまつて、かう言ふのが例になつてゐた。わたくしがもしも何かを盗りでもするようにお母さんも詰らないことを言ふものだと思つてゐた。
「使便は……。」
おしんの言葉をおさへて
「やはり安心のために厠へゆくのがええので、使便はやめてをかうかい。夜中に一度でも土間へ降りれば、何かにつけて要心がええからの。」

布團のへりから、半分出した顔をおしんは見つめた。いつも、何でも先きに笑ふくせのある婆は、それなりで甘く言ひあてることがあつたのである。

「それでは持つてきて置きませんから。」

「うん。その方がええ、それから表と裏とをしつかり掛けてねておくれ。」

さう言つて、「それから竹の棒もついでに手の到くところに置いて行つておくれな。障子にせんをさして置くと、えらい安心をして眠れるから。」

おしんは、梯子段のうらにあつた竹の棒をもつてきて、寢床のわきにをいた。

「此處にをきます。ちよいと觸つてみて下さい。」

「あゝ……。」と布團から手を辷り出させて

「よしよし」と竹の棒に指さきを觸れさせて言つた。

「ではおやすみなさいまし。」

「うん、早くねたらええ。」

おしんが、すうと障子を閉めて出て行つたあとで、豆ランプが一つ暗がりのなかに瞬いてゐた。婆はそれを見つめたが、おしんの足音が次の間へ消へると、むづむづと起きあがつて、鴉のやうに瘠せた澁紙色の足をむき出して

「どつこいしよ。」と、れいと竹の棒をとると、手さぐりで、障子のせんを支へた。引いてみて、かつちりして開かないのをたしかめると、又布團のなかへ潜り込んだ。

おしんは、ぎいいと、竹の棒を障子にささへた音を耳にいれると、どうしてああも疑い深いかと、ときにはおかしく

思ふことさへあつたのである。

土間から豐造が、板じきの方へそつと歩きよつて

「まだかい。」

低い聲でいつた。いま床へはいつたばかりだと目顔でしらせると、豐造はぶつくさ言つて行つた。

おしんは自分の部屋へはいると、何んだか人の部屋へでも這入つたやうな、ひやりとした別な空氣を感じて、立ちすくんだまま、じつと耳をつツ立ててゐた。婆はまだ睡らないと見え、もぞくさと、腰がへりなどしてゐるけはひがしてゐた。

自分の名前を呼ばれたので、はつとした。婆ではないらしく、もしやと思つて、そつと茶の間へ出てみると豐造でもないらしかつた。

「しん様。」

うすぐらい處から、だるげな聲が高の方からしてくるらしかつた。何心なく、ふいと振り向くと、梯子段の下り口に白紙のやうなものがひらりと見え、それが重みと奥行とをもつてゐるやうな氣がした。なほ、よくみると、君子だつた。頸首に冷たい手をさし込まれたやうに冷やりとした。

「おそれ入りますが、すつかり火種を無くしてしまひましたので……。」

低い弱い聲だつた。

「あ、大變ですか、おあげしますからお床にゐらつしやいましな。」

「すみません。」

君子の顔が消えると、おしんは、十能にわづかばかりの火種をのせて二階へあがつて行つた。
瘠せほそつた君子は、うへからかむつてゐる布團さへ、ひしやげて、平つたくなつてゐるのが氣味惡かつた。
「ほんとに御厄介ばかりおかけしてすみません。氣ばかりあせつて一向病氣の方が捗取らないものですから――。」
何時もくど／＼いふので、おしんは深入りしないでゐた。
「ごゆつくりお癒しなさいましな。心配しないで。」
火種を埋めると、君子は、首をさしのべて煙草をつけた。顏いろと同じいやうな煙を吐いてゐる手つきが細く、つやを失なつてかす／＼になつてゐた。
「ご親切にすみませんわ。お婆さんはきつと御機嫌がお惡いでせうと思つてゐるんですけれど。」
おしんは、いつも梯子段の上り口まで行つて、あてつけがましく、何彼と諷刺つける婆の言葉を耳痛くきいてゐたので、かう言はれると、自分だけはあゝいふ薄情なものでないといふ厚意を見せたくも思つた。
「お母さんのことなんぞ、あまり氣にかけない方がいゝんですの。わたしが居ますから氣丈夫にゐて下さいな。」
「ありがたうございます。」と言つて「わたし癒り次第いろ／＼お禮をいたしますわ。」
と、いつも言ふやうに諄くなるので、おしんは熱くさい室を出やうとした。何でもしもの病氣だといふことなので、傳染ると脅かされてから、その部屋の疊まで何か汚ない細菌でもうぢ／＼してゐるやうな氣がして、踵がむづ痒かつた。
「一服やつてゐらつしやいましな。わたし最う一日退屈してゐますの。」
さう言つて煙管で吸ひつけて差出したが、おしんは怖毛立つて、その吸口にべつとりしたうぢ／＼したものが食つついてゐるやうで身ぶるひしてしまふのであつた。

「いゝえ、わたし煙草はいたゞきませんですの。」

「でも何日かあがつていらしつたぢやありませんか。」

おしんは、思はず顏をあかめた。ときをり喫んでみるのを君子は知つてゐたのである。さうかと言つてみす〳〵汚ない煙管の吸口を自分の唇にあてるのも厭であつた。

「ほんとにいたゞきませんの。」

「さうですか。」

君子は、さし出した煙管をばたりと疊の上に投げ出して、ふいと豆ラムプの方を向いてしまつた。それが打ちつけだつたので、おしんは商賈人はあんなものかと、もう何にも言はないで襖をしめて出やうとした。

「しんさん、わたし何とも思つてやしないんですから……。」

君子が又突然にさう言つて、蒼むくれた顏をこちらへ向けた。病氣のせいで、氣もちが變化りやすいのだと思ふと、自分でしたことを自分で氣にやんでゐる君子を寂しくながめた。

「わたし本當にいただかなかつたものですから失禮しましたの。」

さう言つて兩方で、無意味に微笑ひ合つた。おしんは梯子段を下りつめると、婆の寢息がしづかに障子一重におこつてゐた。

土間の板敷の上で、磯造はもう德利をすつかり空にしてゐた。

「もう寢たかい。」

「え。寢たらしいんですの。」

「行つてもいいだらうお前の部屋へ。」

「もう一度聞いてから……。」

おしんは、姿の寝息をうかがふと、すぐ豊造を手招きした。

豊造は、おしんの部屋へはいると、そこにある安火や掛布團や、新しい箪笥までがみな見覚えがあつた。そればかりではなく、おしんの不斷着をなまめかしく掛けてゐる衣桁に、自分の脱ぎすてた着衣のかけられてあつたことまで思ひ出された。

おしんと二人で、姿の目を偸んでは、縮みあがつてそつと不安な短かい時間を樂しんだことも、背中がうづくほど、ハッキリと目醒めてきたのである。

「おしん、お前だつてさうケロリと忘れてゐるわけではなからう。」

微笑ひながらいふと、おしんは默つてやはり微笑をうかべてゐた。

「お前さんさへ我慢をしてゐてくれればよかつたんだけれど……。」

「だつてあの姿にやどれだけ我慢したかしれなかつた。今でも思ひ出すと腹が立つんだ。」

豊造は、さう言つてから

「箪笥を開けやうぢやないか、目でもさまされると厄介だから。」

おしんはぐずぐずしてゐたが、豊造は立つて鍵をとつた。がつちりと穴に押し込んだ音をきくと、おしんは、かうやつて豊造のきたのはただ自分の着物だけをあてに取りにきたやうに思はれて、いままでになく明瞭と不快な気がした。

「開けるんならあたしがするわ。」

おしんは、豊造に近づいて鍵に手をかけようとした。
「どつらが開けたつて同しぢやないか。お前なんかぐずぐずしてゐて駄目だ。見つけられたらそれまでだから。」
豊造は出さきを挫いてをいて、高びしやにおしんを遣つつけた。おしんは踏みつけられたやうで口惜しかつた。
「あたしのものはあたしがしてよ。お前さんにや分らないから。」
「だつて時間が經つては仕方がないぢやないか。」
「あたしに開かさなきや不承知だよ。人のものを全で自分のやうに手をかけて厭な人ね。」
豊造は、蒼ざめていら〳〵してゐるおしの顔を見ると、怒らしては駄目だと、すぐ手をひいた。
「ちやお前やつて見てくれ。」
「…………」
おしんは默つて鍵をあけると、曳出しを抜きかゝつたが、不意に軋んだので婆の部屋の方に耳をつき立てた。
「夏のものだよ。そりや冬のものちやないか。」
覗き込んだ豊造の顔ががつがつしてゐて、きうに意地汚なく見るからにいやな氣がした。さう思ふせいか、人間でないやうな盗人や掏摸のやうな臭いなまぐさい匂ひさへしてきたのであつた。
「小さい聲でお言ひよ。氣のきかない。」
おしんは、鋭どくきめつけた。豊造はそれを思ひがけなくどやされたやうに口を噤んできいた。
「だつて夏のものでは——。」豊造は急き込んで
「鍵をこちらへ借せよ。」といふと

「あたしのものはあたしが持つてゐるのに不思議はないわ。」

おしんは震えながら鍵をもつてゐる手をうしろに隱した。

「誰か不思議だと言つたか、生意氣を云ふな。」

「お前さんこそゆすりみたいに人の物をとりに來たりなんかんして——。」

「何だと、ゆすりだと。」

豐造は[illegible]とした上、酒氣があつたので、すぐおしんの手首を逆に捩ぢあげて、ばたりと落ちた鍵をひろひ上げた。おしんは手首の骨が折れでもしたやうに痛かつた。

「そんな亂暴なことをするなら、あたしもう聲を立てるから。」

おしんはからだぢゆうを震はせながら呼んだ。

「ばか、聲が大きい。靜かにしろ。」

さう豐造が言つたとき、おしんは、これまでは何處かに優しみがあつたやうな氣がした豐造の顏が、その目つきを中心に毒々しくヒン曲げられた口もとまで、すつかり變化つたやうに思へた。それに、その聲におさへつけられたやうになつて、おしんは何か言はうとしながら、すぐ聲がでなかつた。

と、そのとき二人は、おし默つてゐた空氣をさへおもくかんじた。

「おしんや、誰かそこに居るのかの。さきから話してゐるやうぢやが。」

妻の聲がすると、おしんは棒立ちになつて蒼くなつた。

くそ婆め、とう〳〵感づきやがつた。しまつたと思つたが、もうそれは遲かつた。

「いえ、誰も。」

おしんは慌てゝ返事をした。どきまぎな、さきとあととの色合が異つてゐるやうな聲であつた。

「そんなことはあるまい。わしは先刻から起きてゐるのぢやが、誰かを連れ込んだのだらう。」

布團から、がつくりと鎌首を上げてゐるやうな聲だつた。

「誰を連れこむものですか。寢てゐたのですわ。」

おしんは、豐造の顏をまじまじと眺めてさう婆に聲をかけたが、そのとき豐造が心から厭な氣がした。

「ほんとうですわ。」と答へる間もなく、いきり立つて婆さんは言つた。

「うんにや、きつと居るのだ。あてて見ようかい。」

さう氣味惡くくん笑ひ聲をふくんできこえた。おしんは默つてゐた。「くそ婆め、いつそ飛び出して張り倒してやらうか。」と豐造が力み立つたが「だつて今お前さんが出たら、何も彼も打ちこはしだわ。そしてあとで困るものはあたしだけなんだから。」とおしんはとどめてゐた。

「豐が來たのぢやらう。ゆすりによ。お前がそんな手引きをするなら、家には置かないよ。」

おしんは、びつしよりと汗を搔いた。

「豐さんが今時分何の用事でくるものですか。そりやおばあさんの邪推ですわ。」

やつとこれだけ言ふと、婆は、笑ひあかつて、

「龜の甲より年の甲だわ。ちやんと地聲に見當がついてゐるのだから——豐や、ぐずぐずしないで歸つたらええぜ。この家にはお前に呉れてやるものは相憎葉一本だつてないのぢやから。」

家のなかは水底にあるやうに森としてゐた。豐造はふしぎに婆の聲をきくと、からだに震えがのぼつた。「默つてゐるんですよ。いまお前さんがものを言つてはこまるんだから。」とおしんがおろおろ聲でおさへつけてゐた。

「ほんとに誰もゐないのよ。いいかげんになさいな。そんな大きな聲で近所へきこえるとわるいぢやありませんか。」

障子にひりひり震えるやうな聲で、おしんは言つてみたが最う仕方がないから「豐さん歸つておくれ。このつぎにどうにか間に合せるからね。こんなになつたから、どうにも仕様がないから。」と低い聲でささやいた。

「貰ふものを貰はなきや、明日からどうにも仕様がないぢやないか。察しのわるい奴だな。」

豐造は存外落ちついた聲で言つた。

「いつまでもそうして居て歸らないつもりなの。」

「切川宵の口から寒い目にあつてさ、いまからおめおめ歸れるものか。すこし考へても見な。」

おしんは、どうなることかとおろおろしてゐたが、あちらで婆の聲で

「おしんや、豐をかへしてお了ひな。かかはり合ふと損だよ。婆さんはまだ耳が達者だからの。ことに家のなかは蛛蜘の子一疋這つてゐても、ちやんと分るわ。」

おしんはもう默り込んでゐた。豐造は隙間をねらつて、箪笥から二三枚、ぺつとりした重い垂れを手さわりに味はせる絹物をずるずる引き出した。

「どうするの、冬のものぢやないの。これから要るのよ。」

「ぐずぐずして居られないから當分借しなよ。」

「だつてそりや約束がちがうわ。」

「詰らないことを言ふな。」
おしんは堪りかねて、その手をおさへて
「厭だよ。これぱかりは。」
蒼くなつて叫ぶやうに低い聲で言つた。
「本氣でいふのかい。今になつてさ。」
「本氣ですとも、これが本氣でなくて堪るものかね。」
「慾の皮がつッ張つてやがる。」と、引奪つた奴をぐるぐる手拭卷きにした。それに飛び蒐つておしんが捥ぎ取らうとした。その手さきを拂ふと、はづみを食つておしんが轉がつて重い音を立てた。
「盗人め、何をもつてゆくのだ。」
障子のそとまで這ひ出てきた婆と、着物をかかへた豐造と出あひがしらに、ばつたりと婆の額がなりの高い豐造の胸のところにつき當つた。
「お母さん、危ない。」
おしんがさう言つて婆を抱き起さうとすると、どうしたのか、おしんは足を抱きつかれてばつたり倒れた。
「揃ひも揃つた業つくだ。」
呼び棄てて一歩出ようとすると、又、婆が足にへばりついた。それも蹴飛ばした。おしんが起きあがつて
「お前さんそれでも持つてゆく氣かい。それでは盗坊も同じだ。」
しがみついて言つたので、冷笑つて、芝居もののやうに鼻をならした。

「何とでも言へ、これがたければ明日から日干しぢやないか。」

「おばさんまでこんなにして——。」

ふいと見ると、横倒しになつた婆は、諸の工事の枕木のやうにごろりと寢ころんで、それなりで動かなかつた。一枚あけられた例の豆ラムプの仄暗いかげにすかしてみると、おしんは、からだぢゆうが森としづまりかへつて冷たくなるやうな氣がした。

「まさか、こんな事はこれくらゐのことでは……」

豐造が思はず一尺ばかり顔をさしつけると、すぐ顔をもとの位置にもどした。顔がひきつつて青くなつた。

「お前さんて人はいつたいお婆さんが……」

わけの解らないことを言つて、おしんは中腰になつたまゝ、豐造と婆の顔とを見くらべてゐた。

「まさか……」

豐造は同じいことをもう一度言つて、また一尺ばかり顔をさしつけたが、膝がしらがく〳〵し出した。それに土間から吹き通してくる風が粟々と野原のやうにふしぎに身に沁みた。さつき、土間で酒をのんでゐたことも、おしんと踊み合つて話してゐたことも、いま手にもつてゐる絹物の二三枚の包みも、みな遠いことのやうにおぼろて考へ出されてきたた婆が丸太のやうになつて臥ころんでゐるのは噓で、そこの豆ラムプの布團の間にはさまつて安々とねてゐるやうな氣がしてならなかつた。ねてゐてくれゝばいゝんだが……と、膝吹くかぜが寒かつた。

「どうしてもお前さんはその荷物をもつてゆくのかね。」

あまりの恐怖のために、きよとんとした目つきで、おしんが夢のやうな聲でさういつたとき、豐造はやつとぼんやり

したところを掻き亂された。が、無意識に包みを小脇にかゝへ込んだ。
「あたり前さ、これは初めから貰つてゆくつもりなんだ。」
簞笥の鍵が右の手に、かつきり握られてゐた。それを何氣なく疊の上に投げ出した。ことりと寂しい音がした。
「お前さんひとりで行く氣なの、何處へか。」
「一人だけさ。」
ぶつつり答へた。誰と一しよにゆけるものかと。
「あたしは。」
「お前はこゝの家のものだよ。足手まといでいやだよ。」
「お前さんてひとは何といふ薄情ものだらう。」
おしんは、ぎらつく目つきで、爪の立つやうな光を射りつけた。ははん、おしんと一しよに連れて行つてほしくなつたのだな……ひよいと婆がごろりと轉がつてゐるのをみると、おしんが落着き拂つて言つた意味が、むしろ空恐ろしく晉造にはかんじられた。
「薄情も何もないさ、今になつては――。」
「だからさ、お婆さんの寢床にあるお金も持つてさ、二人で……。」
婆がころりと寢がへりを打つたやうな氣がして、ふいに言葉をこつつりと嚥み込んだ。
「あたしだつて口入屋さんから貰はれてきたんだもの。」とへいぜいおしんが言つてゐたのを晉造はひよいと思ひあてたが、寢床のしたに敷いたのも……しかし、おしんのやつが何時の間にあんな太い根性になつたのかと、いまは自分より

恐ろしくなつた。婆のころがつてゐるのも、おしんのした仕事のやうな氣がして、ちよいと氣もちがゆるんだ。實際はさうかも知れないとまで考へた。

豊造は、默つてほゝけ立つた婆の頭髮のところから、れいの豆ラムプをともした部屋へはいつた。布團のしたへ手をさし込んでみたまま溫かく、へばりつくやうなものを手の甲にかんじた。

「そこら邊ですよ。あ、そこ、そこ。」

おしんの聲がひゞいた。

どこかで遠く半鐘が鳴つてゐた。

「火事かな。」

「…………。」

一と握りある財布が大きな豊造の手につかまれた。枯葉のやうにくしやくしやしてゐた。長い紐がする〳〵と、みぢかい蛇のやうに豊造のラシヤ羽織の膝のあたりに、むつてぬら〳〵してゐた。豊造はほとんど無意識に右の手を財布のなかへ衝き込んで、指さきに觸れたのを摑み出すと、よごれた紙幣が幾束も卷かれてあつた。

「こんなに持つてゐて、何て業つくばりだらう。」

おしんは、豊造の手つきを凝然と見つめたまゝ、茫然立つてゐた。

豊造は財布をふところへ入れて、茶の間へ默つてのつそりと出てゆくと、慌てゝおしんが氣狂ひのやうな聲を立てゝ叫んだ。

「何處へ行くんです。」

「何處へだと……知れたことぢやないか外へゆくのだ。」

「誰と。」

「誰とも行かない一人だ。」

おしんは、そのとき襲ひあがつて、梯子段を二三段かけあがると

「君子さんちよいと來て下さい。」と叫んだ。豐造は手にもつてゐた着物の包みをいきなり梯子段に叩きつけた。

「お前のものはお前に呉れてやる。」

さう言つて豐造は、土間の引戸をあけると外へ出て行つた。君子は足を引ずりながら室から梯子段へやつてきたとき、はじめておしんは泣き出した。

「どうしたんですの。そんなに泣いちやつて。」

君子がさういふと、おしんは指さして爺さんの轉がつてゐるのを見せた。君子はおどろいて傍へよると、これも眞蒼になつて立ち竦んだ。瘠せこけた君子の顏いろが二三分經つとだん／＼弛んだ冷笑ひのやうな色をうかべはじめた。

時計が十時を打つた。古い家のうちを陰氣な金屬の波紋がゆつくりと傳はつて行つた。



暗夜行路

志賀直哉

十一

謙作が自分から放蕩を始めたのはそれから間もなくであつた。或る曇つた薄ら寒い日の午前の事だ。彼は現在に少しもさう云ふ衝動なしに、寧ろ決めた事を決行するやうな心持で、深川のさう云ふ場所に一人で出かけて行つた。

北二年程前に木場からその邊、それから砂村を通つて中川べりへ出た事がある。それ故、道は大概分かつてゐた。彼は永代橋を少し行つた所で電車を降りると、淡んだ不愉快な顔をしながら八幡前の道を歩いて行つた。どれ程陰欝な、そしてどれ程醜い顔つきであるか、自身でも感じられた。道行く人々が皆、彼の目的を知つてゐるやうに彼には思へた。彼はそれらの人々に淡い一種の敵意をさへ感じた。そして急いだ。時々空つばを呑み／＼彼は急ぎ足で歩いて行つた。

幾つ目かの小さい橋を渡つて左へ折れると直ぐ、泥堀をへだてゝさういふ家々が見えた。彼は今更に到頭來たと思つた。登喜子のゐる場所へ行く時とは目的が異り

だけに彼の氣持はぎごちなかつた。寧ろ非常に不愉快だつた。それでゐながら、中止しようと云ふ氣にはならなかつた。

向ふから前どよなしに母衣だけをかけた俥が來た。其上の人が黒眼鏡をかけてゐた。それが却つて彼の注意を惹いた。田島といふ彼よりも三つ上の級にゐた男で、かう云ふ場所で會ふにしては其職業からも殊に思ひがけない人間だつた。謙作は一寸迷つた。二三間歩く間彼は其男の顔から眼が離なせなかつた。向ふでも見てゐるらしかつたが、眼鏡の中でよくわからなかつた。間もなく彼は眼を反らした。其道は先の養魚場からでなければ、曲輪からの一筋道だつた。無論曲輪から出て來たのだと彼は思つた。普段使はない黒眼鏡で尙左う思はれた。

これはお互にいやな所を見たものだと思つた。彼は苦々しい、腹立たしい氣持になつた。然し自分は未だ中へ入つてゐるのではないと思つた。此儘養魚場を拔けて砂村の方へ出て了へば、それとも西線のやうな家へ行つて其儘歸つて了へば、といふやうな考へも一寸浮んだ。然しそれは田島が曲輪を出て來たのでない場合はいゝとしても、それを知りつつ左ういふ事をするのは何かしら卑劣な氣がした。そして、どうせ今日入らないにしろ、屹度自分は又來るに違ひないと彼は思つた。

二時間程して彼は往きとは全く異つた氣持で、曲輪を出て來た。自身でも不思議な程氣安い氣持だつた。悔ゆるといふやうな氣持は全くなかつた。

女は醜い女だつた。青白くて、平つたい顔の、丁度裏店のかみさんのやうな女だつた。實に鈍く善良な女だつた。彼はもう二度と其女を見たいとは思はなかつたが、何かで、これからも好意を示したい氣が切りにした。爲替で寄附金をしてもいゝと考へた。女は一人の客毎に抱主から五錢づつを受取るのだと云ふ事を彼は聽いた。

彼は放蕩を始めてから變にお榮を意識しだした。これは前からも無い事ではなかつたが、彼の時々した妙な想像は道徳

堅固にしてゐる彼に對し、お榮の方から誘惑して來る場合の想像であつた。其想像では常に彼はお榮に說教する自分だつた。左う云ふ事が如何に恐しい罪であるか、その爲めに如何に二人の運命が狂ひ出すか、そんな事を諄々と說き聞かす眞面目臭い青年になつてゐた。しかも、左う云ふ想像をさす素振りがお榮の方にあつたわけではなかつたが、彼は時時そんな風な想像をした。

それが此頃になつて變つて來た。夜中惡い精神の跳梁から寢つけなくなると、本を讀んでも讀んでゐる字の意味を頭が全く受けつけなくなる。只淫蕩の惡い精神が內で傍若無人を働く。追ひ退けても〳〵階下に寢てゐるお榮の姿が意識へ割込んで來る。左う云ふ時彼は居ても起つてもゐられない氣持から、階下へ下りて行く。お榮の寢てゐる部屋の前を通つて便所へ行く。彼の空想では前を通る時に不意に襖が開く。默つて彼に其暗い部屋に連れ込まれる。——が、實際は何事も起こらない。彼は腹立たしいやうな落ちつかない氣持になつて二階へ還つて來る。然し、段々の途中まで來て又立止まる。降りて行かうとする氣持、還らうとする氣持が彼の心で揉合ふ。彼は暗い中段に腰を下ろして、自分で自分をどうする事も出來なくなる。

彼の放蕩は少しづつ烈しくなつて來た。然し氣持は少しも所謂放蕩者らしくならなかつた。左うなれない所に放蕩しながら常に不愉快がついて廻はつた。本統に夢中になれる女がゐさうに思ひながら、彼は中々左う云ふ女に出會はなかつた。一寸そんな氣持になつても常に長もちしなかつた。自分も惡いし、對手も惡いのだと彼は考へた。

登喜子やお加代のゐる所へも前程は行かなくなつたが、それでも緒方や宮本と一緒になるとよく行つた。登喜子に對しても或る落ちつきからは進みも退きもしなかつた。寧ろ進む事が段々困難になつた。

或る程度に執着する事はあつても、それは登喜子の場合のやうに、或はお加代の場合のやうに、それでなければ、

の場合のやうに、彼の氣持はいつも反れて行つた。手輕く深入り出來る女は別として、左うでない女では或る程度に深入りしてからなら却つて夢中になれさうに彼には思へた。然し執着すると、妙に彼は深入りしようとするにはそれ程の熱情が自分にないといふ氣がした。これでは何時まで經つても駄目だと思つても、左う思つて敢て進めるのは如何にも圖々しいやうな、不自然なやうな氣がした。感情が一番先立ちになつてゐて呉れなければ、彼ではそれは不自然だつた。誰れとも夢中になれさうもないと思ふと時々彼は自己嫌惡に陷入つた。然しそんな氣持でゐながら、身體だけは彼は益々放蕩の深みへ墮として行つたのである。

生活が亂れるにつれ、頭が濁つて來るにつれ、彼のお榮に對する惡い精神の跳梁は段々烈しくなつた。彼は此儘の狀態を續けて行つたら、自分達はどうなる事か知れないといふ氣がした。殆ど二十も年の違う、其上祖父の長い間の妾だつたお榮との左う云ふ關係は何かの意味で自分を破滅に導くだらうと云ふ考への前に彼は立ちすくんだ。彼のお榮に對する衝動は、それは惡夢のやうなものだつた。白晝、氣樂な氣持で對座してゐる場合、そんな氣持になる自分が不思議な氣がした。そして惡夢でなくて何んであらうと思はれるのだ。が、實際では其惡夢は段々頻繁に彼を襲つた。

或夜彼は夢を見た。

寢てゐる所に宮本が變な笑顏をして入つて來た。そして、「阪口が旅先で死んだよ」と云つた。謙作は寢たまゝ、「ああ到頭死んだか」と思つた。阪口が誰れにも知らさず家出同樣に一人旅に出た事を夢として彼は知つてゐた。そして彼は阪口が旅先で左ういふ死に方をしさうな氣が何んだかしてゐたのだ。彼が默つてゐると、「播摩をやつたんださうだ——到頭やつたネ」と重ねて云つて宮本は妙な笑ひ方をした。「矢張り左うか」と謙作は思つた。

播摩といふのはどう云ふ事をするのか彼は知らなかつた。然し兎も角それは命がけの危險な方法で、阪口はそれを以前

大阪で教はつて知つてゐるといふ事だけを彼は知つてゐた。そして宮本は阪口から聽いて知つてゐる筈だつた。

阪口は淫蕩の爲めにはあらゆる刺激を求めて來たが、到頭其播摩まで陥ちたかと思ふと謙作は身内が寒くなるやうな異様な感動を覺えた。播摩の恐しい事を百も千も承知の上で、遂に其所まで突きつめた阪口の淫蕩は彼の自由意志の外のものだつたに違ひないと思はれた。

「播摩と云ふのはどうするのだ」謙作はもう少しでから訊きかけて口を噤んだ。聽けば屹度自分もやる。此考へで彼はぞつとした。死なずに濟むかも知れない。然し大概は死んで了ふ。から云ふ恐しい方法でも、百に一つ、千に一つ死なずに濟む機會が與へられてある以上、惡い精神の跳梁に打克てない場合は全く恐しいものになると思つた。知らぬが佛で、知つたが最後だと思つた。

宮本は彼がこれを屹度訊くだらうと思ふやうに意地惡い笑ひを見せながら默つてゐる。謙作は訊かなかつた。そして夢から覺めた。氣味惡いいやな氣持が殘つた。それを云ひに來た宮本が既に化物のやうな氣がした。宮本の形を借りた化物のやうに思はれた。——彼は便所へたつて行つた。（それが又夢だつたのである）便所の窓が開いてゐて、戸外は靜かな月夜だ。木の葉一つ動かない、しんとした夜景色で、廣い庭には（彼の家の庭より、それは餘程廣い庭だつた）屋根の影が山形にくつきりと映つてゐる。彼は不圖其地面を何か動いたやうに思つた。映つた屋根の棟でそれが動いてゐた。彼は先刻、どーんといふ鈍い響で何かゞ自分の寢てゐる屋根の上へ飛び下りたやうな氣がした事を憶ひ出した。

それは七八才の子供位の大きさで、頭だけが大きく、胸から下がつぼんだやうに小さくなつた、恐しいよりは寧ろ滑稽な感じのする魔物だつた。それが全く聲もなし、音もなしに、一人安つぽく跳つてゐる。彼から影を見られてゐる事も知らずに、上を見、下を見、手を擧げ、足を擧げ、一人ではしやいでゐるが、動くものは其影だけで夜は前にも[illegible]

たやうにしつとりと月光の中に靜まり返つてゐた。彼はこれが跳つてゐる間、其棟の下にゐる者は惡い淫蕩な精神に苦しめられるのだと思つた。淫蕩な精神の本體がこんなにも安つぽいものだと思ふ事は却つて何となく彼を清々しい氣持にした。そして今度は本統に眼を覺ました。

十二

仔山羊だと思つてゐる内に僅か二三ケ月の間に何時か角も三寸程になり、顋の下からは先の尖つた子細らしい髯が生えてゐた。

「此頃山羊が變に臭いの。洗つてやつたら、どうでせう」と茶の間で一緒に食事をしてゐる時にお榮は顔をしかめながら云つた。

「洗つても駄目でせう」

「左うかしら、それに段々氣が荒らくなつて、由なんか可恐がつて中へ入れないのよ。突つかゝるものがないと、餌さ函をひつくりかへしたり、棒杭と押しつこをしたり、一人で怒つてゐるの」

「何所かへやりませうか」

「鳥清？鳥清なら幾らかで引き取つて與れるかも知れないのね」

「鳥清でもいゝが、あすこへやれば屹度傳染病研究所へ賣るから、殺しにやるやうなものですね」

「それもいやあね。――おかみさんを持たしてやればいゝのかしら」

「然し何所かへやつた方がいゝでせう。何故なら若しかしたら僕は暫く旅行しようかと思つてるの」

「何所へ？」お榮は一寸意外な顔をした。

「はつきり場所はきめてないんですが、半年か一年、何所か地方へ行つて住まはうかと思ふんです」
「又、どうして不意にそんな事を考へ出したの？」
「左うだな。左うはつきりした理由もないが、兎も角僕はもう少し生活をどうかしなければ駄目なんです」
「私も一緒に行くの？」
「いゝえ」
お榮は一寸不快な顔をした。謙作は何んと說明していゝかわからなかつた。少時して、
「信さんへはもうお話したの？」
「まだしません」
「だけども——全體何故なのかしら？　此所ちやア、勉强が出來ないんですか？」
「左うあんまり問ひつめられると困るが、そんな事でもして氣を更える必要があるんですよ」
「左う。そんなら仕方がないけど。半年か一年したら屹度歸つて下さるんですか？」
「そりやあ歸りますさ。此所が自家だもの」
「氣を更えるだけなら一ト月かそこらでも充分だと思ふけど……」
「長い仕事を持つて行くんです。それを書き上げるまでゐるんです」
二人は暫く默つた。
「ぢやあ、此家はどうするの？　私一人だと、こんな家を借りてるのは無駄ね」
「そんな事ないさ。僅か一年ばかり」

「何か理由があるんぢやないの？」

「理由といへば今僕が云つただけの事です」

「何んだかはつきりしないのね」お榮は少し厭味らしく云つて笑つた。お榮は彼が女でも連れて行つて同棲する心算ではないかと疑ふ風だつた。

「一ト言にいへば純粹に一人になりたいんですよ。友達からも自家の人からも、それから誰れからも」彼はわざと女といふ代りに自家の人と云ふ言葉を使つた。それだけでも多少お榮にはいい感じがした。そして笑ひながら、

「淋しくなりませんか？」と云つた。

「それは淋しくなるかも知れないが、何しろ勉強しますよ」

「私は隨分淋しくなるわね。あんまり淋しくなつたら家をたゝんで出かけますよ」

謙作は苦笑した。それから彼は前日から考へてゐた多分山陽道の何所か、海に面した所で、簡單な自炊生活をする事、その他幾らか具體的な計劃を話した。

「氣樂でいゝのね」と云つて、お榮は「本統に氣樂な人だ」と云ふやうな、いゝ眼つきをして凝つと謙作の顏を見て居た。其時謙作は妙な惱ましさを胸に感じた。

其晩彼は電話で信行の在宅を確めてから本郷の家へ行つた。

「一寸羨しいな」信行は直ぐこんなに答へた。「尾の道へ行くといゝ。尾の道はいゝ所だよ」

「さうかね。何所でもいゝ所ならいゝが、船のつく所だね」

「さうだ。お前は汽車が嫌ひだから、それもいゝかも知れない。一つそ、横濱から船で行くといゝ」

謙作はそれも面白いと思つた。そして最近に出る船を調べて貰つて、切符を買ふ事を信行に頼んで、そして翌日又會ふ約束をして別れて來た。

翌日午後四時少し前、彼は三越の角で、近かくの火災保險會社から出て來べき信行を待つてゐた。年の暮れ近い夕方の忙しい室町通りで、電車は北からも南からも絶えず來ては其前で留まり、車掌が同じ事を云つて、又動いて行つた。俥、自動車、荷馬車、自轉車、それからその間々を縫つて人間が四方へ勝手な速さで歩いてゐた。犬も通つた。彼は鼻先をかすめて通る男の肩の風を顔に受けながら、もう直き自分は前に海を見晴らす遠い靜かな所へ行くのだと思つた。樂みでもあり、一寸淋しい氣持もした。

彼はぶら／＼日本銀行の方へ歩き出した。小さい郵便局の前を通る時に丁度四時が鳴つてゐた。間もなく、廣場を三方から圍んでゐる三井の建物から吐き出されるやうに大勢の人々が出て來た。杖を小腋へ挾さんで卷烟草に火をつけてゐる者がある。先へ行く仲間を小走りに追ひかけて行く者がある。見る見る廣場は此連中で賑はつた。日本銀行からも出て來た。正金銀行からも、其他からも出て來た。そして三々伍々ぞろ／＼と通る。彼は直ぐ、其内に信行を見出した。信行は五十格好の品のない太つた男と何か話しながら來る。信行は笑ひながら、片手に丸めて持つた雜誌で他の手の掌を叩きながらしきりに何かいつてゐる。太つた男は時々それに應じて點頭いて居た。

信行は謙作を見つけると、足を早めて近かづいて來た。

「待つたかい？」

「いや」

背後から、

「ぢやあ、失禮します」と太つた男は聲をかけて、中折の帽子の緣に手だけかけて、脫がずに一寸頭を下げた。

「君は此方へ歸るんぢやないのかい？」

「今日は一寸」

「あゝ。それぢやあ、今の事ね。僅かな事だから、僕の方はどうでもいゝから、あんまり露骨にならないやうに御願ひします」

「承知しました」かういつてもう一度頭を下げて太つた男は外濠の方へ引きかへして行つた。

電車通りへ出ると、

「兎も角、向ふ側へ渡らう」と、信行は暗い外濠の角で、謙作の背中を押すやうにして線路を出した。

「何を食ふ？」

「何んでもいゝ」

「鳥はどうだい？」

「鳥でもいゝ」

日本橋の假橋へ來た。土臺を築くために圍ひをした、其中へ滲み込む水を石油エンチンで絶えず汲み出して居る。亞鉛板が蟹に反りかへつた屋根から、細いのと太いのと二本の煙突が出てゐて、細い方はスポツ／＼と勢ひよく蒸氣を吐く度に喘へて居た。そして太い方は赤さびて、其頭から元氣のない烟を僅かにたてゝゐる。

セメントに小砂利を混ぜたのを畚で陸から運ぶ者がある。頬鬚のいかめしい土方がそれをシヤベルでならしてゐる。一方では其上へ蓆を敷いて、向ひ合つた二人が、掌搗きで、よいさ／＼と突いて居た。

脊廣に日本脚絆をはいた男が測量をして居る。其向ふで、丸太を二本立てゝそれへ貫き板をX字なりに打ちつけてゐる者がある。そして、其下の油のギラ〳〵浮いた水溜りで顔を洗つてゐる、女勞働者があつた。

二人は一寸立止つて欄干へ倚り、それらを眺めた。そして又それを離れて歩き出した。

「働く事が其日々々の食ふ手段になつてゐる奴は未だいゝがね。俺のしてゐる事なんかそれだけの必然さもないからね」突然信行はこんな事を云ひ出した。「時々變な不安な氣持になつて仕方がない」

謙作は一寸不思議な氣がした。信行にも左う云ふ事があるといふのが思ひがけない氣がした。

「會社をよす氣があるの？」

「うん」と信行は首肯いた。「俺は自分のしたい事がもう少し分明したら、直ぐよす心算だ」

「先によしたつていだらう」

「それでもいいが……」かういつて信行は一寸不快な顔をして上を向いた。謙作は少し云ひ過ぎたと思つた。信行には弱い氣持があつた。放蕩などから父にも義母にも隨分心配をかけながら、彼は妙に親孝行の氣質が強かつた。それだけに愛されてもゐたが、かう云ふ決心をするにも父を苦しめる事、父を失望さす事は妙に恐れた。

「どう云ふ事をするつもりなの」

かう謙作は訊いたが、信行ははつきりした返事をしなかつた。

二人は間もなく或る小さい鳥屋に入つて行つた。

「先刻俺と話した男があつたらう？」と信行が云つた。「あれは俺の方の勸誘だが、今日あの男に聽いて、中々ひどい奴があるものだと驚いたよ。二月ばかり前だが、河合といふ年寄の矢張り勸誘が、仲間の野口といふのが家族が病氣で弱

つてゐるから、六ケ月で五十圓貸して貰らへまいかと俺にいふんだ。其爺さんはいやな奴だが野口といふのは人のいゝ一寸勸誘なんか向かない方の奴たんで、子供が病氣だといふ事も聽いてゐたし、貸してやつたんだ。其時利子の事をいふから、それは要らないと云ふと、證書を書かせるといふから、それも要らないと云つて、さう云ふ男だから、返せない時、此方へ氣兼ねをして、會社へ出られなくなつても困るから、君からとして、僕の名を出さずにやつて呉れと云つたんだよ。所がどうだね。河合は其金を天引き十二圓の高利で其弱つてる野口へ貸しつけたもんだ。えらい事をやるぢやないか」と信行は笑つた。「今日あの太つた男が野口の噂をしてゐる内に不圖わかつたんだが、勿論野口の方はとうに其金はつかつて了つて、五十圓の證書だけが河合の手へ渡つてるわけだ。今日の奴は河合をなぐります、とかひどく憤慨してるんだが、なぐつた所で始まらないから、證書と天引きした金だけ取り上げて、なるべく穩やかにやるやうに云つといたがネ。又さう云ふ奴だから契約は中々よく取つて來るんだよ。追ひ出すわけにも行かないんだ」

謙作は信行の寛大な氣持を面白いと思つた。自身ならばもつとずつと腹を立てゝ、多分其年寄りを呼びつけて、逃路のないやうに追ひつめるかも知れないと考へた。

「一度思ひ切つて油を絞つてやるといゝんだ」

「そんな事をしたつて仕方がない。此方がうらまれるだけで、向ふはどんな事をしたつて自分が惡かつたとは思はないからね」

「信さんはそんな風に考へてよくあきらめておられるね。腹は立たないかい？」

「腹は立つよ。然しそんな事をしたつて、結果が何んにもならないと分かつてゐれば、怒る氣もしたくなくなる」

「さうかな。それはその方が本統かも知れないが、僕なら中々それでは落ちつけない」

「然し追求すれば、するだけ不愉快になりさうだからね」
「それが分かつてゐても、初めから許す氣にはなれない」
「其所は俺が吞氣に出來てゐるからかも知れないよ」
一時間程して二人は其所を出た。銀座まで歩いて、其所で信行は駱駝の襟卷を買つて、謙作への餞別とした。

十三

冬にしては珍らしく長閑な日だつた。謙作の乘つた船は何時か岩壁を離れて居た。下には群集と混つてお榮と宮本とが立つて居た。彼は神戸で降りるのに見送りは仰々しいからと止めたが、船が見たいからとお榮は宮本に頼んで連れて來て貰つたのだ。鐘が鳴つて見送人が船から降りねばならぬ時に、お榮は「身體を大切にね」とか「お便りは始終して下さいよ」とか云つた。謙作は一寸感傷的な氣持になつた。

船は一方の旋推機で水を後ろへ、もう一つのでそれを前へやり、時々はそれを止めなどしながら段々と岩壁を離れて行つた。三人は時々微笑しながら手を振り合つてゐた。其内謙作はかうして兩方で何時までも〱見送つてゐるのが苦しくなつた。船の方向が定まり船尾が岩壁を三四十間離れた所で彼は口の中で「ちやあ」と云ひながら頭を下げ、具合惡いやうな氣持を無理に二人へ背を向けて自分の室へ下りて來た。

四人入りの小さい室だが、他に客がないので、彼は一人でそれを占める事が出來た。彼は其所へ置いてある、凭りかかりのない小さい丸椅子に腰を下ろしたが、扨て何をするか、別にする事もなかつた。落ちつかない氣持で、立ち上るとベッドの下から小さい旅行鞄を引き出し、時計の鎖についた鍵でこれを開けて見たりした。今頃二人がどうしてゐるか、それが氣になつた。

彼は又甲板へ出て行つた。思ひの外、船は進んでゐて、もう人々の顔は分からなかつた。然し群集を離れて左の方に二人立つてゐる、それが、さうらしかつた。つぼめた日傘を斜にかざしてゐるのはお榮に違ひなかつた。彼は手を擧げて見た。直ぐ向ふでも應じた。宮本が大業に帽子を振ると、お榮も一緒に日傘を細かく動かしてゐた。顔が見えないと謙作も氣輕な氣持でハンケチが振れた。そして船が石堤の間へかゝる頃には二人の姿も全く見えなくなつた。淡い霧たか、烟だか港一杯に擴がつてゐて、船が進むにつれ、陸の方は段々ぼんやりと霞んで行つた。そして一寸傍見をしても今出て來た岩壁を彼は見失つた。艦尾にミノタツと書いた英國の軍艦が烟突から僅かばかりの烟りをたてながら海底に根を張つてるかのやうにどつしりと海面に置かれてあつた。其側を通る頃はもう、岩壁に添ふて建並んだ、大きな赤煉瓦の建物さへ見えなくなつた。

彼は今は一人船尾の手すりにもたれながら、旋推機にかき廻はされ、押しやられる水をぼんやりと眺めてゐた。それが冴えて非常に美しい色に見えた。そして彼は先刻自分等の通つて來た、レールの縦横に敷かれた石疊の廣場を歸つて行くお榮と宮本の姿を漠然と想ひ浮べてゐた。

下で鐘が鳴つた。降りて行くと晝めしの支度が出來てゐた。テーブルには彼の他には英語を話す若い外國人と、一等船客の守りと、それから船の方の役人が一人、それだけだつた。船の役人と外國人とが何か話してゐた。彼は默つて不味い牛肉を食つてゐた。すると並んでゐた外國人が英語で「貴方は英語を話しますか？」と云つた。彼も英語で、「英語は話せません」と答へた。そして横濱に居た西洋人ならまるで日本語を知らない筈はないと云ふ氣がしたので、彼は今度は日本語で「日本語は話せないんですか」と訊いてみた。若い外國人は當惑したやうに一寸首を傾けて赤い顔をした。

守りの女はそれからは一等の方へ行つたきり遂に出て來なかつた。そして二等船室の空家のやうな廣い所に二人だけとなると、結局彼は彼の不充分な英語で其若者と話す事になつた。彼が一人甲板の喫烟室にゐる時に其男はトランプを持つて入つて來た。そして勸めたが、彼は自分の知つてゐるやり方と異つてゐると面倒臭い氣がして斷つた。若者は仕方なしに一人でテーブルにそれを竝らべては崩し、竝らべては崩ししてゐた。

家は濠洲と云ふ事だつた。今まで亞米利加にゐて、三週間程前横濱へ來たが、母親が病氣と云ふ電報で、これからシドニーへ歸る所だ。富士山を是非見たいと思ふが、今日の天氣で、どうだらう。かう曇つて來ては駄目かしら。などと云つた。實際午前の長閑な霞んだやうな天氣は曇りの前兆だつた。今はどんよりと薄ら寒い曇り日になつてゐた。

三崎の沖を廻はる頃から、彼は和服に着かへ寢床へ入ると、直ぐぐつすりと眠つた。そして再び眼を覺ました時は四時過ぎてゐた。和服の上に外套を羽織つて、甲板へ出た。夕方の曇つた灰色の空に富士山がはつきりと露はれてゐた。それが、海を手前に、伊豆の山々の上に聳え立つた具合が如何にも構圖的で、北齋のあゝ云ふ富士を憶ひ出さした。

喫烟室では下手なピアノが響いて居た。そしてそれが止むと若い外國人が其所から出て來た。其男は「初めて富士山を見た」と滿足らしく云つた。

大島はもう後ろになつて居た。風が寒いので彼は喫烟室から外の景色を見てゐた。伊豆の七島が一つ〳〵其數を増して行つた。若い外國人は又下手なピアノを彈き始めた。そして、マホガニーの烟管を横ぐわへにしたまゝ何か小聲で唄つてゐた。その間々にパデレウスキーを聽いたとか、自分の女同胞にヴアイオリンの名手がゐるといふやうな事を話した。

彼は未だ睡むかつた。四五日續いた寢不足は二時間ばかりの睡眠では何んにもならなかつた。彼は又寢床へ入つた。

船は可成りに揺れてゐた。それに船室が船尾である爲めに、舵を動かす太い鎖が絶えず、グロツ／＼と變な響をたてる。それが耳について彼は眠むれなかつた。ダン／＼／＼／＼と云ふ汽關の音に混つて、旋推機に押される、シヤアー／＼と云ふ水音も聴こえた。

彼は多少船暈を感じた。それが酒に醉つた時のやうにいやに手などが赤くなつて居る。寢床の向ふが鏡になつてゐて白い枕に半分埋まつた彼の顔が丁度額椽にはまつたかのやうに具合よく寢ながら見えた。そして其顔も又赤くなつてゐた。旅へ出るとよく病氣をする方で、もう風邪をひいたかしらと彼は思つた。うと／＼してゐる内に又晩飯の鈴で彼は起こされた。

若い外國人が、本を忘れて來て弱つた、然し明日は船のライブラリを開けて貰らう筈だと云つた。謙作はガルシンの英譯本を持つてゐたのでそれを貸してやつた。

寒い晩になつた。晩になると、習慣から却つて謙作の眼はさえて來た。彼は大きな薄ら寒い食堂で、今日新橋まで送つて呉れた人達、信行、咲子、緒方達、それから、お榮と宮本と、それから今頃丁度ペナンあたりまで行つてゐるだらう龍岡に巴里の大使館氣付けで端書を書いた。

龍岡と別れた事は何といつても彼には淋しい事だつた。龍岡は藝術には門外漢らしい顔を何時もしてゐたが、自身の仕事、飛行機の製作、殊に其發動機の研究に就いては、そしてそれに對する野心的な計劃を話す時などには彼は腹からの熱意を示し、よく亢奮した。謙作は仕事は異つてゐたがさう云ふ龍岡を見る事で常にいゝ刺激を受けた。今、さういふ友を近かくに失つた彼は本統に淋しい氣がされたのである。

紺足袋に麻裏草履を穿いた彼の足は冷え切つて居た。其癖彼の頭の上には大きな旋風器が彼を見下ろしてゐた。それ

は此濠洲通ひの船が、マニラ邊へ行くと廻はり出す筈の旋風器だつた。

彼は何枚かの葉書を書き終ると、寢る前にもう一度、外の景色を見ようと思つて甲板へ出て行つた。眞暗な夜で、見えるものは何んにもなかつた。只、マストの高い所に小さな灯りが一つ、最初星かと思つた程に遠く見えたゞけだつた。人つ子一人ゐない。ヒユー／＼と風の叫ぶ聲。其風に波がしらを折られる、さあ――といふやうな水音。それだけで汽關の響きも、鎚の音も今は聽こえなかつた。船は風に逆からひ、默つて闇へ突き進む。それは何か大きな怪物のやうに思はれた。

彼は外套にくるまつて、少し兩足を開いて立つてゐた。それでも、うねりに從ふ船の大きい動搖と、向かひ風とで時々よろけさうになつた。風は帽子を被ぶらずにゐる彼の髮を穿つやうに吹きつけた。そして、睫毛が風に吹き倒されるので眼がかいくなつた。彼は今、自分が非常に大きなものに包まれてゐる事を感じた。上も下も前も後ろも左も右も限りない闇だ。其中心に彼はかうして立つてゐる。總ての人は今、家の中に眠つてゐる。其中で自分だけが、一人自然に對し、かうして立つてゐる。總ての人々を代表して、と、左ういつた誇張された氣分に彼は捕らへられた。それにしろ、矢張り何か大きな／＼ものの中に自身が吸ひ込まれて行く感じに打克てなかつた。これは決して悪い氣持ではなかつた。然し彼は自身の存在をもつと確めようとするやうに殊更下腹に力を入れ、肺臟一杯の呼吸をしてゐた。然しそれをゆるめると直ぐ、又大きなものに吸ひ込まれさうになる。

眞黑い人影が近寄つて來た。ボーイだつた。何か云つてゐるが、風にさらはれて少しも分からなかつた。ボーイは歸つて行つた。それから暫くして彼は下へ降りて行つた。身體がすつかり冷えてゐた。

彼はかなり疲れてゐた。然し習慣から、雜誌を持つて寢床へ入つた。然しそれは十分しない内に文句の意味が彼か

遠のいて行つた。半分眠つたやうになつて、それでも彼は切りにそれへ追ひすがらうとし、そして無理に意識をはつりさすと、字は讀みながらもう意味は勝手な夢になつてゐた。何時か目蓋が眼を被ふ。彼は快く眠りの中へ沈んで行つた。が、まだ、彼は何かしら考へてゐた。此二三ケ月の眼まぐろしい、いやな生活、その處に漸く來た、安すらかな大きい眠りだ。こんな事を思つてゐた。

彼が眼を覺ました時には船室の丸い小さな窓の厚い硝子を越して白つぽい外の光りが差込んでゐた。彼は枕から頭をあげた。海は前日のやうに、灰色をした寒むさうな空の下で荒れて居た。八時だつた。彼が起きた時は若い外國人は食事を濟ましてもう其所にはゐなかつた。そして彼も食事を濟ますと外套を羽織つて甲板へ出て行つた。風は穏らか凪ぎて、船は紀州の海岸に添ふて進んでゐた。

若い外國人は船尾の方で息を切らし〳〵、鼻歌を唄ひながら、一つ所を行つたり來たりして居た。彼を見ると、「お早よう」と云つた。そして、溫かくなるから一緒に歩かないかと勸めた。彼は着流しに厚い毛のズボン下を穿いてゐたので、尻端折りでもしなければさう早くは歩けなかつた。彼は斷はつて、喫烟室に引きかへした。間もなく若い外國人は貸したガルシンの本を持つて入つてきた。そして「四日間」といふ短篇をモルビツトとかテリブルとかいふ言葉を使つて切りと讃めた。

「神戸へ何時頃に着くかしら」其所へ入つて來たボーイに彼は訊いた。西行きの汽車を調べるつもりだつた。「昨晩は少し荒れたので遲れましたが、煙を一杯にかけてますから、さう遲れは致しますまい」とボーイは答へた。「三時頃には着きませう」

實際船は三時に止まつた。止まらない内から、ホテルのランチが何艘か乘客を爭ふ車夫のやうに船のまわりをうろつ

いた。彼は遅れ走せに來た、郵船會社の大きいランチで岸へ上がつた。そして税關で何か白墨でしるしをされた旅行鞄を膝の間に立てゝ俥で三の宮の停車場へ向かつた。

十四

塩屋、舞子の海岸は美しかつた。夕映えを映した夕なぎの海に岸近かく小舟で輕く揺られながら、胡座をかいて網をつくろつてゐる船頭がある。白い砂濱の松の根から長く網を延ばして、もう夜泊の支度をしてゐる漁船がある。謙作は樂しい氣持で、これらを眺めてゐた。そして汽車が進むに從つて夜が近づいた。彼は又眠むくなつた。眼まぐろしい、寢不足續きの生活の後では幾ら眠つても眠足りなかつた。彼は食堂へ行つて、簡單な食事を濟ますと、和服に着かへて空いてゐる坐席に横くなつた。そして十一時頃ボーイに起こされ、尾の道で下車した。

旅行案内に出てゐる宿屋は二軒とも停車場の前にあつた。彼は其一軒へ入つた。思つたより落ちついた家だつたが、三味線の音が聽こえてゐたので、彼は番頭に

「なるべく奥の靜かな部屋がいゝ」と云つた。

二階の靜かな部屋に通された。彼は起つて、障子を開けて見た。未だ戸が閉めてなく、内からさす電燈の明りが前の忍返しを照らした。其向ふが一寸した往來で直ぐ海だつた。海と云つても、前に大きな島があつて、河のやうに思はれた。何十隻といふ漁船や荷船が所々にもやつてゐる。そしてその赤黄色い灯りが美しく水に映るのが、如何にも賑やかで、何んとなく東京の眞夜中の町を想はせた。

命火鉢を持つて入つて來た女中が椽側にゐる、彼に、

「おあぶりやす」と云つた。彼は默つて入ると、障子を〆め、火鉢の前へ坐つた。女中は煎茶と菓子を彼の前へすゝめ

た。

「今からでも按摩を頼んで貰らへるかい？」

「えーえ、あんさんの爲めなら」と馴々しく云つて女中は出て行つた。餘り馴々しいので彼は普通の宿屋でない家へ入つたかしらと一寸思つた。

彼は按摩から、西國寺、千光寺、淨土寺、それから、講談本にある拳骨物外の寺、近い所では鞆の津の仙醉島、阿武兎の觀音、四國では道後の湯、讃岐の金刀比羅、高松、屋島、淨瑠璃にある志度寺などの話を聽いた。彼は東京からの夜汽車其他の疲の癒くまで一週間程何所か旅してもいゝと考へた。

按摩は話に氣をとられると、段々弱くなつた。

「もう少し强くやつてくれないか」

按摩は急に强くし出した。丁度水車の杵が米をつくやうに肩の上でぐり／＼と亂暴に拳で肉をつき下ろした。

「何んと云ふ流儀だね？」

「長崎の緒方流と申しやすけん」

彼は前日新橋で別れて來たハイカラな緒方と、此洒ぎたない按摩の緒方流とで、何んと云ふ事なし、一人微笑した。

海の方で、ピヨロツ／＼と美しい啼聲だか音だかゞしてゐる。丁度芝居で使ふ千鳥の啼聲だ。もう人々の寢靜まつた夜更け、默つてこれを聞いてゐると何んとなく、淋しいやうな快い旅情が起こつて來た。

「あれは何んだい？」

「あの音かいな。ありやあ、船の蟬ですが」

翌日十時頃、彼は千光寺と云ふ山の上の寺へ行くつもりで宿を出た。其寺は市の中心にあつて、一ト眼に全市が見渡せるといふので、其所から大體の住むべき位置を決めようと彼は思つた。

いゝ加減な所から左へ鐵道線路を越すと、前に高い石段があつて其上の山門に獅子吼と勢よく書いた大きな行燈が下がつてゐた。光明寺といふ寺で、彼は寺内を出抜けて山へかゝつたが、うねり、くねつた分かりにくい小路が幾つもあつて、其どれを選んでいゝか見當がつかず、或る分かれ路に立つて休んでゐた。

「寄せ來る敵を、みな〱殺せえ——」軍隊の喇叭の節で大聲に唄ひながら、十二三になる男の兒が上の方から元氣に馳け下りて來た。

「千光寺へ行くのはこれでいゝの？」彼は行手を指して其兒に訊いた。立止まつた子供は彼と一緒に山を見上げて居たが、どう教えていゝか迷ふ風だつた。

「口で云ふても分からんけえ。儂が一緒に行きやんせう」

子供は彼の返事も待たずに、今降りて來た細い坂路を前こゞみの身體を快活に左右に振りながら、先へ立つて登りだした。斜めに右へ〱と登つて行つた。暫く行くと左手に高く、一二三寸に延びた麥畑があつて、その上に屋根の低い三軒長屋があり、その左の端に貸家の札が下がつてゐた。彼は子供に禮を云つて別れ、其家を見に行つた。日向で張物をしてゐた、かみさんが色々と親切に教えて呉れた。

それから斜に一丁程登つて行つて、彼は又三軒長屋で、東の端が貸家になつてゐるのを見つけた。見晴らしは前の家よりよかつた。此所にも親切な婆さんがゐて、彼の聽く事に親切に答へて呉れた。彼には今の子供でも、かみさんでも、此婆さんでも、皆いゝ人間に思へた。かういふ偶々出會つた二三人からの印象で直ぐ、左う思ふのは單純すぎる氣もし

たが矢張り彼はそれから此初めての土地に何となくいゝ感じを持つた。

漸く千光寺へ登る石段へ出た。それは幅は狹いが、隨分長い石段だつた。段の中頃に二三軒の硝子戸を閉め切つた茶屋があつて、どの家にも軒には千光寺の名所繪葉書を入れた額が下がつてゐた。段を登り切つて、左へ折れ、又右へ少し幅廣い石段を上ると、大きな松の枝に被はれた掛け茶屋がある。彼は其床几に腰を下ろした。

前の島を越して遠く薄霽を頂いた四國の山々が見られた。それから瀨戸海の未だ名を知らぬ大小の島々、左ういふ廣い景色が、彼には如何にも物珍らしく愉快だつた。烟突に白く大阪商船の印をつけた汽船が、前の島の靜かな岸を背景にして、其前に時々湯氣を吐き一寸間を措いて、ぼ――つといやに底力のある汽笛を響かしながら靜かに入つて來た。上ケ汐の流れに乘つた小船が思ひの外の速さで其横を擦れ違ひに漕いで行く。そしてそれよりは近かく、幅廣い不格好な渡し船が流れを斜めに悠々と漕ぎ上つてゐるのが見られた。然し彼はかう云ふ見馴れない景色を眺めて居ると、やがてはこれにも見厭き、それがいゝ景色だけに却つて苦になりさうだと云ふやうな氣がした。

彼はうで玉子を食ひながら、茶店の主から、前の島が向ひ島、その間の小さい海が玉の浦、と云ふやうな事を聽いた。玉の浦に就いては、此千光寺にある玉の岩の天頂(てつぺん)に昔、光る珠があつて、どんな遠くからでも見られ、その光りで町は夜戸外に出るにも灯が要らなかつたが、或る時、船で沖を通つた外國人が、此岩を見て賣つて吳れと云ひに來た。町の人人は山の大きな岩を賣つた所で眞逆に持つては行かれまいと、承知をすると、外國人は上の光る所だけを剜抜いて持つて行つて了つた。それからといふもの、此町でも、月のない夜は他土地同樣、提灯を持たねば戸外を步けぬやうになつたと云ふ話である。

「今も、岩の上には昔の其痕に一タ廻りもおゝけえ穴があいとりますがのう。まあ、今日で申さば、ダイヤモンドの

やうな物やつたらう云ふ事です」

彼は町の人々が間抜けだつた傳説を由緒として傳へて居る所が、何んとなく呑氣で、面白い氣がした。

彼は茶店の主から聞いて、先頃死んだ商家の隱居が住んでゐたと云ふ空家を見に行つた。枯葉朽葉の散り敷いたじめじめした細道を入つて行くと、大きな岩に抱き込まれたやうな場所に薄暗く建てられた小さな茶室様の一棟があつた。が、それが如何にも荒れはてゝゐて、修繕も容易でないが、それより陰氣臭くて迚も住む氣になれなかつた。彼は又茶店まで引きかへして、石段を寺の方へ登つて行つた。大きな自然石、その間々に嚴丈な松の大木、そして所々に碑文、和歌、俳句などを刻りつけた石が建つてゐる。彼は久しい以前行つた事のある山形の先の山寺とか、鋸山の日本寺を憶ひ起こした。開山が長崎の方から來た支那の坊主といふだけに岩や木のたゞずまひから、山門、鐘樓、總てが、山寺日本寺などよりも更に支那風の感じを與へた。玉の岩といふのは其鐘樓の手前にあつた。小さい二階家程の孤立した一つの石で、それが丁度寶珠の玉の形をしてゐる。

鐘樓の所からは殆ど完全に市全體が眺められた。山と海とに挾まれた市は其細い幅とは不釣合に東西に延びて居た。屋並もぎつしりつまつて、直ぐ下にはずんぐりとした煙突が澤山立つてゐる。酢を作る家だ。彼は人家の少しづつ薄らいだ町はづれの海邊を眺めながら、あの邊にいゝ家でもあればいゝがと思つた。

暫くして彼は再び長い〳〵石段を根氣よくこつ〳〵と町まで降りて行つた。其朝、宿の者に買はした下駄は下まで降りると、すつかり鼻緒がゆるんで了つた。

不潔なじめ〳〵した路次から往來へ出る。道幅は狹まかつたが、店々には割りに大きな家が多く、一體に充實して、道行く人々も生々と活動的で、玉の岩の玉を拔かれた間拔けな祖先を持つ人々には見えなかつた。

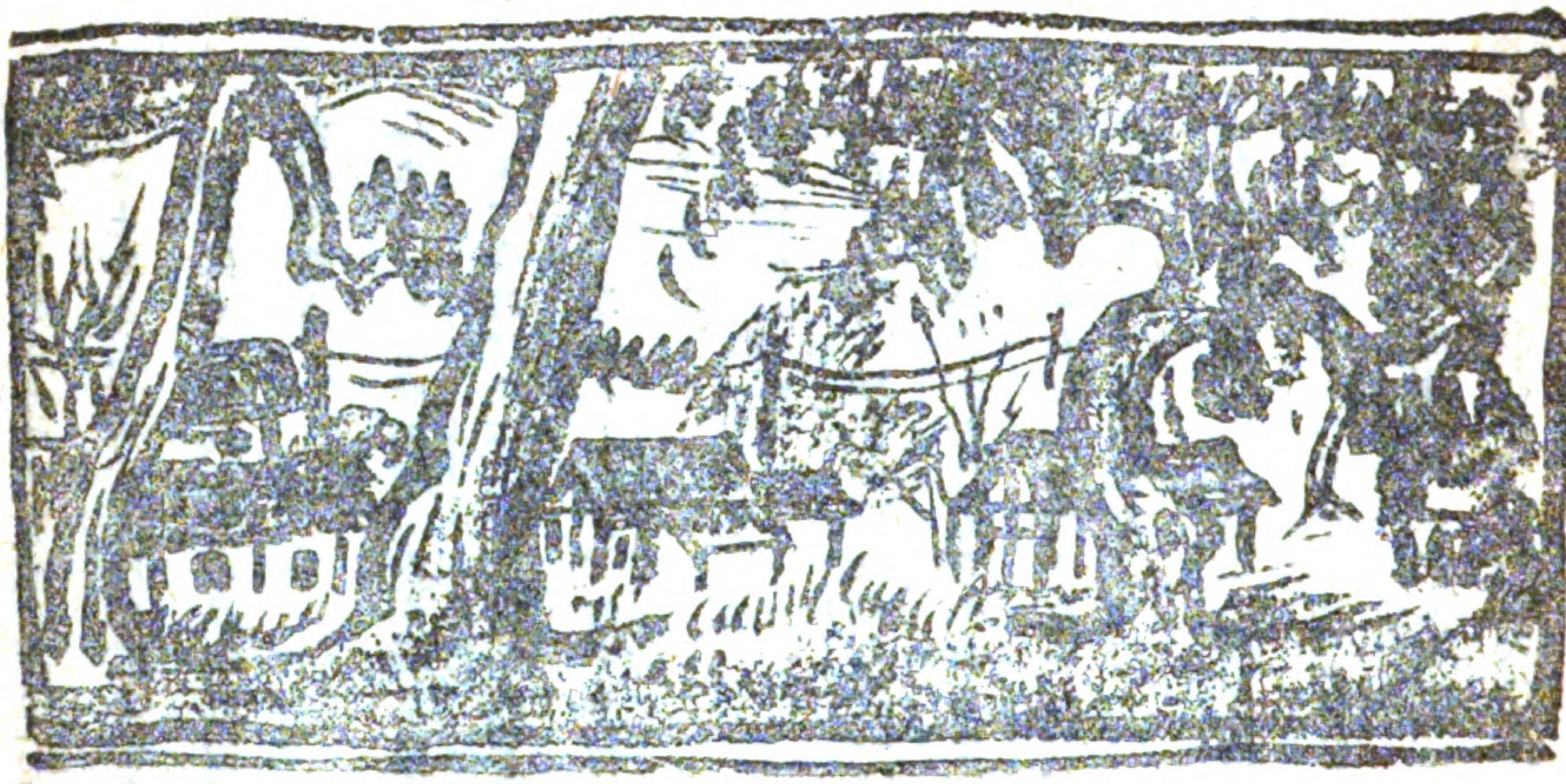
彼は又町特有な何か臭ひがあると思つた。酢の臭ひだ。最初それと氣附かなかつたが、酢と看板を出した前へ來ると一層これが烈しく鼻をつくので氣附いた。路次の不潔な事も特色の一つだつた。瓢簞を下げた家の多い事も彼には物珍らしかつた。骨董屋、古道具屋、又それを專門に賣る家は素より、八百屋でも荒物屋でも、駄菓子屋でも、それから時計屋、唐物屋、印版屋のショーウィンドウでも、彼は到る所で瓢簞を見かけた。彼は歸つて女中から宿の主も丹波行李に幾つかの瓢簞の持主だと云ふ事を聽いた。

其晩彼は早く寢た。そして翌朝未明に起きると、未だ電燈のついてゐる掃いたやうな往來を番頭に送られて近い船つき場へ行つた。霜が下りて寒い朝だつた。

内海の景色は彼が想像した程にはよくなかつた。丁度上げ汐時で、海水が東へ／＼と落ちつきなく苛波を立て／＼流れて居る事などが一寸不思議に思へた。

高濱と云ふ所で下りて、汽車で道後へ行つて、彼は其所で二泊した。そして又同じ所から船に乘り、宇品で降り、廣島から嚴島へ行つた。尾の道より氣に入つた所があれば彼は何所でもよかつたが、結局四日目に又尾の道へ歸つて來た。

淡い旅疲れで、彼は氣分も頭もいゝ位にぼやけて居た。荷は未だ着いて居なかつたが、翌日千光寺の中腹の二度目に見た家を借りる事にして、彼は町から疊屋と提灯屋を呼んで來て、疊表や障子紙を新しくさせた。（續く）



私

谷崎潤一郎

もう何年か前、私が一高の寄宿寮に居た當時の話。

或る晩のことである、その時分はいつもいつも同室生が寢室に額を集めては、夜おそくまで蠟勉と稱して蠟燭をつけて勉强する（その實駄辯を弄する）のが習慣になつて居たのだが、その晩も例に依つて、電燈が消えてしまつてから長い間、三四人が蠟燭の灯影にうづくまりつゝおしやべりを續けて居たのであつた。

その時、どうして話題が其處へ落ち込んだのかは明瞭でないが、何でも我れ我れは其の頃の我れ我れには極く有りがちな戀愛問題に就いて、勝手な熱を吹き散らして居たかのやうに記憶する。それから、自然の經路として人間の犯罪と云ふ事が話題になり、殺人とか、詐欺とか、竊盜などゝ云ふ言葉がめいめいの口に上るやうになつた。

「犯罪のうちで一番われわれが犯しさうな氣がするのは殺人だね、」

と、さう云つたのは某博士の息子の樋口と云ふ男だつた。

「どんな事があつても泥坊だけはやりさうもないよ。——何しろアレだけは實に困る、外の人間は友達に持てるが、ぬすツとなるとどうも人種が違ふやうな氣がするからナア」

樋口はその生れつきの品の好い顏を曇らせて、不愉快さうに八の字を寄せた。その表情は彼の人相を一層品好く見せたのである。

「さう云へば此の頃、寮で頻りに盜難があるツて云ふのは事實かね。」

と、今度は平田と云ふ男が云つた。平田はさう云つて、もう一人の中村と云ふ男を顧みて、「ねえ、君」と云つた。

「うん、事實らしいよ、何でも泥坊は外の者ぢやなくて、寮生に違ひないと云ふ話だがね。」

「なぜ」

と私が云つた。

「なぜツて、精しい事は知らないけれども、——」と、中村は聲をひそめて憚るやうな口調で、「餘り盜難が頻々と起るので寮以外の者の仕業ぢやあるまいと云ふのさ。」

「いや、そればかりぢやないんだ、」

と、樋口が云つた。

「たしかに寮生に違ひない事を見屆けた者があるんだ。——つい此の間、眞ッ晝間だつたさうだが、北寮七番に居る男が一寸用事があつて寢室へ這入らうとすると、中からいきなりドーアを明けて、その男を不意にピシヤリと擲り付けてパタパタと廊下へ逃げ出した奴があるんださうだ。擲られた男は直ぐに追つかけたが、梯子段を降りると影を見失つてしまつた。あとで寢室へ這入つて見ると、行李だの本箱だのが散らかしてあつたと云ふから、其奴が泥坊に違ひないん

だよ。」

「で、その男は泥坊の顏を見たんだらうか？」

「いや、出し拔けに張り飛ばされたんで顏は見なかつたさうだけれども、服裝や何かの樣子ではたしかに寮生に違ひないと云ふんだ。何でも廊下を逃げて行く時に、羽織を頭からスッポリ被つて駈け出したさうだが、その羽織が下り藤の紋附だつたと云ふ事だけが分つてゐる。」

「下り藤の紋附？ それだけの手懸りぢや仕樣がないね。」

さう云つたのは平田だつた。氣のせいか知らぬが、平田はチラリと私の顏色を窺つたやうに思へた。さうして又、私も其の時思はずイヤな顏をしたやうな氣がする。なぜかと云ふのに、私の家の紋は下り藤であつて、而も其の紋附の羽織を、その晩は着ては居なかつたけれども、折々出して着て歩くことがあつたからである。

「寮生だとすると容易に摑まりッこはないよ。自分たちの仲間にそんな奴が居ると思ふのは不愉快だし、誰しも油斷して居るからなあ。」

私にはほんの一瞬間のイヤな氣持ちを自分でも恥かしく感じたので、サッパリと打ち消すやうにしながらさう云つたのであつた。

「だが、二三日うちにきつと摑まるに違ひない事があるんだ、――」

と、樋口は言葉尻に力を入れて、眼を光らせて、しやがれ聲になつて云つた。

「――此れは極く秘密なんだが、一番盜難の頻發するのは風呂場の脱衣場だと云ふので、二三日前から委員がそつと張り番をして居るんだよ。何でも天井裏へ忍び込んで、小さな穴から樣子を窺つてゐるんださうだ。」

「へえ、そんな事を誰から聞いたい？」

此の問を發しなのは中村だつた。

「委員の一人から聞いたんだが、まあ餘りしやべらないでくれ給へ。」

「しかし君、君が知つてるとすると、泥坊だつて此の位の事はもう氣が附いて居るかも知れんぜ。」

さう云つて、平川は苦々しい顏をした。

こゝで一寸斷つて置くが、此の平川と云ふ男と私とは以前はそれ程でもなかつたのに、或る時或る事から感情を害して、近頃ではお互ひに面白くない氣持ちで附き合つて居たのである。尤もお互ひにとは云つても、私の方からさうしたのではなく、平田の方でヒドク私を嫌ひ出したので、「鈴木は君等の考へて居るやうなソンナ立派な人間ぢやない、僕は或る事に依つて彼奴の腹の底を見透かしたんだ。」と、平田が或る時私をこツぴどく罵つたと云ふ事を、私は嘗て友人の一人から聞いた。「僕は彼奴には愛憎を盡かした、可哀さうだから附き合つてはやるけれど、決して心から打ち解けてはやらない」と、さうも云つたと云ふ事であつた。が、彼は陰口をきくばかりで、一度も私の面前でそれを云ひ出したことはなかつた。たゞ恐ろしく私を忌み、若しくは侮蔑をさへもして居るらしい事は、彼の樣子のうちにあり〳〵と見えて居た。相手がさう云ふ風な態度で居る時に、私の性質としては進んで説明を求めようとする氣にはなれなかつた。「己に惡い所があるなら忠告するのが當り前だ、忠告するだけの親切さへもないものなら、或は又忠告するだけの價値さへもないと思つて居るなら、己の方でも彼奴を友人とは思ふまい。」さう考へた時、私は多少の寂寞を感じはしたものゝ、別段その爲めに深く心を惱ましはしなかつた。平田は體格の頑丈な、所謂「向陵健兒」の模範とでも云ふべき男性的な男、私は痩せツぽちの色の靑白い神經質の男、二人の性格には根本的に融和し難いものがあるのであり、全く違つた二

つの世界に住んで居る人間なのだから仕方がないと云ふ風に、私はあきらめても居た。但し平田は柔道三段の猛の者で、「グヅ〱すれば打ん擲るぞ」と云ふやうな、腕ツ節を誇示する風があつたのだ。此方が大人しく出るのは卑怯ぢやないかとも考へられたが、——さうして事實、内々はその腕ツ節を恐れて居たにも違ひないが、——私は幸ひにもそんな下らない意地ツ張りや名譽心にかけては極く淡白な方であつた。「相手がいかに自分を輕蔑しようと、自分で自分を信じて居ればそれでいゝのだ。少しも相手を恨むことはない。」——から腹をきめて居た私は、平田の剛慢な態度に報ゆるに、常に冷靜な寛大な態度を以てした。「平田が僕を理解してくれないのは已むを得ないが、僕の方では平田の美點を認めて居るよ」と、場合に依つては第三者に云ひもしたし、又實際さう思つても居たのだつた。私は自分を卑怯だと感ずることなしに、心の底から平田を褒めることの出來る自分自身を、高潔なる人格者だとさへ己惚れて居た。

「下り藤の紋附？」

さう云つて、平田がさつき私の方をチラと見た時の、その何とも云へないイヤな眼つきが、その晩はしかし奇妙にも私の神經を刺したのである。一體あの眼つきは何を意味するのだらうか？　平田は私の紋附が下り藤である事を知りつゝ、あんな眼つきをしたのだらうか？　それともさう取るのは私の僻みに過ぎないだらうか？——だが、若し平田が少しでも私を疑ぐつて居るとすれば、私は此の際どうしたらいゝか知らん？

「すると僕にも嫌疑が懸るぜ、僕の紋も下り藤だから。」

さう云つて私は虚心坦懐に笑つてしまふべきであらうか？　けれどもさう云つた場合に、こゝに居る三人が私と一緒に快く笑つてくれゝば差支へないが、そのうちの一人、——平田一人がニコリともせずに、ますます苦い顔をするとしたらどうだらう。私はその光景を想像すると、ウツカリ口を切る譯にも行かなかつた。

こんな事に頭を費すのは馬鹿げた話ではあるけれども、私はそこで咄嗟の間にいろいろな事を考へさせられた。「今私が置かれて居るやうな場合に於いて、眞の犯人と然らざる者とは、各々の心理作用に果してどれだけの相違があるだらう。」から考へて來ると、今の私は眞の犯人が味ふと同じ煩悶、同じ孤獨を味はつて居るやうである。つい先まで私はたしかに此の三人の友人であつた、天下の學生たちに羨ましがられる「一高」の秀才の一人であつた、しかし今では、少くとも私自身の氣持ちに於いては既に三人の仲間ではない。ほんの詰まらない事ではあるが、私は彼等に打ち明けることの出來ない氣苦勞を持つて居る。自分と對等であるべき筈の平田に對して、彼の一顰一笑に對して氣がねして居る。

「ぬすツととなるとどうも人種が違ふやうな氣がするからナア」

樋口の云つた言葉は、何氣なしに云はれたのには相違ないが、それが今の私の胸にはグンと力強く響いた。「ぬすツとは人種が違ふ」——ぬすツと！　あゝ何と云ふ厭な名だらう、——思ふにぬすツとが普通の人種と違ふ所以は、彼の犯罪行爲その物に存するのではなく、犯罪行爲を何とかして隱さうとし、或は自分でも成るべく其れを忘れて居ようとする心の努力、決して人には打ち明けられない不斷の憂慮、それが彼を知らず識らず暗黑な氣持ちに導くのであらう。ところで今の私は確かに其の暗黑の一部分を持つて居る。私は自分が犯罪の嫌疑を受けて居るのだと云ふ事を、自分でも信じまいとして居る。さうして其の爲めに、いかなる親友にも打ち明けられない憂慮を感じて居る。樋口は勿論私を信用して居ればこそ、委員から聞いた湯殿の一件を洩らしたのだらう、「まあ餘りしやべらないでくれ給へ」彼がさう云つた時、私は何となく嬉しかつた。が、同時にその嬉しさが私の心を一層暗くしたことも事實だ。「なぜそんな事を嬉しがるのだ、樋口は始めから己を疑つて居やしないぢやないか。」さう思ふと、私は樋口の心事に對して後ろめいたやうな氣がした。

それから又斯う云ふ事を考へられた。どんな善人でも多少の犯罪性があるものとすれば、「若し己が眞の犯人だつたら、——」といふ想像を起すのは私ばかりでないかも知れない、私が感じて居るやうな不快なり喜びなりを、こゝに居る三人も少しは感じて居るかも知れない、さうだとすると、委員から特に秘密を敎へて貰つた樋口は、心中最も得意であるべき筈である。彼はわれわれ四人の内で誰よりも委員に信頼されて居る。彼こそは最もぬすツとに遠い人種である。さうして彼が其の信頼を贏ち得た原因は、彼の上品な人相と、富裕な家庭のお坊つちやんであり博士の令息であると云ふ事實に歸着するとすれば、私はさう云ふ境遇にある彼を羨まない譯に行かない。彼の持つて居る物質的優越が彼の品性を高める如く、私の持つて居る物質的劣弱、——S縣の水呑み百姓の倅であり、舊藩主の奬學資金でヤツと在學しつゝある貧書生だと云ふ意識は、私の品性を卑しくする。私が彼の前へ出て一種の氣怯れを感じるのは、私がぬすツとであらうとなからうと同じ事だ。私と彼とは矢張り人種が違つて居るのだ。彼が虛心坦懷な態度で私を信ずれば信ずるほど、私はいよいよ彼に遠ざかるのを感ずる。親しまうとすればするほど、——うはべはいかにも打ち解けたらしく冗談を云ひ、しやべり合ひ笑ひ合ふほど、ますます彼と私との距離が隔たるのに心づく。その氣持ちは我ながら奈何ともする事が出來ない。…………

「下り藤の紋附」は其の晩以來長い間私の氣苦勞の種になつた。私はそれを着て歩いたものかどうかに就いて散々頭を惱ました。假りに平氣で着て歩くとする、みんなも平氣で見てくれゝばいゝが、「あ、彼奴があれを着てゐる」と云ふ風な眼つきをするとする、さうして或る者は私を疑ひ、或る者は疑つては濟まないと思ひ、或る者は疑はれて氣の毒だと思ふ。私は平田や樋口に對してばかりでなく、凡べての同窓生に對して、不快と氣怯れを感じ出す、そこで又イヤになつて羽織を引込める、と、今度は引込めたが爲めにいよ〳〵妙になる。私の恐れるのは犯罪の嫌疑その物で

それに連れて多くの人の胸に湧き上るいろ〳〵の淺い感情である。私は誰よりも先に自分で自分を疑ひ出し、その爲、に多くの人にも疑ひを起させ、今まで分け隔てなく附き合つて居た友人間に變なこだはりを生じさせる。私が假りに眞のぬすツとだつたとしても、それの弊害はそれに附き纏ふさま〳〵のイヤな氣持ちに比べれば何でもない。誰も私をぬすツとだとは思ひたくないであらうし、ぬすツとである迄も確かにさうと極まる迄は、夢にもそんな事を信ぜずに附き合つて居たいであらう、そのくらゐでなければ我れ我れの友情は成り立ちはしない。そこで、友人の物を盜む罪よりも友情を傷けた罪の方が重いとすれば、私はぬすツとであつてもなくつても、みんなに疑はれるやうな種を蒔いては濟まない譯である。ぬすツとをするよりも餘計に濟まない譯である。私が若し賢明にして巧妙なぬすツとであるなら、——いや、さう云つてはいけない、——若し少しでも思ひやりのあり良心のあるぬすツとであるなら、出來るだけ友情を傷けないやうにし、心の底から彼等に打ち解け、神樣に見られても耻かしくない誠意と溫情とを以て彼等に接しつゝ、コツソリと盜みを働くべきである。「ぬすツと猛々しい」とは蓋し此れを云ふのだらうが、ぬすツとの氣持ちになつて見れば其れが一番正直な、僞りのない態度であらう。「盜みをするのも本當ですが友情も本當です」と彼は云ふだらう。「兩方とも本當の所がぬすツとの特色、人種の違ふ所以です」とも云ふだらう。——兎に角そんな風に考へ始めると、私の頭は一歩〳〵とぬすツとの方へ傾いて行つて、ます〳〵友人との隔たりを意識せずには居られなかつた。私はいつの間にか立派な泥坊になつて居る氣がした。

或る日、私は思ひ切つて下り藤の紋附を着、グラウンドを歩きながら中村とこんな話をした。

「さう云へば君、泥坊はまだ掴まらないさうだね、」

「あゝ」

と云つて、中村は急に下を向いた。

「どうしたんだらう、風呂場で待つて居ても駄目なのか知らん、」

「風呂場の方はあれッ切りだけれど、今でも盛んに方々で盗まれるさうだよ。風呂場の計略を洩らしたと云ふんで、此の間樋口が委員に呼びつけられて怒られたさうだがね。」

私はさつと顔色を變へた。

「ナニ、樋口が?」

「あゝ、樋口がね、樋口がね、――鈴木君、勘忍してくれ給へ」

中村は苦しさうな溜息と一緒にポタ〳〵と涙を落した。

「――僕は今迄君に隱して居たけれど、今になつて默つて居るのは却て濟まないやうな氣がする。君は定めし不愉快に思ふだらうが、實は委員たちが君を疑つて居るんだよ。しかし君、――こんな事は口にするのもイヤだけれども、僕は決して疑つちや居ない、今の今でも君を信じて居る、信じて居ればこそ默つて居るのが辛くつて苦しくつて仕樣がなかつたんだ。どうか惡く思はないでくれ給へ。」

「有り難う、よく云つてくれた、僕は君に感謝する。」

さう云つて、私もつい涙ぐんだ、が、同時に又「とうとう來たな」と云ふやうな氣もしないではなかつた。恐ろしい事實ではあるが、私は内々今日の日が來ることを豫覺して居たのである。

「もう此の話は止さうぢやないか、僕も打ち明けてしまへば氣が濟むのだから。」

と、中村は慰めるやうに云つた。

「だけど此の話は、口にするのもイヤだからと云つて捨てゝ置く譯にや行かないと思ふ。君の好意は分つて居るが、僕は明かに耻を搔かされたばかりでなく、友人たる君に迄も耻を搔かした。僕はもう、疑はれたと云ふ事實だけでも、君

等の友人たる資格をなくしてしまつたんだ。孰方にしても僕の不名譽は拭はれッこはないんだ。ねえ君、さうぢやないか、さうなつても君は僕を捨てないでくれるだらうか。」

「僕は誓つて君を捨てない、僕は君に耻を搔かされたなんて思つても居ないんだ。」

中村は例になく激昂した私の様子を見てオドオドしながら、

「樋口だつてさうだよ、樋口は委員の前で極力君の爲めに辯護したと云つて居る。「僕は親友の人格を疑ふくらゐなら自分自身を疑ひます」とまで云つたさうだ。」

「それでもまだ委員たちは僕を疑つて居るんだね？——何も遠慮することはない、君の知つてる事は殘らず話してくれ給へな、其の方がいつそ氣持ちが好いんだから。」

私がさう云ふと、中村はさも云ひにくさうにして語つた。

「何でも方々から委員の所へ投書が來たり、告げ口をしに來たりする奴があるんださうだよ。それに、あの晩樋口が餘計なおしやべりをしてから風呂場に盜難がなくなつたと云ふのが、嫌疑の原にもなつてるんださうだ。」

「しかし風呂場の話を聞いたのは僕ばかりぢやない」——此の言葉は、勿論それを口に出しはしなかつたけれども、直ぐと私の胸に浮かんだ。さうして私を一層淋しく情けなくさせた。

「だが、樋口がおしやべりをした事を、どうして委員たちは知つただらう？あの晩彼處に居たのは僕等四人だけだ、四人以外に知つて居る者はない譯だとすると、——さうして樋口と君とは僕を信じてくれるんだとすると、——」

「まあ、それ以上は君の推測に任せるより仕方がない。」さう云つて中村は哀訴するやうな眼つきをした。「僕にその人を知つて居る。その人は君を誤解して居る人だ。しかし僕の口からその人の事は云ひたくない。」

平田だな、——さう思ふと私はぞつとした。平田の眼が執拗に私を睨んで居る心地がした。

「君はその人と、何か僕の事に就いて話し合つたかね？」

「そりや話し合つたけれども、……しかし君、察してくれ給へ、僕は君の友人であると同時にその人の友人でもあるんだから、その爲めに非常に辛いんだよ。實を云ふと、僕と樋口とは昨夜その人と意見の衝突をやつたんだ、そうしてその人は今日のうちに寮を出ると云つて居るんだ、僕は一人の友達の爲めにもう一人の友達をなくすのかと思ふと、さう云ふ悲しいハメになつたのが殘念でならない。」

「あゝ、君と樋口とはそんなに僕を思つて居てくれたのか、濟まない濟まない、——」

私は中村の手を執つて力強く握り締めた、私の眼からは涙が止めどなく流れた、中村も勿論泣いた。生れて始めて私はほんたうに人情の溫かみを味はつた氣がした。此の間から逃る瀨ない孤獨に苛まれて居た私が、求めて已まなかつたものは實に此れだつたのである。たとへ私がどんなぬすツとであらうとも、よもや此の人の物を盜むことは出來まい。……

「君、僕は正直な事を云ふが、——」

と、暫く立つてから私が云つた。

「僕は君等にそんな心配をかけさせる程の人間ぢやないんだよ。僕は君等が僕のやうな人間の爲めに立派な友達をなくすのを、默つて見て居る譯にや行かない。あの男は僕を疑つて居るかも知れないが、僕は未だにあの男を尊敬して居る。僕よりもあの男の方が餘つぽど偉いんだ、僕は誰よりもあの男の價値を認めて居るんだ。だからあの男が寮を出るくらゐなら、僕が出ることにしようぢやないか。ねえ、後生だからさうさせてくれ給へ、さうして君等はあの男と仲よく暮らしてくれ給へ。僕は獨りになつてもまだ其の方が氣持ちがいゝんだから。」

「そんな事はない、君が出ると云ふ法はないよ、」

と、人の好い中村はひどく感激した口調で云つた。

「僕だつてあの男の人格は認めて居る。だが今の場合、君は不當に虐げられて居る人なんだ。僕はあの男の肩を持つて

不正に組する事は出來ない。君を追ひ出す位なら僕等が出る。あの男は君も知つてる通り非常に自負心が強くつてナカナカ後へ退かないんだから。出ると云つたらきつと出るだらう。だから勝手にさせて置いたらいゝぢやないか。さうしてあの男が自分で氣が付いて詫りに來るまで待てばいゝんだ。それも恐らく長いことぢやないんだから。」

「でもあの男は剛情だからね。自分の方から詫りに來ることはないだらうよ。いつ迄も僕を疑ひ通して居るだらうよ。」

私の斯う云つた意味を、私が平田を恨んで居て其の一端を洩らしたのだと云ふ風に、中村は取つたらしかつた。

「なあに、まさかそんな事はないさ。斯うと云ひ出したら飽く迄自分の說を主張するのが、あの男の長所でもあり缺點でもあるんだけれど、惡かつたと思へば綺麗さつぱりと詫りに來るさ。そこが彼の男の愛すべき點なんだ。」

「さうなつてくれゝば結構だけれど、――」

と、私は深く考へ込みながら云つた。

「あの男は君の所へは戾つて來ても、僕とは永久に和解する時がないやうな氣がする。――あゝ、あの男は本當に愛すべき人間だ。僕もあの男に愛せられたい。」

中村は私の肩に手をかけて、此の一人の哀れな友を庇ふやうにしながら、草の上に足を投げて居た。夕ぐれのことで、グラウンドの四方には淡い靄がかゝつて、それが海のやうにひろびろと見えた。向うの路を、たまに二三人の學生が打ち連れて、チラリと私の方を見ては通つて行つた。

「もうあの人たちも知つて居るのだ、みんなが己を爪彈きして居るのだ。」

さう思ふと、云ひやうのない淋しさがひしひしと私の胸を壓つた。

その晚、寮を出る筈であつた平田は、何か別に考へた事でもあるのか、出るやうな樣子もなかつた。さうして私とは勿論、樋口や中村とも一と言も口を利かないで、默りこくつて居た。事態が斯うなつて來ては、私が寮を出るのが當然だとは思つたけれども、二人の友人の好意に背くのも心苦しいし、それに私としては、今の場合に出て行くことは次し

い所があるやうにも取られるし、ます／＼疑はれるばかりなので、さうする譯にも行かなかつた。出るにしてももう少
し機會を待たなけりやならない、と、私はさう思つて居た。

「そんなに氣にしない方がいゝよ、そのうちに犯人が摑まりさへすりや、自然と解決がつくんだもの。」

二人の友人は始終私にさう云つてくれて居た。が、それから一週間程過ぎても、犯人は摑まらないのみか、依然とし
て盜難が頻發するのだつた。遂には私の部屋でも樋口と中村とが財布の金と二三冊の洋書を盜まれた。

「とう／＼二人共やられたかな、あとの二人は大丈夫盜まれッこあるまいと思ふが、……」

その時、平田が妙な顏つきでニヤ／＼しながら、こんな嫌味を云つたのを私は覺えて居る。

樋口と中村とは、夜になると圖書館へ勉强に行くのが例であつたから、平田と私とは自然二人きりで顏を突き合はす
事が屢々あつた。で、私はそれが辛かつたので、自分も圖書館へ行くか散歩に出かけるかして、夜は成るべく部屋に居
ないやうにして居た。すると或る晩のことだつたが、九時半頃に散歩から戻つて來て、自習室の戸を明けると、いつも
其處に獨りで頑張つて居る筈の平田も見えないし、外の二人もまだ歸つて來ないらしかつた。「寢室か知ら?」――と思
つて、二階へ行つて見たが矢張り誰も居ない。私は再び自習室へ引返して平田の机の傍に行つた。さうして、靜かにそ
の抽出しを明けて、二三日前に彼の國もとから屆いた書留郵便の封筒を搜し出した。封筒の中には拾圓の小爲替が一枚
這入つて居たのである。私は悠々とその内の一枚を拔き取つて懷ろに收め、抽出しを元の通りに直し、それから、極め
て平然と廊下に出て行つた。廊下から庭へ降りて、テニス・コートを横ぎつて、だら／＼と地面がなぞへになつて居る
草のぼう／＼と生えた薄暗い窪地の方へ行かうとすると、

「ぬすッと!」

と叫んで、いきなり後から飛び着いて、イヤと云ふほど私の横ツ面を張り倒した者があつた。それは平田だつた。

「さあ出せ、貴様が今懷ろに入れた物を出して見せろ!」

「おい、おい、そんなに大きな聲を出すなよ、」

と、私は落ち着いて、笑ひながら云つた。

「己は貴樣の爲替を盗んだに違ひないよ、返せと云ふなら返してやるし、來いと云ふなら何處へでも行くさ、それで話が分つて居るからい丶ぢやないか。」

平田はちよつとひるんだやうだつたが、直ぐ思ひ返して猛然として、續けさまに私の頬桁を擲つた。私は痛いと同時に好い氣持ちでもあつた、此の間中の重荷をホッと一度に取り落したやうな氣がした。

「さう擲つたつて仕樣がないさ、僕は見す見す君の罠に懸つてやつたんだ、あんまり君が威張るもんだから、「何奴彼奴の物だつて盗めない事があるもんか」と思つたのがしくじりの原なんだ。だがまあ分つたから此れでい丶や、あとはお互ひに笑ひながら話をしようよ。」

さう云つて、私は仲好く平田の手を取らうとしたけれど、彼は遮二無二胸倉を掴んで私を部屋へ引き擦つて行つた。私の眼に、平田と云ふ人間が下らなく見えたのは此の時だけだつた。

「おい君達、僕はぬすッとを掴まへて來たぜ、僕は不明の罪を謝する必要はないんだ。」

そこへ戻つて來て居た二人の友人の前に、平田は私を激しく突き倒して云つた。部屋の戸口には騒ぎを聞き付けた寄生たちが、刻々に寄つて來てかたまつて居た。

「平田君の云ふ通りだよ、ぬすッとは僕だつたんだよ、」

私は床から起き上つて二人に云つた、極く普通に、いつもの通り馴れ馴れしく物を云つて居る積りではあつたが、矢張り顔が眞青になつて居るらしかつた。

「君たちは僕を憎いと思ふかね、それとも僕に對して耻かしいと思ふかね、」

と、私は二人に向つて言葉をつゞけた。

「――君たちは善良な人たちだ。しかし不明の罪はどうしても君たちにあるんだよ。僕は此の間から幾度も幾度も正直な事を云つたぢやないか。『僕は君等の考へて居るやうな値打ちのある人間ぢやない。平田君こそ確かな人物だ、あの人が不明の罪を謝するやうな事は決してない』ツて、あれほど云つたのが分らなかつたかね。『君等が平田君と和解する時はあつても、僕が和解する時は永久にない』とも云つたんだ。僕は『平田君の偉いことは誰よりも僕が知つて居る』とまで云つたんだ。ねえ君、さうだらう、僕は決して一言半句もウソをつきはしなかつたらう。ウソはつかないがなぜハツキリと本當の事を云はなかつたんだと、君たちは云ふかも知れない。やつぱり君等を欺して居たんだと思ふかも知れない。しかし君、そこはぬすツとたる僕の身になつて考へてもくれ給へ。僕は悲しい事ではあるがどうしてもぬすツとだけは止められないんだ。けれども君等を欺すのは厭だつたから、本當の事を出來るだけ廻りくどく云つたんだ。僕がぬすツとを止めない以上あれより正直にはなれないんだから、それを悟つてくれなかつたのは君等が惡いんだよ。こんな事を云ふと、いかにもヒネクレた嫌味を云つてるやうだけれども、そんな積りは少しもないんだから、何卒眞面目に聞いてくれ給へ。それほど正直を欲するならなぜぬすツとを止めないのかと、君等は云ふだらう。だが其の質問は僕が答へる責任はないんだよ。僕がぬすツととして生れて來たのは事實なんだよ。だから僕は其の事實が許す範圍で、出來るだけの誠意を以て君等と附き合はうと努めたんだ。それより外に僕の執るべき方法はないんだから仕方がないさ。それでも僕は君等に濟まないと思つたからこそ『平田君を追ひ出す位なら、僕を追ひ出してくれ給へ』ツて云つたぢやないか。あれはごまかしでも何でもない、本當に君等の爲めを思つたからなんだ。君等の物を盗んだ事も本當だけれど、君等に友情を持つて居る事も本當なんだよ。ぬすツとにもそのくらゐな心づかひはあると云ふ事を、僕は君等の友情に訴へて聞いて貰ひたいんだがね。」

　中村と樋口とは、默つて、呆れ返つたやうに眼をぱちくりやらせて居るばかりだつた。

「あゝ、君等は僕を圖々しい奴だと思つてるんだね、やつぱり君等には僕の氣持ちが分らないんだね、それも人種の

ひだから仕様がないかな。」

さう云つて、私は悲痛な感情を笑ひに紛らしながら、猶一と言附け加へた。

「僕はしかし、未だに君等に友情を持つて居るから忠告するんだが、此れからもないことぢやないし、よく氣を付け給へ。ぬすツとを友達にしたのは何と云つても君たちの不明なんだ。そんな事では社會へ出てからが案じられるよ。學校の成績は君たちの方が上かも知れないが、人間は平田君の方が出來て居るんだ。平田君はごまかされない、此の人は確かにえらい！」

平田は私に指されると妙な顔をして横を向いた。その時ばかりは此の闊腹な男も妙に極まりが惡さうであつた。

それからもう何年か立つた、私は其の後何遍となく暗い所へ入れられもしたし、今では本職のぬすツと仲間へ落ちてしまつたが、あの時分のことは忘れられない。殊に忘れられないのは平田である。私は未だに惡事を働く度にあの男の顔を想ひ出す。「どうだ、己の睨んだことに間違ひはなからう。」さう云つて、あの男が今でも威張つて居るやうな氣がする。兎に角あの男はシツカリした、見所のある奴だつた。しかし世の中と云ふものは不思議なもので、社會へ出てから案じられる」と云つた私の豫言は綺麗に外れて、お坊つちやんの樋口は親父の威光もあつらうけれどトントン拍子に出世をして、洋行もするし學位も授かるし、今日では鐵道院〇〇課長とか局長とかの椅子に收まつて居るのに、平田の方はどうなつたのか杳として聞えない。此れだから我れ我れが「どうせ世間は好い加減なものだ」と思ふのも尤もな譯だ。

讀者諸君よ、以上は私のうそ僞りのない記錄である。私は茲に一つとして不正直な事を書いては居ない。さうして、樋口や中村に對すると同じく、諸君に對しても「私のやうなぬすツとの心中にも此れだけデリケートな氣持ちがある」と云ふことを、酌んで貰ひたいと思ふのである。

だが、諸君もやつぱり私を信じてくれないかも知れない、けれども若し——甚だ失禮な言ひ草ではあるが、——諸君のうちに一人でも私と同じ人種が居たら、その人だけはきつと信じてくれるであらう。（大正十年二月作）

東洋文明は精神的にして西洋文明は物質的なりや

—國民間相互理會の要素—

ジヨン・デユウイ

一

旅行は人の見解を廣からしむる効果を有するものとして知られてゐる、そしてそれは少くとも旅行者が進んでその心意を開放してゐる時にさうである。旅行から獲らるゝ啓蒙の量は大抵旅行者の發足地たる國の文明と到着地たる國の文明との差の量に據るものである。この兩者の差異が大なれば大なる程、旅行者には學ぶ機會が多い。けれども同時にこの文明の不同が總てその學ぶことを困難ならしむるものである。何者吾人は過去の經驗によつてのみ新しい經驗を理會し得るものだからである。若し新舊の經驗が餘りに隔つてゐるならば、新經驗は一片の白紙たるに止まり、然らざれば吾人を斷然拒絕するであらう。從つて幾多の旅行者は故國で見慣れたところと相異するものを見ることによつて大いに氣を損ずる。彼等は已知の事柄を以つて畢竟標準とし、何にせよこの標準から遠く隔つてるものを非議する。然しながら幸ひなことに多くの人々は變化と珍奇とを欲するもので、平生見慣れたところと異ふ事物に面すれば、理會せずとも猶それに注意を奪はれ勝ちなものである。其處で若し自然の外觀が蠱惑的であり、人情風俗が綺麗的であり、そして都

ひだから仕樣がないかな。」

さう云つて、私は悲痛な感情を笑ひに紛らしながら、猶一と言附け加へた。

「僕はしかし、未だに君等に友情を持つて居るから忠告するんだが、此れからもないことぢやないし、よく氣を付け給へ。ぬすッとを友達にしたのは何と云つても君たちの不明なんだ。そんな事では社會へ出てからが案じられるよ。學校の成績は君たちの方が上かも知れないが、人間は平田君の方が出來て居るんだ。平田君はごまかされない、此の人は確かにえらい！」

平田は私に指されると變な顏をして横を向いた。その時ばかりは此の剛腹な男も妙に極まりが惡さうであつた。

それからもう何年か立つた。私は其の後何遍となく暗い所へ入れられもしたし、今では本職のぬすッと仲間へ落ちてしまつたが、あの時分のことは忘れられない。殊に忘れられないのは平田である。私は未だに惡事を働く度にあの男の顏を想ひ出す。「どうだ、己の睨んだことに間違ひはなからう。」さう云つて、あの男が今でも威張つて居るやうな氣がする。兎に角あの男はシッカリした、見所のある奴だつた。しかし世の中と云ふものは不思議なもので、「お坊つちやんの樋口は親父の威光もあらうけれどトントン拍子に出世をして、洋行もするし學位も授かるし、今日では鐵道院の○○課長とか局長とかの椅子に收まつて居るのに、平田の方はどうなつたのか杳として聞えない。此れだから我れ我れが「どうせ世間は好い加減なものだ」と思ふのも尤もな譯だ。

讀者諸君よ、以上は私のうそ偽りのない記錄である。私は茲に一つとして不正直な事を書いては居ない。さうして、樋口や中村に對すると同じく、諸君に對しても「私のやうなぬすッとの心中にも此れだけデリケートな氣持ちがある」と云ふことを、酌んで貰ひたいと思ふのである。

だが、諸君もやつぱり私を信じてくれないかも知れない、けれども若し――甚だ失禮な言ひ草ではあるが、――諸君のうちに一人でも私と同じ人種が居たら、その人だけはきつと信じてくれるであらう。（大正十年一月作）

東洋文明は精神的にして西洋文明は物質的なりや

―國民間相互理會の要素―

ジョン・デュウィ

一

旅行は人の見解を廣からしむる効果を有するものとして知られてゐる、そしてそれは少くとも旅行者が進んでその心意を開放してゐる時にさうである。旅行から獲らるゝ啓蒙の量は大抵旅行者の發足地たる國の文明と到着地たる國の文明との差の量に據るものである。この兩者の差異が大なれば大なる程、旅行者には學ぶ機會が多い。けれども同時にこの文明の不同が總てその學ぶことを困難ならしむるものである。何者吾人は過去の經驗によつてのみ新しい經驗を理會し得るものだからである。若し新舊の經驗が餘りに隔つてゐるならば、新經驗は一片の白紙たるに止まり、然らざれば吾人を斷然拒絶するであらう。從つて幾多の旅行者は故國で見慣れたところと相異するものを見ることによつて大いに氣を損ずる。彼等は已知の事柄を以つて畢竟標準とし、何にせよこの標準から遠く隔つてるものを非議する。然しながら幸ひなことに多くの人々は變化と珍奇とを欲するもので、平生見慣れたところと異ふ事物に面すれば、理會せずとも猶それに注意を奪はれ勝ちなものである。其處で若し自然の外觀が蠱惑的であり、人情風俗が繪畫的であり、そして都

市が堅埃と腐敗物との故に餘りに誇張的でないならば、旅行者の多くはその見聞するところより大いに新理解を得ることがなくとも、これを享樂するものである。

旅行者は屢々二種に分たれる。新しい印象に敏感でなく、又藝術的趣味に缺けてる人々は、旅行中見聞するところのものをば、自分がこれまでによく知つてゐてそして自分が好むやうになつたところのものと相異してゐるといふ理由でこれを非議し廻る。かゝる人々の中には、外國の住民が旅行者の母國語を理會し能はないと言つて、これを非難するものすらある。かくの如き人々は自分が外國にある間常に不滿を懷き、一度故國に歸るや恰も彼等の所謂聖能陰るゝ國に歸つたかの如くに感ずるのである。けれども他の種の人々はその見聞するところに絶えざる驚喜を覺え、旅行が不斷の歡喜である。然るにこの歡喜たるや多少劇場に於ける悲劇より得らるゝ娯樂の如きものがある。そは寧ろ皮相的な情緒である。この種の旅行者は旅行する國々をば、謂はゞ、自分の觀覽に供せらるゝための演劇の如くに心得て、眼光紙背に徹する底の企圖を持たない。時としてはかゝる旅行者の態度が却つて前の愚痴つぽい惡口を叩く種のものゝそれよりも土着民の反感を買ふのである。これは彼等が質任として取り扱はれずにたゞ單に觀覽享樂の具に供せられると感ずるが故である。

第一種の旅行者は國際的理會の上に何等有用なるものを貢獻しない。彼は自國が他の如何なる國よりも優秀なることに關して、彼が旅程に上つた日よりも一層強い確信をもつて故國に歸る。彼は恐らく他の諸國民に對する積極的輕侮と凡べての國民的偏見との一層強められたるものをもつて歸國するであらう。第二種の旅行者は國際的理會の上に稍々貢獻するところがある。彼は善意と深切な感情との雰圍氣を持ち歸る。彼は旅行した國に對する興味、則ち、その國の人々も亦人間であつて幾多の愛恐的な人情と綺麗的な風俗とを持つてるといふ感じを持ち歸る。情緒的に彼の展望は廣めら

れてる。この都合の好い氣質だけに就いて謂へば、それは國際的善意に對する一つの貢獻で、平和に資するところが多々ある。然しながらこれは主として理解に根ざさない感情一片のことで、餘り深いところを掴んでゐない、而して若し彼我兩國關係の緊張した時期に遭遇せむか、この感情は直ちに恐怖と嫌惡との他の情緒に讓歩して了ふものである。

要するに、吾人は猶如何にして他國民との接觸が敎育の眞實の手段となり、洞察と理會との方便となり得るかの問題に面せねばならぬ。右の旅行者の場合は單にこの接觸の凡ゆる種類の一例證或は一象徴として擧げられたのに過ぎぬのである。旅行をせぬもの、その肉體が故國に留まるものは、一般に他國民とは何か或る間接の接觸を有する、謂はゞ、想像の上で旅行をする。彼等は書籍或は新聞を讀み、又自分よりもよく物を知つてゐる人々と語らう。そして彼等自身にすら氣が付かぬ間に、彼等は好惡何れかの態度を形づくるやうに見ゆる。彼等は吸引せられなければ反撥するのである。彼等は好奇と興味と同情とを持つ、然らざればその上永く交通を續けたところで、恐らくは貿易品目の他には、何等學ぶところも得るところもないと承知するに至るのである。かくの如き人々の凡べてに對しても亦如何にして洞察と理會とが一層進めらるべきかの問題が存在するのである。何者理會は彼我相互の好感或は尊敬すらも保證し得ぬであらうが、又その緊張した關係の進展に對する絕對的障壁にもなり得ないであらうか、それは凡ての論爭と事件との和協的解決の可能性に於ける信念を創造するやうになつて、そして國民をば憤慨の危險な波濤と疑惑の洪水と恐怖の狼狽とに拉し去らるゝことから防ぐであらう。何者之等は無知と偏見との故にのみ榮えるものだからである。

二

如上の概説は東西兩洋の一般的關係に關する一の特殊な點の考察に對する前置で、この點に關するヨリ良い理知的了解は少くとも兩者の關係を改善するに少なからざる貢獻を爲すであらう。西洋から極東への訪問者は東西兩洋に關する

一觀念にして日本及び支那に可なり廣く行はれてゐるものに喫驚する。それは、即ち、東洋文明は精神的にして西洋文明は物質的だといふことが普通に信ぜられてる一事である。かくの如き信念の存在は彼にとつて一の驚異であり、否一の電擊ですらある、況んや多數の東洋人がこの觀念たるや殆んど公理にも等しく西洋人も同樣にこれを許容するものと考ふるが如きに於いてをやである。その驚異の程度は西洋より來るもの丶甚だ多數がこの言說を顚倒せむと欲するならむと言ふことによつて指示せられ得るであらう。彼等は故國に於ける文明の根據が精神的にして、旅行中に見るものが物質的なるを云爲するであらう。而して彼等はこの信念を支持するために幾多の事實或は少くとも事實と見ゆるものを列擧するであらう。然しながら本論文に於ける私の目的はこの場合を論ぜむとすることでもなく、又この論議の何れの方面かに加擔することでもない。私がこの事に論及するのは、第一には、國際的理會の上の障害の或るもの丶一例證としてゞあり、第二には、一見西洋文明の物質的方面と見ゆるもの丶中に或る種の理想的或は精神的要素、而も屢々等閑に附せらる丶要素のあることを示さむと試むるためである。而して本論文は之等二點の中その第一の點を論議せむとするものである。

三

東洋文明は精神的にして西洋文明は物質的だといふことが相互の理會を進むる上の障害であるてふ問題を考察するに當つて、私は二つの點を明かにしたいと思ふ。その第一は、精神的及び理想的の眞義に關して、東西兩洋に相異なつた標準或は定規の存在してゐることである。私は東洋的意義を闡明せむと觸れ込むものではない、却つてこの點に就いては誰かその資格あるものが東洋から出て充分に說明するならば、私はそれを甚だ本懷に思ふものである。けれども私は屢々東洋人が次ぎの一事に論及するのを耳にしてゐるから、それを此處に書き止めて置くことにする。西洋の人々は多

忙で活動的で、何よりも活動を賞讃するやうに見ゆる。彼等は閑日月と默想の修養と思辨と自然や文學や藝術やの美の靜穩な評價とを珍重するやうには見えない。彼等が優秀な美術と文學とを創造してゐることは勿論拒まれてないが、西洋に於いては、之等は文明の最も本質的なものといふよりも寧ろその附隨物で、人生の主流には入つてゐないやうに見ゆる。大多數の人々は閑日月をば他の種の活動に對する機會として見る。それは何か知らん活動的なそして恐らくは喧騷的な狀態に於いて享樂せらるべきものである。それは默想と靜觀との中に心意を平穩に修養する機會ではない。而して多くの人々にとつてそれは單に氣晴らしに過ぎぬもので、餘り重大な事柄とは視られてゐない。それは絕えず忙はしく何かを爲しつゝあるところの人生の主流の外に置かるべきものである。そして西洋では斷えず多忙(ビジー)だといふことが主として所謂業務(ビジネス)、卽ち、賣買商品製造金儲け等を意味するものゝ如くである。如上の言說が、私には、少くとも西洋文明を物質的だと呼ぶ意味の一部分を暗示してゐるやうに見える。それは更に亦少なくとも東西兩文明を區別する標準として用ひらるゝ精神的といひ或は理想的といふ意味の觀念の一部分を示唆してゐる。卽ち、精練せられた修養と閑日月の享樂卽ち商業的政治的體育的社交的會合の如き直接活動からの解放がそれである。或は少くとも私にはさう見える。兎に角宇宙に關する一種の形而上學的靜觀を含む最廣義の審美的要素が顯著である。

其處で理想的なるもの及び精神的なるものに對する西洋の標準は疑ひもなく東洋のそれとは異ふ。それは前述の要素を全然拒否するものではないが、普通の見解に從へば、この要素は全く從屬的のものである。西洋の見解の中には審美的要素よりも論理的要素が一層强說せられてゐる。他人に對する奉仕、社會的進步と人類の平安とに對する熱情、これが理想的であると視らるゝので、自らの人生に何等これを實現するところなきものすらこれを主張してゐる。他人の平安のために一私的の享樂を犧牲に供すること、否閑日月の精練せられた享樂すらも犧牲に供することが、精神的なるもの

中に於ける重要な要素として見らるゝのである。この標準をば多少意識的に心意の中に宿してるところから、多數の西洋人は、既に私が指摘したやうに、東洋に廣く行はれてる見解を顚倒して、彼等自身の文明をばヨリ精神的だと視るのである。何者、彼等は故國に於いて見出し得ると思ふのと同樣の公共的精神及び獻身を東洋に於いて見出し得ないからである。

吾人は此處に兩標準の稍々平面な矛盾を見るのであるが、如何にこれが相互の理會を困難ならしむるものなるかを思はねばならぬ。奉仕の理想は活動の理想である、斷えず多忙ならむとする理想である。從つて閑日月とその修養との見地よりすれば、そは甚しく唯物論の色彩を帶びて見ゆるであらう、如何にそが唯物論の高い資質を備へてるのだとはいへ。他方、奉仕の倫理的理想の見地よりすれば、審美的評價と默想とも亦唯物論の色彩を帶びて見ゆる、如何にそが異常に高い種の唯物論であるとはいへ。何者そは利己をもつて色づけられてるやうに見ゆるからである。然らば如何にして此等兩理想の中その一を撰擇すべきであらうか。吾等には何等共通の標準がない、兩方面が求訴すべき何等高い共通標準がない。曩に言つたやうに、各々一方が自らの理想の優秀性を確信して、他方の劣等性を主張するところに、極めて平明な矛盾があるやうに見ゆる。隨つて兩者の論爭は何時も一方が他方に觸れてゐない。最も合理的な結論であるならば、兩方面からの要素を共に含む眞の理想であつてほしいものである。今日までのところでは、兩見地は共に一方に偏してゐて、一方は他方より學ぶ何ものかを持つてゐる。然しながら暫くはこの兩標準の不同なることが、東西兩洋相互の了解を困難ならしむるであらう。

四

前述の二論點中の他の一點は哲學的には左程根本的ではないが、心理學的に又實踐的には甚だ重要である。相異なる

文明の代表者は相互に内方的事實よりも外方的事實によつて判斷し合ふ傾向を持つてることは爭はれない事實であるが、さて自らの文明に就いて考察する時には自然と内方的所態をも參考するものである。か丶る方法の判斷は事の自然であつて、或る程度までは全く避け難いことである。吾人は國民性格を判斷するに當つて、個々の人のそれを判斷する場合と同じく、見たり聞いたり觸れたりすることの出來るものによつてするを餘儀なくせらる丶ものである。吾人は外部より出發して内部に進んで行かねばならぬ。其處で吾人の注意を惹く最初のものは外的差異及び對比である。類似のものは敢へて意に止められずに濟んで了ふものであるが、自然風景家屋衣服家財道具諸器械等の差異や、皮膚の色顏の相格言語等の差異は直ちに吾人の視聽に觸れるものである。されば文明全體をばか丶る外的事物、謂はゞ、文明の衣服によつて判斷するは極めて容易なことである。而して之等のものをば國民生活を活氣づける精神に比して重んじ過ぎぬやうにするといふことは、殆んど不可能事である。其處で皮相的なそして寧ろ愚鈍な人々は、自分等が平生慣らされてるところと大いに異ふ生活の外見や衣服や家屋やを有つてる他國民を文明だとは想像し得ないのである。而して修養ある人人にとつてすら、之等の事物を體とする他國民の精神の中に深入りするためには、永い間の時と純眞なる同情とを要する。手廣い一私的交際と、藝術及び文學の知識と、歷史や國民的英雄や行事や憧憬や世間的信念や判斷樣式や禮儀風俗の標準やその他夥多同樣なる事實に對する面識とを要する。

遮莫、國の土着民といふものは文明の精神を印づけてる之等の事物の中に生れて來たものである。彼は之等の事物をば幼少の時から日常茶飯事として經驗する。彼の感情と觀念とは自然に之等の周圍に聚まる。そして彼がこの感情と觀念とに對して有する意識は、普通外國人旅行者の視聽を惹く外的事物に對して有するそれよりも銳敏である。か丶る感情の中に成長し又大部分はそれによつて教育せらる丶がために、彼が自らの國と國民とに關して形成する觀念はこの感

情に負ふところ多大である。若し吾人にして幼年の頃より國民の生命に與つて、その遊戲と競技と並びにその禮拜と勞作とに與することなかりせば、その國民の精神は、吾人に對して、そをば出生以來間斷なくこれに與かることによつて所有してゐる人々に意味するところを意味しないのである。よし外國人が或る他國民を強烈に賞讃熱愛することありとしても、彼がその國民自身に尊重するところと同一のものを愛好するや否やは疑問である。

不幸にして歷史は、背景を示すことによつて外國の文明に關する理會の增進に資すべくして、現今は餘りに資してゐない。否、却つて、或る點に於いてはこれを妨げてゐる。歷史に關する普通一般の人々の知識は學生時代に於ける勉學から來てゐる。彼等はこの時代に可なり自國の歷史を勉強したけれども、他國民のそれは餘り勉強しなかつた。外國歷史と言へば、寧ろ同時代の諸國民の歷史よりも過ぎ去つた古代國民のそれの方に傾いてゐた。少くとも、北米合衆國に於いては、希臘羅馬の歷史が同時代の歐洲諸國民の歷史よりも遙かに注意を拂はれてる。自國の歷史といふものは、大抵理想化せられ、又現に曲解せられてなければ大いに彩色せられてるものである。かくしてそは國民的愛國心を育成するための道具として用ひられてる。搗てゝ加へて歷史は、國際的理會を阻止するやうな右の事實は別として、猶未だ國民の內的精神と眞實の生命とに觸れるよりも寧ろ外的事實を擧ぐるに止まつてゐる。故に歷史は正しい消息を傳ふる時であつてさいも同情と理會とを與へない。

多くの歷史は單に或は主として國民の政治的生命を取り扱ふものである。これは幾多の點に於いて主として外部的に重要なものであるが、單にそれのみを取つて見たゞけでは、國民の生命に洞察を與ふることが少ない。そは政府と主權者とを中心として、大多數を組成する普通人民の生命を省略してゐる。歷史家が自國に對して國民の歷史を政治的國家のそれと別に執筆するやうになつたのは、極めて最近の現象である。政治的歷史は亦科學とか藝術とか宗教とかその他

偉大なる政治的稱呼や戰爭や王朝やの累積に便つて、一國の精神を明かにするところのもの丶開發進步を省略する。將軍と司配者とが大きな役目を演ずるのを聞くが、產業に革命を齎らしたやうな發明家に就いて聞くところが少ない、藝術と文學との創造者に就いて殆んど聞かない、而して恐らくは自然の秘密を發見したやうな科學者に就いて聞くことは更に少ないのである。之等の理由に依つて、私は全體から見て、今日敎へられてるが如き歷史は國際的理會の增進に資するといふよりも寧ろその障害であると斷ずるのである。そは現前の外的事實の背景を提供して、吾等を助けてその奧にある國民の慣習と信念と標準と權力との源泉に徹底せしむべきであるのに、大抵の場合、單に理會の對象たるべき外的事實の量を增加するに過ぎないのである。

五

論議は西洋文明の物資的或は精神的性格に關する題目から大分かけ離れたやうに見ゆるかも知れぬ。然しながら少許の考慮は論議を再び元の主題に復歸せしむるに充分であらう。旅行者或は外國人の眼に明かに映ずるものは確かに文明の物資的方面である、何者官覺を强く刺擊するものは外的事物だからである。これに反して、幼少より文明の一部として敎育せられて來た人はその理想的要素に就いてのみ考慮を費し、その外的方面を見ることは恰も自然の運行を見るが如くである。この外的事物たるや人生に於ける附隨物で、實際的方便を供給するが故に重要ではあるが、眞の生命それ自身ではない。文明の外的物資方面が觀察者の注意を强要する程に廣大顯著だといふことは、殊に西洋文明に於いて眞實である。例へば、誰しも北米合衆國に旅行して停車場や、夥多なる車輛や、汽關車の大きさや、都市の摩天樓や、巨大なる煙突や、廣く使用せられてる電話や、手の仕事を機械の應用でする傾向や、その他幾多同樣の現象に喫驚せぬものはない。改めて證據立てるまでもなく、此處に吾人は物質的にして機械的な文明を取り扱つてるではないか。旅行者

は、職業的教育家ならざる以上、大抵、大學よりは家畜飼養場を學校よりは株式取引所や銀行や工場を見る氣になるが假に彼が學校を參觀するにしても、教師と生徒との精神よりも寧ろその建物と設備とに最も眞實な注意を拂ふであらう。從つて土着民は、自ら無意識的に、短日月間に旅行者に印象し得るものは單に事物の外觀に過ぎぬのを悟るのである。其處で彼は旅行者が案內せられて見る事物から自然に得る印象を誇張するのである。彼はコンコードに案內してエマソンとソローの家を見せたり、或はケムブリッジに案內してロングフエローとジエームスの家を見せたりすることには、大した意味がないと感ずるのである。甘く行つたところで旅行者は、商業的及び產業的活動を別にして、單に一つ二つの遊觀地、例へば、マウント・ヴアーノンとかワシントン或はニユー・ヨーク或はボストンの圖書館とかいふものを訪ふことになるであらう。而して之等のものたるや、その莊麗なる點に於いては、或る停車場やホテルと相伍し得ないのである。東洋にあつて西洋の文明を評價するものに就いてもこの場合にさしたる相異はない。西洋人旅行者殊に北米より東洋に遊ぶものは、屢々、自分の國が現に自分が接觸しつゝある東洋人に印象してゐる二つのことが、一は高度の爆發物の象徵と戰爭に應用せられた機械とを有する軍艦であり、他の一は日用物品の生產及び分配の道具としての機械であるに一驚を喫する。西洋のこの工藝的方面の活動のみが、傳道及び教育上の活動とは別に、東洋の住民に深い印象を刻んでる。これが彼等には西洋文明の眞の顯現のやうに見ゆるのである。支那だけに就いて見ても、比較的最近まで多數の支那留學生は工藝上の研究を追求せむとして洋行した。これは彼等が東洋が西洋より學び得るものゝ殆んど凡べては生產分配の機械使用法、卽ち、工業、農業、銀行、產業と商業との經濟、併せて法律と政治と外交との工藝的方面であると感じてのことである。

若し西洋人旅行者にして賢明ならむには、彼はこの事實が啓示する西洋文明の優秀性の性質評價によつて諂はるゝよ

りも悲まさせらるゝであらう。然しながら少許の省察はその自然なるを示すであらう。貿易と戰爭の道具とは、基督教の傳道事業（多數土着民はこれをも、その實際とは異つて、外國の實業と外交との擴張の具に供せらるゝものと視てゐる）は別として、東洋に割り込んで來て、そして東洋人の觀察と想像との上に自らを印象した西洋文明の所態である。藝術と科學と文學と音樂とは侵略的でもなければ、又生來擴張的でもない。之等は旅行をして外國市場を追求するものでない。若し追求するが如きことありとせば、其處には、大抵、商業的附屬物があるであらう。外交といふものは、平和な時に於いてすら、修養と文學とよりも、貿易と商業と經濟問題とに關係し勝ちである。西洋人旅行者にしてかゝることに考慮を費すならば、彼は西洋文明を本質的には物質的だとする東洋流の評價を異しむ氣にはなれないであらう、又彼はこの評價が東洋文明の精神的性格に關する意識に對比せらるゝことを異としないであらう。

私は、勿論、この評價の中に何等の眞理もないとは言はない。比較的に言つて、機械的發明と物的科學と産業及び貿易に對するその應用とが、西洋の人生に於いて、東洋に於いてそれが既に爲した或はこれから爲さむとするところのものよりも、より大なる役目を演じてゐることは、充分明瞭なことである。而してこの事實と共に、其處には勿論實務即ち所謂實際的活動に關する或る種の先入主的愛好心がある。そしてこれこそ實に西洋に關して東洋に廣く行はれてる觀念に眞實の色彩を施すものである。殊にこれは北米合衆國に關して眞である。何者その音樂と繪畫と文學と科學（應用科學を除く）とに對する貢獻は未だ歐洲西洋に於けるが如きに比肩すべくもないが、その應用科學と産業及び運輸業に於ける發明とに對する貢獻は比較的他の西洋諸國を凌駕してゐるからである。北米合衆國が優秀な成績を示してゐるのはたゞ慈善に於ける公衆的平安及び普通教育に對する獻身（大學博物館圖書館等の基本金を含めて）だけである。この國は新しい、從つてその獨創的修養は淺い、けれどもその修養はその傳播と不斷の用とによつて比較的廣く播布せられて

る。故に私はこの文明が主として物質的文明だといふ非議に全然正義を拒まうとは思はない。然しながらこの物質的所態の中にすら大抵は見逃しにせらるる理想的或は精神的方面があつて、西洋の純眞な修養的事功はこれと密接に關係してゐるのである。私の言及せむとするところは、自然科學の應用とは別なるその精神と方法即ち科學的精神であり、又産業と商業との社會的所態即ち公共心の涵養と純眞なる社會奉仕の實現とに於けるその効用である。一見物質的にして機械的な西洋文明の中に理想的要素が體現せられてるとする之等の二點に關しては、私は次ぎの論文で専ら論ずることとしよう。之等は東洋が西洋から最も學ばねばならぬ點を表現してゐるやうに見ゆる、即ち、其處には西洋から東洋への貢献がある。而してこの貢献に比しては、科學と産業との特殊専門化せられた應用の借りもの丶如きは寧ろ傷害になるかも知れないのである、殊に後者が西洋では現に相關聯してゐるところの科學及び社會奉仕の精神より分離せしめらる丶時に於いて然りである。（未完）

constant use. I do not, therefore, mean to deny justice to the charge of a predominantly materialistic civilization. But there is even within this material aspect an ideal or spiritual phase which is usually overlooked and with which the genuine cultural achievements of the West are closely connected. I refer to the spirit and method of natural science, the *scientific spirit* as distinct from its technical applications, and to the *social phase* of industry and commerce, its use in cultivating public spirit and rendering genuine social services. To these two points, as embodying the ideal factors within the seemingly materialistic, mechanical civilization of the West, the next article will be devoted. They seem to me to express the points at which the Orient has most to learn from the Wert, to mark contributions in comparison with which borrowing specialized technical application of science and industry may even do harm, especially if the latter are separated from the spirit of science and social service with which they are actually connected in their Western home.

---

disinterested as they actually are, but as means of foreign extension of business and diplomacy) the aspects of foreign civilization which have forced their way in and which have impressed themselves upon observation and imagination. Art and science, letters and music, are not aggressive nor inherently expansive. They do not travel and seek foreign markets. Or, when they do, there is likely to be a commerical attachment. Foreign diplomacy even when it is peaceful is more likely to be concerned with trade and commerce, with economic questions, than with culture and literature. When one thinks of these things he will not be inclined to wonder at the current estimate of Western civilization as essentially materialstic; nor will he wonder that this estimate is contrasted with a consciousness of the spiritual character of the indigenous civilization.

I do not mean, of course, that there is no truth in this estimate. It is quite clear that comparatively speaking mechanical invention, physical science and its application to industry and trade, play a greater part in Western life than they have done, or do ever yet, in Oriental. And along with this fact, there goes of course a certain preoccupation of life with business, with what is called practical activity, which gives real color to the current ideas about the West. Especially is it true of the United States that as yet its contributions to music, painting, literature and science (apart from applied science), do not eqnal those of the Furpopean West, while its contributions to applied science, to inventions in industry and transportation, relatively exceed those of the rest of the West. Only when we come to devotion to public welfare in philanthropy and to popular education, including the endowment of universities, museums, libraries, does the United States make any superior showing. The country is new and its original culture is correspondingly shallow even though it is comparatively wide-spread owing to means of dissemination and their

gerates the impression which would be made naturally upon the visitor by the things which he takes him to see. He feels that a visit to Concord to see the homes of Emerson and Thoreau or to Cambridge to see those of Longfellow and James would have little meaning. At most the visitor is likely, beyond commercial and industrial activities, to see only a show place or two, like Mount Vernon, the Library in Washington or in New York City or Boston. And they do no more than compete in grandeur or splendor with some of the railway stations and hotels. The case is not so very different with the person who stays at home. The Western visitor especially the one from America to the Orient is struck over and over again with the fact that the two things about his own country which have really impressed those with whom he comes in contact are the battle-ship, with its symbolism of high explosives and mechanism applied to war, and machines as instruments of producing and distributing material commodities. This technical side of the activity of his own country, apart from missionary and educational activities, has alone impressed the inhabitants of the Orient. It seems to them the true manifestation of Western civilization. So far as China is concerned, one finds that up to comparatively a short time ago the great bulk of students who went abroad to study went to pursue technical studies, feeling that about all the East had to gain from the West was command of the machinery of production and distribution-engineering, agriculture, banking, the economics of industry and commerce, with the technical side of law, politics and diplomacy.

If he is judicious he will be more grieved than flattered by the estimate of the nature of Western superiority which this fact reveals. Reflection will show him however that it is natural. Trade and the implements of war are, aside from the missionary enterprises of Christianity (which many natives have also taken not to be as

outward facts so as to help us in penetrating beyond them to the sources of a country's aspirations, beliefs, standards and power. But mostly it only adds to the quantity of external facts that need to be understood.

The discussion may seem to have got a long way distant from the topic of the material or spiritual character of Western civilization. But a little thought will suffice to bring it back again. It is precisely the material phase of a civilization which is most evident to a visitor or foreigner, for it is the outward phase which strikes the senses forcibly. On the other hand, the person who has from early childhood been educated as a port of a civilization thinks of its idealized elements, and looks at the outward side much as he looks at works of nature. They are incidents, important in life in furnishing practical means but are not really life itself. Especially is it true of Western civilization that its outward material side is so extensive and prominent as to force itself upon the attention of an observer. No one can visit the United States, for example, without being struck by railway stations, the multitude of railways, of trains of cars, the size of locomotives, the shy-scrapers in the cities, the huge smoking chimneys, the wide spread use of telephones, the growing tendency to do by mechanical appliances what used to be done by hand, and a quantity of similar phenomena. What more is needed to prove that here we are dealing with a materialistic, a mechanical civilization? The visitor, unless he is a professional educator, is mnch more likely to be taken to see stock-yards than universities, stock-exchanges, banks, and factories than schools. If he does go to visit schools, the buildings and their equipment, rather than the spirit of teacher and pupil, are the things most readily seen. Unconsciously to himself, the native realizes that in a short time he can only impress externals upon the visitor. So he exa-

The average person's knowledge of history is derived from the studies of his school days. During these days he has studied a good deal of his own history and not much of that of other peoples. The foreign history studied is more likely to be of ancient by-gone nations rather than of contemporary countries. At least in the United States we pay more attention to the history of Greece and Rome than we do to that of even contemporaty European nations. The history of one's own nation is usually idealized and highly colored if not actually distorted. It is used as an instrument of fostering nationalistic patriotism. But aside from this fact which makes a bar to international understanding, the histories still give outward facts rather than the inner spirit and real life of a people. Hence even when they give correct information they do not give sympathy and understanding.

Most histories deal only or chiefly with the political life of a people. This is in many respects of chief external importance, but taken by itself it gives little insight into the life of the people. It centres about governments and rulers, and omits the life of the common people who constitute the great mass. Only recently have historians even for their own country begun to write the history of the people as distinct from that of the political state. Political history also omits the development of science, of art, of religion, and other matters which throw more light upon the spirit of a country than does the heaping up of great political names, wars, dynasties etc. Generals and rulers play a large part, but little is heard of inventors even those who have revolutioned industry, little of creators of art and literature, and probably still less of the men of science who have discovered the secrets of nature. It is for these reasons that I say that, upon the whole, history as now pursued is more of a hindrance than a help. It should give the background of existing

eye or catch the ear. It is very easy to judge the whole civilization by these outward things, the clothes, as it were, of civilization. It is almost impossible not to attach too much weight to them in comparison with the animating spirit of a people's life. So superficial and rather stupid persons can hardly imagine that a people is civilized at all whose visible manners of life, clothes, houses etc., differ widely from those to which they are accustomed. And even for cultivated people it requires a long time and genuine sympathy to find their way into the spirit of which these things are the body. It requires extensive personal intercourse, knowledge of art and literature, acquaintance with history, with national heroes and festivals, national aspirations, popular beliefs and ways of judgment, standards of manners and courtesy and a multitude of other similar facts.

Now a native of a country is born into the things which mark the spirit of a civilization. He experiences them as a matter of course from early infancy. His feelings and ideas naturally gather about them. He is even more conscious of them than he is of the outward things which catch the eye of the visitor. Being brought up among them and educated largely by them, they form his idea of his own country and his own people. Unless a person has from early childhood taken part in the life of a people, including its plays and games as well as its worship and work, the spirit of that people can hardly mean to him what it means to those who have come to possess it by uninterrupted sharing in it from birth. Even if a foreigner admires a people intensely and is very enthusiastic about them, he is hardly likely to appreciate in them just what they esteem for themselves.

Unfortunately history which might be an aid in giving a background so as to enable a person to understand an alien civilzation does not at present assist very much. In some respects, it hinders.

standards which makes mutual understanding difficult. The ideal of service is one of activity, of keeping busy. From the standpoint of leisure and its cultivation it would appear, accordingly, to be tainted with materialism, though a high quality of materialism. On the other hand, from the standpoint of the ethical ideal of service, esthetic appreciation and meditation appear to be tainted with materialism, although of an unusually high sort. For they seem to be colored with selfishness. Now how shall a choice be made between these two ideals? There is no common measure: there is no higher common standard to which both sides may appeal. There seems to be, as was said, a flat opposition in which each side is convinced of the inferiority of the other one. Consequently arguments leave the other side untouched. The most reasonable conclusion would be that a true ideal includes factors from both sides; that up to the present each point of view is one-sided and has something to learn from the other. But meantime the unlikeness of standards makes mutual comprehension difficult.

The other point is philosophically less fundamental, but psychologically and practically it is very important. Representatives of different civilizations tend to judge each other by external rather than internal facts, while in thinking of themselves they naturally include the internal phase as well. This way of judging is natural and to some extent inevitable. We are obliged to judge the character of a people as well as of a man by what can be seen and heard and touched. We have to start from the outside and work our way in. Now the first thing which attracts attention is outward differences, contrasts. The things which are similar are taken for granted and escape attention. But differences in natural scenery, in houses, clothes, articles of house furnishings, utensils, tools, machines, differences of color, of facial features, of language, at once strike the

bustling and boisterous way. It is not an opportunity for a peaceful cultivation of the mind in meditation and contemplation. And for most people it is regarded as only a diversion not as a serious matter. It is aside from the main current of life, which is doing something, keeping busy. And apparently in the West keeping busy means primarily what is called business, buying and selling, making things to sell, dollar-chasing. These statements suggest, it seems to me, at least a part of what is meant by calling Western civilization materialistic. They also suggest at least a part of the idea of the meaning of spiritual or idealistic which is used as a measure in discriminating between the two civilizations. Refined cultivation and enjoyment of leisure, relief from direct activity, commercial, political, athletic, social meetings, is what is mean tor at least so it appears to me. The *esthetic* element in its broadest sense, inclusing a kind of metaphysical contemplation of the universal and meditation upon it, is prominent.

Now undoubtedly the Western measure for the ideal and spiritual is diffrent. It does not wholly exclude the factor mentioned, but in the popular opinion this factor is quite subordinate. In it the ethical element is more stressed than the esthetic. Service of others, enthusiasm for social progress, for welfare of humanity, is regarded as ideal even by those who make no professions of it in their own lives. Sacrifice of personal enjoyment even of the refined enjoyment of leiure in behalf of service for the welfare of others is regarded as the important element in the spiritual. Having this measure more or less consciously in mind, many Westerners would reverse, as I have already said the current Oriental opinion, and regard *their* civilization as the more spiritual. For they do not find as much of this public spirit and devotion as they suppose they find at home.

Now what we have here is somewhat flat contradiction of

of the surprise may be indicated by saying that very many from the Occident would reverse the statement. They would say that the basis of their civilization at home is spiritualistic, while that which they see in their travels is materialistic. And they would cite many facts, or at least seeming facts, in support of their belief. My purpose, however, is not to argue the case or to take either side in the argument. I refer to the matter first as an illustration of some of the difficulties in the way of an international understanding, and secondly for the purpose of trying to show that there are certain ideal or spiritual elements within what at first sight seems to be the materialistic side of Western life, elements which are frequently ignored. This article will discuss the first of these two points.

In considering the statement that the respective qualities of Eastern and Western civilization illustrate the difficulties in the way of mutual understanding, there are two points I wish to make. The first is that there are different standards or measures used in the East and the West of the true meaning of spiritual and ideal. I do not profese to speak for these who represent the Oriental meaning, and should be very glad if some one from the East who is competent to speak would fully elucidate the matter. But I have heard one point frequently referred to, and will mention that. People in the West seem to be busy, active, and to prize activity above everything else. They do not seem to prize leisure and the cultivation of meditation, speeution, quiet, calm appreciation of the beauties of nature, literature and art. It is not denied, of course, that they have created fine art and excellent literature, but these things seem in the West to be incidents of civilization, rather than its most essential thing, and not to enter into the main current of life. For the mass, leiure when it is attained seems to present itself as an opportunity for another kind of activity. It is something to be enjoyed in an active, perhaps

insight and understanding. The case of the traveller is taken simply as an illustration or symbol of every kind of contact. Those who do not travel, those whose bodies stay at home, generally have some indirect contact with other peoples and so travel in imagination. They read books or newspapers and talk with persons who have greater acquaintance. Unconsciously even to themselves they are likely to form an attitude of like or dislike. They are attracted or repelled. They are curious, interested, sympathetic, or else are persuaded that there is nothing to be learned or gained from any further intercourse, except perhaps articles of trade. With all such persons also there is the question of how insight, understanding is to be furthered. And this question is one important to the peace and progress of the world. For while understanding will not guarantee mutual liking or even respect, while it will not be an absolute barrier to the development of strained relations, it will tend to create a belief in the possibility of an amicable settlement of all disputes and troubles, and will prevent a people being carried away by dangerous waves of resentment, floods of suspicion and panics of fear. For these flourish only because of ignorance and prejudice.

These general remarks are preliminary to a consideration of one special point which has to do with the general relations of the East and the West, and upon which a better intellectual comprehension would at least contribute a little to better relations. A visitor to the Far Orient from the West is struck by one idea about the Orient and Occident which he finds quite current in Japan and China. He finds it commonly believed that Eastern civilization is spiritualistic and Western is materialistic. The existence of such a belief is a surprise to him, even a shock, much more so than would be supposed by many Orientals who seem to think that the idea is almost an axiom and is accepted by Westerners as well as by themselves. The extent

language of the traveller. Such persons are always discontented when they are abroad and feel when they return home that they have got back, as they say, to God's own country. But the other class goes in perpetual raptures over what is seen, and travel is a continual delight. But unfortunately this delight is more or less like the amusement which is taken in witnessing spectacles at the theater. It is a rather superficial emotion. The traveller treats the country as if it were a show provided for him to look at and makes no attempt to penetrate below the surface. Sometimes the natives of a country resent this attitude of a visitor even more than they do that of the grumbler and fault finder. They feel that they are not treated as reality but merely as something to look at and enjoy.

The first kind of visitor does not contribute anything useful to international understanding. He returns home more convinced than when he left it of the superiority of his own country to other nations. He returns with perhaps a positive contempt for other peoples and with all his native prejudices strengthened. The second type of visitor helps somewhat. He takes home an atmosphere of good-will and kindly feeling. Ke returns with a positive interest in the country to which he has been, a feeling that its people are also human and that they have many charming customs and picturesque ways. Emotionally he is broadened in outlook. This favorable disposition is, as far as it goes, a contribution to inernational good-feeling and makes for peace. But being chiefly a matter of sentiment, not of understanding, it does not go very deep, and if there is a period of strained relationships between his country and the other country, it readily gives place to another emotion, that of fear and dislike.

In short, we still have to face the question of how contact with another nation may become a real means of education, a means of

SOME FACTORS IN MUTUAL NATIONAL UNDERSTANDING.

By John Dewey

Travel is known to have a broadening effect, at least if the traveller is willing to keep his mind open. The amount of enlightenment which is gained from travel usually depends upon the amount of difference there is between the civilization from which the traveller starts his journey and that of the country at which he arrives. The more unlike the two are, the more opportunity there is for learning. But at the same time this dissimilarity makes it difficult to learn. For we can understand any new experience only by means of our previous experiences. If the old one and the new one are too far apart, the new one will be a blank or else it will repel us. Consequently many travellers are offended by what they see which is different from what they have known at home. They use what is already familiar as their final standard or judgment, and criticize whatever departs from this standard. Fortunately however most persons have a natural liking for change and novelty and so are likely to be attracted by what is different from that which they are used to even if they do not inderstand it. So if the externals of nature are charming, and customs are picturesque, and towns are not repulsive with dirt and decay, most travellers enjoy what they see even if they get no great degree of new understanding from it.

Travellers are then often divided into two classes. Those who are not sensitive to new impressions and who have little esthetic taste go about criticizing what they see because it is unlike that which they are acquainted with and of which they have grown fond. Persons have even been known to blame the inhabitants of a foreign country because they could not speak or understand the native

grow relatively stronger, and it is quite conceivable that they will be in the end the sole victors. But of all these possibilities we will speak more at length on a later occasion.

(In preparing the article here reproduced, Prof. Bertrand Russell has been assisted by his co-worker, Miss Black, to whom owe much of the work and many of the ideas contained in the article, according to a private letter from Prof. Russell—the Editor).

provocation, wars will break out, in which the victors will throw the principle of self-determination to the winds. It is not by a formula, however admirable, that the evils of nationalism can be cured. Nor can they be cured by adopting passionately the cause of the nations now oppressed, since tomorrow they will become oppressors if our championship is successful. The only cure for the evils of nationalism is the diminution of nationalism, the diversion of men's energies and sentiments from the barren business of national rivalry. We shall return on a later occasion to the question whether and how this can be achieved. We have no doubt that it is at present the most important task which civilization has to face, more important even than the introduction of a better economic system.

We have considered in this article what we believe to be the two main forces by which the modern world is being shaped. We have considered each in isolation, without regard to their inter-relations. But these inter-relations are very important and very interesting. Industrialism has in various ways contributed to the growth of nationalism, while it has for the first time in history produced the technical possibility of a super-national government for the whole world. Communism professes to be at once international and the champion of oppressed nations, while capitalism favours nationalism as a method of distracting the working man from socialistic ideas: so long as he can be kept hating foreigners, he will be less vigorous in hating capitalists. All these factors are important in considering the conflict which is threatening to destroy our civilization.

Meanwhile there are old forces from the past, decaying but still strong—such forces of handicrafts and peasant agriculture, religion and literary habits of thought. As the rival protagonists of modern ideas weaken each other by internecine combat, the old forms

embarked upon a war of conquest against Russia, with a view to inflicting upon as many Russians as possible the pains and tortures which Poland had formerly suffered at the hands of the Tsar. There is nothing peculiar or exceptional in this behaviour; it is the natural behaviour of any country afflicted with virulent nationalism.

It is not merely artificial frontiers or the blunders of diplomatists that made the evil of nationalism; it is not merely the fact that some nations are oppressors while others are oppressed. This fact is, of course, a very grave evil, but it is the inevitable outcome of nationalist feeling in a world where a complete equilibrium of national forces is impossible to maintain. So long as the majority of civilized mankind continue to feel that their only social obligation is to their own country, and that for its advancement they are justified in inflicting any degree of damage upon people of other countries, so long no diplomatic arrangements or political reforms can produce a tolerable world.

The principle of self-determination, although the weaker nations appeal to it in their struggle with the Great Powers, is not itself nationalistic; it is rather an endeavour to cope with nationalism from the standpoint of an internationalist. The true nationalist wants self-determination only for his own country, though the need of allies may compel him to an appearance of justice towards other national claims. It is obvious that, while national feeling remains as hot as it is at present, self-determination, if it could be realized and enforced against the stronger nations, would be the best possible arrangement of national boundaries. But it is scarcely conceivable that it should be realized or maintained while natioal feeling remains what it is. At each frontier opposing armed forces will stand glaring at each other; trade will be made difficult, and when it occurs it will be used to stir up national economic hatred; at the slightest

person afflicted with nationalism believes that his own country is the most civilized and humane country in the world, while its enemies are guilty of every imaginable atrocity and vileness. Since they are so vile and atrocious, while we are so civilized and humane, there is no degree of vileness and atrocity which we may not legitimately practice towards them. This is the creed of nationalism.

It is obvious that this creed is, by its very nature, founded in falsehood and leading to strife, brutality and destruction. The beliefs of a nationalist are different in every country. The Germans considered their Kultur so superior as to be worth spreading at the cost of an European war; the English, on the contrary, consider their own so preferable to every other as to be worth propagating by the bayonet and the lash. The English and the Germans did not agree with each other's opinions, though both were nationalists. There is no doubt one nation which really is as superior as each nation thinks itself; it is, of course, that nation (whichever it may be) to which my reader belongs. But all other nations are plainly in error in adopting the nationalist creed: they ought to admit the superiority of my reader's nation, and submit meekly to its demands. But alas! their claim to superiority is just as stubborn as though it were well-founded, just as self-assured as in case of our own *really* superior nation.

The smallness of the difference between imperialism and oppressed nationalism is seen when an oppressed nation is liberated. We may take Poland as a recent and glaring example. For a century and a half, the Russians oppressed the Poles, and the Poles professed to desire nothing but freedom. The friends of freedom everywhere befriended them, and regarded them as a gallant nation incapable of inflicting upon others such tyranny as they were suffering. Yet in the very moment of acquiring their national independence, they

constitutes a nation, the only thing that can be said definitely is that a nation is a group which is defined geographically. One may feel allegiance to various kinds of groups: races, religions, professions, artists, men of science, etc., etc. When a group to which men feel allegiance is geographical, it may be called a nation, and the allegiance which is felt may be called nationalism Thus "nations" and "nationalism" have to be defined together: they are both constituted by herd-instinct directed to a geographical group. It is a characteristic of the present age that this form of herd-instinct has acquired a very marked predominance over every other. In the past, in many periods, a man's herd consisted rather of his co-religionists than of his compatriots. Marx, who regarded the history of the world as mainly a struggle between classes, the feudal aristocracy giving place to the bourgeoisie and the bourgeoisie to the proletariat, expected a man's herd-imstinct to be directed rather to his class than to his nation. Hence his followers have been astonished by the patriotism of working men and cynical about the apparent patriotism of the capitalist class. "Proletariat of all countries, unite" is the Marxian exhortation to the wage-earner to transfer his herd-instinct from his country to his class. Hitherto, this exhortation has been very unsuscessful, as the late war showed; but we cannot be sure that it will remain so.

Rivalry is part of the instinctive apparatus of human nature, and as civilization advances there is a tendency for the rival groups to grow larger and larger, from families to tribes, from tribes to small nations, and from small nations to the great nations of the present day. The essence of nationalism is the sense of rivalry between one's own nation and others. This brings with it a whole train of loyalties and friendly sentiments towards compatriots, with a correlative train of hatreds and pugnacities towards the members of rival nations. A

without a catastrophic abolition of the capitalistic system, and therefore without the very grave dangers to industrialism and the whole fabric of civilization which are involved in a universal class war. But these benefits cannot be secured in a country as yet almost unindustrial, however much it may be nominally communistic, because in such a country the total produce of labour is not very much more than is needed for subsistence, and there are not, in the general body of the population, the habits, the skill or the knowledge required for a democratic control of the process of industrial production.

If these considerations are valid, it follows that the political disputes which centre round the class conflict, important as they are, cannot prevent still greater importance of the development of machinery, skill and industrial habits, which will determine certain broad features in the economic life of a nation whatever may be its system of distribution, and will make two backward countries, one communistic and the other capitalistic, resemble each other more, in many ways, than either will resemble an industrially advanced country.

III.

Next to industrialism, the most potent force that moulds the modern world is Nationalism. Like industrialism, nationalism has two forms, one for the holders of power and the other for those who are struggling to emancipate themselves. Nationalism in the holders of power is called Imperialism; in oppressed nations it is called the principle of self-determination. As in the case of industrialism, the two forms have much more in common than they are thought to have by those engaged in the conflict between them.

But let us be clear as to what we mean by nationalism.

Nationalism is a development of herd-instinct: it is the habit of taking as one's herd the nation to which one belongs. As to what

States. When once the necessary organization exists, and habits of working within it have been formed, self-government becomes possible, and freedom can be gradually achieved. So it is in industry: whether nominally capitalistic or communistic, nascent industry must be more or less despotic, the despot being in one case a capitalist, in the other a State official. All the experience of the Bolsheviks bears out this view, and I have no doubt that it will prove equally true in India, China and other undeveloped countries.

If follows from these considerations that the practical difference between capitalism and communism is not so great as politicians on both sides suppose. Certain features will appear in the early stages of industrialism under either system; and under either system certain other features will appear in its later stages. Russian industry under the Bolsheviks reminds one of English industry a hundred years ago: long hours, a sweated wage, prohibition of strikes, absolute submission of the workers to the captains of industry, are all features which the two have in common, and must have in common, since both are attempts to develop industry without the help of foreign capital.

It follows also that the good things at which communism aims can only be achieved where industry is highly developed and has sunk deep into the habits of the nation. In England or America, communism, if it could be achieved without prolonged war and industrial dislocation, could bring a very considerable degree of material well-being to the whole population, by exacting only four or five hours of daily labour from every adult citizen. And it would not need to be a centralized bureaucratic system, because the workers, from long practice, have come to understand the industries in which they are employed, and would be thoroughly competent to manage them themselves. A gradual approach to these benefits is possible

involves considerable hardship for the average working man, over and above what he suffered before the growth of industry began. If the average working man has economic control, he will resent this increased hardship, and will not be reconciled to it by the promise of ultimate benefit to his children or grandchildren. In the early days of the industrial revolution in England, gangs of working men broke up the machinery of the mills, because machinery produced the same output with less labour, and therefore threw men out of work. If working men had had control of methods of production in those days, the industrial revolution could never have taken place.

But it is not only the temporary increase of poverty that makes self-government in recent industry impossible. It is also—and this is the more important reason—because when industry is new men have not the habit of cooperation in large groups of producers. Non-industrial production is an individual affair, or an affair of a family or a small group of handicraftsmen. There do not exist the customs which would facilitate voluntary combination of hundreds or thousands of workmen. It may be doubted whether an organization of a new kind is ever created voluntarily. It is possible by means of power to compel a number of people to work together for a common end imposed from above, not chosen by themselves; and when they have the habit of such work, and the experience of its usefulness, they can carry it on without external compulsion. This has been the case in politics: only where kings have first produced a strongly knit State has democracy subsequently proved successful. We do not except the United States from this rule, because the political habits of the Fathers of the Constitution were those that had been formed in England in the seventeenth century. And I do not believe that an international world-State will ever prove effective except through the domination of one State or some close alliance of

friendly. But when, as in Soviet Russia, borrowing is impossible owing to hostility, there remains only the alternative of great poverty or very slow industrialization.

It is even more inevitable that the economic organization of industry should be oligarchic in a country which is in the early stages of industrial development. In Great Britain, which is the oldest of the industrial countries, there is a powerful movement for self-government in industry, a movement which deserves the fullest sympathy. This is the form of socialism which has most vitality and force among British Trade Unionists. But in Russia, though a similar movement existed in 1917 and 1918, it has now been completely suppressed by the authorities, who have restored one-man rule in factories and the undemocratic control of all industry from above. This difference has caused a certain wholly unnecessary division of opinion: Russian communists and their adherents in the West consider Russian experience conclusive against self-government in industry, at any rate for the present, while those who adhere to ideas more akin to syndicalism find themselves impelled, in this respect, to criticize what the Bolsheviks have done. For our part, we consider the difference between English and Russian socialism as regards self-government a necessary result of the different stages of industrial development in the two countries, and I think this would have been evident to all if the habit of thinking in terms of political battle-cries had not obscured what should have been obvious facts. Self-government in industry seems to me plainly impossible in a country as undeveloped as Russia, but nevertheless perfectly possible in England. We will try to make it clear why this must be the case.

To begin with, as we have already seen, the industrializing of an undeveloped country, when it cannot be effected by borrowing,

the sake of greater wealth later. Thirdly, there must be a sufficiently orderly and stable government to make it highly probable that those who make this postponement will be able to reap their reward; otherwise everybody will adopt the maxim "let us eat and drink, for tomorrow we die." Fourthly, there must be a large number of skilled workers, because many of the processes of industrial production are difficult. Lastly, there must be a body of scientific knowledge, to make and utilize mechanical inventions. This last condition is the most essential of all: its absence in former times is the reason why industrialism is a recent growth.

It seems almost inevitable that, when a country is in the early stages of industrialism, the economic organization should be oligarchic, and the bulk of the population should be very poor unless it is possible to borrow extensively from more advanced countries. To take first the question of poverty: when a country has not yet become industrial its methods of production are not highly efficient, and do not, in general, produce any very great surplus above what is needed for subsistence. The first effect of a movement towards the development of industry in such a country is to take a number of workers away from work which is immediately productive, and to cause them intstead to build railways or construct machines or export their produce to other countries where machines can be bought or such things as steel rails manufactured. The result is that, at first, there is a diminution in the amount of consumable commodities to be distributed. As there was already not much to spare (owing to the country having been hitherto unindustrial), the result of a diminution is apt to be serious poverty for the ordinary worker. The only way to avoid this is to industrialize very slowly, or to borrow heavily from economically more advanced countries. The latter is the expedient usually adopted when the relations with advanced countries are

and desires. It is an extension of the habit of using tools. The man who first thought of ploughing the soil before sowing took the first step towards industrialism: a plough is something which does not in itself satisfy any of our needs or desires, but diminishes the amount of labour required for satisfying our hunger. Industrialism is the extension of this practice of making tools, until the tools grow into modern machinery, which requires for its production and use the cooperation of large numbers of workers. As an example of industrial methods of production, we may take railways. A railway requires a very great amount of labour for its construction, yet when constructed it does not, of itself, enable us to gratify any of our wishes. We cannot eat it, or clothe ourselves with it, or sleep on it (without imminent risk of death). A railway cannot advantageously be consumed, like a loaf of bread; it can only be used, i. e. employed as a means of providing loaves of bread, and other consumable commodities, with less labour than would otherwise be necessary. While the railway is being built, and until it is actually used, those who construct it cannot be kept alive by their own labour, which produces none of the necessaries of life, but must be supported out of the surplus of necessaries produced by other people. Consequently every increase of industrial capital involves a momentary diminution in the satisfaction of wants; a community which is becoming industrialized is constantly foregoing the present satisfaction of wants for the sake of greater satisfaction in the future.

It is obvious that industrialism demands certain qualities in a community which is to practice it successfully. First, there must be a possibility of obtaining large organizations of workers devoted to a common task; a railway, for example, cannot be built by one man or one family. Next, there must be, in those who can direct the labour of the community, a willingness to forego present gratifications for

oppressed by the enemies of the Entente; those oppressed by the Entente are held to have no right to national independence. The principle of self-determination has therefore been taken up by the Russians as regards territories held by their enemies, and it has thus come into a practical alliance with Communism. But it belongs to an entirely different order of thoughts and sentiments, and can never have more than an external alliance with principles so essentially international as those of Karl Marx.

We have thus four great political forces in the world: the two forms of Industrialism, namely Capitalism and Communism; and the two forms of Nationalism, namely Imperialism and Self-Determination. The chaos in the world mainly takes the form of a titanic conflict between these forces: Capitalism and Imperialism on one side, Communism and Self-Determination on the other.

II.

The bitterness of political and military conflict has concealed from the world and from the combatants themselves how much there is in common between the two forms of Industrialism, and also between the two forms of Nationalism. It is necessary to understand these affinities of rival forces if we are not to go astray in our attempt to analyze the present situation.

First of all, let us be clear as to what we mean by Industrialism.

Industrialism is essentially production by methods requiring much fixed capital,* i. e. much expenditure of labour in producing implements for the production of commodities which satisfy our needs

*Capital is not money but means of production. Money can buy capital, and is normally so employed when it is invested, but capital consists, not of money, but of such things as machinery, railways, ships, etc.

the fanatical Spaniards. It is happening now to the whole civilized world: the old bonds of authority have been loosened by the war, men will no longer submit merely because their forefathers did so, a reason is demanded for abstaining from claiming one's rights, and the reasons offered are counterfeit reasons, convincing only to those who have a selfish interest in being convinced. This condition of revolt exists in women toward men, in oppressed nations towards their oppressors, and above all in labour towards capital. It is a state full of danger, as all past history shows, yet also full of hope, if only the revolt of the oppressed can result in victory without too terrific a struggle, and their victory can result in the establishment of a stable social order.

What are the forces which are shaping the world and producing its struggles? What are their relative strengths, and what are the prospects of their warfare? We wish to consider these questions dispassionately, not as fighters, but as scientific investigators.

There are in the world growing forces and diminishing forces. Among the latter some still remain very potent, but their hey-day is passed, and they are doomed (if civilization escapes disaster) to dwindle more and more. Among the growing forces, two stand out pre-eminent among all others, namely Industrialism and Nationalism. Behind both of these, non-political itself, yet controlling all political occurrences, is Science.

Industrialism and Nationalism both have two forms, one for the holders of power, the other for those who are struggling to emancipate themselves. Capitalism and Communism are the two forms of Industrialism; Imperialism and the attempt to secure freedom for oppressed nations are the two forms of Nationalism. Freedom for oppressed nations is what President Wilson endeavoured to make popular under the name of "self-determination." The victors in the war decided that this principle should only apply in favour of those

near future. If we would act wisely in this time of darkness, if we would take our share in making the destruction as small as possible and the new construction as swift and solid as it is capable of being, it is neces-ary that we should face all that is discouraging in the present and all the dangers of the near future; it is necessary that we should diagnose fearlessly, without regard to party shibboleths or to the desire for the easy consolation of fallacious hopes. It is necessary to apply in our thinking the best science and the most enlightened ideals that our age affords. Above all it is necessary to avoid the discouragement and sense of impotence that are too apt to result from the spectacle of apparently irresistible forces arrayed against the ends which we wish to see realized. For this purpose, it is well to remind ourselves that political forces are not strong except when they rest upon popular support, and that, in the main, only ignorance secures popular support for what is evil. Amid the mysths and hysterias of opposing hatreds, it is difficult to cause truth to reach the bulk of the people, or to spread the habit of forming opinions on evidence rather than on passion. Yet it is ultimately upon these things, not upon any political panacea, that the hopes of the world must rest.

Reason and the scientific temper of mind are more necessary to the world than they ever were before, because all the creeds and habits which reposed upon irrational authority have broken down. Taboos, religious beliefs, and social customs are the source of order among uncivilized tribes, in so far as any order exists among them; and they remain the source of order through successive stages of culture, until at last the sceptical intellect shows their absurdity. This happened in Athens at the height of its political and cultural glory, and in the resulting chaos Athens perished. It happened in Italy at the end of the 15th Century, and Italy became enslaved to

growth in the extent of organizations, more particulary of States. From past progress in these two respects, a definite though perhaps not very immediate hope for the future is seen to be justified.

The increase of knowledge and the growth of States are both sources of evil as well as of good: science has made war more destructive, and large empires have made it more wide-spread. But although both are capable of doing harm, both are indispensable conditions of vital progress. With regard to knowledge this may perhaps be taken as obvious. With regard to the growth of States, the view that it is to be regarded as desirable results from considering the chaos in the world and the only possible ways of amending it. The only ultimate cure for war is the creation of a world-State or Super-State, strong enough to decide by law all disputes between nations. And a world-State is only conceivable after the different parts of the world have become so intimately related that no part can be indifferent to what happens in any other part. This stage has now been reached. Until recent times, the Far East had no vital relation to Europe. Until Columbus, America was isolated. Until Peter the Great, Russia had little connection with the Western Powers. The late war, by its universality of destruction, demonstrated the solidarity of mankind. And this solidarity has resulted from industrialism and mechanical inventions, both of which are products of science. It is science, untimately, that makes our age different, for good or evil, from the ages that have gone before. And science, whatever harm it may cause by the way, is capable of bringing mankind ultimately into a far happier condition than any that has been known in the past.

On these broad grounds, optimism as to the ultimate issue of the present chaos seems to be justified. Meanwhile the state of the world is frightful, and is only too likely to become worse in the

CAUSES OF THE PRESENT CHAOS.

By Bertrand Russell.

I.

The movement of human society, viewed throughout the period known to history, is partly cyclic, partly progressive; it resembles a tune played over and over again, but each time louder and with a fuller orchestration than before. In this tune there are quiet passages and passionate passages; there is a terrific climax, and then a time of silence until the tune begins again. Such a climax is exemplified by the period through which we are now passing or about to pass. If we think only of the one tune, it seems to end in nothingness; if we think only of the cycle, it seems that the whole process is futile. It is only by fixing our attention upon what is progressive, upon what distinguishes one cycle from the next, that we become aware of the advance made from age to age, and of the steady movement underlying the back-and-forth eddies of the surface.

The ancient empires of Egypt and Babylonia were swept away by the Persian empire, the Persian by the Macedonian, the Macedonian by the Roman, the Roman by the Teutons and Arabs, the Arabs by the Teutons. At each stage, a civilization which had reached a certain height and then grown decrepit was destroyed, and a new one built upon its ruins, sometimes only after a considerable period of chaos. Our own civilization appears to be growing decrepit and ready to fall. In all this, we see only the cyclic movement of history: birth, growth, decay and death, in empires and civilizations as with the beasts of the field.

But when we compare any one of these civilizations with its predescessors, we become aware of a definite advance, particularly in two respects: first, the increase of knowledge; and secondly, the

編輯局だより

□四月號は三週年記念號を發行する 四月號が論壇及び文壇に於て、いかに新鋭を鼓して 讀者に見ゆるかは 蓋しその事實に徴して戴きたい、年齢の上よりすれば三ケ年は決して長いとは云へないしかし其奮闘分量より 見れば、他の如何なる會社、雜誌社新聞社に比して劣る所は斷じてない、同人が血みどろになつて 努力したことは洵に愉快に思ふ。

□本社は常に或る目標にすゝむ、 從つて何事にかけても常に背水の陣である、 金があらうが、なからうが、成すべき事業にはグン〳〵穗先きを突込んで 行く、思案投げ首は本社の禁物である。

□哲學家として 世界に重きをなす、ジョン・デュウイ氏は本號より本社社友として 執筆することとなつた、 氏は東洋の觀察を了へて、 遠からず歸米する。

□氏は東洋人が、 東洋の文明は精神的であつて西洋文明は 物質的であると稱するのを不思議に思つてゐる、 そして東洋人の左樣に感ずるのは間違であるとの 論を以つて本號より連續して執筆さるることとなつた。

□本月號はその 序論で、 從つて氏得意の哲學論には這入つて居ないが、 四月號よりは深刻なる批評眼を以つて東洋人の謬想を 指摘することになつてゐる。 愛國心や、 精神文明が 日本の專賣品の如く 心得てゐるものは却つて一讀せぬ方がよいかも知れぬ。

□三月號のデュウイ教授の 譯譯は立教大學の小島教授を煩はした。

□昨年來茅ケ崎に 轉地療養中であつた山川均氏は元氣恢復して自宅に 歸られた。 そして二月から斯學研究の權威であつた『社會主義研究』を菊榮夫人と共に 執筆經營一切を引受けて大森新宿の自宅から發行されることになつた。 又大杉榮君の『勞働運動』も、 二月から週刊として復活し神田北甲賀町の同社から陣頭に乘り 出した。

□筆禍を釀つた森戸辰男氏も、 過日無事に歸られた。 目下鵠沼に靜養中だが、 追々又同氏の透徹した深刻な 評論が拜見出來ることゝ思ふ。

□同人室伏は一月十二日着米、 二月中旬米國より倫敦へ向ふとの通信が 來た、 四月號には例の健筆を以つて縱横の 筆陣を張ることだらう、 大平洋で海が荒れてダイブ困まつたらしい、 左利きの大家だが、 お蔭さまで酒代だけは節約されただろう。

□山本は弟光彦君危篤の爲め急遽郷里薩摩に旅立つた。 所が汽車中で自身が急性盲腸炎にやられて遂に京都下車加養中である併し經過も頗る良好だから心配はない。

□北京のラッセル教授より愈々七月八日上海解纜東京に直行するとの書信が來た。

改造定價		
册數	定價	郵稅
壹册	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲特大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

本號特價　金八十錢

大正十年二月二十日印刷納本
大正十年三月一日發行

編輯兼發行兼印刷者　東京府中目黒七七〇　横關利藤太
印刷所　東京市京橋區[illegible]二ノ廿七番地　秀英舍
發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

新社會の基礎

彼はいつでも一世紀前を豫想した、彼の頭腦は科學者出身でも亦別格にて水晶の如く透明であつた、そして、彼は文壇隨一の文章家であり、且つ、慷慨家であつた。彼の行く所喧嘩沙汰を見ざるなく、血を見ざるなかつた。それ程彼は正直であり、眞摯であつた、彼は來るべき新社會は、いかにして至るべきかを科學的に、情熱的に說いたものが本書である。

再版壹切
好評參版

◇中澤臨川氏著◇
◇山本鼎氏裝幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

東京芝櫻田久保町 改造社 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY TWELVE YEN A YEAR
OFFICE KAIZOSHA, SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十年三月一日發行（毎月一回一日）
大正十年二月廿日印刷納本
第三巻第三號
本號特價
定價金八十錢

